

魏代儒向甲叢集

特116

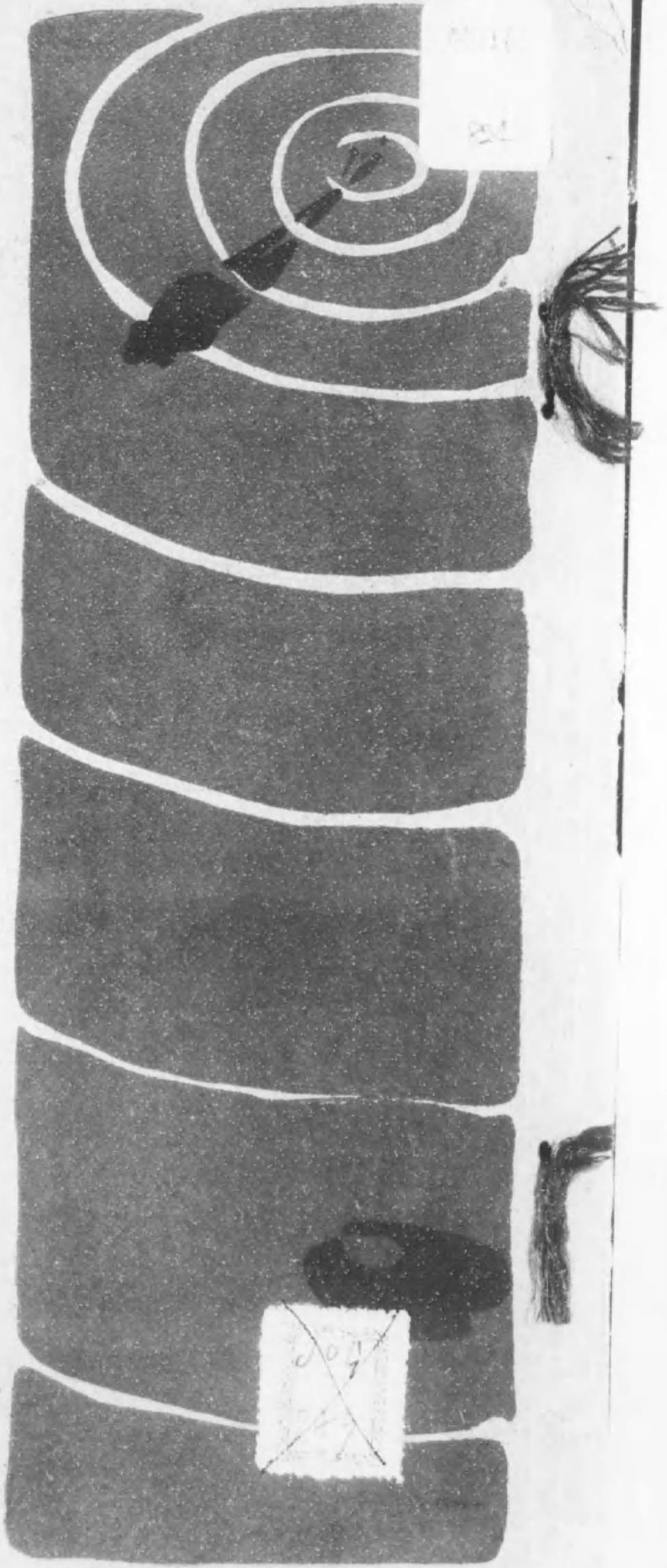
84



始



魏代佛向卯葛集



持世
824



初世鳳尾園瓊翁永眠せられしより爰に十有三年實に夢の如く過去りぬ其靈位を慰ん爲め養成社員發起のもとに第三世曉雨宗匠及未亡人櫻水亭紅雪宗匠主宰として廣く手向の俳句を募集せられしに日ならずして來集せし數實に四萬の多きに至る偏に故人の高徳によるは言ふに及はされども又養成社員の盡力と雨雪兩宗匠の誠志あつかりて力ありと云ふへし予も故人と竹馬の友たりし因みにより一評選釋を乞はるゝの光榮を得たり而して選者廿有六名に對し筆記のみの淨書地卷にては多くの日子と手數を要すへけんとの見込を以て多額の費途を投し集句全部を活版に附せられ一冊紙となして各選者に配附し好便利を計られしは其用意の周到なる實に言はん方なかりし也故に開卷當日に些の支障もなく殊勝に且賑々敷執行し終はられぬ故翁の靈もさそや慰さめられしならん爰に其ゆへよしを記し以て序文に代へて云爾

大正七年初夏

嵯峨

落柿舎栢年識す

大正
7.7.6
内交

凡例

- 一本集ハ初世風尾園環曉師十三回忌追悼ノ爲メ募集セシ俳句ヲ各選者ニ廻附スル便宜上活版ニ附シ一冊トナシタルモノナリ
- 一本集ハ各選者ノ選句スル爲メノ地巻ナレハ出句者ノ原稿其儘ヲ記シタルモノニシテ假名遣ヒ文字違ヒアルモ是レカ訂正ヲナシアラス且公平ヲ保ツ爲メニ出句者ヲ匿名トナシタリ
- 一本集ハ募集課題カ四季隨意ナルヲ以テ四季混雜ニ記シアリ
- 一本集各頁ノ初メニアル數字ハ五百句綴リ淨書地巻ノ番號ナリ
- 一本集ハ記念トシテ希望者ニ分ツモノニシテ發賣スル目的ヲ以テ印刷シタルモノニアラス
- 一本集ニ附テ活字ノ誤植ヲ發顯セシモ發行ヲ急キシ爲メ之ヲ訂正スルノ暇ナキヲ以テ後日檢正スルコトナシタリ

編者識

1 壹

玄關の七寶焼に牡丹哉
 かんさしの芒も戦く野分哉
 繪日傘や疊て見たり廣げたり
 石南花や下から風の吹く所
 よき物は世になからへぬ櫻哉
 花過てまことの春の夜なりり
 やこと無き膳に召さく納豆
 福わらの中に鯛のかしら哉
 行春を眉毛剃たる女哉
 龍の眼も涙さ伽藍や風薫る
 なつかしき碑文讀みり花一句
 よく出来て古酒も負す今年酒
 忌に咲いて花らんまんの櫻哉
 培はぬ柿や盃をは作る家
 居續けて居るらし鳥も花の中
 運咲くや廢藩すでに五十年
 組板に松風氷る若菜哉
 青竹の花筒悲し雪の塚
 金屏風より稻垣や在祭
 言ひ流す御慶や舟に立ながら
 八道を攻めて醍醐の花見哉
 四阿に茶菓を同伴や夏の月
 蛇柳の髪もみたして風凄し
 見盡せぬ花や其夜の夢の種
 花供養雲や花の碑おかみけり

1 貳

笥や寺から里へ配り物
 都出て幾夜寝にけん時
 鳴りひく午報や京の春長閑
 鶯に書き損しけり繪短冊
 鶯や物静かなる朝こころ
 敷行して情史成りぬ海棠花
 停りし御召列車や揚花火
 花の朝枕も輕うはなれけり
 陰日南暖し師弟の間柄
 名香に一座静まる時雨かな
 窓開けは梅の花散る日和哉
 よき師にはよき弟子多し釋奠
 立皮の櫻碑飾りけり
 月花も酒なり殊に雪の舟
 散りしきて波も花なれ大井川
 竹伐や豊凶定めたるためし打
 法の燈の蓮の葉にる夜雨哉
 寶惠籠や一つ後れて哀れなり
 橋守の家一本の柳かな
 秋風や狂女のかさす破扇
 葉櫻や傾城ならは二度勤め
 嫁乗せし護謨輪車や春の月
 江上の月は晴たり不如歸
 明けた窓閉て鶯啼せけり
 寂として月も宿るや古屋の地

1 參

玄關にあまる牡丹の匂ひかな
 積雪やむかし鏡を掛し松
 連を見て着直して出る袷哉
 菊百種花千態に咲せけり
 鳥立たゆれ跡長き柳かな
 香炷て手向心や時雨の日
 説教に耳傾むける頭巾かな
 舍利と見る露置く蓮の臺哉
 曙の松のくらみを櫻かな
 奥山は未だ春残る卯月哉
 散るや花色即是空眼のあたり
 卯の花や名も黄金井の城の跡
 一聲を滿座拾ふや郭公
 碑の面は暮て白々小萩かな
 花供養月も蝕はむ夜なりけり
 長袖の濡り重たし春の雨
 朝風に伸る思ひや青田面
 桑門に入る日は輕し初袷
 筒井筒めくや夜永の小双六
 筆先の紙になしませぬ寒哉
 分別は酒に落けり春の雨
 ふき馴れし椽に影引く若葉哉
 都踊天下の粹士醉はしけり
 葉かくれに老鶯の聲久し
 鹿なくや燈に油さす一刹那

1 肆

雨兆す雲行低し啼く蛙
 和らかな嫁菜や母の好み物
 歌書か星祭りなり小傾城
 耻しき夢着て寝るや夏蒲團
 風もなく露に音ある哀れ哉
 臥に臥に臥もの憂き暮を椿落
 疵口のしきりに痛む雪の陣
 星と露静かなる夜の光かな
 蝶一ツ追て見出すや晝の月
 雲雀暗空に旅情の動きけり
 春雨や湖上も静に暮れて行く
 葉櫻や極樂寺の晝の雨
 展す碑に花のアーチを潜りり
 煤拂や塵の浮世に住ながら
 在天の御靈祭りや彌生盡
 碑の文字も殊になつて墨直し
 夏籠りや無聲の蛙啞の蟬
 鶯や思もよらぬ松の中
 高千穂の雲の光や初日の出
 里の富掛蓬菜にしられけり
 舟よりも涼し舟見る橋の上
 うたかたの夢の浮世や春の雪
 法燈の影に通夜する十夜哉
 尊像の前に紐解く花の巻
 親ひとり子ひとり淋し紙の雛

1 五

方千里秋は豊に届きけり
橋に頬かむりして接木哉
紫に遠山暮る、櫻かな
美しく床一杯に牡丹哉
琴の上に秋海棠のこほれけり
富の塵積れよかしと子燈心
雨も世の賑ひになる田植哉
夕虹は消へて野中の花柳
塚に今日経讀鳥の手向かな
葛水や脱きちらしたる能衣裳
舟の出る方へと霞流れけり
燭臺の晝あさむくや花の宴
箒目正しく掃あるや冬椿
文紙衣若て佛を刻む翁哉
子規鳴くや遠くに斧の音
深窓の春を寒かる佳人哉
虫干や床に恩賜の刀箱
青簾及はぬ懸をへたてけり
春ならは花産む雨を秋の暮
降る夜もぬれて戻るや懸の猫
昔請場や隠居の尻も日も水し
懸塚に血汐染るか曼珠沙花
木蓮や晝の燈淡き雨の寺
お辭儀する風や日和の替り口
鬼燈や片言て來た物貰ひ

1 六

なれも身を懸にもすか野の莖
道筋もうねり勝なり萩の里
千本の櫻一溪の流れ哉
更る夜に鼻鳴きけり極樂寺
梅か香や活氣溢る、奉幣使
幸多き櫻や乃木の宮居咲
城壁に立ちし矢文や時鳥
生た字に亡き師を偲ふ扇哉
木の葉舟鴨の糞に沈みけり
我友は虫なり嵯峨の詫住居
春雨は傘の雫も懐しき
相對し笑ふ神山佛山
忘らぬ句碑や此花見るにつけ
水音の曙ちかき羽音かな
是も又飯の種とや寒修行
子を圍ふ慈愛いたわし雪の鶴
父母の昔を今の湯婆かな
梅雨晴の蝶睦しき日向哉
吾妹の文長々し藤便り
書院から洩る、沈香や蓮の花
夜は露の乳汁に育つ稻穂哉
詩に歌に古き都の霞かな
蠅船や波に浮世のひと世帯
衰轉んで浴衣の主客嘶しけり
石文の露に手向の土筆哉

1 七

床の間や花の香高し梅一輪
あるかなき風に芒の戦き哉
長命にこそ花も見ん二日灸
琴の音にイば梅薫りけり
牛の子の乳放れ早し春の草
君去て紅梅うつる鏡かな
練り返す土蔵の土や霜柱
初午や幟の見へし杉の中
菊の香の來ては動かす燈し哉
風に散る様に水鳥流れけり
初東風や馬上ゆたかに初登城
きく物は只水音ぞ不如歸
大瀧や涼味あをるに別天地
寺の畑打て佛の供養哉
花の塵持つて歸るや杖の先
大空へ曳けり年の市明り
學童の時間おくれ芽花摘
銀瓶の色さへ凄き夜寒哉
敷島の誠を匂ふ櫻かな
入船は見へて出船は霞みけり
春さざす梅に短かき日脚哉
藪人の我子を乗せて涉し守
花の留守千代尼か蠅の思ひ哉
盆石の不二に日永の埃り哉
牡丹の戸世々に譽れの三代目

1 八

關加桶に散るや櫻花の二三片
筈や飛び放れたる畑の中
鉦の音に萩はるく零れ
功成るや石に絡みし苔の花
掃除した碑に見る霜の別れ哉
懸猫を塾生叱り飛しけり
虎杖や兒は寄付ぬ淵の土堤
露寒し朝月遠く草に入る
扇風機に鬢戦かせて夏座敷
仙境の瀧を彩る紅葉かな
草を摘む日傘の上を雲雀哉
廉節な家庭賑はし雛祭り
一時越して青田のなかめかな
面影の變らて老ぬ秋の蝶
花ならば散るいとよに月の雲
冬籠り先師の遺稿編にけり
御陵や松の奥なる初櫻
此里に橋の普請や夏近し
十腹から出ても似顔や蛙の子
懸に夜を更して膝に寝むる猫
虎殿や嘯きさうな水放れ
春の山海見へる迄登りけり
散浮む花や懐し關伽の水
叩かれし粥木の花や初幟
俳聖の碑は苔むして露時雨

1 九

神祭る里豊なり月の秋
勝角力爵ある客に呼れけり
湖見ゆる宿取りあて、酢蛤
雁塞し炊減したる頭陀の米
方便のかさり美し花御堂
詩に歌に幾夜の戀ぞ時鳥
絹足袋や言葉少き茶の給仕
夜の花いさゝか闇をへたてり
俊寛に似たる一日や花の留主
初東風や威徳をしめて貢船
清き瀬に筏流して櫻かけ
岩清水大師の功德掬ひけり
春雨や静かに聞けは音もする
清瀧に二た夜重ねて時鳥
歌こゝろ月の鏡にうつりけり
御車の見へて手に持つ頭巾哉
江の茶屋に松吹く風や青簾
沖の秋汐吹く鯨通りけり
裏表どちらも梅の小家哉
欺されて水鶏罵しる女哉
須磨はさそ今宵の月を此庵
散るよりのまきりに芥子の花
泣て讀む鎌の歌や蝸牛
雲雀なく畑や翠りに太る麥
懸に揃ふ供物や魂祭

1 拾

仁丹の効能語る清水哉
衣更て居心のよし青た、み
法螺吹た歌も間々あり土用干
董野や家庭教師は割籠持
下駄切れて素足に走る吹雪哉
佛果得る法の苔や花御堂
各牡丹殿上人に秀歌あり
土砂降に暑はさめて虫の聲
白萩に刀自懐舊の涙かな
菜島やひらひ蝶の舞ている
花も降りそふな曇りや佛生會
花朽す碑は埋れす春幾代
夕涼や名代娘の薄化粧
花の中十三疊り眼立けり
魂棚や燈も親の七光り
湖を鏡に月の登りけり
葉鶏頭や牛舎まゝこほれ生へ
送り香に顔一寸見たき日傘哉
罪も無き瓢箪男や花歸り
年よつた古人の位を飾海老
雅に心よせて繪紙衣似合けり
笑ふ山後ろは鬼の丹波哉
同氣相求めて月の圓居哉
是も又方便の嘘鳥おとし
來迎に蓮扉を開きけり

1 拾壹

民富みて祭り賑はし月の秋
未た水に親しむ秋の暑さ哉
ひざり宛々静まる蚊帳の嘶哉
歌の燈の菊の白さに及ひけり
舟て山越して三井寺詣かな
立琴や秋の千草の夕嵐
軒借るも何かの縁ぞ夕時雨
牛も寝て京へ出ぬ日や鳥羽祭
風百萬石の城下かな
雅に散し花や三年せと一昔
三と出て二日泊りや繪双六
寺の留主せし夜にき、ぬ時鳥
春雨に居心のよき座敷哉
香に煤ふ千體佛や春の雨
難も砂浴ひる日和や花山葵
大廟を拜して冠る頭巾哉
拾着てよき顔見せに乳母を問ふ
佛手柑に位置譲けり如意拂子
立鳴の跡逐ふ草の嵐かな
袴着て置き直しけり福壽草
千町田の一ト日に青む河内哉
ちりてこそ知るや盛松の花
頼まれた留主の長さや落椿
竹に降る音夏近し夜の雨
眞如堂に眞如の月や蓮の露

1 拾貳

大根の太りも見へて時雨けり
春の雨一力樓に籠りけり
朽ち果し丸木の橋や秋の寂
永々と樂しき事よ菊根分
珍らしき人と來合す御慶哉
白雲に花持つ心移るかな
一ト筋の教守るや雪の道
極樂の道は直なり蓮の花
窓の燈の水田に落ちて啼く蛙
句に籠り夫地玄黄の櫻哉
花の美を賞て碑仰きけり
梅白し清し夜明けの薫り振り
善根の種詩き歩行彼岸哉
うつろ木に顔丈け出霜の猿
潜戸を出て又潜る柳哉
寝轉て見る富士低き花野哉
梅林や富士の高嶺を北にして
關伽桶に花の莖り汲む彼岸哉
豊年の買も添へて葉竹賣
取替て涼し互の枕紙
春の水船傾けて掬ひけり
蒸餾や若狭と話す賣上手
拾ひ來て机の上や桐一葉
逃水を追て田毎の月見哉
春風に吹ゆらめくや床の軸

三

1 拾参

農村の祭り賑はし豊の秋
方丈の居間や佛子掛如意拂子
花よりも鳥の春なり百千鳥
昇る日にするとき鷹の腫哉
足る事の一寸に満り今日の月
虫鳴や史蹟をさくる机
間ふ外は多く語らす冬籠
子をもたぬ身は猶淋し秋の暮
岩紋る様に湧き出る清水哉
御佛の誓ひや法りの花供養
鉢山の橋も落ちけり五月雨
住荒し玄關構へや柿の花
鶯や名付け親にもまさる聲
盆燈籠心の闇も照らしけり
牙返一値札立てけり八百屋店
長壽の徳を頂く頭巾かな
病老の孫に誘わる芽花摘
雪嬉し寒さは酒で消ゆるもの
稻妻や女は物にかしましき
敷入や親の返事も美しき
心なく汽車は過ぎり月の須磨
一二反寺の地領や藪椿
魂棚や一蓮托生發菩提
遊ぶにも一盛ある彌生かな
かりそめの浮世はなし捨團扇

1 拾四

花蔭や靈位慰む供養塔
慶迎と耶蘇耳色々や蟬の聲
草の根を便りに啼くや闇の虫
鶯や輕舉戒しむ一秘策
夜に入りて宿立つ人や夏の月
夏瘦の胸に人ある微笑哉
白菊に浮世の浸にもなかり
夢十とせ故人戀しき櫻かな
柱拾た香の行衛や時鳥
茶を摘むや白手拭に赤たすき
重き世を譲りて輕き紙衣哉
長へに匂ふ立皮櫻かな
月桂冠を得し春駒の一ト嘶き
眠氣さすところから機や暮運し
鎌男や呪ひも利く一不思議
春雨や片足あけて眠る鶴
未枯や不意の易者の呼びに
蓮華草や馬草刈る童の心なき
摺す墨に袖風寒し霜の朝
雨に成る雲見て勇む田植哉
残雪や旅に出る子を送る母
雲追て啼か枯野の夕鳥
寒梅や見せたる人の今日も來
散るものゝ名殘惜むや櫻の實
湯戻りや寄木細工の土産物

1 拾五

民富みて國豊なり花の春
水音にからんて遠き磯かな
夕立や思ふほど今日も來
開かぬ振りして叩せる水鶏哉
花の鐘霞の中によとみけり
梅ヶ香や影新らしき窓の月
里方の無事訪せけり絹配
かきつはた男にさぬ下駄の跡
掛香や水も垂るへき夕化粧
關の戸や夢の跡啼く響ひし
蝶もまた遊ばぬ野なり小松曳
短夜や寝たらぬ顔の朝つかひ
梅林も豊かに見ゆる御苑かな
風前の燈下に酌むや夜の花
佐保姫の寢息流る霞哉
松の琴瀧の靴や春の風
青嵐ホート選手の腕のさへ
髪切の手に美しや花糖
雪の日や心置かる人遺
思ひ出の多き遠物や土用干
ゆれて居る鳥面白き柳かな
物言へど鶯鶯答へず秋の暮
折て去ぬ手に佛縁か蓮の糸
夕良の戸口や妻の磨く靴
夜櫻や月ないかしの燭明り

四 1 拾六

鐵道の枕木出すや閑古鳥
八重葎根をさす地にも葦哉
捕管て富むより花の保養哉
鶯や竹の庵の朝朝
赤裸々に戀して猫は得意なり
萬能の身は治らて年の暮
夕立の跡美しき月夜かな
足に迄手の有て勝角力かな
初花や歌の敷島明て行
茶を摘や空には雲雀日はうも
思ひ出の寫眞飾り魂祭り
時雨と菫の寂しみ音にたて
燦たるや朝日映つる山三九良
引た妓の二度の穂持つ櫻哉
念佛も釣り並へたりむし拂
狐火の燃へ付きそうぞ枯尾花
雪明り動くは熊てなかりけり
山吹や添喰池の水の古り
鶴一羽沙先ふんて時雨けり
羅透けて氣味よき素肌哉
早夢の十三年や花供養
降る雨は涅槃諸佛涙哉
萬籟を静めて雪の晨かな
水仙に短き日脚とさきけり
名月や鷹の目をひく美人草

1 拾七

稻妻や豊な年の雨すくな
雪の戸や誰か訪れの忘れ笠
雪早う見せた山なり残る雪
緋牡丹に鏡立たる祇王哉
年月の流れ易きよ天の川
板け道のまよや蓮の憂根堀り
時鳥一水白く明んとす
初叩きは妻呼ぶ翁か闇の池
天の川松山越てなかれけり
妻險にして越しやすし年の坂
わすらぬ故士の遺稿や春の霽
時鳥月に徳利もかたひきぬ
新海苔の味ある東土産かな
華美鏡よ世に黒染や露の庵
照り曇りして恙なし花七日
注連漚る波静なり初日の出
形代も受る壽命の重荷哉
頼むまじき浮世成り枯萬年艸
白梅や町を後ろの家二軒
吹青む野山を春の姿かな
鶯になれて機織る山家哉
かゆ杖や一人はしさの覺悟振
宿望は語らす雪に小酒宴
見合より髪好みして二の代り
雪幾日流車の發着遅れけり

1 拾八

美しき聲の茶を摘在所かな
片枝は翌日の旅路や蝸牛
泣き事の多き浮世や魂祭
麗かや思賜の義足野面に曳
コスモスは淋き花よ散る夕へ
花に蝶迦陵頻迎の聲もかな
落武者の見返す城や時鳥
三十三歳風の落葉に紛れけり
蚊屋の月夢は宇宙を便りけり
一人づゝ橋を渡るや花明り
納豆を精進物の奢りかな
花美なりけり緋櫻糸櫻
鶯や聲の運も一ト日宛
掃火焚く後ろに細佛の燈
歸依僧を迎ふて櫛の慰安哉
賣残す炭圍も孝の一ツ哉
月一ツ需の下界を照しけり
長閑なる海原走る白帆哉
立秋を馬走らして見たりけり
佛手柑の薫りも床し冬籠
重箱に霞の走る亥の子哉
米を踏む足の輕さや二日灸
亡き居士の化身さから花の蝶
丹精を誇らぬ菊の主し哉
其罪や深し渡世の飯ト汗

1 拾九

虫老いて里豊なり稻の出來
絹蒲團重ねて若界勤め哉
留主らしふして鶯を啼しけり
梅か香に動く座頭の眉毛哉
圓満の月に無量の光り哉
新涼の雲動きけり竹の窓
雪の日の朝寝は旅の奢り哉
油断して月に成けり嵯峨野哉
はつ松魚上戸の徳を知る日哉
涼しさの余りを水の亂れけり
送り出す箱提燈や春の霽
春立や寛の水の走る音
持寄りて聲聞分くる川鹿かな
果ては皆土となるなり草の花
行く春を冷やかに啼く鳥哉
春風や衣桁をこる能衣裳
年々に枝は拂へと柳かな
閉た眼に俯見へつ高燈籠
花の世や阿字十方は佛菩薩
初春や人の話も美しき
梅薫る窓や先師の遺稿編む
時鳥衛士の膽を冷しけり
月の名の有る夜は世話し渉し守
散る牡丹膝にこぼるる麥酒哉
溝一ツ隔てゝ梅と柳哉

1 貳拾

口切茶連歌の席に薫りけり
花の山道にまよふも面白し
よき人の指紋歌留多に残り
盆の月句碑の礎照しけり
人らしき人の滅ひる櫻かな
毛替りし犬美しき五月晴
雨に色あるかと思ふ柳かな
勞れ鶴を厭ふ懺悔や夏の雨
松虫や書院に刀自の歌硯
春の月舟呼ぶ聲の後静か
消ゆるのも置くも早し橋の霜
御辭拜す譽れや鷹の遣ひ振
座を月にまかせて歸る花の宴
口切や越路に語る花もなし
黒犬の眼の玉凄し夜の雪
人の道踏めは昔はなし年の坂
二十五歳も今零限と成にけり
權兵衛か種子箱覗く雲雀哉
夏の雲雨呼ぶ風を誘ひけり
人に人と言ふ人々や縣石
曲水に冠りを誤り流しけり
約束の辻に待遠し臘月
極樂へ音信やせむ御忌の鐘
行違ふ人なつかしき枯野哉
陽報を得る腹はなし粥施行

五

きりくす暗やいふせき煤行燈
世を輕き物にして散る櫻かな
虫干の遺書に懐古の涙かな
其中に過激派もあり戀の猫
碑に心寄せて見榮へる櫻哉
御飾や嶋一番の松の古り
心なき牛は急かす夕時雨
暮る日や散る花斗り風の吹
揺分る小齒菜の深し落の臺
未だ文のはしにも残る暑さかな
花の雪仁王の肩に積りけり
日は静か白帆点々や春の海
山駕の疲れ休める清水かな
能く曇る葉守の神や櫻の實
舞ふや蝶落花の餘香慕哉
賑に七草囀す女かな
牟寄に日向を讓る梅見哉
朝寒を握る仁王の拳かな
冷たさや梅の二月の能舞臺
左義長や雪明け初める火の埃
師の余香をしのふ一間や梅薫る
爐開きや前宗匠の御手の跡
形代や我に別れて去ぬも我
鶯や朝はれ見ゆる東山
夜櫻や何處へ禿の文使

立よればぬれてある樹や朧月
窓うれし梅も旭も真正面
花咲くや庵は香りの中にある
湯歸りの女仇なり雪の朝
美しき峰や彌生の朝景色
花籠る重味の見ゆる牡丹哉
下弟子の里を味ふ草の餅
他人には此誠なし二日灸
落し水松風程に開てへけり
涼しさの湧くや瀧殿泉殿
餅つきや顔も取粉の花吹雪
達磨忌や味譽らるゝ胡麻豆腐
梅一樹先師の句碑を守りけり
定九郎の隠れ場となる稻木哉
待つ我 膝叩かせよ時鳥
世を輕う風にまかせ柳哉
夕山や鶯遠く風吹く
磯に寄る浪の白きよ秋の風
夢はまた花か八日の朝寝人
木枯のついで廻るや水車
思ひ出の多き夕べや散る櫻
麒麟草の廣かる庭や書院窓
かゝり火や燃込む花の風情哉
御野立の跡や霜さへ踏ぬ民
仁と義は人の寶や釋奠

野分哉氣笛の聲もかるゝまで
提る手に心かたむく牡丹かな
碑にも立皮の櫻かな
椿落つ扱は暗示と思ふ事
春雨や本に夢置く臂枕
初風呂の湯氣白々と明けにり
蝶一羽鶴の上り足潜りけり
花の旅先廣ふ思ひけり
夜は誰にもたれた露か女郎花
蓮の實の花や座禪の膝の上
笠寺の麓雨の田植かな
春雨に今日も又織る庭かな
碑を仰ぐ面に浴けり花吹雪
鉦梅や勝負は運の兜町
洞泉を茶に汲む宿や鹿の聲
尼寺も今日七草の祝ひかな
若草や昔ひの蝶の狂ふ下
君か爲惜からざりし牡丹かな
如月となりても雪の高嶺哉
海見ゆる窓開きけり更衣
伊勢の神京の佛や春の旅
高燈やこゝは昔の城の松
葉焚て貴僧饗應す深雪哉
戀覺めてたゝか猫の眠りけり
香くもりの梅に俣あふきけり

また雨に逢はぬ梅垣やにはひ鳥
欄干にもたれて使ふ團扇かな
鳳凰も麒麟も見ばや油花ト
床りある今日の日に散る櫻哉
春雨や雫のたるゝ糠袋
瀧殿を包む飛味の煙かな
眠る様な浪に散りけり櫻貝
思きや花か手向にならふとは
畑打のうち残したるすみれ哉
八ッ房のたれし思ひや神の藤
雑巾の礫冷たし煤拂
百薬の水盃や飯ト汁
花會式都の花も見頃かな
笑顔にも巧拙はあり市の難
鬼燈や戀の使の戀しらす
竹植て富貴の門や風薫る
花は根にかへりて春は行にけり
磯に寄る波も静に春の海
行宮の寂慮や如何に花見時
蓮清し佛心になつて見る
夏の机真如の月の照しけり
世に隠れなき咲き振や名の櫻
小役者と舞姫交る花見哉
磯畑や麥三寸に渡る東風
一石の一字尊き鞠川哉

雪場の千年杉や青嵐
月の雲人の心にかゝりけり
紙窓叩く蠅に冬至の日脚哉
程度なき迄の戀歌や兼好忌
憂我を慰め呉れん秋の蝶
春若く嶋の大松霞みけり
三界に家ある市の難かな
蝸壺に垂る木屐や秋の雨
吹分て匂はせふりの柳かな
藁運ふ雀身輕し春の風
白萩や祇園林も山積き
客送る籠雪洞や萩の中
日の駒も早し行春十三度
鷺の巢や怪僧一人何修行
忙中の一を裂きて年忘
年禮や羽織袴の人通り
鬼百合や夜は人魂の出る處
葦蔭へ廻る月夜の笠かな
遊ひ度き日の續きける彌生哉
思ふ事流るゝ雨の柳かな
盡きせぬは言の葉草や善導忌
桐咲て昔を偲ふ庵哉
ありし世を數ふる夜半か時鳥
水仙や身に汚れなき墨衣
更る夜に盡ぬ咄しや炉の名殘

夕波の渚によする霞かな
瀬の人は鮎汲む人か朝の月
花庭貧富の差別なかりけり
禍ひの口は開かず壬生念佛
案山子には臭き腸なかりけり
四辻や野分の跡の立咄し
よき風の若葉に生る園生かな
翁忌や何を枯木に啼鴉
枯芦や吹こほしたる水の月
名笛や同じ蓮すも敵味方
皆春の支度や歳市の戻り
たまに降る雨は黄金よ早稻の花
出超の横綱となる蠶かな
墨染の袖衣なり後の月
落葉して雀一羽の梢かな
洗ふたる硯に花の日さしかな
晚鐘や風のゆるしをちる櫻
春の海浪も音せ暮れにけり
皆花の雫て育つ小鮎哉
雲雀見て這入れば暗き戸口哉
釋奠や五常の道を守る里
親よりも仲まさりけり今年竹
葉程にも大きくなしや柏餅
桃咲やおらかな在所へ京の人
峯入りや寺の朝起き未だ寒し

戻れ共一人住居の寒さ哉
澄む月や不二には六ッの走花
古塔一基往古の夢や眠る蝶
金鶴の匂ひ床しや御忌小袖
勢田の砂京へ来て吐く蜆哉
一夜にて差返りけり日の初
天下呑む人さへあるに蜆掻き
里ふりのあるや手鞠の唄にまで
無縁にも露を手向て花供養
雪の無事告る伏家の煙かな
客ふりに七分當かふ火鉢哉
祝砲に小春の山河ゆるさけり
鶯に忘れて立つや笠の蓋
木屋町の腐敗覗くや春の月
塵外に我が天地あり冬籠
喰ては飲み御免蒙る三ヶ日
賓頭盧に汗の手痕や雲の峰
翌日と云ふ花に油断の詞哉
春立や南へ走る雲の脚
春の月思はぬ君と語りけり
香に曇る手鍋や花の庭傳ひ
散る櫻東寺の塔にかゝりけり
夏草や露は目玉の高入道
腕白の盛りを蜆かかな
なてゝよむ石碑の文字や葛紅葉

鐘初や絹糸丈けの膝のちり
鬼灯のまた娘氣の殘る嫁
碑に洒く水に濡すや苦の花
加茂川や燕も交る百千鳥
鉛賣りの笛長閑なり桃の村
人並に出来ふ出来有る案山子哉
這ふ子にわたわむる浪や沙干狩
白音は女業らし桃の花
うら枯や京の町にもさくら柴
秋の蝶小町の果を止まめけり
源平に亂るゝ梅の谷間かな
蟬啼や人別割に貫ふ水
師の影を踏ましと月に歩行哉
鶴林に初聲捨て時鳥
日は暮な花は散るなと思ひけり
干綱に蝶の休らふ彼岸哉
山茶花の散るや梨子地の硯箱
霧深し見へぬ小里に鳥の聲
聞けどその聲真似難し時鳥
朝寝せぬ宵約束や花見連
都の錦織るや青柳糸櫻
冬籠机に花を咲せけり
世の人に悟れば花も散る無常
居士を祀る碑や搖かに陽炎へり
初嵐白川の關越す日哉

林檎むけは病み伏す妹の笑淋し
薫風や松に打すよ水白き
千點の梅一痕の月夜かな
海苔と酒起死回生の薬かも
碑の夕間花の朝したを悟り
相惚の浮名嬉しく辰の春
寂ひる程尊し露に濡るゝ塚
花を見るうちには五戒もなかり
小袋にたくみの數や献生子
梅に月誰そ來さうな夜なり
朝は茶に夕へは酒よ梅の花
花の奥鐘も静に聞へけり
髣髴と來て受け花の手向文
絹團扇拵へ取をいなみけり
天福に身を安んぜず綴り足袋
初賣の來て戸をたゞく酒屋哉
見覺に啞も踊りの仲間哉
賢聖の人と瓢出す彌生哉
金欄の袈裟綻ひて春寒し
まいのまいた休たる浮葉哉
葉櫻や机に戻る旅硯
無き人に捧て見たし蓮の花
露を持つ花抽も百味供物哉
奇人奇に俗人俗に花見哉
梅清く雪の中より匂ひけり

霞む日は海の上にも鳥の聲
柴の戸や蟬の來て鳴く丸柱
井守酒香まされて釣る蚊帳哉
忘れ咲く花さへあるに菊枯るゝ
散る花も月情を誘ひけり
蜀魂真如の月をかすめけり
花嫁のたすきも赤き田植哉
廣からぬ窓にも嬉し初明り
白雲のかかりすぎけり朝櫻
戀し鳥爰連れゝを啼夜哉
初午やつままれそうな狐格子
陽炎や雪解の跡の溜り水
一枝に集めて見たし歸り花
苦を見れば米價廉なり田草取
除夜の鐘梅活ながら數へけり
三日月のきつぱり見ゆる燒野哉
海棠や雨の茶寮の物靜
降らぬ内見て返りけり朝櫻
貝てさへ出歩行く花見日和哉
見れば月見れば月なり時鳥
幽明の境を照らす燈籠哉
月は今豊に山を放れけり
木に登る小坊主憎しくらへ馬
閑窓の美人やつれて秋深し
稻の浪心の碇りおろしけり

燭細き獨居をたゞく水鶏哉
黃鳥や名殘の惜き分れ道
謹編す故師の遺稿や水仙花
花の醉面倒くさき小紙幣哉
飯提て雨の戸叩く日暮哉
飛行機の飛行機風を笑ひけり
住の江の春また寒し句鳥
ゆかしさや櫻かもこの忘れ杖
思ひ出に咲きしか君か花筐
草の花露 其儘の手向哉
落古し鯛の相手に初茄子
下馬札の社頭寂なり秋の雨
麗た至高 至遠の芙蓉峰
大家揮毫扇に名ある老妓哉
妙法の幡曼陀羅や風薫る
若水や村一番の撥釣瓶
主客物言す更けり虫の聲
病葉の散る藪蔭や秋の聲
織急く絹の白さや夏近し
大驛の前に宿より明易き
水葬の式ある船や鳴く千鳥
師の恩を思ひ出しけり土用干
子に据へた相伴もあり二日炙
春の燈の二つ枕を照しけり
其儘に手向ける草や野の彌生

大ふくの加減や年の譽め初め
牛の脊を厭ふ葎や日の盛り
酒は壽の肥料や松も變ぬ色
膝に散る花もなつかし塚の前
珍らしき鳥見たりけり春の山
入相の鐘や散る人散る櫻
大將は乳を召されて富浦太刀
手向する水も美し花の影
棒燈の花さくやうに芽出し鳥
一ツ世に二た道はなし佛生會
鶯の聲にゆるむや基の賣手
鶯に憎し垣根を傳ふ備
名月や優美の姿松の上
樂燒に自筆の句あり朝茶の湯
雨を待つ泊り夜や雲の峰
小田の家蛙に留主を預けけり
文字は世の杖や枯野の道しるへ
昇る日に光輝く白蓮の花
此頃の歌皆哀し梨の花
明て居る家は人な夏月の月
立つや春十三年は夢の如
末代の身の譽れなり司召
葉と成りし櫻の嵯峨や鳥の聲
雁淋し蕭々の雨感無量
立鳴や何處の夕暮鳴きに行

逆境の人慰めよ歸り花
白蓮や岸の蛙も座禪めく
心地よき日和や花の餘り風
佛溺の母を扶けて彼岸寺
兀山も見添へて秋の錦かな
武者風や百万石の城の上
鶯の聲に寄膝崩しけり
雪の松法の薪となりけり
なつかしき空や粟津の郭公
曇らねは捨る夜のなし月の秋
若鮎の命は重し桶の水
菊薫る寶祚天壤無窮かな
素破と空見るや杜鵑のひと叫
空蟬となる下宿屋や暑中休暇
新米や母の教ゆる水加減
若草や踏んたばかりの草履跡
掃寄て柴垣低き落葉哉
落葉掃く禰宜の日暮や白袴
しみゝと人待るゝや春の雨
冬降り山靜かなる且かな
鐘の音の誘ふてはなし散る櫻
涼しさや波に押るゝ薄標
火ともせし闇は物かわ花の晝
海棠や亂れ毛もなき朝手水
かほるたけ残して梅の散に鳥

海苔の香や給仕人まで皆雅人
散る影の障子に輕き柳かな
新茶の銘床し秀逸翁草
涙程雨もこぼれて涅槃の日
海や多棠情多恨の歌机
碑に添うて名も立皮の櫻かな
池守の夢破りけり鳴水鶏
紙燭して既見に行吹雪哉
鷹匠や武運拙なき身の果報
養虫も摘み込れけり番茶籠
八專の崩れて残る暑さかな
片腕に女房も遠ふ師走哉
我が舞を影法師に見る月霞哉
花七日也筆蹟は長
御身拭尊像黒く光りけり
梅散りし里へ行けり鹿尾草賣
残る香の床し時雨の翁草
名月やさゝの中から舟の人
結構な夜とこそ申せ花に月
無理な風吹いて砂飛ふ二月哉
碑の寂や花は昔しの儘ながら
松はよき不老の支や庵の秋
咲てから橋の工風や杜若
是程にせまき浮世か秋の暮
探り得し樹に春隣る匂ひけり

下戸と言ふ母も過しぬ玉子酒
梅か香も深し神慮に叶ふ里
書初や筆に師の恩親の恩
白酒に大氣焰なり女教員
宴を張る青年團や花の宿
繪の鳥のなかも消へぬ深霞
戦く萩禿の袖を濡しけり
雪解や乗場の遠き渡し舟
空き瓢花にかさして太郎冠者
能き花の名は世に朽す櫻炭
家見せつ隠しつ野邊に飛螢
俳書めく丘の藁屋や桃の花
言の葉の花の座に咲せけり
停車場の指定地となる枯野哉
涅槃會や鶴の林に法の華
菜畑に見れ隠れして春の川
掛乞に化病の主女房呼ぶ
この日知つて塚へ啼たか郭公
人を見る重き瞳や春の宵
小春日や貸家さかしに妻も行
菩提樹の蔭に宿れよ放し鳥
翁忌や吟聲高き一美人
玉巻て幾代の寂か芭蕉塚
曼珠沙華咲や野茶毗の灰捨場
らぬ鳥なし君の忌日には

敷替へた莫莖に風あり夏座敷
更けてから上手の揃ふ踊かな
娥眉の月澄む曉際や郭公
撞く鐘も露けき後の彼岸哉
戀の窓柳の袖にかくれけり
遠近の山遠近の霞かな
祝いとて馬にも五ッ粽かな
溢柿の美し照る夕陽哉
朝の雪松のしつくと成りに鳥
散るや花如意輪堂の片扉ら
橋守の膳に過ぎたる小鮎哉
秋着し水に親しむ晝の暇
修行つむ如意の光りや釋奠
獅々の育知らぬてもなし初難
から風の吹きかためたる冬田哉
只酔た人に巾ある花見かな
花の過去月の未來や時鳥
川口や船にも月の柳影
世を餘所に舞の稽古や春御殿
月迄か散るを惜しむし櫻哉
手向にと折るや椿も落つ涙
積んで來し徳は花なり司召
山笑ふ三十六峰も峯つゝき
遠山の雪を見て掃く二階哉
酒壺に琴立かけて菊の花

2 拾七

南面の御堂の裏や残る雪
奉納の太刀に雲あり時鳥
蓮一葉水離して春行く
食客の吾に憚れ戀の猫
肉躍血わき花に勞れけり
里川に鮫曰く飛ぶ夕邊哉
雪解や淀みし水の底濁り
朝寝して日の音聞寒さ哉
近寄せる女給仕や毛見の宿
八重と迄咲し譽れを散櫻
五月雨や鞍馬の町は雲の中
一葉より山と積たる落葉哉
柳絮を結んで戀の願かな
君臣の和親は是よ月と梅
うらゝかや松と天女の忘れ衣
鶯を前と後や春の旅
銅像も動きさうなり花吹雪
手向はや蓮の浮葉の露をいさ
參詣して茶店に慰ふ春日哉
積上げし炭の中なる炭屋哉
名月や甲斐は暫く不二の關
人は皆無言の行や時鳥
野司さは高し枯野のひとり立
秋の蝶日の懐ろに睡りけり
惜みても是非なき花の名殘哉

2 拾八

魁けて色と誇らぬ野梅かな
水論も雨に流れて夏の月
祖師の才受たし花に知恵貫ひ
摘草や歌の七つも繪の加茂も
麗よて汲み行く春の流れ哉
羅に急ぐ羽織を取られけり
賣残る土藏すまひや鳴水鶏
切干や物貯へも在所振
鶯の靜に朝寝おこしけり
灌佛や草花萌ゆる野邊の寺
後ろ迄調ふる雛の買人かな
陽炎をたゞみ込め一船の管
梅薫る席に雅人の集合かな
基の勝負鶯水を入れけり
鳥守さては妻あり小夜磯
水清き小村を包む若葉哉
葉櫻に曉の雨匂ひけり
花の香や里は御幸の道普請
機嫌よく菜の花蝶 化日哉
散てなき花の形も牡丹哉
笛や床し師の影うかむ閨隴
朝顔や破れ垣によき咲き處
謠にも残る哀れや梅若忌
露の奥供養の鐘の聞へけり
桃の戸や橋の履歴に乗る夫婦

2 拾九

子を泣かす是も情や二日爰
青すたれ人ある如しなき如し
花紐解くや氷室の夏櫻
櫻桃の里生理なる娘あり
朧夜や親指見ての暖拂
鳥打つ我影長く入る日かな
花に杖へらして命延はしけり
紙衣着て身もにも輕ふ成に覺
王川の玉はかくれて臘月
松島や何を榮に秋の色
梳る岸の柳や水鏡
谷巡りて水の温みけり
拜填や家憲亂さぬ三代目
芒野や測量杭と一里塚
青樓酒の味未だ知らず厨男
鶯や尼僧味嗜する椽の前
小さくも借家にあちや蝸牛
けふや碑に苦むす迄の花咲ぬ
景清の阿古屋訪つる朧かな
短日の雲押合ふて暮れにけり
佛弟の縁架袈裟や花木權
千秋の氣り盡きてや枯る菊
庵は景道に世話し八重葎
維摩忌やせ下せしは何朝臣
朝顔の力見せけり蔓の先

2 貳拾

梅咲くや何か降ても春や春
肌寒き舟の寝覺や雁の聲
蕙似や橋に添へし手向筒
雲尻に月も出てあり揚雲雀
電焚く煙は重し濡れ燕
春淺し深し日の裏日の表
くま笹のさもたくまじき粽哉
松風も通ふか炭の起り口
藪人の長閑にしたる山家哉
あら名残り惜ふ散りにし花の友
寝むる蝶ソツト宮眞に取れけり
行秋や洪水あとの壁の浸
飛入の人氣男や手取角力
姿にも似ぬ聲のあり啼蚯蚓
雪の戸を叩けはぬく返事哉
足に乗る埃りも熱き夏野哉
桐一葉人戀しさの夕へかな
滿洲に櫻一株植添へん
落花無心子は能く寝たり晝の雨
水吹いて糊もとしけり單衣
碑の文字も霞むや涙浮ふ月に
長へに枝は榮へて松の花
川止て大井泊りや繪双六
山里や只冬枯の夕煙り
風呂吹や酒提けて入る俳諧寺

3 壹

初雷や砲車をつゝ師團道
東雲の第一着や初松魚
雁啼や月に障らぬ通り雨
焚惜みする菊柴や霜柱
一聲ははしかき麥のうつら哉
靜心なく花のちる夕べ哉
拜殿に鳩集めけり青嵐
碑と共に名も立皮の櫻哉
重國の御代の光りや初日の出
飴伸す手に糸遊の纏れけり
瀧流や岩飛々に啼川鹿
涼風に科有る鬢のはつれ哉
行春やある夜雨戸を叩く鳥
夏山や越す手は雲に閉されて
蜩喰た跡にも出たり常念佛
山門に葦酒も許せ花供養
同し草二國芳し美濃境
延寺は餅に事たる櫻かな
冥想の耳汚しけり落ち椿
不如歸鶴の林に向ひけり
智恵貫た佛忘れず雀の子
白雲は朝日消へてみねの花
野は暮れて雲雀に殘る入日哉
送火や有漏と無漏との道明り
碑の文字は夜も讀易し花明り

3 貳

月を呑む雲の早さや時鳥
奈良坂や今撞く鐘も霞む數
幾まかりて行くや春の水
酒となりて浮世賑はせ今年米
野風呂焚く裸男や夏の月
師の恩のおもはるなり冬籠
良き村に一流あり梅柳
紙難や華美は許さぬ家政より
名僧の辻説法や秋の暮
星うつる流れ迂曲や枯柳
竣功の橋の雑踏や揚花火
蟬啼や眠る五山の晝の鐘
摘草や市原野邊の村小町
引裂た文から立や秋の風
豊公の遺跡訪ふ日や梅匂ふ
放生會鳩百羽より鶴一羽
花咲ぬ樹も匂ふらし春の雨
からりと鳴子の音や秋日和
時雨るゝや蒔殘したる升の麥
夜取水鷹匠は妻に命しけり
蓮の花南無阿彌陀佛の臺哉
折々に年賀も參る二月哉
出來秋や伏家に匂ふ新疊
炎天を乗合馬車の喇叭哉
接た木の三世薫るや八重櫻

3 參

麗や山から見ゆる京の町
銀先に雲切る畑や雉の聲
梅探り謠諷よて通りけり
時鳥松風高ふ夜明たり
鶯の便りうれしや梅の花
曉は露一色の千草かな
形代やついてに頼む肩こり
三千と世の夢見給ふか涅槃像
母の無事枯の音知らけり
宿り合ふ一樹の蔭や時雨會
鶯子啼や挽茶の匂ふ松の寮
鯉刻て卵の花陰の水深し
駒下駄の殊更重し芥子の畑
さし水に勢のつく金魚かな
新しき火の見や萌ゆる草の中
摺さしに一葉伸たる山葵哉
花の庭や喜捨に成たる塔一基
名月や硯は人の智恵の海
献立に張合抜る夏斷哉
椿の主黨派の議論笑ひけり
釜によれ机によれと日の永し
花散て財布は空となりけり
花籠に似た薬玉の飾かな
伽陵頻の聲聞かまほし蓮の花
尺七の影去りし身を慕ふ

3 肆

夕月や蛙啼く田の水明り
岸になみ萩咲く先は昔にしき
佛から佛に入るや涅槃像
春のひとつによりて今朝の秋
百薬の長や新酒の酔こゝろ
釣橋の下千丈や夕紅葉
寺の名と成て年ふる櫻かな
霜の鐘峰の巨利に響きけり
形見分け汗へ返る灯を圍みけり
蟬時雨先師の忌の夕かな
知己からの灘の酒あり冬籠
汗拭いてはつと息吐く暑さ哉
奥鶴や芦邊に高き浦の松
意氣天に語る花の盛りかな
虫干や父の習ひし手本まで
くさら聞く曇となりつ隅田川
彼岸會や京洛中の幾佛
さらぬたに淋しき物を秋の雨
朝東風や松の雫の落る音
小屋掛や花に臨時の派出所
其まゝにほしき柳の葢かな
三ヶ日子供と成て遊ひけり
夜を河を渉る智者あり雁の聲
揮を洗ふ和尙や夏の月
さゝ啼や小聲に覗く破れ障子

雪洞に影引く市の難かな
裏白や年の表の祝ひ草
未だ思ひある夜の明る難魚懸哉
鶯や花橋に老をなく
影消て雲に聲あり揚雲隻
由緒有る橋へや門の古柳
蛤の眞珠を島の雀かな
天照す神の光りや初日の出
瀧呑の酒に浴ひけり花吹雪
賑しき町續きなり年の市
逆らはぬ心に足るや生身魂
隣りにも同じ盛りや時計草
大農の駒を勞る蚊遣かな
湯に入る間嫁に温石預けり
弓と成り矢と成り雁の一つらね
涼しさに寝時の逢ふ夜毎哉
明不足暮不足なき春日哉
柳ある分れの辻や東海道
夕鐘や人も散りけり花も散る
關の香や絹地に輕き筆遣ひ
俤もかなと送り火透しけり
世渡りと許せば易き鶴匠かな
涼しさや菜賣のこぼす朝しつく
噴水の上に出てあり夏の月
日表に来て鳴く鳥や霜の朝

物好と云は雅味なし雨の花
松に夜を殘して明る櫻かな
長煙管長閑なかの小畑かな
初鷄や乾坤方に新なり
殘る甲斐ありて花さく大根哉
虫の聲高原の月靜かなり
朝月の消へ處なり遠柳
心までしめり勝なり五月雨
山茶花や刀自か閑居の歌机
夏瘦や醫學博士の妻乍ら
何時までも流れは盡きす岩清水
山莊の海老錠叩く落葉哉
物思ふ身は亂れたる踊り哉
時鳥遺墨を濡らす涙かな
木像も齋麥喰ふ寺や時鳥
崩しては組む智慧の輪も日永哉
慾去れば浮世も易し糸瓜の戸
水葬の棺呑む浪や星月夜
曇なき身にたどはるや今日の月
川風や折にちされる茶摘唄
亡命客澤山來るに鶴は引
多情多恨君に別れて春の月
禿山の夕日あかるし時鳥
鶯や未だ松風は冬の聲
尾も振らぬ馬の勢れや麥の秋

手を引て行くや沙千の姉妹
口切や茶の味も一と昔し
箒目の波に影浮く牡丹哉
人送る狼凄し冬の月
名月や庭一はいの松の影
葉櫻や人の昨日の夢の跡
御手植の昔過て櫻實る
昔歌の門家なりけり墓參り
日の旗に千代の風添ふ御代の春
利香は果て數寄屋は利休哉
人氣ある店に福ある年の市
そめくして野山影取る時雨かな
萩の聲水に打込む風哉
笠白くニツ三ツ這ふ青田かな
釣竿は袋の儘や魂祭
伊勢の神奈良の佛や春の風
春の月心のゆとり照しけり
べ直す鼓の紐や五月雨
散る蓮や人の命も明日知れず
矢の如き月日にも此夜長哉
石に立つ矢のためしかも寒稽占
眞言の秘密功なし散櫻
聲よりも下降る雨や時鳥
灰に焼く石切る山や葛の花
連れた子の手も遊はせず年の市

雛鶴の歩行みに似たり雪の舟
盗まれた跡に歌あり梅の花
玉の名を箒のちりや落椿
散る頃は日和もろき紅葉哉
山葵田や菘にも届く日のぬるみ
氣の張らぬ客に手の入る難かな
月既に落て尾花の風白し
十とせ三つは遠きにあらず薰梅
山河皆眠りて清し雪の國
永き日や巡りて善光寺
桐一葉萬感せまる庵かな
名のみなる母か叱るや寒習
美と實の伴はぬ世に桃の花
關伽桶に湛へて淋し秋の水
悲喜交々雪十心に眺めけり
羽織着た人も手傳ふ初荷哉
絹蚊帳耻かしそりに潜りけり
禁魚の池に靈ある柳哉
鷄頭や入日さし込む破垣
乾かして居るや花見の手風呂敷
からし菜に蒸せ暗せしか畑の雉子
昔から梅咲く寺や法の聲
蟬の聲松吹く風と成りにけり
三芳野の春は知らねと今日の月
月の出て名をさされたる踊哉

彼岸會や船の中にも珠敷の音
身に清き風の薫るや青幣
藻汐焚く煙の空や春の月
物堅き家例頼母し戎子講
家普請の注連張にけり冬の梅
ぬれ色の黒髪山や郭公
網入る柳の下や星月夜
鶴も巢を離れて彌生歩行哉
神風にひらめく旗や御代の春
鶴鴉の尾に天地の陸みかな
孤燈更けて寒し紙衣の膝頭
春風に乗るや心の浮調子
露の家薬知らすの揃ひけり
虫干に干す物も無き氣樂さよ
庭敷て昔し偲ふや花の蔭
御製にも入りし山家の砧かな
積葉の名残は霜の別れ哉
一と夜とはつれなき星の契り哉
來迎の夢や夏宵の筆勞れ
涼しさや水に浮く鳥沈む鳥
三符の襦袢はや雨に宿る蝶
投節は磔替りか納涼船
人を見て逃げ支度する鹿子哉
萩ちるや古院に細き夕燈
煩悩の夢醒せとや御忌の鐘

照降り人は人にもあるや入梅の空
香りに垣なき梅の匂ひかな
蝶とよやひは橋の幾處
十頃の麥田の上や揚雲雀
掛稻の上にも餘る日和かな
青柳に引張てあり船の網
新しき衣の折目や年の花
晴も念佛の中や眞如堂
稻の香の破風より洩る、夜明哉
有情戀情感交々や桐一葉
なつかしき虫の聲也句碑の下
移住して殊更淋し冬木立
近所には牛飼ふ家や冬の蠅
茶に心鎮めて時雨聞夜哉
今詩た水も地に呑む暑かな
流れ行水に立澄む砧かな
花の句碑匂ふ花傘翳しけり
梅の香や眞如堂の燭ゆる、
谷川や紅葉彩る夕日影
惜む程尙散そうそ夕櫻
美しや老て盛むの飾り海老
奢らねば世は渡りよし桃の里
鉛煮る鉛の煙や雲の峰
人を斬る風の、冬の橋の上
寺へ請ふ一荷の水や草の市

蝶々や友呼ぶ振りの羽根遣ひ
戦く葉は聲の響か時鳥
暮て又此月夜あり小春風
はかどらぬ足や雪見の階子酒
浦風に散るなり志賀の山櫻
春の雁ある夜きしを別れ哉
歌心有て話せる花の守
放生會や鳩も雀も一ッ籠
鶴も舞天津日嗣の御代の春
膝廻す木の葉懐紙や郭公
紙衣着て清貧論を草しけり
月を見る果報に貧富なかり覺
朝日さす嫩草山や風光る
若竹や何の不足も無き育ち
年の關勘進帳を開きけり
夏籠や只鳥の聲水の音
人の世や花に笑ひつ又泣きつ
日盛りやたしない水にうつる雲
女郎花誘ふ水あらはの風情哉
薫風や營門を出る聯隊旗
去ぬ雁や遠波滔々沖漣し
永き日に棟木の以來尋ねけり
散る日まで折り惜けり庭の梅
捨團扇誰か樂書の筆の跡
虛無の理は悟り得されと冬籠

貝桶に溢れかゝるや桃の花
雪解や馬にももの云ふにり道
遊ふ日はみしかふ暮る櫻哉
彌生空我物にして鳴く雲雀
電線に整列したる乙鳥哉
小春風沖津島山畫の如し
梅散や跡の床しき香の殘る
猫の夫聲に理想を選ひけり
親の汗子を美しう育てけり
葉櫻や人の往來は鐘供養
苔のむす碑高し靈祭
攝酒して家費調節の寒さ哉
養蠶や一家の富は國の富
待甲斐も有る山里や郭公
鳴り響く鐘の供養や花の寺
年の瀬や百鬼夜行の小提燈
花美々し碑は健やかな筆運ひ
遊ふ子の智慧を見ている日永哉
花咲て勞れ養ふ菊の主
下女までも機嫌酒なり難祭
され事のあるか太平よ花軍
咲くや蓮泥を放れて彌陀の前
花近う眠たき雨の降る日哉
時鳥星線る指の狂ひけり
室咲の一輪落ちし憾み哉
十三

3 拾叁

念佛して戻る僧あり 曉月
水上は雪の花かも 吉野川
夏知らぬ木影もありて 苔の花
葉灰の無心も多き 亥子哉
こからしや海へ横たふ 沙煙
鶯ともし水呑む 住居かな
國寶の太刀薄曇る 卯月哉
うつ蟬や身は厭世の殻ら 衣
鶯の姿かゝして 初音かな
逃水に追はるゝ 蘭田の水鶏哉
掛取の出入も繁し 今分限
白菊や濁りゆく世の清め 草
禪室に師の一喝や 秋の聲
野路深く 藥草探す 日傘哉
千鈞の名歌を讀めよ 附子鳥
幾世香に碑は包まれて 花の雲
ふらこゝや 悶へ心を幾返り
夕顔やくらき 戸口の洗ひ 銀
芥子散て 佛の道に誘ひ けり
御獵場の砲聲高し 雪の朝
清貧の友は 汝こそ 蓑
被布召た手に 似合けり 花しよき
草の戸に 聲のもたるゝ 蛙かな
萬岳の中に 氣高し 雪の 不二
碁を圍むすへ 覺へけり 避暑閑

3 拾四

湯豆腐の提燈高し 萩の中
葉櫻や春のゆくへの 美しくしき
錦着たより 菖菴の 新酒哉
蜜蜂や山又山の 花にまて
正月や梅から 移す酒の音
花に風をしまぬ 人はなかりけり
初懐紙水莖の花 匂ひけり
白蓮のすくれて 清き姿かな
曉夜の湯屋路や 唄の捨て 處
今日きりの春を 鐘撞く男かな
咲花を見ゆる 限りの手向かな
當年の意氣 連積や 藥喰
美しき言葉 使や 難の客
閑居して 世事白菊の主かな
樓門の勅額 高き 紅葉哉
井を問へば 指さす山の 清水哉
幽魂何處にか 在す 散櫻
櫻咲く國に 生れ 歌の主
無理云ふて 惜かる菊を 貰ひけり
荷は馬につけて 身輕し 春の旅
譽られた雨から 出た 夏の月
須磨明石秋を 隣りの 夏の月
陽炎や馬糞の 多き 都口
鈴虫や月に 冷たき 竹の 椽
鳩は巢に 籠りて 鳴くや 藤の 雨

3 拾五

拜墳や糸程細き 涙雨
年の花咲くや 豊榮昇る 旭
露涼し 恙なき 田の 朝景色
閑寒し 一つは 棚に 有る 枕
戀なれや 猫も 此頃 不食する
古き世の歌な つかしき 櫻かな
蛤の寶殿る かく 夢見哉
人ならば 樂觀的の 蛙かな
春もまた 櫻に ならず 梅の花
大望を抱へて 鷹の 跡出かな
うるはしき 露の 玉ちる 青田哉
萩百勺もの せん月 は ならずとも
遊ふにも 日配りの ある 彌生哉
安賣の 扇子 買ふたる 殘暑哉
身は親に 智惠 虚空藏に 貰ひ 覺
祭る日は 幣も 風なし 花鏡
無爲に 化す 太古の 顔や 畑打
日盛りや 空ら 馬車通る 砂煙り
假寐の夢に 泪や 父戀し
青田十里 果を 白帆の 往來哉
遅櫻 曉の 居酒屋 寂に けり
寺の花 浮世の 人を 覗き けり
月碎く 石に 聲あり 夏の 川
枯野にも 未だの もしき 小松哉
解たれば 水に 色なし 雪 達摩

3 拾六

指の畫か 道案内なり 萩の茶屋
仲る程 空へは 遠き 柳かな
手入した 丈け花にある 牡丹哉
塵一ツニツ手の 鳴る 牡丹かな
惜まるゝ 隅田の 昔しや 梅若忌
白菊や 都に 古き 扇折り
人心見 違ふ 鏡の 咄しかな
雲と見し 氣色も 夢よ 落葉時
天台の 山門 暗し 夏木立
朱に 黒の 筆誤てり 時鳥
美しくしや 花輪 供へて 手向水
神州の 兒は 餘裕あり 鯉瓶
篤かきの 酒代を ねたる 吹雪哉
香笑は 禪味 起りて 露の 音
貧民に 志十石の 施米かな
花賣りの 梅と 柳を 初荷かな
釋奠聖者の 偉功 慕ひ けり
釣鐘の ヘンに あんふなし 蝸牛
珍らしき 蝶の 影見る 小春かな
梅咲て 茶菓に 事たる 庵かな
金衣鳥や 吉野へ 來ても 梅による
那智の 瀧心も 塵も 洗ひ けり
病癒て 二度の上京や 今朝の 秋
ざんざんの 松も 探らん 月の 旅
散る花を 浴ひて 流るゝ 隅かな

3 拾七

陽炎や 軒に 干たる 濡雜巾
初鴨啼くや 神路の 山桂
植をく くれた色の なき 青田哉
鳥さしの 足にも つるゝ 落葉哉
我に 鳴く 犬ども したらす 鉢叩
嵐山の 錦鯉 蛾野の 錦かな
釣干に 花咲 しけり 櫻鯛
歌をよむ 今小町あり 業平忌
此奥に 古き宮あり 梅の花
御被して 五罪十惡 亡ひ けり
見ぬ先に すゝしき 瀧の 轟き哉
名月や 加茂から 加茂の 人通り
竹に 降る 雨に 味ある 新茶哉
田村に 水車の 輝る 暑さ哉
鳴の立つ 雫を 雨の初め かな
芍薬や 風采高き 刀自の 住む
山水の 音 静なり 臈月
潜り出で 跡を よりむく 芽の 輪哉
梅香る 岡や 経讀む 鳥の 聲
動きなき 巖に 咲くや 苔の花
若芝や 木屐に 垂るゝ 鞠袴
枯果し 野なれと 月は 夜も すら
蕃人の 血鎧 提げ 行 枯野哉
白ひ 蝶白ひ 牡丹に 隠れ けり
福田に 法の 種 詩く 彼岸哉

3 拾八

大庭に 鑄物の 鶴や 松の花
白梅や 朱には 交らぬ 一軒家
七浦や 鯉 供養の 鐘 霞む
文身の 腕つき 出すや 鏡ト汁
行春や 花の 夢見し 嵯峨 御室
月に 借る 庭に 粉のこほ けり
よく 酔て 能く 寝て 年を 忘れ 覺
語るた ひとした 昔しや 月の友
簾 障の一令 待つや 月の 灣
花萬葉 五彩の 雲のかゝり けり
風となりて 空に 舞らん 桐の花
氣まくれの 俄移轉や 霞の 夜
朝露は 涼しきもの 上蓮の花
聲の音に 歸は 離れて 蓮 薫る
湛へたる 泉も 甘し 佛生會
菊の座や 主は 米字客は 古稀
亂れ 髪笑窪の 種か 朝の 蟬
行春や 肩揚を ろす 隣りの 娘
飼猫の 眠る 小春の 日向かな
公事も なき 十戸の 村や 桃の花
紙幣納て 極樂 買ふや 御取越
濁江に 染まぬ 色香や 蓮の花
寒月や 染 壺並ふ 窓 深し
蝶雲雀 皆野に 遊へ野に 遊へ
踏めは 鳴る 院の 廊下や 梅の花

3 拾九

夕月は 棹にかゝりて 覗 取り
眞直な 道を 扇て 致へ けり
神垣や 若葉に 清き 朝平
寒菊や 意義有り けり 破れ垣
出代の 今さら 落す 涙かな
虫鳴や 閑静かなる 緋行燈
龍すこく 書院に 曇る 卯月哉
思ひ出す 人幻ろしや 朝茶の 湯
昇る 旭や 梅匂は して 人の 來る
世を 悟す 芥子や 無常の 教へ 草
杜蠅船や 果し 芝居の 良り 客
閑にして 閑なき 身なり 菊作り
庫裏へ 來て 鳩吹く 顔も せさり 覺
夕顔の 夜露も 待たす 開き けり
夕立の 晴れて 込合ふ 電車かな
更衣して 取る 蘭の 古葉かな
遠き路 わさど 撰むや 春の旅
なんどなく 氣改まる 芽の 輪哉
花の 碑も 曇るや 手向く 香煙
勤らきに 生れた 世にも 櫻かな
武器 武器も 積に 替へて 桃の 宿
霞む 根となる 今月の 夕煙り
秋の 蝶息 吹かけて 放ち けり
また 暮れぬ 梅に 柳の 月夜哉
人聲は 法座の 果か 牙ゆる 月

3 貳拾

腰袋に すれ行く 雨の 螢かな
時鳥 狩場の 陣は 寝入 けり
白雲の上 になり けり 山さくら
兒供等の 文珠の 智恵や 雪佛
餘の事 心に 散らさす 墓參り
出で見れば 遊ひ 連る 師走哉
口切や 妻より 古き 友計り
さす水も 手向こゝろや 瓶の 梅
月涼し 網一列の 漁村かな
懐舊の 談 酣に 明易き
無き人を 慕ふか 句碑に 虫の 聲
一人 寝の 聲は 夜風や 紙衾
さきりくす 泣く 野芝居の 愁嘆場
惜まるゝ 色香や 菊の 霜一夜
鴨川の 空に 流るゝ 轍かな
黃鳥や 見返れば 唯 竹の 雪
皇國の 精華 誇る 櫻哉
夕月や 蛙鳴く 田の 水明り
掃く 後を 又掃く 後を 落葉哉
我も 愚に 返る 思や 散さくら
世渡りは 嘘八分なり 厄拂
首塚の 狐火 凄し 秋の 聲
名月や 神話に 似たる 山の上
なつかしや 世聞し 花の 遺句
花桐や 行義 正しき 人 出入
十五

時鳥山の夕日を浴びて飛ぶ
初空や動かぬ不二は長
糸遊の影水にひく日和かな
放ち鳥一善盡す心かな
鶯の間ふて嬉しき庵かな
秋淋し風に破る、蜘蛛の糸
五月雨や瀧へ戻りし松の音
一聲にかたよく月や時鳥
光り持つ砂の冷たし後の月
探り得し梅や在所のぬかる道
啄木鳥や神秘を包む保護林
初鴨や冷ふ渡る池の風
大雪や我が胸の緒を切てより
うなひ子の手に取られ鬼手鞠花
水音も眠りて塔に月牙ゆる
花の雪硯の海を埋めけり
あり難き法の不思議や御難餅
不自由はた、水計り也花の山
利かぬ帆の上に聲澄む雲雀哉
思出す師の俵や花の旅
花に飄雨手に玉の思ひかな
堆さ句碑堆き櫻かな
落付いた音や日永の壘所
古郷の香もなつかしき草の餅
絹走る筆の軽みや初嵐

子は園に捧けて老の畑打ち
入船も出船も潜る柳哉
鯛や四面静けき極楽寺
陽蔭ても堪へ切れざるを田草取
紫陽花や雨も日毎の色に増す
明け残る嵯峨のともしや時鳥
夢は覺め果てけり花を見し昔
十方に聞なし蓮の朝朗
晝も露ふじや通れる丈の道
曇り日や肌へ届かぬ松の風
尼寺の垣根葎や鬚草
別れたる君は何處を戀し鳥
暑からず寒からず花の世なる哉
船に跡一と船は月も乗る
酒言ふ腰押を得て年の坂
鐘の音や花より出て花に入る
石撫て、讀む碑尊し苔の花
蜂群れて静に花のうなりかな
笑ふ外の二々癖無用花に酒
雁風呂の餘燼盡させぬ名残哉
淡雪や夕日のあたる東山
懷舊に耻るや花に杖曳て
猿引の小袖洗ふや春の水
皆花と匂ふ遺墨や西行忌
花探る道に聞なし極楽寺

心かも鳥か経讀む極楽寺
松や竹雪の積りて立姿
蓮の香や手向の歌仙巻く座敷
筆とれば懐紙明るき紅葉哉
寝臺の窓や朧の月、明り
簀篋者の交りてをかし飯の鍋
長閑さや何處から見ても朝の富士
見つくせぬ花雪にして歸り鳥
南山に登る麓や梅柳
水亭の下に入りけり番ひ鴛
笛の秘曲奏すや花の塚の前
踏青や姉の子供は京育ち
我曉忌に孫は十三参りかな
風の有無團扇全部を撰みけり
落葉踏て訪ふ山莊や春近き
行く雁や湖南に淡き月の影
また残る蚊に捨棄る團扇哉
降る雨や一日は簑も花ころも
やさしさは風にもあるか糸櫻
舟つきの提燈結ふ柳かな
紙衣手向の水に濡しけり
春の草ふまる、人に匂ひけり
牙返る今日を十年の年忌哉
一筋は田へ行く水や茨の花
草の戸や筆をかんでも露の味

乃木となれ東郷となれ初轍
夜も花の往来なるへし渡月橋
悲しさの餘りに鳴くか間の虫
行く在に御治定とあり桐の花
紫陽花や世をすね人の隠れ家に
風かみの涼しさてなし神路山
櫻網鳴門の海に浮かれけり
散り際は人も斯くあれ山櫻
蟻螂や墨みそこねし羽根の儘
古井戸に燐の火凄し枯尾花
寛活な教訓の座や釋奠
山茶花や女主の小庭先
齒固や喜壽と米壽の母と父
夕顔や昔しは壁も白かりし
水汲に通ふ小経や散る紅葉
西行の歌に名のある櫻かな
芭蕉忌や三百年の語り草
引き残る霞とはかり櫻かな
飾らざる貧は美し梅の軒
後ろから呼へど答へず春の人
鶯や夢なき朝の枕元
十年前偲ふや花に集ふ友
川音をかへて深き霞かな
泡沫の影を宿して、雪連摩
髭剃て口元輕し今朝の春

涅槃會や空に棚引く法の雲
惟は元直なり雪に曲る竹
曙に残る名の夜の光りかな
時雨まつすみや菴の香合
一宗の長老も出たり寒念佛
古への右京の跡や啼雲雀
顔かくす草はまたなし雉子の聲
消へもせず流もせぬや花の雪
木蓮や露けき尼の腰衣
濃厚な中に味あり玉子酒
梵僧に宿供養せん遊行忌
葉櫻や歌詠みし跡酔た跡
初松魚大膳察へ登りけり
一脚の主や杖は菊にまで
秋の寂夜に廣かるや虫の聲
朝冷の返しを花の日和哉
炭かまの煙りとなるや散紅葉
粉黛の匂ふ間もあり梅屋敷
十分に汐の干る日や花盛
瓢なせて亡き師を語や花の下
酒故に人には成れず綱代守
朝起にくせはつかねと晝寝哉
蜀魂なくや句塚の峰つたい
慾はつて濡らすゆまきや沙千狩
詩に歌につきぬ名残や散櫻

寒梅や床には忠に孝の軸
重なりて居るや日永の岩の龜
鳴あかす虫も古人を慕ふ哉
啼く水鶏離別の酒肴冷にけり
地蜘蛛追ふ追そこのふて立雲雀
時雨や墓碑に來て鳴く鳥の子
渡し場に乙女の群や早苗月
草花や蝶は日和のこぼれもの
往て見ずに置く、物か花の山
石地蔵の天窓撫けり鬼芒
越し方を思はせふりや散櫻
野邊送りすまして戻る寒さ哉
藥堀る手を毒虫にさされけり
蜻蛉の眼玉や汝いつ眠る
花の雪忌日暮をほらひけり
渡守る小屋の中まで散る櫻
極楽の鳥になれよと放ちけり
盃に散り込む花の吹雪哉
御生母のありしと見へず涅槃像
春の宿禰隔て、語りけり
鳥の巢や校舎の裏の小松原
青葉ならぬ篋の笛や春戀し
人へのみ残る寒さか初櫻
本願の松は緑りや枯野原
古枯や足にからざる裾の襷襦

青柳や潜り潜りて高瀬舟
木犀や香も頻りに月の照り
下萌や引けは破る、捨むしろ
鶯や膝に伏せたるみ、な草
川越に鉦のどくや寒念佛
心して師の塚跡らせ春の雨
露時雨草の家の燈の走りけり
葉櫻や花の昔のなつかしき
女郎花華に潔白しめしけり
雪譽て居る川附の座敷かな
萬民の喜捨の香りや花御堂
一意専心孜孜と勉むる乙鳥哉
拍子木の音は寂けり啼水鶏
海松や嬖女も子の日の遊ひ振り
空園を守る貞女や夜の長き
青柳や雨の孤村の物靜
露の野や碑にぬかつけは濡、袖
梅咲て似合ぬ垣はなかりけり
京なれや詩繪、椀に蜆汁
一本の花を便りの茶店哉
竹帛を汗に汚して晝の夢
葉はつねに譽て置けり蘭の花
夏瘦のたもとに忍ぶ富貴哉
歌にまで園は豊かな田植哉
葉櫻や人何時までも若からず

忠に身の寒さ濟すか葉竹賣
物忘れする身乍らも花さけは
あしきなや頼みにきぬ秋の暮
遅參者を扇鳴らして誹りけり
忠義とて子雀の歌ふるいけり
菊の香や家憲五條の温め酒
燕や橋渡るにも一と翅さ
福藁の中に目出度き一穂かな
八朔や田に物云ふて人通り
煩惱の百夜に盡て月氷る
萬城の神ならねとも難魚寝の夜
枯芦や河どんよりと湖に入る
海見へて涼しき松の小蔭哉
春駒の來て搔餅をかかしけり
頼母しき田の面の色や半夏生
今日も又雨となりけり時鳥
歌となり句となりて散る櫻哉
七轉ひ八起の世界で花見かな
鶯に趣も味も持たぬ部落哉
鳴きつれて雁歸るさよ月暗し
暮雨斜め傘走り行く青田哉
我轉々戀し十三年前の秋
片町は小家計りよ啼く蛙
水行きて歸らす花は雪と散
魚多き浦の寺なり秋の月
十七

枝低ふをりて鳥鳴く涅槃哉
白露や草の香に立つ朝朝
こほれ合ふ露さへ菊の匂ひ哉
初雛や男の中の女の子
遊廓の行燈更けて寒念佛
春駒やむかしを包む氏素性
大年や子守して居る角力哉
見ぬ人に迄惜しまれて散る櫻
朝日さす松の透間や雉子の聲
起される身にはつれなし霜の鐘
伯樂に會はぬ駿馬よ楯の主
時雨るゝや左舷は月の見へ乍ら
曳て行く鶴やそれさへ後ろ影
間接は花の罪なり二日酔
川舟や初霜白き苦の上
勝菊の名は長へに根分哉
素直ても底力あり雪の竹
水田から續くまかきや啼水鶏
掃をしむ花におもたき箒哉
茸狩や蜘蛛の糸引く松と松
木の芽摘む右手に豆腐の通ひ哉
鷹一羽追れて來たり夕時雨
時めさし茶寮の跡や苔清水
櫻雨寺に淋しき浮廬の國歌哉
鹿鳴や月は入狹の片明り

國歌を祝ふ君か代喜久の花
花は寝ぬものか闇にも薄明り
浦淋し思ひ出しては鳴千鳥
魔の如く蛇泳き來る花藻哉
どもし火も暈さる春の雨夜哉
探るにも尙奥深し枯尾花
百敷の庭橘に匂ひけり
探り得た遺墨尊し桃青忌
火なふりの外に所作なき寒哉
花の留主暗剣殺に向ひけり
蚊柱や嵯峨訪ふ僧の夕煙り
空家の庭やゝ荒て落椿
開墾の許可得た野なり草の花
狢犬に雪をかける若葉哉
月花や既に十有三回忌
提燈の消し間際を時鳥
大船の龍骨見ゆる沙干哉
吹さかくる仁王の顔や花吹雪
機を狙ふ塗炭や鷹の眞直翔
鶯や閑伽汲む院の朝ほらけ
風車見上げける空や時鳥
十三里盡ぬ清水の流れかな
逃る事知て居るなり雀の子
白拍子花の御寺に辿りけり
燈し火の流れて寒し持佛堂

世を捨る處なし此處もくも花
馬買ふて牛を賣りけり麥の秋
白酒に酔て見に行く鏡かな
絹團扇山葵の涙かくしけり
白萩に尻行つめり垣の月
長生へて行春に逢ふ櫻かな
若竹にうつる雨夜のともし哉
静かさや月も運に入る光り
黃鳥や紙鐵砲は隣の子
顔見世や人氣吸ひ込む竹矢來
其昔葱文字摺小忌衣
飯運さ宿と記しぬ鹿の聲
輕業を眞似るか竹の蝸牛
竿躑躅見も思なり櫻欄の花
長き夜の寝覺や淡き月明り
足袋履けは子に行先を問れ鳥
枯杖の障子に寫る夜寒哉
ちかよつて見らぬ花や岩つゝし
咲てから日數見せけり八重櫻
古への都の跡や草紅葉
茶の座にも成た跡あり春の草
花の雲花の碑包みけり
碑や時雨に寂し苔衣
馬洗ふ廣き川原や夏の月
秋立や我發心の旦より

菊咲て聖壽無窮を祝しけり
付て味附付けぬ味なり露の臺
猿鳴て哀れなりけり夕時雨
能五番果てゝ水打つ館かな
大念佛小袖に書ひて壬生寺へ
ゆるさなき國を根にして櫻哉
大矢數柳の棟を通しけり
曲水や百司の試す筆の綾
干たらの網に小春の入日かな
師を問へは答ふ鸚鵡や春の雨
いらく秋また暑し灸花
有司百官召されて菊の御宴哉
障子張る尼の手白し秋の風
江の島の春や梅貝櫻貝
星今宵月有情に曇りけり
朝月に塔影薄し蓮の池
心みな佛にしたり神の留主
子も親にまけぬ香手や花歸り
笹啼や數寄を疑らせし竹の窓
井の底の蛙に星の神秘哉
廓の灯のにちみて見ゆる臙哉
見上く花見上く碑綾と錦哉
夕暮の人皆若し己午市
達摩忌や浮世は芦の一そよき
とこしへに薫る花なり大和魂

初日出太平洋を産湯かな
雨乞し社へ稻の初穂かな
家に花咲せた人や菊の主
末なりの南瓜に残る暑さ哉
日當りに庭師眠れる小春哉
猫の顔覗て行くや飛小蝶
時々はぬれて外山の眠り哉
夜櫻や人は櫻に向ひた儘
貰ふたる鯉は放して袖味噲哉
脱き取た上に珠數置く頭巾哉
實を結ひ初めぬ記念に植し梅
萩の戸や誰そ來よかしの茶の煙
桃からの遊戯愛らし雛の客
電力の源は此泉かな
初霜に聲の牙へけり納豆賣
山鳩の三枝の禮や冬木立
木蓮や今道心の腰衣
冬櫻袖の焚火に開らきけり
八重櫻雨に重たき姿かな
神風に匂ふ紅葉や手向山
冷麥や盆勘定の仕舞酒
籠夜にして戻りけり東山
碑に照るや紅葉の夕明り
手まねして角力戻りの話し哉
京戀し奈良なつかしき新茶哉

榮へ行く御代美わしや菊の花
香に香添う十七文字や花の下
虫干や拾ひ讀みする翁の句
當にせず置く債券や虫拂
子子やいつか無縁の墓の水
夕立の去りて月浮く流れ哉
鶴引きし跡やなつかし清見瀉
菩提樹の日影辿りて運如忌
白雲のさかろふ影や秋の水
趣は夜毎變われと月と梅
蝶てさへ花に迷ふか鬼窟
低冷の夜や残月に啼千鳥
鳴鳴や月に箋着る渡守
割菘鳥鳴や里子は蓋に夢
奥津城の小さき日蔭や苔の花
山里は蚊遣り焚くなり夕まくれ
七夕や後宮の燭籠にて
今日も花倒れぬ程の酒の酔
開傳ふ史蹟花野に探りけり
師の句碑にいつ迄絶る蝶々哉
夏の夜の風冷あり腹の皮
碑に記憶新らし花の雲
羽震をいとよ眼ませや繼尾鷹
佛にも濁世の塵や御身拭
窓明て上衣を脱くや春の風

新しき卒塔婆にも散る櫻哉
踏て見て馬引く雪の土橋哉
鐘の聲雪の夕暮造りけり
髭すれの儘に譲りし紙衣哉
一門の道中なかき展墓かな
暮る迄野に置く牛や春の月
八月の間の小口や落し水
鶯や今に戻らぬ水貫ひ
石に立つ矢もあり肝に此暖簾
水滸や恩賜の恵み受る膝
筆染る硯の海も月夜かな
南枝既に花あり雪の處々
慈悲の藏の簀に隠れん三十三歳
古池や蛙飛ひ込む向ふ見す
凍付て有るや軒端の捨わらし
何見ても清し雪野の朝朗
鶴の子も親に離れて春暮る
放つ鳥茶毘の煙にかくれけり
散り際に力ら見せけり八重櫻
夜もすから鹿の聲聞く御坊哉
野佛も着曠や苔の花衣
朝顔やをもひもよらぬ色計り
うれしさは吾に有りけり魂祭
さわかしく廓に一つ螢哉
時鳥三人上戸寝たりけり

海に船空に飛行機飛はせけり
暮淋し燒野の空のちきれ雲
浦へ出て舟待今日の日永哉
短夜や扱も良人の書淫なる
子子や蚊に成る迄の淫き沈み
天心の花かは知らし今日の月
人格を保つや牡丹活るにも
花七日心は十日二十日かな
齒にさわる迄端居して秋の風
蝙蝠や月と柳を右左
夕顔や蚊遣に煤ふ竹柱
風輕う耳に冷たき彼岸哉
衰つまりて豆腐の堅き楮火哉
生徒等の修學旅行や和清天
舟宿の寒業暗し啼千鳥
涼しさや寝轉て見る蚊帳の中
燈火に迫る靈氣や魂祭
花の寺仁王計りの顔構
椅子二脚菘薇の香清く薫けり
不二高ふ澄や小春の田子の浦
夏羽織風輕き夜と成りにけり
句碑不滅花に幾世の語り卿
勤儉の二字は尊し葉碯
唐船の諸所望や春の雨
手向はや萩の雫の届く迄

長閑さやあくひにゆるむ笠の紐
休む日は毎の肩打つ砧かな
薫る名は枯てもくちす菊の花
芋虫やころがる迄に喰ふどり
追羽子の袖美しき舞妓哉
山吹や羨乞われたる雨の宿
積雪の高低ありて夜の明し
梅か香や庭踏む人の繪雪洞
うくる手に慈悲のこほ。施米哉
手入する座敷廻りや冬構
罪の程思へば亂る鶴繩哉
仁丹は母の情や岩清水
散る人を花も惜しむか夕嵐
紐付の足袋詠へる頭巾哉
長閑さや一里の道も旅心
留るにも袖は引かれす夏羽織
古枯しの吹忘れしか月一つ
米櫃の底掻く音や秋の暮
世の塵りもなき水音や山櫻
山川に風情も添へつ秋日和
辨慶は酒にも強し花の陣
長閑さや隣から来る酢の匂ひ
月今宵十年の昔しのひけり
重箱に野邊の色香や草の餅
月の雲風雅の變化自在なり

寝る迄にして能き月に涼み覺
見る人の心も澄めり朝櫻
虫啼くや眞如堂の松の蔭
我が胸を千疊敷にして涼し
寄附札の傍に込み合ふ羽蟻哉
白萩や花の重みを水のの上
御座船の浮くや鶴川の百簀り
記念樹の回忌に會て歸り花
庵易し客も隔てぬひこつ
蝶鳥の影も見ゆるか春の月
囀りて遊ふ波間や都鳥
萬巻は腦裡に秘して楳の主
いにしへを忍ぶや須磨の青藤
命かけに千鳥開けり親不知
咲くや花鳴呼師の翁ましまさば
幼子の寝顔覗くか蚊帳の月
盆の月佛の國に入りけり
色も香も問はず早梅の譽哉
源平に分れて涼し水泳帽
俳諧は益なり花に握り飯
草菴の灯を吹く風や星月夜
世は夢や花も咲替ふ十三度
番茶にはをしき水なる桃の宿
碑の前や雨の落花に男泣
爲ならぬ涙瀧さて芥子の花

初花に樹下石上の法話かな
高燈籠あゝ世の道を照しけり
朝寒や何か雀の謀
寺に行く道我開く吹雪哉
鶯や旅も音せぬ賤の機
顔ふりて木の間にけり雨の鹿
梅の窓月に餘韻の籠りけり
陽炎や世を樂燒の土細工
矢尻研く笑顔の凄し楳明り
蓮咲くや迷ひの夢の覺めし朝
櫛入た髪にも似たり糸柳
極樂の風にゆるる蓮華な
嫁娶て疊は青し春の風
零する若葉に光る日差哉
玉苗や瑞穂の國の寶艸
御忌の鐘土の街に響きけり
釘錆て蘇鐵に残る暑さ哉
山櫻散て浮世へ流れけり
由緒ある寺も崩る落葉哉
撫て見る塚の湿りや夏の露
さすり出す如意の光りや冬籠
虫干の巻や十年の筆の跡
其心といたき茨の花と針
神の伊勢佛の奈良や春の風
花の留主朝の連摩を下しけり

涼しさや風は柳に月は水
散り込みし花を讀書の葉哉
金装の経積む寺や一葉舟
生活は簡易に如かず冷奴
經机姫百合の水こほれけり
鹿鳴や曉寒き水の音
墨染の身はうつ蟬に似たり
雁啼や母國の山河夢に入る
動く物皆初秋の姿かな
白芥子花に厭ふや晝の雨
花のちり掃出す船や夕渡し
朝霜や渡るに恐き丸木橋
假名書の手紙美く草の餅
萩枯て上風計り通りけり
起されて浮世へ戻る晝寢哉
何一ッ目障りもなき青田哉
春の川供養の龜を流しけり
方言に苦む里や桃の花
行春や袋にかさむの敷
初雷やほろりと落ちし燭の花
年忘れ債券五枚買ひにけり
花の雲句碑の餘情を作りけり
欠伸迄籠へ投げ込茶摘哉
平等も眞如も月の姿哉
色も香も量りて見たき花野哉

語るへき友亡し春の雨頻り
年寄と思ふ日はなき彌生哉
傾城の素顔を見たり朝櫻
よき事は子も開分て放し鳥
下に見る花の盛りや大悲閣
月の輪の中に星あり蛙の夜
花の山乗り有る樹を尋ねけり
秋一夜空嘯て明しけり
見つくして初手の櫻に戻りけり
花と見し雲やいつしか消るらん
芭蕉忌や世に月花のある限り
雨雲の脚の早さや枯野原
雲一重下界は雨よ富士詣
言の葉も香に立皮の櫻かな
捨て難き夜なり月なり郭公
いさ今日の手向と新茶送りけり
不夜城のうしろは闇や啼く蛙
しらむ夜の露は涙かどもし妻
鶯や一部八巻さとりかほ
初雪を何と見ている乞食哉
餅を搗く音に小家はなかりけり
踊から因果の胤を宿しけり
慈善には財は惜ます干菜汁
二親に着せてから着る袷かな
珠數持て見れば重たき鶴繩哉

手作りにして趣味のあり盛籠
報恩の端にと粥の施行哉
行くや年老若男女皆連れて
散るものの中に美し山櫻
入院の野路や露さへ冠る壘
葉と成りて過ぎし日徳ふ櫻哉
蟬鳴や木蔭はしらぬ通り雨
忌垣に添ふて玉巻芭蕉かな
映る灯に靡く柳の姿かな
遺言は念佛もいらぬ魂祭
藥湯に入て餘寒を忘れけり
花したい鳥も群れ来る忌日哉
二ツ三ツ左に狂ふ砧かな
葉櫻や月影いまた春の如
世の塵にふれぬ露持つ蓮哉
方言は國の手形や出代り女
泣連れも子を負ふ人よ壬生念佛
花散るや追悼會の鐘の音に
鶯の飲みには育つ流れかな
君戀へは文待つ我に夜永かな
借梯子かたけて來たり梅貫ひ
掴み出す鴈寒し春の魚
へたてなく露有れば月舎りけり
口笛に明く裏の戸や朧月
時雨るゝや蒔萱堂の薄月夜

散る花やあはれを誘ふ暮の鐘
夜は花の上越す音や大堰川
容赦なく牛の踏み行く田螺哉
草の戸や月は入りても虫の聲
憂き秋を餘所に墨染衣かな
短夜や梧桐の葉越に残る月
草餅や家の和合の美しき
隣りにも着りし音や櫻鯛
一押しに風は行なり萩のうへ
宵からの雨も晴れけり更衣
若竹や風の油断を月昇る
爐開や帛紗捌きも馴れし業
蓮咲や早明てある寺の門
實櫻や碑寂し故人の句
世は夢と悟りて糸瓜氣取り哉
鶯に聞はゞや梅の植處
初寅や雪降る中を小荷駄馬
明残る月の尖き野分かな
春雨やまた片附ぬ庭普請
馬曳て時雨るゝ道を急きけり
翌日も又來る氣揃や粥施行
菊や尊仰く芳香幾萬里
狸寝の心中苦し蚤嫌ひ
風もなく静な庭に一葉かな
吹草場の一曰寒き祭かな

碑にかくる花も手向の葉かな
曉夜や俤うかふ持佛堂
沙山のさしての磯や鳴千鳥
うたゝ寝に涼しき戀や竹婦人
鶯の嘴の暗や篝の照返し
芳名を千古に残せ散櫻
椿落て池に波紋を畫きけり
花の袖隠し涙に濡しけり
椋の實に松葉も交る袂かな
此奥に塔も有りそら茂り哉
六月や雨にもならぬ朝くもり
取込んだ花に御威や花の幕
子を寄て志望尋る火鉢哉
紅燈の高き埠頭や冬の月
手向るも心ばかりや残る菊
子子や一個の瓶を太平洋
二の聲は國を隔てゝ時鳥
涅槃會や珠數掛け鳩の屋根に鳴
淋しさは芒に落る夕日かな
散らぬ程招け野中の花芒
櫛入れて思ひ出もあり魂迎ひ
供養に撞く鐘の響や散櫻
我の乗る蓮を作るや慈善心
青柳や辨財天の堂赤き
人の來ぬ日か長閑なり書齋室
二十一

月澄むや封鎖を破る飛行船
粉白もいはれて有富浦哉
目に見て春は伸けり草の丈
里富て人心よし梅柳
霞出て霞に入るや春の雁
寒菊や雨に香焚く佛の灯
爐寒や立居も軽き裾捌き
極樂の名の夜なるへし盆の月
人も来る程に成りけり山の菊
大空を雲のせはめて時鳥
寂盡す秋の根しめや菊の花
煤掃や男手はしき女衆
月涼し墨繪の様な窓の竹
碑は幾世朽ちず花の香偲ふけふ
龍の目もすわる伽藍や露の音
是も又通夜の果報か時鳥
寒うなき日には眠たき柳かな
呼出しはそれかと知るや廊日傘
大蕪種ともなりて京の市
松一木星の葉りや冬の月
身を横にすへき夜てなし新嘗會
見込程花の威深き牡丹かな
一部落寺も宿屋も蠶飼
千代の根は山に残して門の松
出代の包みに餘る情け哉

錠かけて渡さぬ橋や蓮の花
秋風や澁谷に立つ誰か煙
白牡丹頃國の美を賛せられ
三日月を喰ひ残したる西瓜哉
植た夜の竹にさし出す手燭哉
月の暈破れて花の日和かな
箱詰になつて雖も渡米かな
初生りの梅や年忌の塚の曠
人もかくありたき梅の品位哉
燈籠の灯もうちからず魂祭
入梅の雲煙の様にはしりけり
花籠や其日／＼の花盛
時鳥山葵に鼻をつかひ時
虫干や家寶の劍夏寒き
人生五十功なく老て鳴子守
兩親か翡翠の玉や辻か花
笈摺の置き所なし苔の花
假堂に佛畫掛たる涅槃哉
船に寝て秋の夜の空眺めけり
借看して式に加はる夕さむし
小手投は殊に氣味よし勝負力
名月や松は古今の歌柱
瀧壺や涙ふ流るゝ法の芦
今日植た竹とは見へぬ月夜哉
永劫の座取りに法の花見哉

俳聖の墳の閑伽かも竹の露
雲はしる夜は明易し花の上
田螺鳴く孤村の夕へ静なり
値を閑た計りても先つ初戀
芦は瘦せ柳は枯れて冬の川
勇む駒つなく木のなし花の山
心地よき麥酒の酔や今朝の秋
一人にはまかせぬ筆や墨直し
淋しさのかたまりかゝる尾花哉
虫干や思ひ出多き筆の跡
出代や誠をみたすかめの水
風は未だ障らぬ朝や松の雪
炎天や鎗もしそうな金佛
たく香に傳もかな花供養
竹奴松の位に抱かれけり
濡て来る八潮の時雨や黒木賣
金婚の夫婦運あり尙齒會
寄る波やゆたり／＼と春の月
一ツから積し供養や千團子
鐘よりは外に音なし雪の原
歡はせ安きは親よし生身魂
諸物價の騰貴若にせず初松魚
昔からの長命家なり桃の宿
今更に思ふ名残や十日菊
萬籟は湖に吸れて山眠る

山吹や雨のたまりし捨て盟
露の戸に餘命つなくや菩提心
勝角力小さき母の笑顔哉
酒滿ん／＼花盃面に浮ひけり
蝶々も慕ふや君か句碑の花
水仙や刀自か無聊の香手前
印籠の匂ひこほすや夏羽織
庖丁の血糊匂ふや初松魚
鏡きて浴ひても見たし花吹雪
由緒ある寺も破れて散る櫻
初花に未だ新たらしき箒哉
時雨して無縁の墓も手向水
寝た門にあるや涼しき月と風
喚き付けて隣も來たり藥喰
風波なき家を港やたから船
菊花國亞細亞の主權握りけり
つれて來た春つれ行や風と雨
迎火や胸裡に畫く父母の顔
我馬の行方に初日出たりけり
白菊の家毎に見ゆる小村哉
若草を這ふや船燒く煙り先
無我に入る夢の境や時鳥
首振りて雪拂ひけり戻り駒
師の御魂祭る其夜に時鳥
霜に布引きたる様や牛の息

花の瀧先師の句碑にそゝき覺
よき智恵も出さうに遣ふ扇哉
舞ひ捨てた扇の上や散る櫻
衣裳まけ仕て見返すや御忌詣
囀りや松虫塚に迷ふみち
玉の露月の臺となりけり
秋風に眼立や松の男振り
人の手にもまれて薫る新茶哉
おなし木に鳴ても居らす春の鳥
秋の暮拾子拾ふて育てけり
許されし机に風の薫りけり
雪に寝た渡しの小舟起しけり
禪僧も恥ぬ抱寝や竹婦人
偲はるゝ句碑や櫻に十三とせ
拾着て拾勝ひに出たりけり
碑の前に花の連歌を開きけり
嫁入の袴に添ふ雛の夫婦哉
見覺の衣裳に泣くや壬生念佛
面白き話も出たり戎講
白菊や此庵有りて此の翁
蜻蛉や流るゝ舟を押へ行く
突き出して葉戸締つ萩の花
梅の主九十九の略史語りけり
咄迄しめる日のあり五月雨
春雨や夢と現の中を降る

春淺し竹の深草水の淀
蓮の露佛舍利を見る思ひ哉
落椿池一はひの波輪哉
朝顔の縁を結ふ垣根かな
朝風や入江にさわく早苗舟
歌に句に故人偲へは柳散る
若竹に和尙の白衣干しにけり
鐵漿付けた年魚や鹽燒三盃酢
陽炎や小鳥の歩む磯の船
花七日すんで吹け／＼春の風
漕て居るうちは蚊も來ぬ小舟哉
うか／＼と早行春を惜みけり
抱て寝る月との思ひを散る牡丹
拾ひ讀むこけの碑文や花散る日
水を火に利用する世や扇風機
佐保姫の姥か乳の人か雪女
甘たるき風も來るなり百合の花
塚に咲く萩を自然の手向哉
若水に富士を汲みとる日影哉
風に鳴る障子の穴や秋の暮
雲水の跡なき道を天津雁
東風追ふて綻ふ花や師の忌日
白蓮の頃へ取越す忌日かな
菊咲や庵にも酒の用意あり
花に日を拾ひ溜たる聖かな

碑の前に額けは袖時雨けり
引鶴や龜もをり／＼上る鳥
師の墓の掃除にも行彼岸哉
散る花を松葉の針につなき覺
早夏に隣るか五位の鳴月夜
芒枯れて風徒らにさひにけり
稽古酒あかるや今日も／＼雪
からかさの油かれけり秋の風
跡へ來る人のいそぎよ枯野原
花の連達者過てもこまりけり
撰り上て名を選はする新茶哉
寒月や狐の走しるうしる藪
不自由の中に味ゆり沖繪
うつたかき故人の句碑や花の雲
歌垣に遊びよる夜や郭公
我が事と思へは易し祈る雨
初寅や手合の出來し小商人
桐一葉人の油断を覺しけり
鶯に今日もかしけり庵の庭
風や牛追ふ人の頬冠り
盃は持たぬ手のゆく火鉢哉
駒止て琴の音したふ月夜哉
草萌や地雷火消へて十五年
朝顔や散らぬ力を持たなから
夜櫻や馴染めは腔も情に入る

箱入の儘に虫つく難かな
蝶舞ふや笈佛卸す草の上
埋れ木の香こそ高けれ摘若葉
枯芒炭焼小屋を覗きけり
涼しさや椽先走る筆のさや
手向には作らさししを菊の花
鶯の枯木に玉の初音哉
夏瘦や雨の芍藥風の百合
曙や朧や花の花頂山
廢塔の庭の淋しき苔の花
五月雨は晴ても暗らし草の窓
遠開らく音や浄土の朝朗
梅咲てからは氷らぬ硯かな
しろ／＼と明し露營や霜の朝
薫る風机上の詩箋散らしけり
蜀紅の錦野に見る子の日かな
破れても張らぬ障子や暮の春
瀧壺や飛沫を受けて散る櫻
窓押せば眼覺嬉しや菜の香哉
張立の障子明るし冬隣
句碑しめる露は涙か朝の花
花盛り月まんまるう昇りけり
倒ても弓矢はなさぬ案山子哉
枯草や鴉の景色も物たらぬ
返らても止め水あり山涼し

5 拾壘

藁音の郵便局や梅の里
長閑さや磯へ持出す船の飯
嵐とは名の不似合そ花の山
翌日知らぬ命を今日の佛生會
安良居や素袍にかゝる花の雨
白梅や古廟に淡き朝の月
冬籠小さき佛刻みけり
簀はとく指先利かす寒の雨
萬代を見せて散りけり松の花
芦も角出してかたまる堤かな
日の光り受て咲けり年の花
譽る手の灰迄撫る火鉢哉
さて捨も成らぬ物あり虫拂
香たいて靈慰めん花供養
竹植て師の俵を偲ひけり
接木した梅やそも十三三年
双六や佗しさかこつ廓童
凍解をこらへ兼てや土龍
初東風や獨り鈴なる神の庭
初雪や庭掃き兼し寺男
枯れる丈枯れて時待柳かな
養父入や二人並へて梅柳
櫻伐て酒にして吞樵夫哉
春樂し心のゆとり日のゆとり
貝寄や法の嵐を神の松

5 拾四

柳から出たり疑問の傘と傘
穴を出て佛縁も得よ蛇蛙
時雨會や世に古池の水涸れは
物云はず要領得るや大念佛
帷子の裾に届くや川明り
袷着て師匠の遺徳偲ひけり
蜘蛛の巢の執着深し女郎花
水室守千疋猿に馴染けり
千仞の雁に一樹の紅葉かな
天然の美あり吉野の櫻哉
いま暮た夜を深めけり飛ぶ螢
青梅や十三年の夢のあと
出茶屋にはまた主なし初櫻
萩の戸や未だ婚季も遅からず
邯鄲の枕借らはや春の宵
雅は午前俗は午後なり櫻狩
己か名の雲に入りにし雲雀哉
石像の濕りに匂ふ若葉哉
腫夜の草にさやめく流れ哉
稻村を渡る小鳥や日の弱き
戀草といふのてもなし紅の花
雪の簀拂ふや夫の旅戻り
はりほての虎も交りし花戻り
青むかと思ふ小春の柳哉
寝ても尚通ふ寒さや耳の穴

5 拾五

廣前の化粧砂かも春の雪
晩鐘や人も散る頃散る櫻
地獄箱制て施す彼岸かな
果の有る事とは知れど五月雨
的干した矢場の日雨や冬の蠅
風に散る楊の雨や郭公
梅の寮茶釜に雪を煮せけり
子も寝さし親も寝さして砧哉
三十三歳見る氣になれは隠けり
降りたかる日和や花に又しても
緋くや蒲の時雨を御傘
理れ木も世に拾はれて櫻炭
形代や一夜を明す杭の間
朽ぬ碑に香のしたわしき櫻哉
朝の蓮五濁の塵はなかりけり
大笛も百味の内に魂祭
猿引や這入兼たるやしき町
親遠て子は育ちけり郭公
拜む手の皸に豊けき初日哉
糊鉢に雀の寄るや今朝の雪
柳あり橋あり自働電話あり
初蟬は水の味知る日也けり
袴着て釣する人や春の海
鶯や子のなき家の物静
唯北斗七星牙へて鴨の聲

二十四

5 拾六

浮沈みある世も安し燕の巢
煩悩の心清めん秋の水
頻撞く狂女の鐘や三井の月
公達の腕のさへしる野猪哉
鷹の眼を動かす高嶺風哉
芥子ほろり夢や浮世は飯の宿
我戀は色にも見せずうかれ猫
鶯や撫牛刻む梅花石
青蘭の磯邊を走る時雨哉
啼き沈む虫や花野に宵の雨
伺てある様にあそふや庭の蝶
花賣にもつれて狂ふ蝶々かな
繩一ッ大象の鼻をなぶりけり
雲を得て龍昇天す湖上哉
無能なる男てはなし網代守
雪解を利用や木曾の御用材
雜作なもうれし幟の上け下し
蓮の實の飛んで佛の掌
麗や仕事半はの一休み
稻咲て古郷戀しくなりけり
遠さかる雲のいつこか郭公
亡き人の名を呼ぶ鳥や春寒し
稻も伸ひ手足も伸る夕立哉
向ひ日に扇をかさす旅路哉
一ト昔夢は臚の花見夜

5 拾七

初開さや鶴の背とく落標
初沙や膳の上這ふさゝれ蟹
着汚れて花に恥かし旅衣
覺悟した程は茂らぬ葎哉
帷子や細き朱袴の落し差
蓮の香や戸口に迫る朝朗
蝶舞ふや草喰む馬の鼻の先
苦沙と泡の色にも知られけり
うち附たやうに啼なり松の蟬
夕良や袴はつせは我世なり
雀にも鳩にも及ぶ施米哉
夜もすから雪を擗か暖鳥
鬼灯や畑半坪の立田姫
黛は老ても黒し白重
観音の出顯地かも苦清水
麥秋を譽めて蚊帳賣這入けり
格子から日を取る家や福壽艸
七布袋並らへたようそ土俵入
梅咲や楷子畑の麥二寸
稻妻や首塚凄き鈴ヶ森
夏の花白きも時の好みかな
玉簾なるらん雨の枯柳
桃園や雨の庵の机立
返り花名のみ春を笑ひけり
眉描く局の若し春の宵

5 拾八

知る人に逢ふた心地や初櫻
春の夜や金襴に泣く小傾城
相寄て啼くや數万の蛙の子
水鳥と共に流れの柴屑かな
葉柳や橋と家鴨を右左
松風の梢に輕し今日の月
花を折る曲者見れば和尚哉
碑の前や花散りかゝる居士衣
戀しらぬ乙女や髪にしたふ蝶
念頭に道教へけり彼岸會
田から田へ聲のつなかる蛙哉
鶯の高音や富士も見ゆる朝
摘卵や誘引ぬ連の野に揃ふ
夜もすから音せぬ雨や鳴く蛙
結ひ直す脚絆の紐や掃明り
春の川のの字を書て流れけり
時めけは苔にも花や雀口
涅槃會や末寺の多き京の町
積雪やたつた一聲朝鴉
稻波の案山子を拂ふ畝哉
埋火も又なつかしき余寒哉
雨一と夜一と夜に春の別れ哉
蓮池に泳ぐ極樂とんほかな
蟬啼や篋の中を蟻の這ふ
隠れても朽ぬあどあり花の旅

5 拾九

矢張汝に女房もあるか鉢叩
丹頂の巢や花孕む松の幹
國寶の佛を拜む彼岸かな
鹿笛やいかなる人の思ひつき
細振る稽古も済んで鏡と汗
名月や何にふれてもぬる袖
名月や左遷の君の筆すさみ
待されて奇麗にしたる火鉢哉
雁啼て戸仕舞早し淀の家
共に來て經續む鳥も日永哉
名月や松はたしかに大勳位
飛ぶ鳥の羽振りに叩く落葉哉
墨堤の白雲消へて青嵐
なつかしの句碑慕はしの櫻哉
糸瓜の戸主不在印しけり
持込て店の賑ふ初荷かな
身は輕く初音は重し郭公
菜の花や京の小道を銀閣寺
世の塵を拂ふて澄むや海の月
手料理にすぎた香りや櫻海苔
敷島の道知邊なり櫻の碑
澁紙衣命冥加に破れけり
花を待つ葉に撫る瓢かな
きりくす吾終生は布衣の夢
頼て手向る水の温みけり

5 貳拾

咲き揃ふ花に明るき碑文哉
初荷積馬の染分手網かな
見飽ひたと云ふて又行く櫻哉
清書の山を築くや筆林
鶯を籠に啼せて月と梅
花に風世は長短の一夢かな
騒かしく人静めるか花の雨
白酒を好く口に合ふ甘茶かな
臚夜の静かに雨となりけり
能く出來て穗並の揃ふ豊の秋
陣屋めく長者か家の幟かな
世は夢の本來空や雪達摩
角かくす心のをかし蝸牛
臚夜や假橋の御用船
勅額を仰ぐ古刹や風薫る
婿和風吹けく花の散ぬ間に
土の香や蛇も穴をは出る日和
國寶の佛拜みて風薫る
黒くろと川一筋や雪野原
飛行機のうなりも高し秋の空
未だ酔ひし人には逢はず初櫻
行春や鳥は古巢へ花は地へ
落花して茶店は元の一人かな
其中に櫻もあらん冬木立
俵の机に残る寒さかな
二十五

唐錦大和錦や草紅葉
歌箱や葉廣芭蕉の高詩繪
影に成る樹は櫻なり山清水
散る櫻をしまぬ人はなかり鳥
秋夕や風を氣にする雲のやけ
氷る夜やゆるめし儘の水道栓
行暮て今宵は花に臥してまし
揚げた帆に孕む風なし雲の峰
坂越て要のゆるむ扇かな
鶯の來ぬ日は寒し歌机
星一ツ隠す雲なき霜夜哉
粧ふた花摺衣や練供養
鶏の巢や共揺れのする水の月
鮎にまで紅葉うつりて秋の暮
海苔の味こし深く成に覺
初鷹や隠さぬ爪のういし
釣養に汐の雫や夏の月
遅ければ遅ひ連れある櫻哉
時鳥鳴くや爰にも芭蕉の碑
實櫻やはや十三とせの句碑の寂
眞向に月浴ひて居る瓢哉
根の落た島田もをさる跡かな
涼しさの朝まで残る月夜哉
蓮植て師の追福を待たれけり
君か代に光り廣める蠶かな

畑打や留主する妻も機仕事
名を慕ふ道の栗りや枯尾花
梅譽る人らし園の聲々も
百景の一橋に盡く柳かな
蚊柱や見らぬいふせき道生小家
馬持の朝寝して居る跡かな
木蓮や寺に法座の鐘しきり
家ありと見へぬ小島の帳かな
雁落ちて月一痕の虚空かな
起心寝心雨の蛙かな
群れ返す千鳥や汐の引し跡
落書に女邊の名あり花の宿
お月見の芋掘り過ぎて叱らるゝ
魚漁る鷗の群れや海うらゝ
大佛も居眠りまさる日永哉
藏遠る繩張内や露の臺
青簾富直武士の行義かな
蓮の香や無位の淨土に居る心地
岸面枯伏し声や霜の花
朝霧やちりかき集む寺男
枯てさへなほ慕はしき尾花哉
蜂の巢に匂残るや薇藪の露
菜の花や辻に並ひし開扉札
草餅や白も緑りの洗ひ水
夏の月船は柳を放れけり

七浦の漁利分ち日や秋晴るゝ
金波銀波打よす海や寶船
今更に燈懸し春の夕
窓の灯は寝をしむ人か月の梅
盃の金文字光る新酒かな
あした咲く朝顔宵に數へけり
追悼の莊嚴檀や花の幕
虫鳴や史蹟に富し八瀬大原
卯の花に加茂の酢莖の匂ひ哉
散る花を手にく惜み拾ひ覺
葉となりて人悟らせる櫻かな
心得の連歌もあるや葉竹賣
腰折れの一昔手向て人丸忌
姿見の前や團扇の京美人
更る夜や人なつかしく飛盤
俗眼に見へぬ女神や花の漣
夕顔や麥酒に淡き酔こゝろ
散る時は一重つゝなり八重櫻
しつ心なく散る花や極樂寺
此花に酒何石の價かな
長閑さや書讀になりし六歌仙
枝豆や茶にも酒にも添ふ風味
燃わかる蚊遣りに聞き行燈哉
開く意味嬉しや雨は花の鍵
しめきりし障子に寒き梅の影

走り込家には知らぬ時雨かな
霞む鐘ゆれて香走る木末哉
羽子板の無心の繪にも笑顔哉
澁柿や迷ひ易きは色と慾
移り香は赤梅檀や御身拭
松杉のあちら迄來て初時雨
咲台ふは手向心か塚の花
飛かねて暗雀子や白の中
佛は心に見へて臘月
繪行器や封しの紐も蝶むすひ
茶の花や利久好みの四帖半
忘れたる瓢や花の浮れ客
行く春を生命保險約しけり
鶯鷓語る縁に詩作や庭の花
蟻遂にみゝすの長蛇逸しけり
排牡丹や宮腹在す蟻賊の奥
若葉吹く風新らしう思ひけり
手作の酒と肴や桃の宿
月三更川風寒う鳴千鳥
怠らす修行の道や寒念佛
頭巾着て夕暮走る子供哉
闕伽桶に霰こほすや秋の暮
嵯峨として突出するや岩躑躅
土藏建る氣にもなりり稻の出來
世を覗く窓は求めす夏百日

經伏て萩の聲聞く聖かな
雛の酒黛の美人微醉せり
漣抱て一樹遅るゝ櫻かな
蚊遣火の様に裸の女かな
怪談に名の有る松や三日月
春の川船は流れに任しけり
短夜や語り盡せぬ師の逸話
ふくる程足並揃ふ踊り哉
米搗の片手に軽き團扇かな
永き夜の空氣抜けたる枕かな
虫干や本堂せまき般若經
鼓み洞に伐り残したる躑躅哉
菊日和龍鶴を遠く拜しけり
白蓮の香に清淨や朝こゝろ
五月雨や淋しう過る鶯一ツ
圖案家の頭に有るや花見衣裳
盃に逃けて火に酔ふ炬燵哉
葉の間に盛り見せけり山櫻
匂ひ鳥春の曙作りけり
聞き直す心に遠し霞む鐘
水は皆石にのかれて冬の川
出來過て人驚かす案山子哉
窓明て奥も花まつ心かな
燕子花剪るや素袍のまくり袖
待つ心惜む心や去年今年

貰ひ物とは思はれず難煮著
蓮清しまた其上に朝月夜
夜櫻や祇園精舎の鐘の音
聖賢の文庫建けり桃の村
花守や國有林の監査役
稻妻や母の蔭寄る枕蚊帳
開く戸に豊の匂ひや藏祭り
鶴の寝た松には見へず忘霜
蓮の上照る月清し露の玉
手枕に樂寝も見せて涅槃像
一ト處に掃寄て有る落葉哉
忘れたる瓢や花の散りし枝
爐寒や納所坊主を客仕舞
咲くや花雅美の道は奥深し
囊中已に空しくも春を惜み覺
紅梅や舊家に残る歌日記
沙千狩どの穴見ても蟹は留主
二日酔若葉の風に吹れけり
かうくゝと老松吼る野分哉
夕鳴の立つや寂しき芦の群
寝不足の夜を一夢や玉子酒
よき友を炭團に待や雪まろけ
山彦のすき谷間や鳥叫ぶ
昨日まで野邊のみどりや草の餅
星の飛ぶ宵に秋しる川邊哉

顛と汗苦學する子を叱りけり
會釋して向ふ机や風薫る
夜もそつと明た様なり芥子の花
亡き妻を思ふ寂覺や時鳥
西行か野風呂に更る月夜哉
玉子酒夫婦別なき世帯かな
法苑や弔詞の袖に花吹雪
若き身に浮名たてらるゝ踊哉
蚤の來ぬ工夫は出來て宵寝哉
鳴く千鳥松の嵐の添ふ夜かな
涼さや柳は春の物なから
鶴遣や宗旨は堅ひ法華疑り
扇風機に夢あをかせて晝寝哉
病ひ葉や納骨の夕嵐
寒梅やわすれぬ花の咲處
小蠅なす神の怒り蚊遣流行
駒下駄の近づく音や燕子花
樹に似た家から出たり蜆賣
大内に召るゝ鷹の得物かな
佛果得んと蝶も來たらし花供養
働くに惡ひ日はなし初曆
風月の餘情を菊と契りけり
切火して手に取る鶴の庵丁哉
木母寺の灯に見る秋の行衛哉
咲揃ふ花や都合の吉野山

八月や梅は咲しに散る柳
旭の曠や雪の尾上の一つ松
人は歸路に雲雀は雲に陽は西に
碑又何櫻の下の新ら佛
髻髪子や土筆を書寫のすさひ草
問ふ程は忘るゝ道や葛の花
雪に酒不足なき世と思ひけり
鳶の輪の下たに山焼く煙かな
靈も來て受けよ手向の花一句
緋く花の垣根や忘れ霜
瓢とは善き道連や梅探
春日永花の手紙の長かりき
春の野や草に染りし葉草履
如意を持つ手に梅か香も握り覺
海賊捕れて岩屋編蝠の巢となら
白川に來て秋立ぬ旅衣
井戸端のさわきと成ぬ猫の戀
手荷物や枕に汽車の晝寝哉
下宿屋を追立てられし寒さ哉
一發の音に鳴立つ澤邊かな
大根引太いと云ふて笑ひ覺
夜三更鍋焼うまし寒念佛
登るなど禁札憎し花の山
思案して居る間に氷る筆の先
水を見て前かく馬や花芒

雪折れや縁なき性は度し難き
國は富み民は榮へて豊の秋
早立の拾ひ物なり時鳥
秋風や行脚の僧の破れ衣
月村の家毎に聞くや藁砧
時鳥千代は聞かすに明しけり
朝顔や露の命を蔓の先
丹塗りの樓閣高し萩まはら
二見から目に付易し四月不二
身は神に捧げて安し大矢敷
花の散る夢に枕のはつれけり
釣下けた報謝草鞋や木槿垣
同行を杖に登るや富士詣
雉子啼や遠山晴れの朝景色
流れ来て池に廣かる櫻かな
兄弟のやうぞ土用二郎土用三郎
戀ならぬ帯解さけり蚤の業
簞入や摺りむける程洗ふ顔
銀猫の床飾りして西行忌
花の雲髻高ふ仰きけり
笹蟹の足にも入梅の重みかな
靈泉の立札くらし夏木立
分別もありけに鳴らす扇子哉
山吹や再縁辭して侘住居
花孕む山や霞の岩田帯

耳にふれ眼にふれ立や木々の秋
過し日の戀しや花の吉野山
姉も其唄に交りて茶摘かな
氷はる上も月日の埃りかな
爐寒きや自由過ての侘心
餅花に長閑の暮と申けり
盆石の波に埃りや冬牡丹
霞む野や鶏にしらるゝ一トツ家
盡きぬ名殘に袖絞る夜や時鳥
野に山に遊ひ盡して沙千狩
一癖は有るや納豆の好き嫌
寄航地に集る花の便りかな
塔の先き殘して山の霞みけり
椿落ちて黙僧の眉動きけり
靜岡の五分停車や鯛の餅
追懐に夢や結へす時鳥
飯蛸の直を聞く寺の納所妻
三代の主につかへて年男
金屏に花嫁美なる柿の家
宴席に黄菊白菊匂ひけり
切干や軒三尺の日脚處
俳友の歸て午睡厭かな
山吹や塵も未たなき小流
渡り来て後ろ見返す水可南
この匂ひ西へ届けよ梅の風

性の美は遂に土化せず蓮の花
紙衣着て威けん正しき机哉
黄昏の散る花に舞ふ狂女かな
秋も尙ほ子福長者の賑へり
送り野や虫啼く上の晝の月
虫の聲都は秋の運き哉
緋いて日永過さん懐古録
初風呂や小窓にうつる梅の影
牛の背を走る柳の雫かな
をしなへて櫻も冬の木立哉
閑古鳥都の人に聞れけり
七癖の内か師走の朝寝好
枝すかす防風林や秋暑し
風通す簾小袖や夏座敷
紅梅の花にも白き雫かな
荒鷹や待賢門に小松追ふ
蜂除けて思はぬ牛と隣りけり
花散りて又精進や寺男
七絶に春待つ除夜の机哉
鶯の價はいやし時鳥
廓近き風呂屋仇めく澁日傘
月のさす葎もあるに火取虫
若松や頼ては鶴も寝る處
世の重荷下してかるき頭巾哉
放し鳥皆極樂へ急きけり

孫に筆取らせて菊の根分哉
類ひなし日出つる國の朝櫻
蚊の群れて耳に鳴よる曇さ哉
眼を配る鷹や隙なき羽繕ひ
眞狐枯れ萩枯れ淋し關屋の灯
秋立や晝寝の跡の枕より
戀の袖月に濡らして戻りけり
乙鳥に啼かれて明ける戸口かな
是も皆涙の種よ螢籠
攝待の札讀み易し假名遣ひ
心まで貧に染らす計り炭
麗や煙の長き峰の茶屋
桃散るやもう上津せぬ野道
海棠や二尼を訪ひ來る佛御前
鳴鳩や太膳職の味増加減
乞食の椀に酒あり花の暮
戀種も特くや彼岸の遊女町
行秋や結へは折る草の蔓
りん／＼となく音勇まし虫の聲
刺文の腹に毒なし飯の友
月落て闇夜をかこつ櫻哉
名月に夢見る人のなかりけり
松風をしすめて雪の降夜哉
たさる湯に掃き／＼と爐邊靜か
仰き見る師の碑や花供養

浦島の龜も浮はん春の海
誰か植し一本杉や閑古鳥
月はまた朧の氣あり夏隣
時雨るや梢に残る柿のへた
霧晴や山八合の遠なかも
背の順に雜客の膳運ひけり
鯨飲も馬食も花の一座哉
夕顔や窓より流す化粧水
稽古茶にすぎた花なり白牡丹
師の墓へ一筋道や枯尾花
雨の月思案をかへて更しけり
蚊の群る中や孝子の破れ團扇
鈴虫や蟬居なまめく小傾城
松の聲秋の夕暮れ作れけり
さし込た日のつや／＼し花御堂
蜘蛛の子は自活の道に散にけり
夕空に浮世覗くか蝸牛
傘講の出来る話しや春の雨
世に残るものは名のみを散櫻
世を照らす佛生るゝ四月哉
文臺に涼しう咲ぬ筆の先
寛朽て水音細し蝸牛
黄鳥や人にうつせし朝機嫌
相互に皺の寄るまで干蕪
紅梅や茶の香の洩るゝ利久窓

稻妻や晝は峰なす雲間より
初霞古き都の夜明哉
白粉の花も咲きたる夕涼み
閑古鳥鳴くや地獄寺極樂寺
緞子蚊帳や褥も軽き唐錦
雨晴て船の灯うつる柳かな
靈前に一句手向けむ梅の花
陽炎や掃てかわかす溜り水
石山や月に式部の故事偲ふ
春を待つ枝あり花の冬構
あやかに來る人も有る頭巾哉
摘草や優しき籠の置き處
見直せば星と成りける雲雀哉
耕地整理の利益を量るや秋の掛
簞入や今日は斷機の母とても
妻逝きて埋火に胸寒き哉
花のなき内は踏るゝすみれ哉
撫る手に付く水滌や八字髻
うつむひて言葉少なや墓詣て
忍ぶ懸糸瓜に尻を打たれけり
白き朝やかり田のみたれ藁
簪の花に蝶來る春野かな
名を聞けば只白菊てなかりけり
寒梅の枝に雀のふくれけり
うさ人の手の裏こかせ走り炭

春の水極樂谷を流れけり
鶴むるゝ海邊の松や千代の春
蓮飯や禁五ヶ條の寺の齋
賽鏡を投げて氣の付頭巾哉
初秋や湖上を渡る燈影
茶碗酒霜夜の廓にあぶりけり
渡る雁蚊帳釣らぬ夜と成に免
炎天や砲車轟く砂烟り
寺借て又呑み直す櫻哉
花七日しづまり給へ風の神
雲に入鳥なつかしふ思ひけり
渡場に噂さの立て初さくら
眞清水や流れて湧て幾千年
山はまた其奥深し初紅葉
庭の木に古ひの付て蟬の聲
佛手拈や唐傳來の五智如來
日盛りや加茂の積の小石割
足跡て手を洗ひけり沙千狩
きぬ／＼の別れを照す葎かな
虫干や打たれた如意を床の上
攝待や常に物約の約
上蟬蛾や訪ふ人もなき閑古鳥
夕立の起してまはる晝寝哉
勤王の士の光榮や叙位の沙汰
縫初や戀のいろはの智惠袋

子は子たる道を守りて魂祭
夢つなく入江の船や春の雨
大佛の耳にさやく小鳥かな
湖に杖つく松や風薫る
三歳に自然備はる野梅哉
小鳴して鳥飛びけり秋の暮
干衣の片笠荷なふ柳哉
植遂る田に心地よし雨の音
時雨るや床の遺墨に香一縷
夕沙の風は曇りて初蛙
口罷に吹散らしけり納豆汁
旅に鳴く蜩や花の下雫
春なれや此川に此水の音
名月や卒土の濱も柴の戸も
白酒に微酔の姫の舞ませり
雛の主琴の所望に隠れけり
掃く跡へ蟻の道つく牡丹哉
玉藪垣の結目にニツ三ツ
家起す身に日永さを忘れけり
戀人と手を引合ふて踊かな
恩賞の賜金拜して年の暮
夕立に物干床の騒かな
花や咲け句碑は香りのうつる迄
刻て居る内に氷るや籠の魚
世の淵を渡り兼てや網代守
二十九

夜櫻や兎角偽善の人多き
電報驚て見れば新年御慶哉
引汐の眞砂に残る曇さ哉
鳴かず夜は終に明たり時鳥
朝寒く小驛の宿の葉汁哉
秋ならぬ錦や桃の花畑
放す手に慈愛のこもる小鳥哉
陽炎や糊引く刷毛の幾戻り
春雨やポスト離る、蛇の目傘
鶴の餌に翻れ込みけり梅の花
春立や心の向ふ處より
種芋の芽を切らぬの彼岸哉
ましまさは供せんものを花供養
鳴立や田越しに空の夕明り
朝霧を残して水の流れけり
雲鳥や倫起鳥に眼もくれす
沓音や菊を御覽の排傘
入相の鐘か迎ふや花の暮
一ト思案して動きけり墓
あら面白の浮世かな櫻かな
水に浮く芦の穂絮や初嵐
傘留の全盛ふりや伊達日傘
小式部は歌に召されぬ星祭り
殊更に干支に興乗る御影供養
鶯や本の葉に置眼鏡

寒椿笥をへて貰ひけり
名月や静まりきつてむら雪
鶯の驚く鐘の夜明け哉
月西に孤村静かや水兎の聲
草の戸や蛙のかゝる升落し
白の月も取さして有る春の雨
暖かや龜の塔積む寺の池
花の波かふさる人の出汐かな
居並んで無言の夫婦春惜む
賓頭願の漆香高き彼岸哉
宿り木に押合ふ鳥や夕時雨
梅か香の翠簾深く匂ひけり
日暮まで寝る覺悟なり桃の酒
帳に替へし屏風や花の大酒宴
魔風戀風祇園は櫻月夜にて
雁金に破鏡の佳人惱みけり
旅なれて草鞋も軽し別霜
笏や盗人に繩かけらるゝ
練雨に哀れ深めてきりくす
青蘆温泉宿のてすりかくしけり
年の瀬や羊頭かけて賣る狗肉
川鹿鳴く夜も寝就かれぬ旅宿哉
十歳経て歸參の沙汰や鹿の聲
凌ぎよき日頃となりぬ初櫻
抱き籠はよき夢結ふ便り哉

降雪の積むや家にも焚はこり
上和下睦全き御代や今朝の春
後の世の苦も思はてや鶴の稼き
箒目の上新らしき落葉哉
朝寒や驛長殿の笛の牙
飛笠間の碑照らしけり
托鉢の鉢合せする彼岸かな
古兜ひろをて戻る沙干かな
親牛にをくれて霞む小牛かな
花嫁の名張て居る柳哉
海山の色にせかれて更衣
連歌にも花の名残はありに覺
働て居れば忘るゝ寒さかな
春の月戀の巻を覗きけり
手に受て清し櫻の一雫
椎の實や石摺り取の春中叩く
漁火は須磨か明石か鳴千鳥
内職に酒賣る寺や花盛り
憂き連の友かは小田に啼く蛙
達摩忌や壁に無言の影法師
行秋や柴賣乗せし夕渡し
その中に繪日傘優し最合船
開の川笠の浪を打せけり
茶も出花名も十八の大角豆哉
喜壽米壽迄壽かん花の主

垣に結ぶ程杖のある十夜哉
玉と呼ぶ白き椿の位かな
いたつらに老し女や五月間
薫風や善男善女堂に満つ
受繼いた遺墨に逢る夏書哉
椿さへ落ちかさなりて庵淋し
浮む瀬に散華の塵や川施餓鬼
玉川の萩に抱るゝ潮音かな
蝸牛山莊の雨静なり
鏡ひしは都の花か御忌小袖
つゝまじき仕付繼足す粉炭哉
鐘聞けは南無勿體なき彼岸哉
陽炎や遂に干にける涼
玲瓏の玉は蓮に結ぶ露
雪の富士其まゝに達摩作らばや
春雨や唄に意中を洩す温泉女
待今の座敷にぬき炬燵哉
闇の夜も無事に明けたり白牡丹
鉢に植へ替へて白菊見上げ鳧
酒盡て虫聞窓を鎖しけり
さゝみや室後疎林に日のふくみ
酒は櫻澁茶ふさわし梅の花
野路樂し誘引ぬ蝶の前夜
短夜を知りつゝ更す咄し好
塵一ツなくとも曇き佛間哉

肌寒や窓からすてる化粧水
はさみ持ち牡丹二タ枝迷いけり
拾着て行や内外の旅迎ひ
念佛の聲で植けり菊の苗
門前に賣茶の旗や菊の寺
蟹の泡吹く砂川や雲の峰
王と成る心は見へず牡丹の芽
敷砂に箒目正し寺の萩
落し水田螺の這うた流れより
御降りや謠の洩るゝ白書院
船鈴や人波打て日の暮るゝ
そろ／＼と日傘の續く青田哉
すれ合て芝居話や二日灸
松原の果は海なり青嵐
拍手は耳にさわらぬ神樂哉
いとし子の初旅おもふ吹雪哉
粗想した水は戻らず重ね鍋
佛書く繪具とかはや蓮の露
灯の消。風にはあらず秋の聲
懸行燈引かけて明たる短夜哉
夕顔や何を憚る掛簾
雷落て枯れし様なり松のはく
竹植て窓に風待つ日頃かな
戦き止む柳や雪の九十九髪
蝶一ツ船迄来るや花日和

庭池に子を産む鶴や松の花
外へ氣を取られ勝なり櫻月
旅千里我に母あり秋の暮
霞わけ朝日環くや峯の松
神前に婚儀の鈴や紅葉照
鶯や長者の娘啞そこは
出来上る橋の普請や初櫻
雪解るとんごん上の鳥居かな
春日永米に字を書く男かな
秋の來て如件桐一葉
歡樂はきのふの夢や散る櫻
怠らす流れて涼し水の音
春風や天女の舞樂奏寸堂
笑はして蛤にしろ沙干かな
鶴の來る野松高々霞みけり
揚雲雀目を病む者もなかりけり
行年と思へは世話し朝雀
わひしさに辻占あふる火鉢哉
灯は壁にむけて虫聞く端居哉
暑き日や學校戻れば河太郎
はばかりぬ逢瀬の歌や天の川
三年の苦界勤めて桃の里
開ふとは向ふに知らぬ郭公
折らぬ手を届かして見る櫻哉
二日目は屏風見に行牡丹かな

太刀魚や切れる元直に負をしむ
來年もとて茶摘の別れかな
雄子啼や遠山晴れの朝景色
散る花のたまるや暮の絞り織
歌に詩に龍田は古き紅葉かな
國の史は机上の花や紀元節
堀り出した寶石洗ふ泉かな
白萩の間に一ツつゝこほれ鳧
濡て來た文もなつかし初時雨
寶引や一籤毎の笑ひ聲
華美さらふ一村富めり釣干菜
風渡る麻の青葉や残る月
戦く葉に成て慥な接木かな
鶴の舞ふ羽先に風の光かな
焚火した跡も有りり笑ふ山
寒研さの御劔水の如きかな
發展の家こそ早し乙鳥の巢
秋立や疲れた女の頬寒し
桐一葉計音の電報届きけり
電話にも團扇遣ひの聞へ鳧
拾着て洛陽の人となりて鳧
同情の眼に溢るゝや袖時雨
時鳥啼や月夜の神樂岡
蒼海の千尋に入らん落し水
指差して寺教へけり初櫻

金神の崇りてもなし花の留主
親子して返す廣田や暮遅し
山廓の花水村の柳かな
鶯の蹴去りて輕し枝の雪
行動に根底得ぬを釣案山子とも
夜櫻や人造の美も捨られた
鯛の沙汰ははらくやんで初松魚
よき事の鼓に梅のこほれけり
軍港の山頂白き櫻かな
油にて名高き島の椿かな
寺の柿荒しに來るや檀家の子
風に耳向けて座頭の納涼かな
佛描く繪の具や解かん花の露
冥途鳥子は鶯に預け鳧
早わらひや蛇喰ふ鳥の立ちし跡
野佛に意味ありけなる臚哉
我に寄る皺は覺へず古紙衣
炎天や砂に消へ込む浪かしら
黃鳥の得てある聲を重ねけり
大量な氣分見せけり青瓢
鮎汲やうしろへ過す小脇さし
一陣の風に散りけり花萬葉
露と成る雪や供養の送り膳
雲の退く松は月あり花明り
何處へとはおろかな訪や花盛
三十一

長き夜や詩僧來まして探る韻
清淨の御砂利にも似し蓮の露
行秋に破門の弟子を惜みけり
夕風の手に答ゆるや風の糸
花の根に歸りて白し夕月夜
酒肉賣る門にも雪の達摩かな
月てさへ素顔てはなし春の宵
露の枝をかいなき萩の戦き哉
青柳の日和定てけふりけり
霞ともなるや沙屋の夕煙
駒鳥啼や浮世に遠き小柴垣
湯上りや浴衣のまゝの徐ろ行
未だ星の透ける柳や隴月
今朝植た竹とは見へす夕景色
肴には飽た口なりあふり海苔
投下する馬糞の上や糸遊ふ
洗面は眞意の筆か涅槃像
露の音きくや禪話のはてし庭
早乙女に會釋して行く村長哉
水上げて座敷の狭き牡丹かな
裸灯や夜寒の町の探し物
大寺の經千卷や土用干
五月雨の中や名の有る雨一と日
御佛に仕へて涼し墨衣
晴るゝ間を花に眠るか雨の蝶

左り手に尻叩き行く團扇かな
摘草の案内や寺の末娘
鳩の子を拾ふて戻る新樹哉
たゝかひの火花を餘所に櫻哉
歌道にも明るき刀自や紅葉の戸
小綺麗な繪師の住居や花菖蒲
振て見て伐て呉けり芥子の花
幔幕の芝居はしまる花の中
糸ほどの雨や田植に並ぶ笠
飾り竹正しき節を撰ひけり
苦清水靈氣肌へを透しけり
骨肉の情手向ん魂祭
野地蔵に香華の絶ぬ彼岸哉
碑の櫻櫻の碑なり眞如堂
雲や花の句碑は櫻の包みけり
引捨てし大根花咲く水田哉
踊りや身も十五夜の花芒
其身さへ露の命や螢賣
廣過て詫しき夜あり旅の囀
踊り子は思案の外の思案哉
花の道開て渡すや渡し錢
秋立や森羅萬象星の數
つく鐘の響くれ行く紅葉哉
折かねて放す手に散る櫻かな
碑の寂や花は昔の香に匂ふ

水臭き膳廻りよし萩の寺
蜘蛛の巢に落葉残して秋はゆく
乙鳥を出してから焚く朝茶哉
籠底にあるや茶摘の隠し紅粉
旅僧の笠吹飛す野分かな
來るか皆買人てなし市の雛
雁風呂に發心の腹温めけり
明殘す戸に吹き入るや秋の風
寝をくれて三井の鐘聞く夜寒哉
名を留し故人の庵や竹の秋
年老て尙健かや足袋嫌い
合力の話しも可笑し不二詣
雉子啼や一波ゆれる山の池
櫻にも佛縁の有る彼岸かな
春の月載せて急かぬ流かな
今たれた馬糞の上や糸遊ふ
剩さへ米を踏めどや花の留主
白萩やあられ梨子地の御所文庫
仙人も居さうな洞らや墓
水道の水冷やかに秋の風
鉢叩き或夜は聲の若かりし
惚はるゝ十三年や高燈籠
花も實もあるや接木の譽言葉
杭打ては瀬を作りけり春の水
耳涼し風の音より水の音

畑て焚く茶に客のある日永哉
雁啼くや月見せ乍ら小雨降る
空蟬の太箸ならめ麻木箸
晝る休ひ月となれ行夏の旅
あちこちと向く精勤や釣案山子
病床に辭世の句ありほどゝきす
初空のなかもこぼるゝ梢かな
陽炎や話さざるゝ俣夫に我れ
雨垂れの音にも春の夜情哉
時と世につれるや花の噴衣裳
色情も無常も花の動きかな
露の戸や死する夢にも驚かす
涅槃會や結縁受に浮ぶ龜
月の座に並ぶ十六羅漢かな
君の跡慕ふ風情や散る櫻
藤棚や鯉の飼を賣る橋の上
水滸り身も冬枯るゝ物の内
灌佛や舍利程御手の玉雫
十月や一癖持し山の雲
佛飯の蠅や拜めは叩かれす
鶴遣ひや妻は迎ひの小松明
寺のものらしき墨染櫻かな
詞なし嘴さしよせて雪の鳥
月の蓮香の見えさうに思ひ鳥
一日の如く百日夏行哉

たしまれたものを供へて魂祭
駒の尾をつなく柳ともつれ鳥
晝寝して静かに天窓刺せけり
船一里土産の海苔をへらしけり
厭はるゝ蝶となり鳥芥子の花
散れや花句碑の邊も埋む程
反古紙帳世に詔はぬ菴かな
石橋の左右に開らく蓮かな
雁鳴や時鳥より夜の寝よし
奈良積に酔ふ人も有り初櫻
花の山俳聖の句碑たつねけり
山寺へ行道くらき茂りかな
鶯の啼聲持て朝寝哉
鶴の居る門田も持て冬籠
遠くから譽て近よる野梅哉
片敷に宿る夜は淋しきりくす
大津書や鳥羽書や花の戻り道
草庵の竹の戸鳴りや初嵐
客船を見て驚く荒鶉哉
風音に早や秋らしき氣分かな
貫すれと鈍にはならぬ紙衣哉
鳥去つて山静なり花菴
心眼に書損なき夏の寫經哉
故師追ふて行きたき花の世界哉
春雨の跡を楡垣の雫かな

十返りの花や鶴さへ庭歩行
塗り上げし色の美し春の橋
失戀の果もあるへし鉢叩き
友とわていとゝ耳立竈馬かな
人皇茲にと縁起も長し牛祭
露の音冥想神に入る夜かな
冬枯を見す京極祇園町
若竹に開く書院の小窓かな
朝寒や親をはなれし狎の顔
目に觸るゝ物皆澄て秋の行
百年の姥の住居や桃の花
子の智恵を見るや高きに柿置て
瀧尻に錦織りけり散る紅葉
籠馴て老鶯と成りにけり
菩提樹の蔭にやとれよ放し鳥
輕裝の健兒五百や花の旅
着ふくれた人は出憎き炬燵かな
朗詠の法師の琵琶や春の雨
蝶つまむ心小さう成にけり
高瀬船時代遅れや散柳
下着には白袴見せて夏衣
いろゝゝの名に咲き誇れ菊百種
池水に草の影すむ夜寒哉
人も花も世はかりものそ春の雪
白鷹の羽の艶見せる朝日哉

木辻てふ廊も更けて鹿の聲
のんどりと雲井に鶴の親子かな
手に戻る鷹の雫や遠時雨
花に濡れ雨にかわくや旅硯
大佛の篝火消へて月の萩
荷車と馬と酒やに時雨けり
雲にまて隠して花の夕かな
蓮開く音清らかの御法かな
鳴立や芒散行く水の上
彼岸會や常は不沙汰の寺迄も
化粧水捨てる小庭や秋海棠
何事も曾忘れたる清水かな
菜の花や暮れて暫く日の暖み
我膝を我友にして秋の暮
年寄の口にさわらぬ嫁菜哉
弓腰に矢竹の杖や梅探
鑄直しの鐘は上野に霞み鳥
わすられぬ昔の京や鐘霞む
月の夜や鶴匠の家に僧のくる
檜街の灯影もさひし秋の風
行秋や秀才老て文を賣る
白蓮や物に汚れぬ池構へ
鶴の鼻組今成金て無かり鳥
櫻洗ふ水は無垢なり夏の月
春の雪竹の雫となりけり

菱の餅より色敷や鶯の羽根
水の無き川にも苔や春の色
炭の香や造花の銀の焼き加減
吹送る木の葉に載て鹿の聲
久々の握手して居士は袖みそなど
鹿鳴て勇士も心動かせり
西東花有る丈けの盛りかな
霜のまゝ下る夜や朝の川
世を馬鹿にしたか糸瓜の庵住居
碑の名も立皮の櫻かな
招魂碑取巻く花の萬葉かな
尻見せて無禮にならぬ益かな
僧供養より貧の一燈や魂祭
戀の猫夢も障子も破れけり
露の戸に老いて晴耕雨讀哉
川に沿ふ墓點々や草堂
一里の子はあれ丈か推拾ひ
曉夜やたれ駕急く土手八町
蚊處こして暮行や蟻峨の春
水打て笹蟹の業眺めけり
いにしへの道は暮はし釋奠
京なれや西も東も花の人
木蓮に尾を引く香の煙りかな
忘れぬ水の甘みや花の山
今日迄は散るとも知らぬ櫻哉

7 拾叁

様々に朝露みたす花野哉
こひしさや亡き人に泣く土用干
水に影映して蝶の舞ふ日かな
啼て出る鶉も霜の別れかな
陽炎や吉左衛門のねさし土
勅語にも適ふ和合や鴛鴦番
傾城に佛の日あり納豆汁
蓮池や紅蓮白蓮咲き満る
後朝や柳は廊のささらは垣
名月や縮の光る砂の上
極樂の夢見か花に眠る蝶
留守守る嫁や夜寒の針仕事
欄干にはすきならす遊女かな
花鳥に配りたらぬや朝こゝろ
雨はろり／＼と雁の去ぬ夜かな
子は強ふ育て置たし二日灸
青竹の鏡筒太し花の茶屋
花明り碑の文字照しけり
朝の花心静かに眺めけり
人妻となつて出難き花見哉
暮告る鐘にこはるゝ小萩かな
明残る短檠の灯や時鳥
幾千代も流れ汲なり岩清水
暮惜しむ山から出たり春の月
笠脱いて休む木蔭や蟬時雨

7 拾四

芦の風涼しや鯉の生造り
筆借るも墨なき家や山櫻
雨乞や異曇りて幣の風
涼風をふくめて贈る水うちわ
さや豆の聲も粹なり藝者町
探梅や鳥鳴く方へ尋ぬ行
汲む水も苔の香高し五月雨
冬は来ぬ奈良の都の夕時雨
月の夜は殊更廣き江口かな
流行を競ふ花見の曠着哉
因あれは果あり故山に歸る雁
散るを見んと思へば芥子も強き哉
蚊柱や沼を命の小孤村
俳諧の趣味是にあり溢團扇
素麺を冷すや那智の瀧の水
酔醒の顔に涼しや落花哉
枯芦や水を放れし蟹の穴
辻占を買す禿や春の雨
鶯の聞たやうなり走り炭
柿盗人捕へて見れば我子なり
見て居れば合點の行や壬生踊
夜神樂や人影移る釣り鏡
有漏無漏のさかいを蓮の薫り覺
淫樂會や西に尊き花の雲
花の雪見惜しむ膝に繭れけり

7 拾五

障子越し茶釜の音や後の月
吹く風に吹かれてもこの柳かな
百舌鳥の尾に夕日動かす梢哉
摘まぬ子も唄ふて居るや茶摘唄
啼と言ふ佛法僧や遅櫻
淡雪や雫と成りし竹の先
揚貴姫と銘せし花王咲にけり
蓮咲や庭を清めの寺男
短夜や竹田を走る魚荷哉
御辭儀して昇る姿や奴紙齋
幸甚ふ賜田の月や稻の波
好い月と蚊帳を這ひ出て納涼哉
桃咲くや小牛に鼻輸入れる門
息つひて鳴聲でなし揚雲雀
萌へ出る草踏しめて薪能
醉醒に水呼ふ夜半や川千鳥
約束の人は来たらず鳴水鶏
鶯や曉寒き二月堂
佛説に靈鳥の入る紫雲哉
日本でも釋迦の生るゝ卯月哉
秋の曲調りへる窓や虫の聲
昇殿の衣冠に風の薫り哉
書は人のこゝろの花に筆初
白雲の積くや峰の花曇
鹿鳴て三笠の山に月牙へる

三十四

7 拾六

短刀に無念の錆や土用干
箱子戸の曇りは庭の霞かな
簀着せて君を送るや露時雨
からす戸や夕月曇る釜の湯氣
禮帽もうつむき勝や墓參
塵積た船も景色や雪の朝
妻揚子迄新たり初裕
夜半の秋金箔を打つ隣哉
緋の房の手箱や雛の迎へ客
大膽も過ては愚なり腹と汁
師の譲り今も頂く頭巾かな
常盤樹とたのむ松にも落葉哉
佛檀に經手向く夜や鉦叩き
閑古鳥鳴くや高野の晝灯し
菊譽る譽様譽る主しかな
勇將の苦戦の蹟や蓮の花
朝顔や見せたさ客は起されず
見る丈見て日の高し壬生念佛
米も搗鳴子もひくや山の水
名筆の遠摩乗せたり木葉船
琵琶ひかぬ夜は虫聞て更し覺
櫻見た春ををしみて衣かへ
水破る船か港や冬の月
つく／＼と世を詫介の椿哉
今更の様に思ふや散る櫻

7 拾七

さて網にたまる小鮒や落し水
鶴一羽より鳩百羽放生會
短夜や寝鶴の春に沁る月
麥秋や塗長持を買ふて去ぬ
池の面に丹塗浮へて杜若
春興や千疊の芝に樽枕
山茶花や閨秀畫家の佗住居
蓮池や浮葉に宿る露の玉
日車や夜るは北斗に向へし
月 隴女名前の軒行燈
吹き切て添ふ雲もなし牙月の
草の戸や晝に盡とて虫の鳴く
梅に尻向けて曰はる男かな
寒月や山越して来る海の音
郊外の春をたのしき散步哉
舞ふ胡蝶老の近道教へけり
飯蛤や罪はなけれど珠數つなき
月三更芒は影を定めけり
逃げ水は逃る平家か旗芒
騒かしき中に寂あり替むし
この親にしてこの子あり司召
名門や古風の儘に風薫
撫飽かぬ瓢や花に五十年
夜着淋し魂棚の灯に眠られす
うか／＼と乳母の家訪ふ小春風

7 拾八

支店長表彰兼て夷講
海苔の香や花の都の別れ酒
夢と降り夢と消へけり春の雪
何菊かむしるをもせしく初つほみ
悪評を叩き消したる枯かな
風あけて山皆低ふ見へにけり
密葬の戻りは更けて時鳥
明け寒き湖上を走る燈かな
蒲鋒や齋上手にはやしけり
雨の月破鏡てらさぬ恨かな
大半は草のすひけり春の雨
勸學の灯影や梅の新天地
佛手拈や觀音の軸掛し床
曼陀羅や菩提こゝろの満し蓮
花散るを木魚問なる御寺哉
茶に酔ふて短夜を長く思ひけり
遠退て見れば秋あり廓の灯
しほらしや柿の接穂の初紅葉
蝶飛や吹て見て居る風車
蚊帳釣れば又もや蚤をはやし覺
着心も馴れて老知る紙衣哉
抱籠や好み過たる水枕
菜の花や蝶の来ぬ日は雨の降
我も又乾かぬ袖やぬれ燕
退くと物見れば興あり月の雲

7 拾九

牛と人乗せて花野の渡し哉
元日や天地一變する心地
噂する唇寒し初さくら
本尊は自然石なり閑古鳥
名と共に残る屏や散る櫻
寒聲や壺五千の町外れ
夜半の鐘餘韻は霜の聲に化す
蝶の影さすや卒塔婆の忘れ水
賜りし名は常盤木の竹婦人
馬の沓浮巢の様に流れけり
海苔の香や嬢か料理の稽古膳
見る人の心動かす鞍馬かな
恥しき風情や露の女郎花
花一日心大きく遊ひけり
白露の野に出て拜む旭かな
長閑さやくわへ煙管の高咄
笛の音に清女學ふや月隴
鶴の餌の思案に暮るゝ彼岸哉
白百合や小窓に迫る朝の靄
清盛の暴は野分に似たる哉
身重りて踊れぬ愚痴をもらし覺
時鳥獨吟千句なりにけり
彫刻の佛尊し冬籠
漣や年立志賀の浦景色
茶の花の盛りや宇治の朝ほらけ

7 貳拾

辛子味噌ならは猶よし酢蛤
春深き池や底より青む草
舞ひ下る鳩や雪掻く前後
三越路や琴の音深し雪の底
世界無比の國振を菊高薫る
妻なしに暮しなれたる紙衣哉
普賢像咲くや念佛花盛り
釣人の笠に這ひけり蝸牛
打水や庭に素足の小公達
壽の恩賜露の家にもをよひけり
桶に浮く店の埃りや冷し瓜
露の戸や人の命を語り合ふ
経藏を圍ふ小池や破れ蓮
花皿や手向こゝろを露のまゝ
蓮の香や波の／＼明る東山
時鳥鳴くや佛間の灯の弱り
飯汁や人つき合も事に寄る
山寺は鐘つくのみの佛生會
初雁や雨を寒かる渡し守
牡丹一輪一輪活に活けられす
名月やつきぬ名残りや白む空
合傘にぬれても恥す花の雨
春の夜も光りは淋し佛の灯
何事も明日なし花の夕風
引惜しむ戸口の花や雨の月

亡き人の筆なつかしき扇かな
朝顔や無理に取つく今年竹
枯菊の薫り立ちけり日の恵み
鐘の音は魚山の奥か夕時雨
行く水の影も歸らす散る櫻
馬も肥へ與作も肥へて芋の秋
趣味深き遊ひの道や歌留多會
静さや夢の浮橋渡る蝶
富む人も慾に眼はなし福は内
圓山や雪に障子の明け放し
稻妻や變る／＼に見ゆる雲
咲榮や開かせ榮や冬牡丹
白梅やそゝろに寒き夕月夜
碑に残る徳を慕ふて墨直し
紫に法の花ふさ匂ひけり
注意して一枝貫ふや茨の花
鞆や五色の綱に日の光り
口敷を言はぬ接木の上手哉
客の耳女將の口や花の暮
鯉賣心の玉も磨きけり
限りなき空の高きや秋の月
富も田も幾繰り返す女夫哉
一聲の調子に乗りし雲雀哉
短夜の鐘うたかへは雞の聲
立髪に勇の汗や鏡へ馬

徳に稀慈にまれ梅の主かな
敷島の汀の松や初日の出
人も斯くありたき物よ揚雲雀
猿酒や山兒の妻健にして
近道と聞て廻れば枯野かな
形代や末は千尋の浪枕
降れや花この碑を埋ひまて
消す電燈無言で蝸へ這入りけり
大切な花より落し椿かな
短夜をうち寝しけり鴉の浪
春雨や焼印掘へし宿屋下駄
死して尙咲く今日の年忌哉
苜りゆるむ鎌の目釘や當り稻
傾けて戀垣作る日傘かな
黙想の貴人耽けり花の王
萬開の花亂れ散る庵かな
出る汗に米の價の知られけり
栗飯や山て活計を立つる里
妻に待つ事の數あり年の暮
雛の座や庶務と出納は母の役
虫干や反古に似たる寶物
花に夜の更ける影なし庵の窓
葉家たけ降た様なり春の雪
道間へは逃る娘や桃の花
鬼灯や村一ぱいの星祭

山の井にニツ三ツ飛ぶ蛙かな
團扇とは優し螢の狩道具
沙風に肌くつろけて夏の月
虫なくや嵯峨野は戀の捨所
雲雀野の一水國を分ちけり
賑やかな女連あり木の子狩
涼しさや月の雫の水馴棹
戸さすのは思ひの果か雨の月
式臺に繖れ松葉や春の風
庖丁の手際見わけり洗ひ體
詣ひのなき身構へや養
水によき京に色よし秋の山
亂れては月にはつかし合砧
夢の世と悟るや花の袖籠
其徳は代々もつきせぬ苔の花
鞆の綱にもつる／＼柳かな
若水の清きにうつる笑顔哉
雪花は真如の月の柔り哉
魚梯幾尋登る小鮎の勢ひ哉
月深う草踏む道や虫の聲
野や長閑捨てたくもある返し傘
初東風もつのは雨と成にけり
親の氣に合ふ話して納涼けり
常闇の昔語るや今朝の春
天地相和せり初日の芙蓉峰

戀すてよ吾名立ちけり歌留多會
手向はや其香散らす梅一枝
鶯兒鳴き倦みて日永き庵哉
隣にも灰吹叩く夜長かな
こほれしは蟻もあやかる施米哉
上嵯峨の梅下嵯峨の櫻哉
口丈けの沸騰て止まず鯉の友
行春や歸らぬ水に花の散
拵へた襟な柳の螢かな
夏を待つ舟の手入や湖畔亭
白蓮に青き佛の在しけり
人住むと見わけて桃咲く離れ島
開帳の札の眼に立つ彌生哉
鳥の巢や雨に淋しう親を呼ぶ
白蓮や寂光院の朝朗け
雲波の中を走るや夏の月
葉柳や河岸に繫きし貨ホト
厄日無事瑞氣萬戸に溢れけり
暮遅し梨仕舞て戻る牛
窓明けて雨見る夏の座敷哉
新宅は瓦音なり桃の宿
勝鶏の御座の間向てうたひけり
二階から人呼びよめる柳かな
蓮の實の飛て驚く蛙かな
人の非を聞くより寧ろ晝寝哉

打寄せる白浪寒し親不知
大洋に旭旗なひきて風かほる
梢には花とまらす時鳥
桃咲くや生壁乾く日の匂ひ
愛らしき客のまごひや雛の宴
初雷や雨となりたる花の上
見ぬ人に迄惜まれて散る櫻
雉子鳴や落合川の水煙り
今日の月座敷清めて迎へけり
今朝の秋黒髮山の高さ哉
翠帳に曉寒しほと／＼さす
歸る日を妻にも云はす春の旅
筒の花御法りの露に光りけり
花守に眞宗和尚のはす／＼けさ
引鶴や浪もうら／＼かな和歌の浦
老振りも見ぬ色香や園の梅
子子や浮沈は人の常乍ら
去ぬ雁や故郷忘れぬ夢の上
月の出て高うすみけり秋の空
帆に風の見へて波なし春の海
惜しまれて名月雲に隠れけり
暮て若く宿は風呂なし秋の雨
春の水化して皇都の明り哉
七千萬一身平等今朝の春
不善なす勿れ炬燵に親みて

何れ散る物とは知れど風哉
皇國の尙武見上る幟かな
駄馬の脊に空き樽寒き山路哉
白蓮や月半輪の明白み
菜の花や腹ふくらむ瓦斯ダンク
降る雪を題に演じて救世軍
明星の露にさへこむ蓮哉
水海へ笠のうつりし田植哉
峰入や暗かり堂の朝鳥
暮涼し右岸左岸の誘蛾燈
齒を洩る／＼聲も目出度し諸初
不孝者とは存外や鯉賣
犬を呼ぶ聲に落たる椿哉
極樂は涼しき寺の廣間哉
樹の蔭の我を離れて夢醒めぬ
羅浮仙の俤もかな月と梅
雜羨餅禮義正しく祝ひけり
十六宵や奢れば人も下り坂
買切た車に乗らす春の旅
賣れる日は松も聲なし心太
初虹や松に未だある雨の色
影膳に物言ふ人や秋の雨
七夕や驚香に渡る銀河
記念樹の無事も知りけり歸花
乙鳥の往來にのそく普請哉

よき事を聞く耳かゆし初蛙
船窓や曙かほる磯の梅
初冬の障子明るき二階哉
田を守る案山子も國の民の數
川風を通して涼し籠枕
水口の幣に露の濡りかな
押つまる日敷を雪の埋めけり
渡し場へ行く近道や芒原
大口を開く胃の臍や芋の秋
梳る黒髮山や春の風
隼や羽繕ふにも眼の配り
惜しや月欠くるものとは知り乍
春風につるる虚榮の女哉
初雷やすん／＼伸る麥の丈
鳴立て秋の暮行く汀かな
碑や梅と櫻と袖袂
校名を汚す愚童や印地打
涼しさや柳の下に遊ぶ舟
鳳の尾を張る園や風光る
里を出る朝提燈や時鳥
危くもどまり直しぬ芥子の蝶
詩も歌も海邊の松や今朝の春
慈悲の君忠義の民や今朝の春
大悟して管弦何ぞ蕪汁
俤を雲に残して時鳥

危きによらぬ君子や鯉の席
ライオンも虎も居眠る日永哉
來て暫し無念無想や花の中
雨の日も花の往來や東山
碑を濡らす雫や花に集ふ袖
付た根の岩より堅き石菖哉
ひとならひ山根に白し田植笠
電柱の片面白ししまく雪
閑古鳥ついて來るかと思ひけり
昔長者屋敷の跡や虫の聲
世に匂ふ花や名句の墳印
貧乏の我にひまなし花盛り
延明か靈夢の骸よ枯れし菊
畑に満つ麻の香や雲の峰
梅か香に押さる／＼春の寒さ哉
來た空の裏や臍に返る雁
一異彩放つ變裝の花見哉
爐塞や壘一枚新らしき
編籃や化粧最中の遊女町
魚市も人も盛りや櫻鯛
二階から按摩を呼ぶや春の宵
南洋の話子にする燕かな
蚊帳に寝て母に歌舞妓の咄哉
ぬき捨し笠の下からさき／＼す
兒と椿乗せて引する庭かな
三十七

白蓮の濁りに染まぬ散り心
空濠を走る 鮎や冬の月
睦ましく家庭計りの月見哉
涼しさに夏を忘るゝ乱かな
足に未だ添はぬ草鞋や朝霞
名月や明け行く空と思はれず
室の梅茶寮の床に薫りけり
野の水に秋立雲の動きけり
青丹よし奈良は櫻の薄月夜
なつかしき日のきくや初時雨
花に立つ七日は人の命かな
慾知らぬ友を招きてきゝ茶哉
抜け出した若き狂女や桃の花
笛にする竹探らはや月の秋
庭掃は遠音になるや虫の聲
師の遺風守る子弟や釋奠
鈴虫の聲に澄み行く月夜哉
籬に添ふ溝の濁りや芹の花
三日月の入りし方より郭公
樹の苔のころりと落て秋の風
初風や松は今年の歌柱
なれ捨てし熊谷坊や夕櫻
日月の如き白菊黄菊かな
親連れた人美しき花見哉
縮緬の様なり春の海の面

大人には出来ぬ手際よ手鞠つき
角火鉢丸き咄に圍みけり
海鼠鴈や命幾つを箸の先
月涼し冬は長しと思ふ橋
古る事を思ふ目先や桐一葉
あれ程に出て跡のなき羽蝶哉
深草の御宿は何處を雀の子
戀に泣く我ならなくに時鳥
焚すきて風呂に水待つ寒さ哉
鶯や我庭なから忍ひ足
蝶々や寺子戯れ行く午下り
雲分けて澄むや真如の月の影
暑き日を静に轉る水車哉
法燈は代々に滅せず涅槃像
初夢を問て問はれて隠しけり
妃殿下は雛に似させ給ひけり
葉に花の隠る牡丹の盛り哉
秋も未だ浅し蚊遣の煙る里
起きゝの氣を引立る新茶哉
顔に飛ぶ密柑の汁や春寒し
赤蜻蛉妹のひさしの雨やとり
合戦は平和となりて雪達摩
瀧川の音にまじるや小夜砧
神童の傍や墨摺る角力取
奥津城の關伽となりけり花の露

我古き詩腸洗はん今年酒
雪の道をはつかなくもたどり
戸さゝぬは見る氣でも夏月
徐ろに夜の退く花の梢かな
雪の里鐘の音計り聞へけり
門通る足音早き寒さかな
朝寒や竹椽にこる銅盃
はゝゝに名残の煙る夕かな
明の鐘驚き別ればなかり鶯
鶯に笛附けて居る翁かな
政界は新聞に見て接木哉
臺所に味噌する音や花の寺
留主訪て糸瓜に一首残しけり
影清き朝三日月や蓮の上
碑に手向く香華に蝶の羽風哉
舞ふ雪を無心に仰く乙女哉
鼻たけは老せぬものか梅薫る
若葉して小さうなりぬ山の池
歸る日のあるへき物を雨の雁
戀瘦の美人あさける牡丹哉
年の坂脚無に先を越されけり
暗中の光一點や蓮の花
梅か香や得かたき物は人の徳
山里や權兵衛の梅曆にて
万歳の鼓打ち込む戸口哉

防禦も俄の事や雷の陣
雪佛本來空に歸りけり
朝寒やゆすぶつて見る籠の虫
なつかしき事のみ多し春の風
一粒もすたらぬ雨や綿の花
傳令の一騎繩手に霞みけり
我暑き貧民窟の掃除哉
舟涼し呼へは來さうな都鳥
花の座に追慕切なる一ト日哉
里川や春の奥なる百千鳥
梅か香や供養の灯ゆるゝ程
瀧白く五月の山にかゝりけり
人の道踏めは怪我なし年の坂
隅田近き庵に糸萩小萩哉
手強しと見るや二の鷹矢火早
飛行機の飛ぶ空青し小春風
家移の菊や子供と合車
雨一日ちからに山の笑ひかな
京へ行姉と別るゝ柳かな
千匹に成て事すむ益哉
風にさへ道ある御代の柳哉
朝の間を水もすみけり杜若
雲や花盡きぬ眺めそ東山
竹植へて新し朝風夕嵐
白萩や句塚をすりしこほれ墨

雪止んで行辻々に達摩哉
松風に親しむ菴の新茶哉
月愛し松にむかへる初旭哉
篋にも客あり花の吉野川
手際よく織くや枝炭櫻炭
蛭や馬の麥表るどろゝ火
花の咲く木は何々そ春の風
頭巾着て眼立ぬ用に追はれけり
水に火の花咲く天満祭り哉
峠から孫の氣を見る幟哉
忍はるゝ榮華の跡や桃の花
名月や配置の叶ふ歌机
聞まじや聲に限りのあるくさ
戀草の萌へ出る春の小雨哉
南天の實の美しや雪の朝
春深し酒屋の軒の古青葉
傘借りて這入て見るや杜若
刻む菜の中に音ある氷哉
初旭仰く鶴や尾上の松の上
百川の一湖に入りて水温む
片鶯鶯の婦徳愈尊けれ
斧見せぬ荒神山や閑古鳥
鑛山の技師は閑らん閑古鳥
猿の智慧程もないらし猿廻し
撫子や花植一ツに唐大和

鶯の籠や春待つ教へ笛
二度と來ぬ様に逃げる稻雀
柿の花こほれて白し勤農鳥
桃山は御陵となりて松の花
小松原鶴一羽居て初日の出
手をこぐる團扇や夢の桐一葉
碑は黙し鳥は歌はす散る櫻
毛虫焼く毛虫の如き男哉
極樂の水湧く池や蓮の花
神垣や神の枝に蛇の衣
月の夜や無我有の郷に在る思
三月の雜誌籬の畫解かる
初汐や縮緬皺の波の音
降雪の見ゆるも雪の明り哉
掛乞や留主と言さぬ影法師
水音に別れる道や閑古鳥
後から脱せもふすや夏羽織
其笹に焚取る氣か天の川
松風の途切れを鳥の砧哉
初雪に椿の花を見付けけり
三猿の一つ守りて壬生念佛
時鳥星一點の光り哉
花に貸す庭織りけり春の雨
草に入る二日の月や鳴の聲

竹婦人宿に三とせの馴染哉
亡き人の夢に目覺てそゝる寒
月影の居り所や水芙蓉
夕暮の鐘も淋しき枯野哉
名月を槐にくらき菴哉
遠蛙法談眠むき夜なり鳥
人の眼は高い物なり司召
常盤木の落葉や庵の操草
梅か香の薫るや鳥の枝移り
一錢の釣鐘つゝや彼岸會
耳洗ふ法師立ちけり秋の水
疎き日も滿れば暖し枇杷の花
藤咲くや止まれは動く溪の橋
はる寒友をく琴の高音哉
廊や春躰算盤を持たぬ客
芥子あまや咲して庵の朝寝哉
勞れ鶴繩ありたけに流れけり
相生の松の青みや今朝の春
饗飽ぬ花や二度来て二度乍ら
のごかさや母國へ歸る姉妹艦
月一ツ刈田に捨てゝ時雨けり
旅僧に宿乞れたる深雪哉
片言の歌愛らしき手鞠哉
雀籠や現に 鯉の夢心
散り際の際よりもろし芥子の花

雞の音や浮世に戻る月の舟
夏籠や心にこまる鳥の聲
散る花の舞て流るゝ早瀬哉
石碑に嬾紛として落花哉
笹鳴や墓地に買足す山畑
日は山へ暑抱へて入にけり
夜日和を見上り利那や時鳥
涼しさに脱し兜を枕かな
蚊柱や泣く子の多き裏長家
磯狩やよくも女の海馴れて
奥津城に流るゝ花の雫かな
還幸の跡静なり花に月
師は筆の鞭や持つらん瓜の馬
夜は虫に廣しと思ふ小庭哉
米つけた牛の目に立つ枯野哉
清貧に天下に耻ぢず濫團扇
春の夜やそゝる心は鼓打つ
秋草の露踏み行やお六尺
冬瓜や師の家庭はまどかな
よき夢の覺たあしたや冬牡丹
よき空に雨拵へる暑かな
新造の飛行機試す小春哉
白重ね床しみどりの籠越し
夕立の夜に入る町の燈かな
洗ふ手にさばく小鮎の光り哉
三十九

夏座敷雨の遠山眺めけり
晴るゝなら風丈け残せ夏の雨
人毎に撫て髪めけり丸火鉢
夏瘦の皺腹一ツ叩きけり
名の夜見た眼に幻や後の月
有無の日も遊はせず筆硯
御酒古草内裏難迄酔しけり
初花や踏み心地よき庭草履
鞆や乳母に持たせし小脇差
今日の月詩歌に盡せぬ眺め哉
糸遊の立つや干瀉の身をつくし
蜂の巢や雨露に寂ひたる五重塔
落葉して赤い鳥居の目立ちけり
山吹や咲かぬうちから撓み癖
竹の子や親は隣の垣の内
やむ空の初手から見へて春の雪
金色の波に浮ひつ稲の村
月涼し國を二分の一大湖
今日も又日くらし鳴て暮んとす
冬の部へ峰は突出て暮の秋
百官を集めて菊の御宴哉
書初や拙なき筆も先賀祝
桑の實や絹を貢の一在所
撫子や砂に吸込む走り雨
加茂川に離座敷や蜘蛛の船

遠くなる程堪かたし秋の聲
三界を捨て身振りや盆踊
飯提て井戸覗く子を叱りけり
麻衣寒くをわさん寝釋迦かな
山高くして水細し冬の月
女には見返らぬ眼も花戻り
釣案山子穂波左右に泳きけり
神の山佛の山や夏木立
我座の雛魚寝照らすな夏の月
洞泉に詩鴈を洗ふ残曇哉
鶯や琴聞く橋の河はこり
忠孝の講座二席や釋奠
梅か香や机に向ふ朝心
明月や澄ほと暗き物の影
沈み行く通夜の木魚や虫の聲
粥腹に餘寒の鐘の響きけり
來迎の夢をかへすや郭公
三井の鐘霜夜の湖に響きけり
川一ツへたてゝ煙は時雨けり
我と我が旅を哀む時雨かな
遠征の我夫思ふ吹雪哉
笛に寄るあはれを知らず藥食ひ
初雲雀母屋の旭浴ひにけり
若鮎や食道樂の舌鼓
短夜や黄昏に似し朝ほらけ

青東風や汐の漕を一ト頻り
不夜城も更て音なし寒念佛
提て行く使命の重き牡丹哉
時雨るゝや月にも名ある峰の松
古茶汲むや母は昔の御殿風
千早振る舞樂や花に神遊ひ
行く春を風迄花を散らしけり
藤咲くや崩れて赤き山の土
花眼の届けはゆるむ手綱哉
親實く撥疵つらし寒稽古
水取や龍の都にとゝく法
今年はと思ひし年は暮にけり
春深き寂見る煎茶茶碗哉
不如歸まくれ當りの寢覺哉
秋淋し物敷云はぬ寺男
氷柱長し大家の軒の少さ家
葉隠れの牡丹を覗く日傘哉
角隠す頭巾を針の始め哉
荷を持し主もあるや花戻り
遺弟相謀る誠や花供養
霞から霞を縫ふや鐘の音
句碑あつて世に名の残る櫻哉
立咄し柳結んで別れけり
身に入むや神の告聞く晝の夢
明月の更て光るや椿の葉

模範村の稻の八重垣作りけり
葉櫻や雨に暮れ行く大悲閣
山茶花の散りぬ佛の掌に
文學は人の花なり初硯
散頻る花に黄昏静かなり
一蝶か筆のしづくや蝸牛
船を呑む浦の難所の施餓鬼哉
茂りから日影ちらつく清水哉
花慕ふ心は等し残る蝶
浪花津の燕は橋を潜りけり
大津繪と微塵も似てぬ鷹匠哉
次の田へ片足入れて植仕舞
艶は皆師の手痕なり桐火鉢
水音の方へ道つく夏野哉
鶴の子の堅濡しけり春の水
雷鳴に恐れて蚊帳の睦み哉
日の駒を繋ぐ樹はなし大晦日
花の山海見ゆる迄登りけり
咲き満て惜しや牡丹の高崩
急行車ひらりとされる乙鳥哉
頭巾着て酒くさき僧を苦笑ひ
桐の實の鳴る山風や今朝の秋
一座皆天盃受けし頭巾哉
竹の音松に聲あり夏の月
あはれなき笑顔突出す施米哉

白藤や院の半菀暮遅き
人心くつろく上や夏の月
思ひ事有て小寒き裕かな
植て退く田面や風の夕けしき
貴妃老て牡丹に恨み残しけり
開けしは妻の礎や戻る門
瀬の音も笑ふ様なり春の川
初時雨雉の下蔭したひけり
箱出して雛の冠正しけり
法の月偏ねく蓮を照らしけり
鶯や忘れて戻る藏の鍵
寂返れば後へ廻る夜寒哉
龍天に昇るや淵にひそむ魚
春百花棹尾の雅味や松の花
行燈を消して寝よとや火取虫
豊は世の寶なりけり今年米
耳塚を素通りしたり時鳥
碑や名ある櫻の真正面
寂惜みの付く夜となりぬ梅に月
狙酒の馳走に逢ふや時鳥
時雨るゝや千古不滅の塚の文字
飯蛸の佛性あり佛果得さすへし
馬の繪や塗墨黒き筆始
掃焚て罪なき顔を並へけり
二百兩は操の花か勝負力

くつきりと夕顔白し瓜畑
夜櫻や物言ふ花もはへりけり
紅梅に誰か契りかや結ひ文
國に忠盡す構や初幟
汽車輕轆霞む山根を過て行く
夏籠や月日の外は筆を友
寄宿舎に揃ふ生徒や虫の聲
巢放れの鳥に宿貸す若葉哉
名月や有らほと思ふ歌心
春寒し八十丈の瀧の音
花は葉となりて佛の生れけり
亡き父の寺から呼ぶや閉古鳥
夜は夜の人に賑ふ櫻かな
柴山や常盤の中の黄葉紅葉
草の戸の雛蝶の來て覗きけり
朝寒や廊下を迂る上草履
清貧にして詩長者や梅の主
鶯やいつの間にやらあこめ垣
茶畑に浮名を殘す摘人哉
手籠し咄になてる火鉢哉
春寒し天歩艱難國歩難
晴るゝ迄泣き續けり雨蛙
藤波や面影包む綾小袖
蝶一ツ小庭に春をこほしけり
東雲や花物云はす水の音

小酒屋へよるや夜寒の町戻り
幕張てまつ我物よ花の山
人の行く道を辿れば櫻哉
菫の月冬を隣りに戸さしけり
伸過て軒へ腰打つ糸瓜哉
古猫も戀に忘れず鳴き歩行
美しくしう雲はく峰の櫻かな
葉櫻やまた佛の殘り雲
碑に雨をゝく夜や郭公
花咲くや塀を見越の木の配り
山吹や狩衣はしる雨の軒
呂の調や世に名のひく鼓瀧
彩管の戯れもよし春の宵
此走り山家にもある新茶哉
朝顔や夢の浮世の悟り草
永き夜と思へぬ廊の遊ひ哉
隅田堤花のどんねる造りけり
花守や雨の夕へを一人酒
雉子鳴た處から立や日和虹
涼風の的や遺墨の掛け扇
淡雪を蒸汗のまうけ林丘寺
老て猶松は初日に榮えけり
夜櫻や氣も浮船の隅田川
乗初や砂を蹴立し二勇士
散る花と悟れば風は面白し

山寺の寂打ちかくす柳かな
こぼるゝは現世の露か蓮の花
五月雨や互に眠る基の疲れ
引鶴の跡も濁さす小田の水
水に置く影も芳はし白牡丹
暖すれば明く枝折戸や月籠
老若の用捨輪踏になかりけり
半折れし戒壇石や枯柳
薰風や國道十里松並木
さす月も重みになるか一夜鮮
法華經の石碑涼しき木影哉
短夜の人と成りけり宿の妻
瀧白く梢の秋にかゝりけり
蝶番ひ解けつもつれつ別けり
施して慈悲の名の出る門茶哉
蘇氏傳の緋く夜半や時鳥
常を守る遺訓三章の扇哉
寒食や一日こまる煙草好
何となく倦心つく彌生哉
美しき平和の神や雛祭
散る花にのみ風の添ふ思哉
鳩の來て三枝散りけり松の雪
夜と晝と取違へけり盆踊
春も富む姿なりけり彌生不
敵の手て紙衣の皺を伸しけり

睦まじき隣同士の糸瓜哉
何時夢のさめても聞や茶立虫
ぐるり皆咲きけり梅の中の家
緋ダリヤの黒くしほみて秋の行
抜けて出て抜ける連待つ踊哉
鶯や花の都の朝ほらけ
鶯や筆の遊ひは物静
行く春の名残りや花も歌の塵
麥の穂も早出揃ふて夏隣り
變遷たり矢に切る竹は菊の杖
岬角の佛體石や草の花
梅咲くや十三年は只一夢
其跡は無事な家内や魂祭
地に垂る、柳も有や夏木立
淺くとも流れは清し納處
十月や案山子のこころ菊の骨
雨に伸ひ風に伸ひけり糸柳
一日の精進長し櫻鯛
散てこそ花も七の譽れ哉
句にあれば故人に見みゆ露の莖
誠忠の詩にこそ残れ山櫻
日の霞暮て朧となりけり
乗初や鎌倉武士の勇振
鶴よりも鶯は青田の氣色哉
京の花都踊も見たりけり

水道やバケツの中の冷し瓜
通夜すればこそ聞にけり時鳥
思ひ出の昔を語る紙衣哉
遠花に心むけたる馬上哉
紅鶴の聲寂てあり露時雨
高樓の晨化粧やさはひこめ
甘酒や子の歸省待つ親心
蝸虫の家は買手もなかつけり
戸口から草踏む門や飛ぶ螢
尼寺の木魚の音や木蓮花
春雨や晝静かなる廓町
山頂に傾く堂や散る紅葉
言はずして寄るや夜寒の臺所
飛込て月を動かす蛙かな
藜折れて白地なり秋の不二
十六宵や今日も昨日も泊客
名刀を仕上げて吹草祭哉
長閑さや柳は枝をもてあまし
夜櫻や顔るつきの譽言葉
風流な花盗人や句も盗む
賑はしき畑や茶摘の別天地
養父入や我家なからも客心
冊立の御沙汰長し菊の宿
夕涼み明日も爰よと別れけり
裏町の煙は細し夕時雨

風の主風にもあてぬ育ちかな
引た袖曳かれし袖や土用干
賣聲も走か如し氷賣
麥跡の水にをわる、田植哉
梅古き家と尋ねて文使ひ
人柄をくつさぬ客や白扇
須磨寺や經よみ鳥の日も終ら
太郎作も羽織短かし在祭
芥子活て琴次の間へ運ひけり
茸狩や繩一筋トを吳と越に
二粒は數珠も花見る眼玉哉
日の暖み未たありそや今年綿
灯のいらぬ燈籠ありて風薫る
佛彫る木を伐る山や時鳥
入手寺と思ふや落つはさ
山吹や昔の儘の水車
局めす鈴音ゆかし青簾
編笠や身は浪々の一木立
浄品や春の水のもろ解けし
薫風や遺稿緋く大廣間
船は世の放れ座敷や月涼し
振上げしこよしに垂る、柳哉
行儀よき扇使いや姉妹
庵かこむ木立目出度し閑古鳥
光秀の首塚荒れて青瓢

福引や男女交りの高笑ひ
散る花や諸行無常の鐘のなる
峰迄は笑と、かす不二の山
蕎麥湯して義士の龜鑑の咄哉
家屋敷布くや首夏より改て
春の海邊に鶴首迎へけり
寶石の光る腕輪や夏衣
夕月や花の静さ見へて散る
到る處青山ありて風薫る
鶯や晝静かなる四疊半
新酒酌む手は未だ癒ぬ日焦哉
鷹匠の拳に消ゆる霞かな
初雪や化粧の水の捨所
初櫻よりも新茶の花香哉
夢くるめ打や施竹の残り水
折からの雨も手向よ花供養
山門に時雨て居るや豆腐賣
一本に仕立て、左團扇哉
面影は西へ入日の左久良哉
花に事よせて新婚旅行哉
粗朶に咲く湖路の花や櫻海苔
手折るのも愛る餘りや梅の花
若鮎や香氣も淡き口當り
眼の蕪村耳の芭蕉や初時雨
朝起や病もなをる青田哉

罪も火も消へて明行く鶴川哉
見た夢も皆筒拔よ籠枕
鶴高く小春こほして通りけり
初雪や竹の心に叶ふはと
筆置て暮遅き窓覗きけり
嗅き茶して亡き友語る座敷哉
茸狩や一番かけの悪太郎
鞍壺に梅か枝さして春の駒
懸乞女内心夜叉の類ひ哉
手元から風の生る、田植哉
正月は翌日其てもよし煤掃
せかまれて孫に蝶取る彼岸哉
玉川の名も愛て、聞く蛙哉
椿の禮木魚鳴して戻りけり
椿にも望あるらし梅貫ひ
鮑むく家はちひさし雲の峰
酒好の亭主を持って夜寒哉
點心の菜粥うまきを春寒し
秋深し山に打ち込む波の音
着心地や洗ひ浴衣の糊加減
洗ひ干す蠶莖や風かほる
水に風障れば蓮の薫りけり
若草や無分別なる下駄の跡
此池のあるとは見へぬ花野哉
五月雨や庵の淋しき時鳥

追悼の齋の場や花吹雪
三萬の佛黙して堂涼し
桂男の覗くや色を變へぬ松
列見や蝶の氣付ぬ挿頭花
止る蚊に可愛兒の顔叩きけり
砲火遂に霞の幕を破りけり
暑き日や俵這ひ出る米の虫
貧しさの中に盡して盆供養
梅咲や窓の障子のうすよこれ
樵人は風呂の湯にくむ清水哉
碑と櫻目立都の名所かな
徳は孤にあらずと梅の薫りけり
輝や村て模範となりし嫁
作柄も書て案内や秋祭
水に月静に鶴の歩み哉
乳母と云ふ殿のあり高浦太刀
病すら忘る、舟の涼み哉
石道に流れて寒し町灯り
五車の書や冬籠る座の右左
花足袋や高きに登る歩行ふり
徒然に清掻く妾や春の雨
紅梅や妙齡の美女欄に倚る
手拭の木の間白き茶摘哉
藏建てる築地に霜の柱哉
獨艦は打ち沈めたし春の海

箸先は伊豆七島や沖繪
山風の野にもこぼれて春の月
曉や露にまた、く星一ツ
鳥部野の方から吹や秋の風
引き残る鶴なつかしふ思ひけり
花のなき寺はすけなし東山
回顧すれば夢なり松も十返て
露の戸や世に捨られ果、僧
花の雨團子日和といはまほし
夏袴膝ふくらしてすはりけり
一人兒を貰た思や菊根分
春風や松の根洗ふ浪頭
苗代や鴨に化し古双紙
八千代てふ名も頼みなし落椿
はの、と八房梅の匂ひ哉
師の遺す硯に蓮の雫かな
眩し灯のすくよか立てり涅槃像
六合に満つる櫻の薫りかな
霜の筈はねて船出す港哉
仲達の後見せけり月の琴
半道は漸く來たり辻扇
見上れば花の中なり大悲閣
眉を剃る盟の水の温みけり
河骨や流のつかぬ水の中
二次會の掬となりぬ春の月

都にもあるか此秋此夕
曙の色儘なり花と水
棚卸し殖したり此三代目
日の駒の足はたゆまず年の坂
奉納の馬吹く風や豊の秋
舟て見る家の後や梅柳
怪夢さめて頼の汗や時鳥
温泉煙や日三竿に鳴く雲雀
此松と共に幾代を馬紅葉
松明に怒濤の凄き和布刈哉
香のなくは梅とは知らし月朧
帆柱の並て霞む夕かな
惜まる、花も是非なき嵐哉
鶯や能番附に餘念なく
薫風や若むす石に日の光り
離れたり逢たり竹に夏の月
大雪に北半球を埋めけり
月を脊に負ふて戻るや山遊ひ
足と手と歩む山なり冬の月
文机に芒の影や今日の月
櫻はと人によこれぬ紅葉哉
不如歸營まぬ巢に籠りけり
春雨や曉傘の伊達女
丹精を籠に盛りたる茶摘哉
共進會に賞得し近江蕪哉

9 拾參

灯の見へて草臥の出る枯野哉
鐘撞けは雲動きけり峯の秋
何も手にさす花見をのはした日
深き雲に任せて月の一夜哉
春寒や魚鱗を叩く健仁寺
落てから虹の飛出す椿哉
梅に月夜に鶯の鳴くなれば
春雨や大臣は未だ夢さめず
枯枝と魚の囀や冬の川
已か葉を夜の衾や歸り花
風を衰た姿てはなし稻の出来
木屋町や扇鳴せは鼠啼き
鶯や隣に邪魔な葉砧
雞をよぶ様な手附や大根蒔
血腥き風吹かぬ國櫻咲く
柳させば生くと見ぬ虫土もた
百萬の軍を配する團扇哉
秋の寂持たぬ氣色や須磨の月
羅や衣通る君か身の光り
涼風の音なく渡る青田哉
春雨や静かにすはる不二の山
山吹や春と夏のへたて垣
今年また淋しい蓮の花の影
一心の誠貫ぬく矢數哉
長谷の鐘聞きたひ匂ふ牡丹哉

9 拾四

起臥も易し鶯初蛙
飯汗や半は研究の醫學生
不義に富む錦より此紙衣哉
筆取れば天下に覇たり梅の主
逃けて来た隣にも又蚊遣哉
三井の鐘湖上を渡り消にけり
龍も見ん五月の池となりけり
身に沁みる木蔭の冷や神無月
うなつかる御意に薬子進みけり
雨は早横に降りけり今朝の秋
制髪をさせた子戀し秋の暮
年の花匂はぬ家はなかりけり
一昔跡になりしか花の連
名月や曇らぬ御の勿體な
親切の涙にむせむ蚊遣哉
人知れず濡らす袖あり土用干
思ひ出の多き拜領の難かな
進む世によき習はせや冬の梅
千鳥なく海の底にも都かな
孫たきし老の笑顔や初寫眞
空寒し不二を根形の扇風
春風や奈良の佛に伊勢の神
柴の戸や朝の落葉を夕煙
八講や港の圍ひ船
魚ねらふ様なり涯の猫柳

9 拾五

翁忌の雨水壺に匂ひけり
秋の聲鐘計りてもなかりけり
懐き袖に花の香残りけり
麗や隙行、駒の歩行哉
優渥の御下問もある深雪哉
雲に鳥蛇も穴出る日なりけり
佛にと開て赦しぬ花盗人
襟敷の外にして着る紙衣哉
寛せく物さまの落葉哉
出處の知れぬ水あり芒原
散り行くはいつこも市の櫻鯛
日暖か巢虫出よやれ俳諧せん
師の蔭に勝る涼味はなかりけり
飯人や親に土産の貯金帳
見事咲き見事實を得る櫻哉
花嫁の扇に紅の移りけり
人も馬も炭負ふて出る山路哉
日の筋や舍利程残る雪佛
萬歳や二軒一緒に舞ふ長
納豆作る宗規もありや大徳寺
一喜一憂花咲かす雨散らす雨
消へ残る薄茶の泡や夕櫻
鶴鶴や地神五代は我皇祖
月天心霜踏む鹿の聲牙へて
群雀の默す鶯の初音かな

四十四

9 拾六

山茶花や菊をふせたる薬園
鶴歩む春に吹く風の光りけり
朝寒や旅藝人を乗せし馬車
朝寒く小驛に送る別れかな
遇然に富士を惠方の我家哉
夜の塵を放れて白き牡丹哉
心なく踏んた跡あり苔の花
出来のよい嫁の噂や生身魂
灰汁桶の雪ほち、春の宵
誠あるものに派手なし稻の花
昨日より今日又高し風
形代や渦に消へ込む合川
草萌に徐かな鶴の歩み哉
紫の雲や涅槃の朝朝
降らぬ日もかわく色なし燕子花
尾花散てり果て、水聲古今なし
鳥雲に入るや駄菓子子の賣り茶屋
草餅や是も家庭の教へ草
桐火鉢家三代に傳りぬ
赤松は亡國の樹や山眠る
暫時は汗ひく坂の清水哉
入相の殊更惜し、今日の花
溢れて行く酔た女や花の雨
葉竹賣商人らしふなかりけり
勤儉を座右の銘や桃の主

9 拾七

柱男の覗く夜うれ竹婦人
蓮飯や手首に珠數の掛けたま、
成金の御殿造りや雛祭り
天職を忘れ顔なり戀の猫
偷講の暇に探るや菊の鎌
天地の真中に白し梅の花
町になき馳走と譽る椿火哉
淋しさの古へふりや山櫻
夜寒さの天井を騒く鼠哉
香焚て寂深う聞く時雨哉
雉鳴や籠の里の朝煙
七浦は海豊年の踊かな
夕顔や杏引摺て戻る馬
青虫のはく、み見るを春彼岸
鳴きし日を夢な忘れそ時鳥
稀々年重ねて老の紙衣哉
長生美德曳けり花に杖
はつきり松の落葉や山清水
熊の肉煮て酒あふる椿火哉
圓山や隈なき花の雪明り
能く咲て猶寺めくや糸櫻
佇て鼻かむ人や月と梅
水仙や名香高き持佛堂
公達の鬘斗目は瀧々し桐の花
立隠す姑を持ちて嫁か君

9 拾八

屋根つりの雪を踏まへて浮れ猫
異口同音民權叫ぶ蛙かな
葉櫻や木樵となりし渡守
なつかしや蓮の雪の目にうかむ
此の頃や併搗音に暮早し
山の井の淺きまてしく落葉哉
時雨傘借て忘れて戻りけり
鶯の咽より空の馳みけり
藝踏んで駕の足並亂しけり
降る雨も名のある日なり曾我祭
初春や若草山に立つ煙り
人中の人と見られて年男
聲替りして戻りけり春の猫
笛袋木の間の露にしめりけり
名は嫌い花は愛する唐木瓜哉
凧に鐘でもあそぶ撞木かな
強力も共精進や獨活胎
朝晴や山風風て花曇り
先床に祖先の畫像虫干さむ
人の跡見ても吾には初櫻
月淋し延元陵や散る櫻
春の山只はう然とすはりけり
時雨る、や不二を見初る二子塚
人來ねは鶯も鳴かず秋の暮
梅白く月の光りを奪ふほど

9 拾九

眼を閉ちて見る佛や魂祭
星影を共に積込む初荷哉
鳳は雲に古巢は松に預けけり
花葺鶴の羽風に戦きけり
文明の利器利用せず花の旅
知らぬ聲呼子鳥かと思ひ鳥
家毎に折て戻るや桃の花
門川や硯洗ひしさ、濁り
少さうても尾頭付よ小殿原
そ、かき雀の戀や落椿
向ふ敵なし雷の陣備へ
手向はや知らぬ經より蓮の花
木蓮の白らけ茶や佛の日
鳥には惜しき盛りの野梅哉
平和なる空や亂れず渡る雁
慈に徳に榮行家や年の花
ふいと香も法の味あり蓮の飯
吹て来る風に針あり寒の入
茶の花や橋守を訪ふ僧一人
軒下の干菜取込む霞哉
忠信か鼓の音や花の影
見返れば我影淋し秋の暮
齒を染て鮎は寂るに紅葉餅
なつかしの樂譜や夢に千鳥の夜
子を持つて親の恩知る夜寒哉

9 貳拾

七夕や戀と云ふ字を母に問ふ
竹植て月の心に叶ひけり
名月を汲みこぼしけり水車
詣る人鐘を撞けり若葉寺
日は斜山門た、く落葉哉
戀を捨て世を捨て、鉢叩きけり
翻れても、も萩の盛り哉
夏の夜や瀬をあさり行人の聲
散櫻夢の浮世を悟りけり
噂する方へ散り行櫻かな
俳諧は大江戸より、紙衣
梅提けて荷物めかした禮者哉
湯上りの肌に秋風覺へけり
枕木の霜踏んで行工夫かな
棗から、茶杓や時鳥
佛舍利の様にころふや稻の露
粟拾ひ花咲翁も交りけり
隣村の風の子も来て吹草祭
花七天天氣豫報も狂ひ勝
霧深く三十六峰包みけり
時ならぬ嵐や花の散る夕
八洲の山は晴れけり渡り鳥
菊の芽や手入と、いて椽の先
涼しさや佐土を船出る朝ひらき
白魚や曇らぬ御代の育ちふり
四十五

つくく〜と見る書換や春の雨
擔ひ込む鯛の尾をする乙鳥哉
思ひ内にある顔るなし春の人
雪洞に蚊の一ツ來を櫻かな
駒鳥なくや深溪に入る書人あり
三味糸されて淋しや小夜千鳥
關の名は枯れても朽ちぬ櫻哉
分別も愚にかへる夜や玉子酒
窮屈も馳走の内か船遊ひ
散る花や吉野の詠史偲はる、
春惜む事多かりき旅日記
亂れては風の色ある柳哉
千金の花に浮世を悟りけり
駒鳥の聲鈴鹿の雨は晴れにけり
折からの花の吹雪や香つゝみ
一坪に足らぬ小庭や釣苜蓿
啼止めは月の野となる櫻雀哉
花咲くや竹屋の渡し十三艘
野の梅や折らむとすれば牛の聲
煩惱の夢させとや散る櫻
花胡羅笹風鳴るを寺は閉つ
確言も身につまされて秋の暮
帛紗さはく手に漸寒を覺へけり
寄生木の一枚青し冬木立
我戀や芋も届かぬ柿一ツ

稻妻を突返したる不動哉
血の滴るゝ生首凄し芒原
藏開き戸さしぬ御代の例哉
一念の腕に籠るや雪の銀
鶴曳し跡や名残の盡ぬ松
孝の名を覗て共に賣る子哉
梅か香も朝日も這入る小窓哉
海士の子の裸くらしや海雲取
兄貫字吾長非なと鯁と汁
舞ふ鶴の影静なり初見空
豊年の貢輝く雪の山
此宮のゆかり尋ねん苔の花
花に來し儘か枯野の捨徳利
鶯に耳取られつゝ朝餉哉
稿を突や深山に木隠れて
虫鳴くや法の灯の草に引く
月落て只白露の野となりぬ
羅や帯も白絹の芦手かき
髮結ふて電話かけたる花見哉
鶯や書院の窓のそつと明く
春雨を知らぬ夜もあり草家に
涅槃會や無言で拜む人計り
通天や紅葉の中の松一木
春の水鶴の綿毛も流れけり
鶯の老ての地なり眞如堂

宇治は今儲けの秋や新茶時
六月や外から見ゆる奥座敷
醉ふて歩行く様に流れつ春の水
春雨肅々舊懐の情深めけり
雨の日や何をさゝやく巢の乙鳥
蜘蛛の子や早氏よりの巢拵へ
人揚げし船の掃除や夕霞
藻の花や刈り上げらる船に咲く
因みある笹も添けり雀鮮
一日つゝかはる日影や枯柳
春の夜や人静れば松の聲
海士か家に詫寝して聞く千鳥哉
世に稀な一粒種や辻か花
山吹や朝寝の戸口眼に立す
待し甲斐あれと遠音や時鳥
蝶も未だ知らぬ氣色や初櫻
眼に見へぬ客にいそかし魂祭
臘月藤戸の淺瀬越す夜哉
鯛や能因に似し窓の影
成佛せよ花散る夕緯切れし
花咲けは馬は伴ふ浮世哉
花老て塚寂て寺静なり
虎荒れて筒先すこき吹雪哉
沖見れば沖にも船のとんと哉
十萬の蚊軍慕の眠んたり

双兒産て牛乳足す戸やそゝろ寒
笑ふ山寫して水は温みけり
風温き藤江の浦や鮎釣
蝶鳥の世にして霜の別れ哉
史跡尙今に埋れて枯尾花
短夜も汐の來てあり垣根先
嚴談の煙管に叩く火鉢哉
戰場の野邊に血のある清水哉
奢る世に染らぬ振りや澁團扇
多士齊々卓を圍んで嘲す
遺言は鯛も備へて魂祭
鯢取る人を養ふ鯢かな
迫り來る夕闇憎し花の下
心には錦着て身に紙衣哉
世に通る名は残したし大矢數
夏寒き岩間に霧の雫哉
花の湧く如く月夜の三九良哉
蓮の香や雨に小暗き持佛堂
笹蟹の貸す袖ならず青藤
花に雲眞如の月の匂ふ哉
ある甲斐もなき水鉢や百日紅
春の空日終ら水に移りけり
涼しさや夢の下行く水の音
啼捨て蘭沼抜行く水雞哉
親ありて月の櫻に別れけり

じき親に逢さうな夜や盆の月
野の人を呼ぶ聲遠し花大根
脆夜の小路に消へぬ頬冠
舞姫の鬢も崩るゝ蒲團哉
一ト筋の思ひを糸の願ひ哉
歌膝にせまる夜冷や時鳥
踊り人と見人に出たり一家内
幸に善き水もあり夏木立
御佛事や他力にすかる老の杖
秋海棠朝のそよきの風寒し
艘の座や妻子なき身の友揃
遣り羽子の筆や禿の切られ與三
起されて見れば舟なり夏の月
油断して櫻淋しうなりにけり
田樂の旗に枝貸す櫻哉
陸まじき人は見てよし鶯番ひ
青柳や船へ持ち込む鼓箱
義仲寺に草鞋脱く日や初時雨
通夜を詠歌に曉すこみ梨の花
牙へ渡る眞如の月や鉢叩き
水仙や銘墨薫る四帖半
醉狂の醒めて身に泌む寒さ哉
けつそりと瘦せし今年の曇さ哉
蝶々や花なればこそ鬼薙
氷る夜に汗や吉原邸は關か原

子に譲る田地は買はず初松魚
香に奥の流を花に知られけり
鷹の來た老松枯れて月淋し
竹婦人紅閨の枕何かせん
柳見て居ればさめけり船の醉
世を渡る義理の重さや夏羽織
句はしき一間や梅と福壽草
須磨涼し琴曳松に浪鼓
うら若き妾持ちけり桃の主
一ト廻り挽は新茶の薫り哉
遊ふ日は短ふ暮るゝ櫻哉
屠蘇の酔日本一の機嫌哉
山の雪蛙の歌に崩れけり
舟の蚊の柳に戻る夜明哉
風の身に答へけり畚渡し
雲に入る龍美ます啼く蛙
三伏の夏おもむるに安居哉
咲みちて漂ふ花の白さ哉
御佛の顔から曉けて蓮の花
徒に名馬老ひたり轡虫
輪飾や數寄屋の外に刀掛
小鏡讀む音や夜寒の渡小屋
秋津洲で廣げる菊の根分哉
報恩の謝徳忘れず墓詣
大三十日光陰は矢と思ひけり

塚一ツ咲き埋めたる櫻哉
道しとふ人集りて花供養
永き夜に待夜さひしき煙草哉
時鳥玉叩くかと思ひけり
なつかしき碑に散りかゝる櫻哉
どちらにも涼しと見るよ橋二階
初夏や蒲に替たる椽疊
船の窓須磨の行秋のそきけり
梅か香の鬧動かせて匂ひけり
鶯に小猫の鈴を押へけり
夏瘦せてかこ顔なる涙哉
何時の間にもふへし野川を風霞む
能い中の隣は遠し梅柳
法樂の舞に花散る夕邊哉
木屋町は涼し瀧音に洗ふ耳
千金の夜空を春の別れ哉
隣にも更て味増する名の夜哉
船と燃ゆ躑躅屍を焼く野哉
我袖を濡すや義理の最合傘
春の夜を笑に更かす女哉
大濱や千鳥鳴き立つ沙寄藻
名月や須磨の松原唄歸る
閑伽楠や孝か手向の蓮薫る
振り袖に袴や雛の料理方
太刀鞘に治まる御代や踏歌宴

碑や行程廣き花の道
師の忌日龜放つ江や花藻吟
若鮎や奔流飛沫雲の如
未だ風の日うらは寒し初櫻
短夜や左舷に落る海の月
春寒し冠ぬきて簀と笠
數活けた中に位のあり白牡丹
大慈は無慾に似たり粥施行
風に手を當てぬ計りや花七日
野は雲雀川原は鶯の日和哉
三代の榮へもあるや粥施行
着ふくれた後ろに寒き素足哉
京極や辻か花散る俄雨
一ト嵐蝶も落花に交りけり
花守になれよと蝶を逃しけり
晴ぬ間を急げ雪見の駒使ひ
左り襪取りての果や若菜摘
夏百日本木の実食して籠りけり
葦野や歩行習ひの紐草履
冥想の耳に澄みけり露の音
鯛や夕加持濟みし院の雨
芍薬や盆畫の砂に一ト雫
卷き果てゝ無事に戴く曆哉
皇國の花や初日の位山
神樂笛音も澄切る松の隙
四十七

土と化す花や香りは世に残る
惜しまるゝ棚田の月や落し水
花吹雪駒も立髪拂ひけり
茶の間出て庭に寛く扇哉
谷底へ風をさらす芭蕉かな
開に來た鳥は開れず閑古鳥
初物は雪さへ少し計りかな
未だ冬の構への家や梅の花
兵も飯にはをしき命かな
腰低うして徳高き頭巾哉
しのはしき紙衣の微や土用干
誘はれて花にほとくや忌中鬪
梅咲くや芭蕉利久の客計り
燃わ残る草や燒野の一ト景色
水蓮や目障りなる寄進札
春風や嫁入の馬車吹送る
たゝ歎歎に言はて堪へなく花橋
浮世哉散るも咲かすも花の風
鶯に帛紗のさきは狂ひけり
落葉して七堂伽藍暮んとす
春風の吹き廣げゝり人心
麥の秋西には壬生の地藏堂
普化僧の乞食を叱る清水哉
百薬の長を迎へて春を待つ
風風て納まる花の曇り哉

花御堂佛は悟り上手哉
庚申は結ふの神か臚月
在祭り軒に草鞋を釣ながら
撫子や小砂に埋もる古蛇籠
折からの雨響て取る田草哉
梅白し月にうそふく御廟守
油花トに心の迷ひ寫しけり
智を増すは學ふにしかす釋奠
有卦の戸の暖簾は古きて鳥哉
戸明けしは物乞ふ人よ雪の暮
仁丹を分合て呑む清水かな
尾て籠を叩く眞鯉や寒見舞
花散るや亡き師を偲ふ机先
鶯に憎き女のくさめ哉
絶へてつゝく香煙の行方沈丁花
眠りたる翁の魂か花に蝶
空柱に更くる春の夜惜みけり
よき茶得て雪煮る庵の掃火哉
松島や松はみどりに蔦紅葉
墓疊り悲しき戀となりけり
出養生や鶯つれて浮世小路
花ならば八重はよけれ筑摩鍋
秋ならば琴聞笛や花に月
法名も授りし身や御忌詣
春風や勇める駒か立髪に

散るや花故師の遺蹟を拜す時
万人の等しく仰く櫻かな
夢結ふまでの花なり竹婦人
早梅や花屋の門の春支度
君は船民は水なり春の海
永き日や酒に寝た日を茶で醒し
晩年を故山に飾る紅葉哉
仰き見る茂りの中に薬師堂
三味線の寺に開けて花盛り
裕着た日に見出しけり福白髪
水面鏡日かけ移して曇りけり
花守や茶より話の好き同志
子雀に米蒔く刀自や佛の日
長閑さや天に飛行器地に電車
不二は何時見ても美し五月晴
越し方の戀惚はれて花の留主
狩衣に波の花ちる和布刈哉
累代の掟は堅し遊園扇
夕顔や月は音羽の山離れ
蹴り上げし毬の下飛ぶ燕哉
囀りや割籠を開く草の上
記念碑に師の名慕はし花供養
鶯や帛紗さきはきも氣扱ひ
春風に奉納の幡靡さけり
啼く千鳥かへる旨味を知らぬ哉

人かける絶る間はなし花御堂
白蓮や婦徳汚さぬ菴の刀自
時鳥甚五の龍の水を吹く
脱替へる心美しく着衣初
天の美は地の理に如き月の須磨
未だ母の力嬉しき砧かな
振れば鳴る櫓も名残や花戻り
桐一葉椽の日時計狂ひけり
飯を喰ふ僧悟りてもなかりけり
山吹や小菘干したる垣の外
藤咲くや紫雲棚引く山の寺
泥水に咲もしらすや蓮の花
親ありて心の廣し盆の月
初霞御手植の松堆し
雲に月隠れて洩るゝ餘光哉
彌榮ゆ國の光りや初日の出
御野立の錦旗を吹くや青嵐
福祿壽揃ふ牡丹の主哉
繼足袋や龜鑑女房の水仕事
畑打や桃山問へは畏る
水の名も目録にあり風呂茶の湯
秋の蝶日の懐ろに眠りけり
蟻も塔積むや先師の碑の前に
行燈に小銭數へる夜寒哉
よき雨の降た跡ふむ夏野哉

夜毎來て妻戀ふ鹿や奈良の町
月と梅空も隔てぬ夜なりけり
有馬から連れて戻りぬ竹婦人
聲も出て神輿かきけり在祭り
浪先に驚て退く鹿の子哉
赤きにもある清浄や蓮の花
宿引に渡すも惜しゝ笠の雪
柿一ツ葉のなき枝に残りけり
桃の戸や慈善の富は長へ
月も手にすく玉手の清水哉
縁手紙見せて出代る女哉
初雁や月を縫行く根なし雲
待兼る胸のさわかし時鳥
待た程日數のほしき櫻哉
戀塚を指す札や花野原
花籠董あるに亡兒を泣く
鶴の餌に碎く田螺や春寒し
水結ふ手に名月のこほれけり
火車闇を破て雪の野山は牙に鼻
戀猫や己か主家の盗み喰ひ
夕顔や三日月白き西の對
茶咄しや松の内でも風雅同士
亡き居士の逸話に更す掃火哉
枝移りしては寝付かす花に鳥
九日の小猫や菊の裾模様

墨を賣る奈良の小家や梅の花
秋の色水にも見へて紅葉鮎
羅や香高きはらは針のある
寸沙に切る葉に交るや桃の花
梅か香を浴びて蕤打つ山家哉
波頭浴て群立つ千鳥哉
人の美は姿にあらず餅女
引掛る羽織の裾や梅の枝
千鳥啼や齒に入み渡る船の飯
京の水に出花咲かして新茶哉
橋立や霞む入船を小松越し
摘草に幼き戀の二人哉
小説に泣く女ある夜長哉
一掬の涙と五形花と状に巻く
是も皆佛の為や放鳥
降り足りし雨に涼しき田面哉
鐵橋行く汽車の響や霜今宵
返り花安居の筆に叫びけり
靈山や幾世を経ぬる夏木立
送のか送られるのか臘の夜
愛られし櫻を今日の手向哉
菜の花や蝶幾つかい
行秋や誰か身上を鳴く鴉
菊の香や東西南北新領地
散てこそ國の花なり山櫻

金波銀波松に映して初日影
散る花やたそかれ寒き人の上
布教師の柳の下の法話哉
神酒口の如く玉巻く芭蕉哉
花暮てもふ夜櫻といふ櫻
天の川須彌の山より流れけん
樓門の屋根より高き櫻哉
散る花を筆ではねるよ繪具皿
神聖を保つ御陵の若葉哉
竹椽にかけ心よし朝茶の湯
京の花をなせ逃け行くや時鳥
菩提樹や悟道の奥を探る庭
春の山登れば見ゆる都哉
朝晴れや涼しと思ふ人の家
夕立や淀川水の片濁り
願ふてもなき客のある牡丹哉
雨の日や利茶の跡の小酒盛り
埋み火に娘の心聞く夜哉
大漁や七浦晴れて秋に入る
涼しさに乗すこしたる電車哉
野を横に飛ぶ鳥低き霞哉
鏡出して鐘撞く京の日永哉
夜櫻や酔ねは知らぬ水の味
永日や鎖をなふる繫き猿
御田植や戦き畏き注連の内

公設の水泳場や夏柳
時鳥大やもんどり光りけり
醒安き油断の酔や今年酒
積まは積め到れば止めん雪の竹
我子とは知らずに響る踊哉
掃よせた花に交や鯛の骨
薬玉の下に小櫻おとし哉
門松や頼は是も煙り種
春雨や次の間はたゝ捨箆
親の名を薫らす花の接木哉
去年の田も無事に濟せて雑煮哉
惜しき人みやひの花と散にけり
降るよ雪酒買ひに行貧乏園
植へ戻す廊の花や時鳥
何處て吹く笛を幽に臚月
鳥羽玉の闇の花なり飛ぶ鶯
鐘撞く花の吹雪に追はれけり
二度花を咲かすや雪の嵐山
寒月や城の太鼓の遠響き
京料理よりも珍味や沖繪
心よき沙湯や雁の供養風呂
濡れ色に日のさし通る紅葉哉
龜を池に雀を空へ彼岸寺
よく忠によく孝にして品打
陽炎や茶巾盟の餘り水
四十九

10 拾七

我植た菊も嬉しく咲日哉
大空も呑む氣概あり鹹鯉
儉約の札はかけても門茶哉
雪の日や茶釜の湯氣のしきり立
田所の秋や芽出度き葉埃り
古葉のみ残る茶の木や時鳥
今更に夢の浮世を櫻の實
聞き様に依らず寂あり秋の鐘
着せ綿の趣もあり日白の雪
下手有て上手の眼立踊り哉
散る花や暮れ行く鐘は天龍寺
芥子詩や喧嘩の種は知らぬ人
遅き日を句法樂に懐ゆる
鶯や月其儘の朝
神寂て涼しき加茂の流れ哉
厄年も事なく暮て嬉しさよ
金持て京に上るや春隣り
虫干や忠義の光る劔の先
白桃や鶴の齡を保つ叟
旅情轉た妻戀ふ鹿の霜になく
家根よりも高き寛や葛の花
亡き人を思へは桐の一葉哉
乗り初や前途洋々幾千里
花の酔ひ月にさまして戻りけり
蒲公英や名にも劣らぬ黄金原

10 拾八

櫻伐て酒にして呑む樵夫哉
寒月や生きて飛ぶ直の送り海老
桃の香や家族の如き一部落
夏瘦て遠ふ様なり嫁の面
夜嵐に耳を立ててけり猫の妻
朝顔や見て居る顔に日の當る
春と春抱き合せたる接木哉
寝た筈の人見る窓や月朧
佛果得よと龜放ちけり寺の池
炬燵から寝耳にきくや鉢叩
連歌巻く夜とはなつかし郭公
暮る日はいつも待たき今日の月
不二の雲扇の先きに動きけり
撫上る髪の色や尙齒會
日の當る丈け濡れ色や草の露
釣案山子風を利用の工み哉
松の花鶴飼ふ水にうつりけり
御簾巻や寂慮に叶ふ松の雪
要塞の徹夜工事や啼千鳥
錦木の二度花見たり盆の月
柏餅蒲團着て寝た姿哉
辭なく無量の感や魂祭
沙漏ちて刻る大魚や青嵐
和氣既に宇宙にみちて山笑ふ
爐開や漆の匂ふ塗り爐椽

10 拾九

川狩や網打ち上る二人連
竹婦人青きは若き思ひ哉
時鳥管割ねて見る行衛哉
飾・雛帝のむかし忍ひけり
木涕や蜀に貸すへき智恵はなし
薄月や菫の中の大徳寺
五六寸残して折るや女郎花
白魚や水を離れて水の色
幕洩れて田樂匂ふ櫻哉
冷靜の頭となりて紙衣哉
咫尺する塚のそらを筆の子
眠る氣てなき手枕や春の雨
鶴は霜に孤兒は乳に泣く夜を鼻
いたすらの若き客あり火取虫
春隣り梅の木などを數へけり
持佛置く樹下石上や煤掃
内に居る日は内て呑む彌生哉
二ツよき事はなけれと月梅
川狩や魚と水との誘ひ文
それ鷹や無念を掴む松の枝
陣祭の野には餓へまし柁の主
差す沙や退沙や日ヶ芦茂る
白露や樹々にきらめや蜘蛛の網
美人叱て牡丹に對す笑顔哉
万人の眼に響らるゝ櫻かな

五十

10 貳拾

日星の響き御儀や菊の宴
若嫁の鼻高か面や初鹹
時鳥君に聞かせはやと思ふ
毬栗の想を撫る嵐哉
元日やそち酒は祝ひ物
寂深き籤も霞めは景色哉
佛法僧聞くや夏籠る深山寺
起さずに置けは夜に入る晝寢哉
見心の落付く朝の櫻哉
露の家樂知らずの揃ひけり
釣葱たゞ真似して直す髮
鑄上げたる鐘引て行く花野哉
枝折は雪のこほり野梅哉
芹飯や山海の佳味何の其
大和路の後に春の別れ哉
蓮の香や嵐は水に浮き易き
光陰は矢と思はれす花の留主
南窓に月あり梅の薫る庭
人よりも猫に追はれて雀の子
接待茶煮る大釜や報恩講
我儘な野菊は強し秋の霜
月高し十三重の塔の上
春の川花束なんど流れけり
夕顔や馬の麥煮る外竈
人去りて月靜かなり花の上

11 壹

輕き身は沈む苦もなし水馬
香を殘す花に濡らすや雨の袖
茶の酔に寝ぬ夜の幸や時鳥
身のさひは水に流して寒行者
静さや鶯の波立つ中禪寺
露と水隔て蓮の浮葉哉
叢に朽ちる士てなし司召
我物の様に暮打つ花見哉
あやまちも洗へは白し足袋の土
鱈鱈子の産る夢や聖一忌
花の香に吹かれて出たり春の月
花に風顔に氣味よし酒の酔
羹打の咬へ煙管や桃の花
身の無事に増す富はま今朝の春
椿焚て血のたる肉を焙りけり
色も香も世の魁や花の兄
書にさへも二ツはかゝす時鳥
とことばは名は日の本の櫻哉
照鷺や板敷山の朝日和
海棠や百のへつらひ千の媚
虫なや夜は更けたりなく
此寺にこの櫻ありこの碑あり
待つ我に膝叩かせよ卯月鳥
送られて木屋町出たり臘月
桶沓のつり下てある柳かな

11 貳

稔らすは何樂まん稻の花
路孝茶の羽織は澁し時雨釜
間曳菜や花山莫敷北斗星
白梅の香り尊し神の奥
物影に廻る彌生の寒さ哉
澄切て氣味よき露の夜明哉
伸るか杖引て見る柳かな
黄昏の湖へ裾曳く霞かな
鶴遊ふ山田から水の温みけり
梅提し人の通るや寂照忌
消へ残る雪から風の寒さ哉
蓮の花清し真如の月明り
涙と拭く目に落花白かりき
親の足撫て話す夜長哉
合掌の指に覺ゆる餘寒哉
炭の香や春を鳴せる秘藏鳥
笛の音に思ひ出多し薪能
緇衣紅紫佛前の小松緑せり
放歌亂舞月の美花粹に酔ひ
三島衆の化粧の水や春の風
蓮咲や普茶を馳走の客設け
方丈や爐裏て待つ基の敵手
物賣の名も覺へけり避暑客
俣も浮かへ春野の草景色
糸屑の膝春寒う拂ひけり

11 參

菜の花や乾け風の吹渡る
五斗米に腰は屈せず梅の主
行煙のくらしに藤の盛り哉
笹鳴や牡丹に着せし葉の上
何の樹に咲ても白し六ツの花
巫の口よせて開たし盂蘭盆會
むつかしき源氏名もなき野菊哉
本盛の果とは見へず遊團扇
龍宮出た飯とて針の供養哉
眠られぬ初奉公や時鳥
子福者の脊丈けも揃ふ田打哉
綿打の閉め切てある隣子哉
三猿の教へ守りて露の主
浮かれ来る蝶や禿の後や先
椿焚て佐野の昔を語りけり
草の戸に三位の兜飾りけり
葉櫻や遺稿繕く窓暗し
策略の塩とも知らず披れ馬刀
百年の計は儉なり遊團扇
疊にも長き夕日の糸瓜哉
花の礪や文の林の道しるへ
山を出て流れ進むや春の水
寸陰を惜しみつゝ花待つ日哉
炎天や仇につかはぬ貰ひ水
露の音秋の誠を知る夜哉

11 肆

警風の魔窟襲ふや千鳥の夜
初撰に登る松あり浦の春
雪積て京を取り巻く京の山
京の夢見て春雨の朝寢哉
名利の花に年忌の句會哉
夕晴や雲の茜も春の色
水雞遠近草家の灯雨を射る
一門の榮へ目出度し難の敷
筆の跡今日には尊き扇哉
魂棚に忌に泣きたらし花供養
黎明や蓮の雨聞く經机
花菜暗針箱に倚て眼を拭きぬ
虫淋し尾花にかゝる二日月
陽炎や居士か遺吟の碑の邊り
物思ふ佳人に似たり雨の百合
鶯や弔辭の聲の裡に入
寸志とて芭葉を頰かつ忌日哉
兩將の駒を並て春立つ
白鷺の去て跡なし冬の暮
花皿に一ツ心の手向かな
碑文に花の雲湧く會式哉
孝に汲む流れは清し苔清水
片側は吹雪に白し松の幹
終に夜は雀にしたり郭公
不知火や潮蹴立て驅逐艦
五十一

風風も麒麟も泣くや涅槃像
啼く蛙雨氣の星の移る池
新蕎麥や其敵よりの果し狀
御能果春の月夜を戻りけり
清き瀬を濁せし硯洗哉
山の井や櫻に出来し剣つらへ
子を秘して再婚したり暮るゝ年
雀子の出這りするや鬼瓦
茅舎二三雁遠鳴いて秋の行
鶯や今朝の初音は拾ひもの
此里の宿汁や時鳥
永き夜や又蟹殿を操り返し
枝は尙若し一年経る糸櫻
山茶花や夕日照り込む長廊下
子のなきを恨む牡丹の長者哉
花時を曇る鏡の心かな
初午や貰ふて歸る御簾の錢
案内者に倉の數問ふ牡丹哉
吹風に重味の見ゆる糸瓜哉
碑をめぐらや暮の花吹雪
身に入や虫さへ父を慕ふ聲
曉夜にして戻りけり東山
若竹や人にありたき育ちふり
平安の武者や案山子に及はさる
花の噴衣皆三越へ委せけり

砲聲遠し金波打よす日本海
養老の壽盃頂く頭巾哉
誰か魂を雨の卒塔婆の蝸牛
京の宿立つ日を春の別れ哉
よき事の問はず語りや梅貫ひ
雨漏りに蓬巻く夜や鹿の聲
名を薫る人の住居や菊の花
さなきたに悲しきものを秋の暮
木槿かほる庭を雲山會場哉
約束も手向けとなりぬ菊の花
梅か香や冠着たる巫女の眉
袴の名も同じ苗字や牡丹の戸
花時や大門開く勅願所
室の津や水主も遊女も羽子の友
蕉門の俳味をかたる蛙哉
奥よりて一字のさひれ青嵐
抱た子に鼻つまるゝ晝寢哉
春雨や繩をない込夢幾つ
御朝時や友や經讀む鳥の聲
八功德ある靈泉の清水哉
蘭燈にまはゆき春の小袖哉
束の間に美化する雪の野小屋哉
焚火して饗應す雪の使哉
辻風に高上りする蜻蛉哉
何をして暮た月日を梅の散る

風切て荒鷹空へ進みけり
親しみは寒き夜にあり小鍋立
願ひなき身もさそはれて星迎
春戸口を明けは散り込柳哉
朝顔の種くれた八世を去りぬ
稻菊や古稀尙若き類冠り
一日の憂きを忘れん夕納涼
初時雨蟬峨の竹洩る灯の暗き
もたいなや晝寝して聞く田植歌
筆貸して歌の所望や菊の主
御降りや怠り初の一と眠り
岩つと水又清し梅薫る
俳神の天地は廣し冬籠り
其中に銅像青し冬木立
一粒も天の恵みや夏の雨
木蓮花を夜の乗りや遊行寺
歌に寝ぬ昔男や春の月
寂探り句に更る夜や茶立虫
香焚て上げ花付けん俳庭
今も見る夢の話や魂祭
雲と迄見る日を花の盛り哉
松は聲柳は風の姿かな
丸節巾着るや功なり名を遂けて
蛙よつて碑に讀經や寂照忌
遊ぶにもよき浦風や松の花

親の恩厚く着て寝る蒲團哉
垢抜のして見違る殿入哉
千古の寂に趣味あり京の秋
菊の香や輪も長き髭併
炬燵して聞くと越路の七不思議
螢雪の響れや梅の机
枯るゝとも名迄はかれず翁草
去り舟の跡消へ残る春の湖
在りし世を憶はるゝ日や花曇
難賣りて芙蓉淋しき夕日哉
秋の聲悔悟の膽に銘しけり
春雨や傘のずれ合ふ先斗町
桃咲や平和に富める一部落
湯波汁て飲朝酒や寺の花
うたかたや赤裸々の釋迦牟尼佛
轉ひ出し子を尋ねけり蚊帳の中
鐘の音や空は彌生の五色雲
空風を櫻に締る水かな
亡き名呼ぶ鸚鵡に秋の暮寒し
狭き迄積て賑し炭俵
雀迄殖へけり竹の若葉時
時ならぬ吹雪にすくひ土筆哉
海苔の香や富士を見乍ら朝支度
雁を見て居れば日和を開けけり
行燈に來て虫となる螢かな

雀亂や友の親切嬉し泣き
鳥邊野の露ふむ盆の月夜哉
留主の戸を我世と虫の啼音哉
思案する机の上や散る櫻
いたゝいて柴出す果や遅櫻
國寶となりし壁畫や虫拂ひ
暮惜み寝惜み花に立日哉
行水に己か影追ふ蜻蛉かな
參詣に自他の別なき彼岸かな
世を忍ぶ垣も手輕し萩の菫
釣下手の上手連出す日永哉
鐘陰り松吼へ冬の湖暮る
咲き揃ふ今日とは嬉し花供養
熱涙に温むと思へ手向水
雨晴や簀は無用の土筆
のつと出てそれから遅き日脚哉
秋晴の天高くして柿赤し
花散るや鈴聲山の鐘の韻
こほれ込む露や水輪や蓮薫る
忠度の夢の上なり春の月
草に降る雨は音なし鳴水雞
春の野や塗墨譽る陣の閑
先師去て十三年や涅槃像
長閑さや女鯛釣る日本海
嵐山花の吹雪を膝の上

鶴鳴て梅か香清し神の庭
降りつゝ雪や今年も豊の兆
月一ッ影は田毎に移りけり
棟上や餘寒を凌ぐ茶碗酒
一家皆仁に治めて梅の主
淡雪に行袖ぬれて戻りけり
鶯の春を運ぶや雪の庭
花に風つれなきものゝ試し哉
風にまからぬものや牛の角
鶴の巢や松は千歳の枝配り
紅閨に夢みたゝかし春の雨
玉の汗身に咲花の苔哉
竹の子や鏡重ねの皮衣
法悦にあり時鳥悲喜を聞く
琴の音に動く心や海棠花
老の戸も雪には載せし自在釜
咲と散る花や角力の一勝負
花の果紫雲細引く夕へ哉
佛の立ち寄る花に浮ひけり
柴の戸に入るや梅見の袴客
寝る事を唯數入の望み哉
秋暮る物や残りし破れ案山子
一昔立つのは早き櫻かな
獸を射る矢竹を焙る樺火哉
若竹の奥靜なり笛の音

雨かわく匂ひの甘し瓜畑
矢の先に雀のとまる案山子哉
一ト在所寺で飯喰ふ十夜哉
笑はして子の齒數へる日永哉
發心の人紫陽花に似たりけり
畫心のある植ふりや竹の向
梅雨晴やついた接木の禮に來る
我菫は俳畫に似たり糸瓜棚
灯を消して見ても白菊黃菊哉
煤掃や代々續く出入方
雪の橋しはし眺めて渡りけり
詔らはす御代を誹らす畑打
世事持み難し紫陽花褪せ易し
駒鳥啼やかすかに響く坊の鐘
人ちらり初花ちらりほらり哉
剃髮の窓にこぼるゝ小萩哉
花の碑に白雲かゝる眞晝かな
聞ゆるは夜の静まりて露の音
花菫わりなき人に狭めけり
六月の雨に餅搗く在所かな
今流る話分らす漣團扇
宮柱古し若葉の山籠
四民平等薫る御國や今朝の春
暖かな里や子福者梅長者
夜櫻や不意に呼はるゝ昔の名

初時雨竹の割下駄濡しけり
小包をさげは香に立つ松露哉
神寂し楠の大樹や風薫る
迹は志賀の花なり春の風
若葉洩る日影は別よ眞如堂
是はかり霞まぬ法の燈かな
また惜しき色なり風に落椿
貨車を出る馬の疲や蟬時雨
乞得たる雨千町田にあふれけり
春はもう後ろ姿や残り花
野の家や隣はなくも梅柳
毒草を刈盡さんや露の原
松魚提げて逢着したり俳諧寺
戀に捨つ身を憐めり酸汁
山門に禁斷の碑や寺の梅
雲泥の差に選り分ける新茶哉
辛き世の中味あり唐辛子
七所鳥居涼しう潜りけり
蘇へる田に夕立の戦きかな
白壁の殊に目立つや桃の花
青麩庭木の翠深めけり
睦まじき姿や雪の家二軒
子と共に他家へ縁付く難哉
不二川に漲る浪や雪解時
虎杖や殘墨の石所々

II 拾參

臥しなから折ぬ力や雪の竹
若葉して趣のある寺の庭
勅額に輝く花の朝日かな
若苗や農家を肥す一ト色紙
經書で石沈めけり秋の水
岩傳ふ筈のもりや苔の花
菊合せとちらも露の力かな
口癖の寒さも交る彼岸哉
顔撫る風に春知る日和かな
見下せば人様々や大三十日
寒月や須磨の宿りも物足らす
戴いて着るや記念の初袷
邪氣なくて嬉々嬭々を辻か花
一村の牛耳をこれる頭巾かな
形代にこもるや重き願事
碑に整ふ花の風致かな
影ふめは空に聲あり月の雁
春雨や今日は内かど覗かる
流れても親しき中や花と水
世事凡て吾關せずと鳥打
髭剃て湯あみ濟して初袷
高砂の松の行儀や今朝の春
春寒し裾吹風や野の讀經
踊まてかくすや花笠紅草履
松溜り／＼て須磨の月涼し

II 拾四

もて所のなきこそよけれ花の宿
秋立や千切れては飛ぶ日枝の雲
無事は皆人の徳なり花に酒
蓮の實の飛や静けき法の池
まどかなる居士の忌日や花供養
舞ひ上る極樂鳥や風薫る
夕時雨船のかたまる入江哉
髪結ふて大さう潜る蚊帳哉
青空を白眼む野壺の蛙かな
白蓮の香やイめは法の鐘
離れ鳥つなく霞のはたしかな
花標此の翁高風憶ふへし
御降や我もうるをふ民の數
手向はや歌に纏めし新豆腐
忘八の遺墨芳はし大石忌
師の歌を味ふ花の會式かな
捨干の消炭白し霜の朝
植替へた松の覆取る彌生哉
更て踏む土に音あり冬の月
駒鳥啼や氷室を圍ふ翌槍
鹿の聲近しある夜は又遠し
紅梅や玉簪曳きし牛の塚
春てさへ夕邊は淋し落椿
孔明も防く術なし花に風
桃の脈梅の接穂に通ひけり

II 拾五

月高し花只白し水の音
家の富知らるゝ茶器や冬牡丹
鶴の羽に乗せて桑子を育てけり
小屏風の歌凡ならず楯の宿
籠もれて琴の糸這ふ益かな
行秋を色に定める草木哉
寝た儘に年立つ庵の戸口かな
墨染も白衣や雪の寒念佛
天然の美は爰にあり雪の不二
移り行世の様見ゆるや土用干
夏菊の立派に咲て惜乏し
若帖や流の底は雪の味
行春や菅笠着たる滋賀の人
炎天や撒水馬車の土煙り
暮遅き鐘の餘韻や散櫻
ひかり出る佛の徳や御身拭
夕嵐人も櫻もちりにけり
髪とひて花のつかれを休めけり
騎初や草履出する大軍師
野々宮や花もあるのに竹の秋
奈良廟の昔偲ひて小鹿鳴く
顔へ来る風未だ寒し初櫻
長閑さや鶴の歩み消す浪の泡
大矢數巖も徹す勢ひかな
落の葉に包てもらふ木の芽哉

五十四

II 拾六

衣掛けの名も由緒ある柳かな
丹精の光り尊し今年米
野鴉の一羽かなしく時雨哉
散る櫻はそ浮世の習ひかし
閑伽楠に寒き風情や落椿
潮引きて洲草の泥を寒う見る
譽られた茶の枕馴染ぬ夜長哉
地を走る雲雀や草にそゝく雨
初蝶や一合減りし不二の雪
持て出た傘の荷になる紅葉哉
うつろ心祈にあれば實梅落つ
天地の恵を深し銀初め
湯上りのほんのり色や春の雨
住めは野も都に勝る錦かな
紫の藤や朱門の古りし寺
寝つ起つ果は夜長の朝寢哉
春湖に浮む小舟や浮人形
吳竹の葉裏に雨の螢かな
子は傍に君か代語ふ砧哉
帷子に小さ刀の似合ひけり
菜食の衛生論や温團扇
月は秋月夜は夏と思ひけり
流るゝも輕し小春の都鳥
かたわきに豆柴も置く年木哉
雪見する丈け窓明けて冬籠

II 拾七

殘る蚊や斷食堂の燭細し
丸かたと祈る心や盆の月
曳なりも見へて一日は小田の鶴
穴井戸は草に隠れて苔の花
床下を水も流れて夏座敷
酒の顔花の吹雪に打たれけり
袖なしの羽織ふさわし梅の主
人となる子に踏せけり雪の道
隣りへも遠し御慶のすまぬ内
氣苦勞のある日團扇の風熱し
彩管に迫る睡魔や春の雨
忠度の夢の上なり春の月
抱籠や馴れて艶ます肌さわり
花の碑や古池迄は道つゝき
菊の日や来る人毎に匂ふ袖
落畑や夏に隣りし雨の音
紅梅や窓に佳人の歌撰み
春の月花の碑照しけり
實に喜劇糸瓜の蔭に驚きて
脇匂練る机の上や梅薫る
嫁さかす程見歩行や市の難
懐かしふ魂棚近ふ寝る夜哉
今朝の秋富士は雄姿を正しけり
失戀は是にも有か浮れ猫
朝涼し到來の魚鱗刻る

II 拾八

春風に吹かれて輕き心かな
靈前へ供へて戻る新茶かな
枯れ果てし木にも花咲く彌生哉
提て来た龜酒臭し放生會
船は皆出て港の水温む
逆芽ふく生木の杭や春の雨
柳活けて根の出るまでの日數哉
谷川や曲一曲に水温む
風の翼廣げる芭蕉哉
夏の露倒れ麥穂にしつく置く
初雛や君を迎ふる新天地
不二山の煙から春は立にけり
柳髪さらはの小聲纏れけり
曉の空吹き澄ます柳哉
佐義長や扇て拂ふ焚埃り
川上は白風悠々風光る
男手を借るや粽の繩結ひ
菰敷て白切る爺や桃の花
立のはる香の煙や花曇り
身に入むや債主に渡す馬の聲
雲山の由来を語れ呼子鳥
朝顔や倦かぬ別れを首尾の夢
地はめきの抜る雨夜や啼蚯蚓
爪や隣とてなき野の小家
菜の花を根にして立つや朝の虹

II 拾九

虫に泣く憂き玉の緒や露の床
鹿は未だ乳房放れす若楓
眞晝には露待つ岩や苔の花
賣家の日南に海扇の遊ひ哉
言葉には香もなき梅の主哉
鳥瘦せて聲哀れなり冬木立
一輪を釜日の曠や寒椿
明易き夜を惜げなし雞の聲
淨刹の晝静かなり百千鳥
騒しき人静りて花に月
神徳の外外に見ゆる芽の輪哉
一管の律呂偲ふや花吹雪
新らしふ又見せんとや月の雲
花七日遊ひ勞れもせさりけり
勤儉の徳したはしき牡丹哉
鶯も隨喜の聲や碑の供養
初雷やたつた一ツに探す豆
先陣を争ふ駒や春の風
鶉の嘴をのかれて結の寂にけり
冬の蠅茶臼に附て廻りけり
鶯に圍丁腰をかゝめけり
花に雨我身もぬるゝ思ひ哉
鳴く千鳥九瘦の夢は覺にけり
春の水鶴の足元流れけり
乙咲も色は變らす杜若

II 貳拾

短か夜の眠り覺すか鉢鼓
散る色もなくてほろりと桐一葉
鳴り秘めし霜の巨木や旭筋ある
天性の美に汚れなし蓮の露
花に嵐有情無情を悟りけり
春の月は未だ建られす遅櫻
胸を突く十三鐘や散る櫻
曼陀羅の虫糞はらひ夏行哉
三尺の箱庭入れて雪見かな
無價香の薫りも添はん花供養
見失ふ敵艦悪くし霧の海
琵琶法師壽永の春を語りけり
月澄むや此頃鐘たる鐘か鳴る
春雨や泥の流るゝ浪花町
戀風を遠退で着る紙衣哉
世と共に開けて廣し花の道
晝顔やたしなき風を水の上
警鐘に夢破らるゝ寒さ哉
浮世てふ垢はなけれと御身拭
雁鳴くや間の襪切る沙明り
かなしみは佛にもある別れ哉
狩暮て戻りは霜の山路哉
三遷の手入届きて菊匂ふ
木枕に夢冷かや露の宿
帳としや大黒に似た親且那
五十五

此君は昔の名あり竹婦人
啼て居る虫から先へ買はれけり
花一樹眞實眞如堂一字
龍紋の旗炎天に昇りけり
蝶と飛ひ出と舞て花吹雪
二代目を繼ぐ俠客の施米哉
杖振る身にはあらねど更衣
待し人來しか水雞の叩き止む
湖を見下す月の床几哉
月の出て裏の出來たる柳哉
撞捨る鐘にも秋の行方哉
響き込む雲のゆとりや御忌の鐘
花芒月吹出して戦きけり
猶神の寂うや／＼し青簾
風のなき日は物足らぬ柳哉
冬木とて牛も櫻につなぎけり
長刀も目出たふ鋒の飾り哉
兒を遣た寺の鐘きく夜寒哉
花後よき春乗せて流れけり
柔らかに小松撫てけり春の風
袖か香に染る月あり軒の梅
寶頭盧に光澤の浮立彼岸哉
阿字を説く鉦の餘韻や散る櫻
陸まじき姉妹の中や土筆
笹啼や落葉掃出す御陵守

世にまさは共に仰かん菊の御代
降さうて降らぬ日和や花曇り
高僧と知らて宿賃す深雪かな
町に出て我も小春の人なりき
屈志遂に功あり寒の梅薫る
緋けは風の薫るや遺墨帖
石碑に残る動や花供養
花の香の残て古き硯かな
追悼の心を濡らす時雨かな
歌種は無盡蔵なり花の山
散る花を曇み込みけり舞扇
昇る旭も入る日も露の廣野哉
行春に溢るゝ歌の袋かな
虫鳴やつゝれさす灯の草に引く
涼しさや軒にふらつく飛脚札
枝選みして鶯の初音かな
虫の音に秋知り初めし一夜哉
蟬なくや寺の説教人を煮る
谷影や紅葉せぬ木も共明り
露にさへ長短ある齡ひかな
親みは花より深し雪の宿
難見ても一夫一婦か論理かな
子供等の自由に遊ぶ春日かな
日の足しに出すや夜長の旅硯
牡蠣ひさく店に居並ぶ割人哉

灯を向けた夜から來ぬ水雞哉
花爛漫金融融緩漫人蹠蹠
進み行世の様知るや土用干
慾徳も夢や蛙の目かり時
汗しみて御判染れし白衣かな
鶴舞や小雨降る夜の物哀れ
吹送る風に香あり青簾
神風の昔語りや掃の主
翌日を立つ里の名残や小夜砧
晴なから雨には近し杜若
我に寄る年程難も古ひけり
賤鳥に筆を走らす女優かな
灌佛や終日眠き雨の降る
古歌盗む猿智恵もなし雨の月
澤瀉や堀たけ残る城の跡
瀧計り白し紅葉の若王寺
燈を秘めし浅妻船や春の月
名月や墨より黒き松の影
目薬を附し跡あり春の風
鳥てさへ歌讀む假名の御國哉
塵の世を離れて清し峰の月
秋日和錦か原と思ふ程
佛果得し怪石もあり芒原
出兵の可否を遊塞の茶談かな
正宗の仕込杖なり櫻狩り

寺に住む髪の尼や萩の花
二階より春の海見る二人かな
聖住む近江の里の門茶かな
梨の花冠の紐ゆるみけり
白砂千里松一態に風薫る
走り茶を供へ申さん涅槃像
昨日まで雨の小立や初櫻
基の名手一座の汗を拭かせけり
氣配りに日敷のたらぬ師走哉
白菊や月にも日にもありの儘
復習をすませて來たり土筆摘
暮ゆとる潮來出島や夕柳
へし折て蛇の蛇打つ若葉かな
是程の花に音なし散る牡丹
花ならば散る品振りそ踊かな
悟りなは本來空や雪佛
下駄脱いた處も忘れて登狩
繪も書てあるや彌生の旅日記
去ぬ雁の竿ほど續く出船かな
弄は他宗法華經は蓮哉
冬の月凍つく道を照らしけり
景氣よく積重たり牡蠣の俵
春の池鷓鴣たかに浮ひけり
手に戻る鷹に御譽の言葉かな
放し鳥伽藍の上に眠りけり

風情あり卍字巴に花吹雪
貴賤なき室の泊りや不二詣
白蓮や殊に淨池の朝朗
干飯の雀飛にけり一ト鼠
上蔕の淡き化粧や初櫻
大瀧の響を包む若葉かな
北受は松に抱かれて寒牡丹
世の塵を包みて清し積や雪
月の弓雲の旗手や時鳥
柴の戸や持せし杖に蝸牛
長き日の捨所なり東山
甘水や浮世に相違した佛
乳臭き牧舎の前や柿の花
蔓切し西瓜黄はみてきり／＼す
流れ出て山田養ふ清水かな
啼出せば子の泣止むや籠の虫
思ひ出す日に又春の寒さかな
峰は花籠は松の霞みかな
鶯を誘ふ水あり谷の音
暖かや誘ひ残した人に逢ふ
今も尚花や雲湧く極樂寺
朗に夜は明にけり麥の花
只ならぬ胸の騒ぎや花に風
若葉から日嗣の相や菊の苗
薪負ふて女美し初紅葉

七情の自然溢るゝ櫻かな
長へに靈氣溢るゝ清水かな
薰風や白帆見るへく窓明けぬ
後髪引かるゝ雪の首途かな
米に書く髭題目や日も永き
佛前に香華の絶へぬ彼岸かな
枯てさへ尊とき名なり菊の花
壽きく菊や御國の寶草
若葉山包む精舎の煙りかな
野遊や瓢も乗せし乳母車
涼風や見上る笠に瀧しふき
花衣飾るや十二一重程
貧乏になき隙ありて晝寝かな
己か火に焚落ちたり水の上
月を見る侶もなし枯野原
朝顔や朝々軽き起き心
筆投けるとはよく／＼よ時鳥
未だ朝の雫冷たし種卸
孝行は赤貧にあり露の宿
盡されぬ言葉の花の土産かな
飾替る表示や腐草螢とは
鳴の來る景色は失せて春の池
傾城の文繼き合す紙衣かな
歌にして足すや牡丹の譽言葉
神代振り見へて尊し穗屋作り

蛇籠にも似たる姿や竹婦人
流行追ふ伊達の權化や御忌小袖
晒井の水溢れけり里の道
白菊も國威につれて薫りけり
六月や起て空見る朝心
野分して岸の小舟を流しけり
居並ふは花の蕾か雛の客
年々や徳は孤ならず花供養
京迄の道連れにせん飛胡蝶
辻か花庭の教へも届きけり
滴りは水室の水や運櫻
月涼し銀波洋々幾千里
枯芦やよそ／＼しくも三日の月
モテルにもなる夏瘦の女かな
はたをりや軒端に蜘蛛の糸仕事
子の爲によき隣あり木の芽垣
雪解や岩に逆巻く水の音
滋味ある家の住居や梅の花
杖にして親に與へる藜かな
すへからく愚を養はむ梅の花
月花の蕊に裸硯かな
人參や土の底にも秋の色
國難や阿國難や春寒し
千金に勝る手向や花に月
法談の果て、眞如の月夜かな

初春の姿うつるや塗筆筒
華やかな世を裏に着る紙衣哉
月うとし花の中なる渡月橋
なか／＼に光は失せず月の後
煤掃や笹葉の散りし雪の上
春の色移して水の温みけり
青柳や棧橋揺るゝ船上り
狩暮て霧の冷つく紅葉哉
昇る旭に奮ひ起るや雪の竹
電車唄や枯木を鳴らす山嵐
文臺に花の影さす彌生かな
飯木打つ外に音なし閑古鳥
霞かど見れば燒野の煙かな
塵の世を包て清し雪の朝
累卵の國には咲かぬ櫻かな
吹て來る風未だ寒し初櫻
山吹や手向る水の湧き所
雲に鶴蛙は水に遊ひけり
瓊曉忌や麗な空に樂譜の音
隱居から來る譽役や二日灸
此上の名もなき雲井櫻かな
出歩行は寝惜む人か月の雨
線路きくまはゆく光る春日哉
瘦男世に捨てられて紙衣かな
古池に聲新らしき蛙かな
五十七

口切や一ツは別に飾り壺
 柳吹く反橋更けつ時鳥
 鳩三枝鴉反哺に時雨けり
 暮残る垣三尺や花卵の木
 角取れて咄も丸き頭巾かな
 酒に寝るさは慮外なり今日の月
 雪解て山から届く手紙かな
 夕雲や風になくろ、雉子の聲
 裏藪の共同墓地や秋の雨
 橋立や海へ一ト筋青嵐
 草臥る程は日もなき小春哉
 飛び付た葉に力なし枝蛙
 玉水に晒し井堤の砧かな
 六十の聲に別れて秋淋し
 見ぬ花に心の動く夜雨かな
 勝祝ふ菊もあらうに出家かな
 石碑の夢の古ひや苔の種
 不堪田依估なき意見奏しけり
 涅槃會や鳥も経讀む山の寺
 桃の日や色洋傘の往き交す
 勢れしか鶉語らす暮遅き
 内閣の稅政を論す頭巾かな
 福娘つれなく花處巡りけり
 夕顔や公達笛に餘念なき
 野路の梅水夕闇を繞りけり

茶殻干す長者の軒や柿若葉
 散りて尙世に惜まる、櫻かな
 涅槃會や一字に充つる法の聲
 眼のあたり未だ見るまゝ散花
 暫し世の大愚となりて晝寝哉
 啄木鳥の鳴くや年経る神の松
 来た鳥のぬれ羽を振ふ若葉哉
 柳には飽かねど長き堤かな
 錦する野や色鉛筆の數足らす
 時鳥鳴や山田の配り苗
 只さへも喪は物憂け秋の雨
 絹團扇蘇鐵の蟻を拂ひけり
 其夜たけ瓜かくしけり暖め鳥
 涼しさは風の外なり寺の庭
 常は氣の付ぬ小寺の紅葉哉
 懐かしき野邊の色香や草の餅
 散て来る花に廣げる兩手かな
 三界に家あり牝の蝸牛
 來よかし 思ふ夜もあり灯取虫
 藪影の椿落すや群れ雀
 錦着る身ても紙衣の姿かな
 白菊や花にまどまる夕明り
 夏草のたしなき水に育ちけり
 別れても又逢ふ道や呼子鳥
 虫干や間毎の 小袖幕

思ひ出に夏瘦にけり未亡人
 悠然と牛は食て寝ん 蠶時
 植仕舞ふ田に神風の戰きかな
 稻妻や俄にさわく女客
 持てなしの團扇に尙も暑さ哉
 星一ツ二ツ涼しふ暮にけり
 着て歩行日の珍らしき袷かな
 山茶花や破鏡の里の腰衣
 竹切や腕牙へたるにあらねども
 花有て禪林 晝も静なり
 秋淋し撰り残されし牧の馬
 朝寒に物價騰貴をかこちけり
 清き音は篋の笛や魂祭り
 紅梅に鼓の名手老ひにけり
 梅寒し凝てにかすりし筆の跡
 程のよき酒の加減や春の月
 國の利を殖すや蜜を釀す蜂
 古池や長き歴史を啼く蛙
 夢乗せて戻る小舟や春の海
 對岸の一燈更けて霜寒し
 死して猶榮あり句碑の花供養
 ほろ酔のそゝる歩行や隴月
 渦を巻く水に散り込む櫻かな
 湖に果つる松の一路や風薫る
 天翔る船もある世を蝸牛

斷腸の思ひや曉の時鳥
 うなついて今日を弔ふ柳かな
 子に着せた綿柄はよし初裕
 眉白き人に親あり 桃の宿
 物質ふや春の近きを啣ちつゝ
 川止や不二の雪解の大井川
 大江戸の埃り曇りや風のほり
 雨後の月宵寝の客を起しけり
 其一ツ誰か目にもつく瓢かな
 連綿と續く質屋の門茶かな
 廣重の繪を見る如し田植時
 花にのみ優しき蜂の素振り哉
 魂棚や居士の逸話に絞る袖
 折て出る工風をするや藪の梅
 露の草鎌の汚れを拭ひけり
 鷹匠の塗笠はちく霞かな
 日の駒の狂ふも宜よ花見月
 子を負ふて繩ぬら娃や桃の里
 紙衣着て役者に似たる姿かな
 戀の的踊る弓手に射止けり
 雨風に四分五裂の芭蕉かな
 二ツとは鳴さへ立す雨の澤
 雉子啼や山のあなたの芥の音
 不二絶頂我足痕を印しけり
 菊苗や杖に無心の結ひ處

匂ふ木に心痛める餘寒かな
 響應に裏表なし 澁團扇
 裡寝も夢となりけり置炬燵
 散るにさへ盛りを見せる櫻哉
 夜の雪精舎の灯かすかなり
 籠を出て羽叩きしはし放し鳥
 花に留主して永き日を覺へけり
 牛車馬車振舞水に止まりけり
 水仙や家憲正しき刀自か窓
 藪深ふ啼て日永し雨の鳩
 口下手の賣人買手や升の市
 我物にして客呼ふや月の宿
 開惚れて聞すかし見る水雞かな
 英雄の心に似たり 月の海
 白雲に五々の菩薩か花の降る
 寝に來たる京てなけれど春の雨
 一水の遙に白き 枯野かな
 百日や岩に抱かれて百合の花
 相對す僧無言なり 落椿
 子を中にして時雨けり夜の鶴
 人違ひして耻かしや隴月
 夕顔や藤を洩る、緋の袴
 石打ては天に聲あり霜の夜半
 繪馬負ふて登る御山や春の風
 笈摺に淋しき秋の日さし哉

十三年の涙くむかに破れ芭蕉
 月のなき空さへ秋は澄みにけり
 裏表なくて涼しき咄しかな
 老先も短かき杖や墓參り
 朝顔や水に錆たる銅釣瓶
 芦の雪風の油断を積りけり
 逆縁の手に伐るや白牡丹
 藪入や炬燵に一日野に一日
 蠶飼ふ家は昔の 住居かな
 時雨るゝや志す日の納豆汁
 釣鐘に似た蜂の巢や寺の軒
 散る花や昨日は今日の夢の跡
 湯上りの浴衣の儘に螢狩り
 武家の駒攝家の 駒や夕霞
 蝸舟の墨に汚る、柳かな
 産氣附く順禮や鵜縄干す門に
 怒る時出す角てなし 蝸牛
 杭を打つ音にひまあり春の川
 初夢を日記に残す女房かな
 捨た子の無事を見に來る職哉
 飾らぬか神の誠か穂屋作り
 小謠て熊野か小鹽の隴月
 ほのゝと明けて静な蓮かな
 島の鐘島を放れす霞みけり
 長雨や庇を傳ふ 雙蟬

夏瘦や仇に立つ名の耻しき
 遠雁の聲に顔出す小窓かな
 豊さの限りや雪の朝朗
 春の水春の心に流れけり
 人の着て来るさへ嬉し初裕
 山寺やあふれ清水の庭へ來る
 紅茸や浮氣女に似た姿
 枯野三里馬士の鄙唱黄昏るゝ
 繪の様な鮎の汲み場や嵯峨の奥
 晝は機械て夜は又砧かな
 追懐の念やるせなき夜寒哉
 摘草や流れ覗いて 髮撫る
 胼の手や末は賢母となる女
 雲に入る鳥や恩師のなつかしき
 霞む野や急かぬ駒の片手綱
 川門に枝を折るなど櫻かな
 干菜湯や親に誠をつくす嫁
 子は君の御用に立て、畑打
 春風や幸溢れたる 久邇宮
 勅題の一首に去年と今年かな
 涼しさや白帆數へる松の蔭
 朝月に籬の菊の雫かな
 戀塚や春思出の草萌る
 夕暮の鐘や落花の降り頻る
 若船や夕映の空高う 飛ぶ

行人の跡見への迄時雨けり
 雛棚や流石大和の昔振り
 戦艦の進水式や春の海
 花散るや供養を曠の極樂寺
 さよるまで風雅の友や櫻炭
 幣を吹く松風涼し夕萩
 汗計り出て足の出ぬ噂かな
 春の雨野火する山を青めけり
 野に進み進めは廣き霞かな
 空桶をころかして行野分かな
 道の奥廣げて枯る、尾夜かな
 寝乍も出來る仕事や鳴子引
 狩暮て宿乞ふ花の御寺かな
 水音となりけり萩の露の果
 青柳やこゝにも一人釣り垂る、
 青天に羽音雄々しや初鶉
 智恵磨く心て洗ふ硯かな
 それなくも色めくものを春の廓
 夏山や神の燈火身にしみる
 羨も出た座の長し 後の月
 氣ゆるみに等閑勝の日永哉
 世の塵を避けて蓮の庵かな
 海原に沙浮く日なり 目刺干
 編蝠や土蔵の壁の暮明り
 彼岸會や心の花も咲く 日和
 五十九

張上る聲切れ／＼や寒稽古
空を行く人さへあるに田螺取
引く度に心の届く鳴子かな
鶯や今朝は力の入りしし聲
賣家の札貼る門に秋行きぬ
人品は貧苦に去らず白重
白帆点々日傘洋傘磯涼し
朝寒や一ト穂あてし藁草履
留主勝の戸口を塞く芒かな
日に錦月に玉持花野かな
船宿に早し卯月の掛け籠
鶯に玉樓の簾動さけり
糸柳や耳に障らぬ風の吹く
根なし雨萩黙らせて通り鳥
紅塵を避けて冠るや花の塵
金波打ちよせる入江や春の海
遠退けは雲近よれば櫻かな
休戦に軍馬洗ふや春の川
筆杖に法の道ふむ夏書哉
海に入る船の煙りや青嵐
夕暮や落葉に白き風の吹く
行春の雨は小町の涙かな
偲はるゝ南柯の篇や春の行
立錐の餘地なし花の手向場所
旅長し名残惜しくも春暮れぬ

一八や松に由緒の冠木門
蟬鳴や木影に解きし三度笠
花の香や曙さそふ山嵐
大正の國威仰くや初日の出
貝も珠孕む夜なり朧月
消炭にするや多少にかゝわらす
佗しけに僧の見て居る浮巢かな
力竹折れて寒菊しほみけり
負けに出る愛嬌者や辻角力
月の雲曇る鏡の思ひかな
不二詣戻れば低き我家かな
時鳥一河の流れ汲む夜かな
孝行は人真似もよし生身魂
人も斯くやあの世此世の火取虫
菜の花の中に煉瓦の工場かな
こわい物見たき類か鯨と汗
寶惠籠に未だ乗りなれぬ舞妓哉
尋ね入る名士の塚や草紅葉
知る人に逢た心地や初櫻
春の旅氣の合ふ友と膝栗毛
雛の日や振袖着たる花使
又しても見に出る雨後の接木哉
碑の文字の窪みに光る螢かな
見て貰ふ人まで撰む牡丹かな
雲の峰風は草木に沈み鳥

笑ふ山江には柳の眠りけり
茸狩や芒に切れし手の痛み
一寸来て月まで見たり梅林
穂さゆる小鍛治か春戸や冬の梅
誰か手にもふれぬ花なり積穀垣
落なんとする毬栗や雲動く
秋の夜や徒らに見る大刀の銘
つと入や家柄知れし書畫珍器
切髪は由緒ある人そ墓參
京鹿の子江戸紫や辻か花
御萬歳臍のくゝりをほとぎけり
一ト昔變れど同じ花の露
雨淋し焼け野に迷ふ夕雉子
世の中や三日見ぬ間に櫻炭
月の出てかゝる高嶺や風涼し
花一ト木人立かわり入りかわり
月照れど雪降る居士世にまさす
夏籠や半搗米の粥喰ふて
陸まじき船の世帯や月涼し
蛤や京に来て吐く伊勢の潮
山茶花や右院の夕静かなり
先哲の遺墨に風の薫りけり
思はしむ柿を菩提の花糖
雲に入る様な白帆や春の海
天爵の花に備はる牡丹かな

御代嬉し事なき儘に年暮る
鴈も匂ふ卵の花降しかな
ぬつと出る初日國旗に對し鳥
霜光る片葉の芦や鴨の聲
耳を煽る揚子浮雲なし時鳥
時鳥ついで逃られた思ひかな
聖堂の燈灯くらし時鳥
短夜を千切り／＼や夢の數
過去も夢未來も夢よ鉢叩
萬歳の先き廻りする子供かな
足場結び細毬下かる柳かな
義には出し惜ます汗に得たる金
治豐酒を吞て置たに時鳥
田舎から花の荷を出す日毎哉
神寂て涼しき加茂の宮居哉
石山の木立も寒し後の月
糸遊や縋るゝ風もなき日和
曆より十日も早し冬至梅
風に梳る柳の髪や三日の月
風味より真心嬉し草の餅
連翹や杉垣洩るゝ比丘尼寺
浮き上る泡の崩れや水馬
花咲や無常を悟す教へ草
白蓮の香に澄む朝の心かな
花籠に床し野菊のつかみさし

不斷着に寝皺のつくや春の雨
百千鳥天下の春を語ひけり
こそ／＼と八坂抜けり鉢叩
宮の奥向梅ありて尙清し
雁の文こま／＼月に照しけり
漁師町の燈揺れす雁の遠鳴て
其中に人里低き夏野かな
酒持て來たと叩くや雪の門
雲さへも放れ惜むか峰の花
蝶ニツ三ツ四ツ五ツ廣野哉
秋の雨物の哀れを知る夜かな
加茂川に星冴へる夜や鳴く千鳥
松高しそこの尾花枯て猶
葉櫻や一世の夢は立易し
春の夜や鏡を傳ふ女郎蜘蛛
未だ明の夜を運にさす小舟かな
和らかな恵みに暖し粥施行
行く春や芥も芥も花にして
花散らす風床の遺墨に通ひけり
除夜の夢小判の中に寝たり鳥
行々子守の朝寝起しけり
煙らした上は蚊袋遣ひけり
木蓮や横日の當る經机
初風呂や未だ明けさらぬ窓の間
神の前幣吹く風も薫りけり

春の夜や五更に及ぶ鳥驚の興
菊枯れて墨の香高き名札かな
濡るゝ程袖に散りけり花の雨
即得成佛何うたかひな施餓鬼棚
號砲に動く小山の若葉かな
山茶花や家相を忌みて鎖す井戸
紫の雲や動かす峰の花
青嵐志賀の白波よせにけり
月に花幾春秋を網代守
彼岸會や後家か寄進の筆頭
十三の娘を曠の花見かな
養父入の土産に伏見人形かな
撞き捨し鐘の餘韻や散る櫻
一人氣の勇む日頃や人來鳥
惜しされて散も櫻の風情かな
淺からぬ淺草海苔の香りかな
手綱程曳くや生駒の初霞
書初や震天動地龍躍る
魚賣の見込て這入る初轍
羅に雪を欺く素足かな
見覺の小袖なつかし壬生念佛
句碑に眠る胡蝶の夢や聞まほし
見しか否急行列車を蝸牛
鶯の初音日記に残しけり
開汗にかゝる樺火の埃りかな

汲み替て功德新らし施行水
燈籠の浮世を示す光りかな
指て文字讀む校庭や桐の花
積れとは思ひ遠ひの深雪かな
時雨るゝや落葉の中の鞍馬石
夕顔や同じ廊の化粧時
掛稻の中より太き煙かな
傘さして花の誠を見出しけり
十返の花や思出深き庵
行く雁を疑へ聞く八重の沙路哉
暖一ツ大路にひく寒さかな
肖像に妻の物言ふ夜寒哉
稚兒の出で一塵静まる十夜哉
着倒れの遺風見苦し御忌小袖
看經は流石かゝさす冬籠
粘打つ横顔譽て通りけり
粉摺に徑尋ねけり梅探
玉と散る吹井の水や風涼し
冬の日僅かに届く障子かな
かき曇る夜は只梅の匂ひ哉
能き秋を取て春待つ在所哉
配り行く膳に花袖の匂ひ哉
腰元や梅を片手の文使ひ
よき程に酔て目出たし菊の酒
村長を辭して牡丹の主かな

口切や月雪花の友白髪
香を贈る術もあれかし蓮の花
年端経る芭蕉にもつや露涙
落葉に不意打たれけり駒の子
初日影迫るや磯の浪頭
佐保姫の眉毛なるらむ初霞
草の實の翻れて淋し鳴く鶴
子は國の柱石にして菊の主
雨に風いよ／＼瘦せし案山子哉
年數寂の十三絃や春の曲
待遇も軽くて涼し座敷哉
引鶴や日露國交絶へしかに
流行も又富もあり茶摘歌
未だ知らぬ蝶に見せし花御堂
柴の戸につかみ遺ひの粉炭哉
梅か香に雪の遠山古ひけり
鳴くや千鳥長汀九十九里
五月雨や瀧の七五三繩たるみ鳥
追よせし魚藻の花に隠れけり
草の戸や膳の上まで蝶の來る
神の梅影も踏しと思ひけり
師の位牌持て高きに登りけり
戸締りを仕兼て更す月と梅
ぬるみけり蛇籠にからむ水の泡
授ふりし物の思ひや子燈心
六十一

送火や愚痴に煙の立をくれ
散る柳湯女も針持つ夕へ哉
散ると言ふ憂ある花の曇り哉
今朝の春老て若やく心哉
替る空雲色々や秋隣
天高く馬肥へ季は太りけり
嗚呼涼し燈は風に取りられけり
蜆賣小さき家庭作りけり
鹿鳴くや空也の庵のちら／＼灯
初雪や松を友なる筆すさみ
不二白し青し若葉の筑波山
枝含洩る皇國の歌や菊薫る
讀經の聲を裏切る乙鳥哉
白蓮や心も無垢の朝朝
蟬殻のはなれすにあり桐一葉
閉もせず誰待つ窓や啼く水雞
初曆月雪花の柔かな
馬よりも牛に乗りたき花野哉
くるりから夏にするなり草の家
雪竿のかくるゝ迄も積りけり
碑の文字を思ひ出す日や散る櫻
開直し出来ぬ朝なり初鳥
鶴鶴や水垢もなきさ／＼れ石
散る銀杏古刹の寂を深めけり
時雨會や其俤は神々し

朝顔の蔓や門下の友からみ
實櫻や吹く山風も野嵐も
狭ふ寝て家内嬉しや蠶棚
夏霞大利根下る白帆哉
師の歌を味ひに出る彌生哉
春の宵金婚の獨立派なり
夏瘦て胸に焚く火もありぬへし
仰き見る御陵畏し散る櫻
升香の酒の肴や鷹の爪
晒し井の中から出たり三十三歳
惨状を聞き召さるゝ吹雪哉
山藤や山をつないで瀧の上
花の雨もてはやされて降に免
魚にさへ花の色あり櫻鯛
萬歳や子のあるやうな顔もせず
禮禮皆此所に用なし花の宴
鳴かいては客も去させ時鳥
花の雲吉野の史蹟包みけり
活花に向ふてたゝむ扇哉
夕霞馬に任かして戻りけり
姦しいとは汝なり三十三歳
見へぬ迄見送る船に霞けり
貰ひ乳の不足をすかす螢かな
更たれと來ぬ夜てはなし寒念佛
藁音の不老門あり菊の花

世の憂きを捨る一ト日や蓮の飯
源氏名の残るや月の一ツ窓
紺鮎や鼓戸外せは竹生島
涼々しげにとり飾りたる初轍
刻そうな魚の料理や夏の月
花に雨無慮の威に打たれけり
見覺の一ツ家もあり梅探り
皆元の水に戻るや雪佛
皆福の神を乗せけり寶船
空也堂は茶釜の屑を蚊遣哉
龍虎を分て預かる角力哉
鷹の巢や斜に峠を見越す松
絹布團枕低しと思ひけり
走り穂も稔る光りや天の川
すれて行傘にくし糸柳
炎冷しや親の寢酒に添へる孝
縫上げた曠着たゝむや除夜の鐘
夏の月用なき橋を渡りけり
養父入や都はなれて高からけり
又元の土に戻るや露の玉
灯は虫に取りらして結ぶ赤繩哉
朝寒や香も沙はゆき舟の飯
佐保姫の衣裳就へや比叡愛宕
名香の薫り床しや青簾
夜の明て千鳥も見へす加茂川原

法の灯の霞むも愚ふ涙哉
孝に寝ぬ針とは知ちす火取虫
秋風や白く乾きし暮の月
雪の果唯美しき眺めかな
菊嬉し三千年の君子國
往時只煙の如し散る櫻
湖涼し藻を積む舟の岸に着く
師の塚に枯れてもなひく尾花哉
蘆鱗を珍味や雪の奥山家
炭の香や傳經の一間静かにて
菊の香や忠と孝は國の華
養父入の遠慮うれしう阿けり
雪の不二日本一の氣色哉
梅に月實に千金の夜なり免
輕薄の世風は吹かす楮の宿
福引や小家に狭き下駄の敷
冷足のしはらく痛き炬燵哉
見て居れば動く舟なり春の海
枯木にも六ツの花咲く夜明哉
百萬の信者に狭し御霜月
梅の村史蹟の多き地なりけり
蝸牛や何處で暮ても己か宿
ゆつくりと晝寝もするや旅功者
夏の山海に夕影浮ひけり
洩れて來る花の匂ひや夕霞

朝顔やはかなき夢の浮世垣
庵の芒野狐禪住むと人やいふ
捨て兼て二日置きけり餘り苗
花の雨儘よ寝て見ん晴るゝ迄
灯と共に虫に取らるゝ話し哉
甘たるき進め言葉や玉子酒
兼好か手枕に散る櫻かな
鳴や千鳥四更の鐘に眠る水
喜怒哀樂様々や年の暮
歸る雁小田は蛙に譲りけり
春は春らしや接摩の吹く笛も
薫る名は過去となりけり秋の風
電燈に罪なき僧や火取虫
若草に鼻をし付て牛の夢
思ひ羽を重ねて鴛鴦の衾哉
温石を入れて乗込む夜舟哉
稻船に泳きつきたる蚤哉
墨染の袖口切らす夏書哉
勿炭や禿の酌の及ひこし
殖へた程騒しからぬ小蝶哉
野鴉の鳴叫ふなり野分哉
曙の云はんかたなし花の山
笠掛けて時雨聞はや翁の日
行春や散りにし花の眼に残る
尋ね見ん佛の御名や花の下

白堀の顔に日のさす若葉哉
御園生や菊の香に酔ふ局達
鹿の聲絶へて夢野の一ト嵐
天祐は丹精にあり稻菴
佐保姫や鶴龜芝の花衣
春雨や雪洞淡き長局
水露の山覆ふ花の雲間哉
打明けた咄涼しき二人かな
鼓焙ふる丈けの火鉢や藤の雨
水音に心引かるゝ夏野哉
角力取の門掃く家や花牡丹
千鳥聞く淀の夜船の寒さ哉
書添ゆる 齢も曠よ筆始
貧すれと鈍せすの詩や溢團扇
魂祭の手向の水に花の影
朝涼し露の芝生の踏心
雛の日や一人は欲しき娘の子
大空に雲なき花の曇哉
冷腹や帯したなりて夢結ふ
夜の底を戻る廊や春寒し
啼捨てた杉に月あり郭公
吉野見た咄しに來る裕哉
吹く聲に三枝崩れつ森の鳩
松高し天の川風通ふ音
積善の家は榮へて門茶哉

水音の出来てゆれ出す芒哉
乾かねは焚れぬ柴の蝸牛
湯豆腐や俳味にこもる時雨窓
日永さをつむき出しけり糸車
是迄は町つゝきなり木槿垣
春の雪月に鶉の渡りけり
春風や逸せし駒の野を走る
懸帷の老松木や藤の花
今日の月名を得し句碑を照し覺
逆さまに流るゝ水も小春哉
未だ淺き春の色猶む若菜哉
柳さへ見て居ればよき浮世哉
春風や駒の手綱もゆるむ原
雪の簷脱けは女や山持き
居酒屋の一軒更けて冬の月
花の下酒の前なる美景かな
樂過ぎて氣の草臥る日永哉
枕にも傳ふ涙や時鳥
日盛りや汗にぬれたる笠の紐
彈初や始一手は八雲琴
霜寒し咳き響く朝手水
歌一首付けて送るや菊根分
葉櫻や草鞋ついてに島邊山
得道の我は念佛よ花の留守
秋の山色なき雨に染りけり

天高く天長節の花火かな
老鶯や機を逸しれる志士の窓
鯛や二人連れ立つ尼法師
濡るとも親し一味の花の雨
夢覺むる蝶の行方や草の風
智恵貫ふ望みや花の法輪寺
蝸壺に雀のひそむ野分かな
乃木祭や蘭菊共に香る秋
尺八の友を呼ひ出す涼み哉
花咲て埃の見へぬ經机
初東風に皆向ひけり都鳥
影は瀬にゆられて眠る柳かな
天狗住む岩を包みし若葉哉
雪解や工風して越す丸木橋
しと／＼降る雨淋し秋の宿
往く先は明るき花の旅路かな
月洩れて雨降る夜や歸る雁
我年を惜しむ譯あり親有て
大漁に賑ふ濱や春の雨
來朝の人和装して日傘かな
何一ツせぬに日暮て秋の雨
稻妻にきらめく松の手哉
名月や風雅羅漢の一ト圓居
美しき中に寂ある切籠哉
花咲かは寺も浮世の卷かな
六十三

13 拾參

遠山をばつして釣す葱かな
有あまる物は露なり草の庵
月の宿貢の草に埋れけり
惜しみつゝ雪掃き分る戸口哉
墨染の袖に櫻の雫かな
麒麟兒の出た葉家あり桃の里
目出度さは其名にもあり福壽草
塗下駄の時めく頃や桃の花
濱宿や波を枕に明け易き
宿引に引き残されて春の月
曉の空未だ寒し春の霜
加茂川や友仙濯く春の水
千町田に黄金の浪や實る稻
唐崎や小春の曠を松に見る
朝顔の種ははちけて夜の寒し
勢ひを祝ふものらし小殿原
見覺への道忘れけり燒野原
落花葉と共に吹かるゝ毛虫哉
寝姿もさとり顔なり涅槃像
暑き日や餘所を降らせる雲の色
眞直な道踏み行くや不二詣
初秋や青葉の付いた笹箒
煩惱に寝もせて明す十夜かな
玉簾に雨の若葉の匂ひけり
木々の露羽叩く難に日のあたる

13 拾四

三代の曠や雲湧く花供養
行先はよし濡るゝとも花の雨
踏み送けて涼し人たる人の道
行啓の國母畏し蠶時
攝待や御通路様をとめるきに
淡雪や軒へ呼込む若菜賣
有りなしの風に花散る夕かな
大平の御代の景氣や初登城
待ち乍ら思ひかけなし時鳥
大和路や汽車の中へも花吹雪
牛の荷は風一ツなり市戻り
空蟬の一句を得たり竹婦人
鶯や箸置く音も聞とかめ
夢の世を夢の間に散る櫻哉
香はと汗になりけりつとめ酒
鶯や伊達巻しめる手のゆるみ
叶はずは死ぬ覺悟なり常陸帶
傘さして二人濡れけり春の雨
庖丁の切れ味もよし初松魚
庵の春梅に柳に餘りけり
不知火やあと方もなき朝明
見込よき寺や若葉に袖衣
青梅や十三年も夢の間に
師の噂さして寝ぬ夜半や郭公
待た日に成て出代り名残かな

13 拾五

出来稻や皇國の富は無盡藏
子は絹の蚊帳に左團扇かな
炎天や堪へ入りそな犬の息
夢の世を夢と廻りし燈籠哉
遣羽子の中や李白の千鳥足
近よれば招くともなき尾花哉
佐保姫の名に似ぬ鷹の勢ひ哉
永き日を佛を刻む木取哉
街へ来て師走の人となりけり
世か末に成て多いか不如歸
龍夜や三味の音洩るゝ下河原
初職立て隠居の普請かな
鶯の起すまでとや眠る山
日積りの花に違ふや春の旅
雅と俗と支度の違ふ花見かな
一晚の納豆に風味ふくみけり
夕顔や木賃なからも花の宿
雪折は一枝もなき柳かな
紅梅や玉簾洩るゝ瓜調へ
花七日人は四十の盛りかな
時雨るやもき残つたる柿の色
魂棚や心に浮ふ居士の顔
松杉にゆつりて木々の落葉哉
拾髪の箒離れぬ餘寒かな
老松の月古からぬ今宵かな

六十四

13 拾六

景氣皆雪に埋れて雪景色
窓明けて舞ひ込ませる花の雪
帆に迫る夕日や湖の片時雨
八旬の姥攝待の企かな
苦むした孝婦の塚や桃の花
月天心雪滿街や寒念佛
日本海見放して山遊ひかな
清貧は天下に耻ぬ粉炭かな
掛替へる軸や新茶に招く客
未だ春も若き野に摘む嫁菜哉
一句を辻に賦して雪佛
山水の巡り出にけり雪解川
もう竹を折る力なし春の雪
馬洗ふ湯にも菖蒲の匂ひ哉
水音の細りて太る氷柱かな
待つ人のあるらし一人床納涼
龍夜や柳のよとの俚待つ
無事な身の上に咲けり年の花
散る事を早思はるゝ櫻哉
玉藻焼く浦の煙や春の風
蓮咲くや半菰菊るゝ普門品
榮達の一門和して菊の宴
散る花の名は水莖に残りけり
葉櫻や山家に残る流行唄
水雞鳴くたひにゆれるや草の波

13 拾七

大黒の居間覗きけり嫁か君
叱るにも物柔らかな頭巾哉
庭の梅笙に心をうつしけり
鶯や山懐るにあまる風
樂しみの緋く空や初鶉
掃除にも人手は借らぬ牡丹哉
龜鳴くや晝猶暗き池の鳥
焚火して雨聞く秋の名残り哉
氣かゝりな濟し様なり水祝ひ
稻妻や富士も筑波も一たり
轡虫なくや弔ふ古戰場
磯村や松を小楯の冬構へ
重なりて雁の落ちけり浦の月
花肌にひくや彼岸の西あかり
暑そうな顔も仕て居す奥女中
焼芋や松の位の裏表
出代や櫛も美術の京細工
文机の鬱若草に晴らしけり
待つ一日よりも短かし花七日
むらかつて月もてなすや班ら雲
あたまはし父の壽命や風の風
子に譲る柿幾本の接木かな
初冬の水汲む酒屋男かな
王候の門憚からぬ燕かな
世を救ふ佛の御手や蓮の花

13 拾八

何處やらに梅の匂ひや薄月夜
楨の奥只燈籠の明りかな
一昔忍ぶ故山の櫻かな
失戀の仇打つ雪の礫かな
花として見ても淋しき芒かな
限り行く里の入江や山粧ふ
無位無官無慾涼しき裸かな
新婚の京に旅寝や春の雨
兒の智恵の付く程長し風の糸
元朝や姉妹並ひし化粧室
寒梅や南枝一輪咲き初る
繪團扇や流石都の意匠振り
歌の山かすむ菜の花日和哉
景色立つ櫻の上や重き雲
星祭る夜に初戀を覺へけり
春雨に都の町を煙りけり
手枕や月と蚊遣を前後
我心我にある夜や露の音
叱る迄子の出這入や初蚊帳
帆の皺も目出度二百十日かな
七浦の夕雲赤し鰯引
奇麗飾る名馬曳るゝ鷹野哉
壁に貼る古新聞や秋の雨
蚊柱の崩れかゝるや戻り馬
師の記念柱にかけし扇かな

13 拾九

陽炎やさらさら光る避雷針
編笠や元は廓の懸敵き
走り字の文や蓮の朝使ひ
桑門の寂深めけり葉雞頭
海の底踏む日を桃の盛りかな
思ふこと花に忘れて仕舞けり
龍卷や二月は春も物荒き
牛馬の眼は皆細し涅槃像
初櫻飄持たさし怨みかな
有職の講習會や牡丹の戸
煤掃や典侍内侍の長棒
奈良漬の口切る寺や初紅葉
秋の暮留守遣れて戻りけり
達摩忌や浮世は輕き芦一葉
敷臺の名札散らすや手鞠突
腰袋に猪の血沙や夜輿曳
我無事も添へて暑中の見舞哉
蝶二ツ日和の花と見られけり
行違ふ乙鳥の早し十字街
句碑訪へは立皮櫻の盛り哉
追かけて施行なしけり寒念佛
紅梅や椽にこぼれし牛の乳
極楽や水音清き夏百日
草場から玉のうてなや虫の聲
蒸すか如き沙漠の晝や雲の峰

13 貳拾

鶴籠の師に従ふや雪の道
積塔や琵琶の秘曲に濡るゝ袖
姉妹氣も相打の砧かな
史に漏れし皇位尊き櫻哉
京極の通も更けて秋の月
山は不二花は吉野の譽れ哉
鬼灯やにくまれ口の愛らしき
紅に飽きし日の行く柳かな
春風や杖と笠とを友として
二座の客すまして日の有永き哉
雪の翠簾御意に答へて巻にけり
天然の美に銷はなし花宮浦
西へ行く雲は歸らす秋の夕
日本一の美人娶て初職
青雨に捨てし鉢の木芽を吹きぬ
馬拗て盟に入らず夏の月
水明り立夜を夏の別れかな
木兎啼や木の間に寒き彗星
菊の香や筆の遊ひは物静
大連摩小連摩雪の都かな
飛行機の憂救へかし秋津虫
鯉喰て寝たり屏風も逆さまに
紫陽花の影の淡さや池の面
木枯や怒濤小島を呑まんぞす
花に雨敵と迄に恨みけり

朝顔の白きは淋し今朝の秋
朝顔や不中の直る垣隣り
不可思議は法の功力や御水取
鶯に鶯も首を傾けけり
六田淀に幅漉したり花笈
薫る名は幾世に朽す菊の花
見る人の心にたしし櫻かな
茶立虫連子窓からほられけり
若も慾も洗ひ流して除夜の風呂
苗代やめし煮く様な水加減
掃き洩れし落葉走らす嵐かな
花の酔良心の鏡曇りけり
戀猫や忍ぶか岡の薄月夜
筆塚の跡か知らねとつくし
師の魂に侍れかしこそ放し鳥
涅槃會は佛ほどけとなる日哉
膝崩すお針疲や花菜明
袂別の詩を取り交し雪に泣
羽の抜てあはれな鶯の翼かな
聖代に居て猶悲し魂祭
水も寝る夜更や鶯鴛の私語
鐘寒し夕陽花に迫る時
つく鐘の音の拍子や桐一葉
芋頭これも祝ひの一ツかな
窓明りして寝付かれす月の雨

突出した舟は事なき時雨かな
旭にまけて柳もゆれす雲の峰
裕着て着古し提る重さかな
夜櫻や篝りの跡の月うとし
出来秋の朝たに太し茶の煙り
鶴曳て淋しうしたり磯の松
清明の雨や柳のもつれ髪
春の川棹さす人の霞みけり
涼しやこほるゝ様に竹の月
鍋を釣る木彫の魚や櫂の宿
たしなみに花なと活けて冬籠
櫂の火に髻をこかせし笑ひ哉
白ろ蓮無垢の法衣に薫りけり
九万正の沖や悲惨な常陸丸
大海に只名月の一ツかな
老て行氣はなし花に向ふ雲
鷄卵酒昔しの戀を語りけり
人浪に散るや市場の櫻鯛
百合の花白さ雫も手向水
難問の解けし講場や風薫る
垣越しに隣りの花袖貰ひけり
蓬萊や國は平和の友白髪
姫百合や水をたへし火山壁
さぬくや浴る計りの花吹雪
雲の峰流れて動く柳哉

扁舟に釣する人や花の影
手の皺を競へて笑ふ紙衣かな
小原野や月落かゝる破れ扉
雷裂けの大杉凄し呼子鳥
一枝に色さまゝの紅葉かな
世の無事を仰く外なし御田扇
釜洗ふ群るに目高や春の水
初裕蜂にさゝれて戻りけり
今日の月思ひ出多き夜なり
酒好きも茶好きも来るや梅の客
板に曳く杉の匂ひや時鳥
鼻啼や油つきたる常夜燈
晩酌に我世顔なる俗衣かな
折水や柳に早き風移り
ぬれ釜の乾く匂ひや若楓
三界唯心夕邊の煙り朝かすみ
薫風や黄金作りの太刀佩いて
落花浴びて額く慕前鳥鳴けり
琵琶抱いて乗り合ふ船や月の秋
名月に團子十三供へけり
一步一步仙境に入る紅葉かな
撫てらるゝ膝にも居らす戀の猫
破魔弓や實に宰相の威風あり
孝行に立つ薬湯も餘寒かな
霜枯や女房迎ひし角力取

菊の香や座敷に沁る釜の音
風揚げて不中の高さを尋ねけり
畑打の腰伸す午後の三時かな
長閑さや雲間に洩るゝ鳥の聲
又元の松風寒し春の暮
来る雁や湖南の夕へ雨寒き
迎ひ火や這入る煙を客こゝろ
暮るゝ日を日毎に惜む彌生哉
松の木にしみ込蟬の時雨かな
心あゝ雨の降りけり曾我祭
宮城野や萩も芒も月の草
君か代や祈らぬ雨に育つ稻
雨覗 袴に葱の雫かな
新らしき柱唇や春となり
剃髪をすれば遠るゝ繪踏哉
姉の來てはこゝや風の纏れ糸
鳥立て水を離るゝ柳かな
長閑さや野は鳥池に魚の浮く
夕照りや紅葉に赤き山の井戸
澄心の女性に疎し竹婦人
夕榮や桃一面の山畑けり
五十年 蠶作りて白重
曳船のつなも切よと初かつを
年の瀬や我も流る物の數
還俗の動機となりぬ花に酒

金屏にまさる眺めや稻の垣
散りて来る花や一棹戻す舟
啼鳥の聲落付かす歸り花
弓矢取る武士粧ふて案山子哉
菜の花の果てや汽船の黒煙り
咲惜しむ梅も春待つ風情哉
風徳の名のみに朽す墨直し
千金の石見出しけり秋の水
貞操を鍋に祭りし賢女哉
養父入や門へ出て待つ親心
行先は蓮の世界や一人旅
露踏んで都の病ひ忘れけり
花に尻向けて美人と對話哉
白妙の不二や冬さへ暮遅き
打返す波の輕みや初あらし
得道の響れを花の念佛哉
院の灯や寫經に更けて時鳥
露に曇る野守か家や月更けて
句三昧夜長の油盡きんとす
碑文の寂も照らして花に月
内治難外交難や春寒し
散て行花に引かるゝ心かな
東洋の春を占めたる櫻かな
春雨に煙りて見へす片在所
梅にまもた春寒くさこへけり

長らへよ小春も来るそ菊の蝶
椿焚や猫も煙りにむせる咳
眼に餘る霞や七野の七景色
山吹に半かくるゝ雛かな
胼の手をかかしてつかふ嫁の家
竹の秋追想録を物しけり
曇りなき倭島根や今日の月
踊らして見たき踊り子歸り鳥
猫の子やどうでもよしの小金貨
落る時をどの淋しき椿かな
花の雨上戸は濡れて戻りけり
嘘書た硯洗ふや小傾城
悪夢覺めて寝汗冷たし鐘水る
此味に此名の有りて櫻鯛
畑打や雨續晴耕の在郷軍
月涼し水に任せて流す舟
氷る夜を氷らぬ酒の力かな
雨となる名の夜を須磨に惜けり
ふみしめて渡る小橋や雪解川
洋書室モテルは來たり春麗
師の遺墨備へて拜す花供養
春の山木るを譽て登りけり
紅白の幕紅白の梅花かな
片里や賢者も愚者も冬籠
松は不易の香あり心太

秋無月此夜狸の腹や病む
魂來ませ眞如堂に花供養
納豆や禱の赤き坊か妻
膝の子を立ち初にけり玉の春
消亡せて佛果を得たり雪達摩
股引の上に十夜の袴かな
身を深く秘して語らす櫂の主
忘れぬはなし相手や桐火鉢
寒月や梶音はけし刃物鍛冶
月二ッ荷ふ手桶や水の上
夕立のあとや田の月みねの月
濱萩の聲引返す夜沙かな
傾城は見憎し晝の螢籠
曲水や鳥柏を草の上
梅か香を殘して水は流れけり
名木の許の名碑や花吹雪
鋤鎌の身こそ安けれ桃の里
相逢うて馬上長開けき笑かな
梅咲やせゝられ清き紙屋川
雨に成る風や櫻の遠薫り
畑打や六十と見へぬ腕力
月花に見あひてか鶴雲に入る
翁忌や向け水ほと初時雨
何時迄もそうわ呼はぬを嫁か君
雪の山笑ふた山や春淺し

寒菊や心の隙に來る匂ひ
萬葉の講義聞く夜や初蛙
足り過て又席替る年酒哉
春なれやそゝろに探る京名所
四の緒の調へも悲し萩の雨
雨一去一來秋を深めけり
譽れ名の幾代に薫る櫻かな
蝶一ツ二ツとなつて垣の外
今落る迄もさかりの椿かな
重陽や今日登りたき不二の山
佗介を片手に提し頭巾かな
灯うつりの涼しき鉢や納涼臺
初雪と成りけり風のたるみより
化粧料か十萬石や月の淀
納豆餅都て喰へぬ風味かな
朝雨の雲雀に晴れて麥の虹
茶計りの紅葉に寒し寺の庭
花ちるや法然院の夕静
脊なの子に教へて淋し魂祭
銀分つ蠟燭太し除夜の奥
輪造りに月の潜るや釣葱
女十八男一人や春の旅
丸頭巾國粹保存論者かな
茶に添る名所案内花の宿
落し水安協の果は笑ひ哉

白梅や志士の遺墨の古屏風
間に更け開かぬに更て時鳥
鶴と組む鷹やするとき宙返り
添馴て咲か岩にも藤の花
追て遣る思ひも知らて火取虫
光陰は矢よりも早し櫻の實
降れば迎内にも居れぬ花七日
雀子の教へは母の翅かな
初賣の人氣のせけり馬の年
初花や夜は末にあらき松の聲
花に留主月に留主して十夜かな
千代八千代垂穂の稻の稔かな
蓮の香や鳳凰堂の朝朗
合す掌に松蔭さして月涼し
成佛の御法なるへし散る櫻
麗夜や酒氣をさましに庭を
落るとは色にも見せぬ椿かな
鶴一羽梅の小村を東せり
肌寒や子を連れて来るさくら賣
酢の利た鯛に舌打花見哉
菊の戸や王女入御の噂あり
春の雪傘の雪と成りにけり
輝りや寝酒は妻の如才より
雨一ト日二ト日も續く餘寒哉
田には未だ残りてもよき曇哉

雪持た儘に明樽流れけり
動かねば水にも見ゆる暑さかな
初夏や庭や水引く地拵
三吉野の月や花から花に入る
松風の中に寂有り遠砧
松林の亭に人あり春の朝
鶯の邪魔でもならず爐の手前
閑伽桶の花今朝見れば盛り哉
夫婦してむしろ織けり暮の秋
雲にしてをけは罪なし遠櫻
文豪にして酒豪なり梅の主
さま／＼の色見る秋や繪具谷
靈山や晝時鳥晝の月
慶長判灰皿にして牡丹の戸
酒五合貰ふて花の留主居哉
弱そうな脚元はやき水雞かな
儉約を教ゆや炭の切り様まで
朝／＼の心養ふ柳かな
追付きて見れば人手の笠かな
勤勉は徳の母なり田草取
寝たら啼くやうて寝られず時鳥
精心に勵のむちか競馬
近づけは男なりけり隴月
川止めの明いて眼さます晝寝哉
葉櫻や妻携帯の出養生

崇拝の碑文尊し花の影
さ／＼やきに問ふ戀もなし竹婦人
春風や被衣吹る、文使ひ
蝶を追蝶を追坂登りけり
年毎に色香失せけり竹婦人
客揚げて船は霞に戻りけり
紫の雲や涅槃の朝はらけり
手を打ては答る山や閑古鳥
夏瘦女粹になつたと言われけり
千金の春を殘して歸る雁
ちか寄れば花に遠退く曇り哉
淺芽生や露に日丈けて鳥の立つ
有餘る景色を花の霞哉
奇麗好き涼しき門にしたりけり
替る瀬は人にこそあれ天の川
運はる、様な氣になる野分哉
又平の書も出て踊れ盆の月
梨子の棚繕ふ人や夕霞
筆賣の卵の花垣に呼はれけり
磯草に花咲く浦の小春哉
碑文を浸すや花の朝平
論戦を彌次る日比谷の蛙哉
恩給は貯金に積て菊作り
桃咲や遅れ年始の女客
柵一杯延び出て藤の下りけり

一つ宛山へとらる、砧かな
千金の春の湊や花の山
碑の前や心あり氣な虫の聲
土鍋迄敷に加へて菊作り
虫啼や悲調を帯ひし平家琵琶
草の戸に秋の丈け見る糸瓜哉
灯も淡きたそや行燈や春寒し
歟入れた計りの田にも諸子魚哉
松茸や木の葉かつきの男より
一聲は無量の寂や時鳥
澁柿や租税の役を勤めけり
また簀は草の匂ひや初時雨
長しへに幾十返りや松の花
朝櫻昨日の人の残りけり
櫻よし大慈悲の普門開
窓明て春雨受ける硯かな
引鶴や名所／＼に一日つゝ
進む世も梅を唇や飛彈の奥
何處までも伸る勢ひ今年竹
青柳や碧水樓のさんさめき
都にも近きふしなげ茶摘所
衣紋着て向ふ机や今朝の春
梅か香や机に向ふ窓の先
早餅やかくしむさひに忍び泣
古池の流は盡す鳴く蛙

牛追ふて史を讀む人や梅の里
臘梅やわかたつ柳の山かつら
開たより津の町長し春の風
衰て戻る春中の猿や春の月
泣くもあり笑ふもありて二日爰
師の記念戴き洗ふ硯かな
鍋に煮る馬の薬や秋の雨
かさし草歌舞の菩薩に狩れけり
草餅や田舎の味を京の町
初雷や空はみどりの根なし雨
松風の浮き沈みある夜長かな
酒に脊向けて團子と花見かな
覗かして貰ふや花の御庭先
虫干や長へ匂ふ筆の跡
雁風呂やちよと聖の一ト泊り
藤の世や解脱の像も御身拭
菊晴れて孔雀尾を張る日和哉
散る花を浮へてゆるき流れ哉
轉ひ出て小言も不言竹婦人
寝ぬ鳥のどても来てなげ花に月
衿正す先師の墓や霜の花
句碑の文字照らすや花の夕明り
眠る牛唄ふ乙女や春の草
藤も又咲く丈のひる日脚かな
煤掃の門を走るや豆腐賣

琴の音を慕ふすさみや月の笛
松と共に齡重ねて葛かすら
川狩や魚籃をつなく亂れ杭
露深き草にうつるや佛の灯
浪先は秋の表か初あらし
出水跡川繕ふや風光る
人の非に耳は汚さず菊の主
世話數寄の椽や猫の子雀の子
行春のどめ處なき日和かな
一ツから重ねし無事や年の豆
寒菊に貸や吉野も見せた笠
濁酒や月を相手の一人り住
鯨突く矛もあるに網代守
かこつけの踊や敵は本能寺
捲き揚る籠や月の山放れ
納豆汁在所めひたる匂ひかな
油花トに心の迷ひ解けにけり
煤掃ひて廣ふ見へけり盃所
春の海聖の想も浮ふへし
橋からが丁度見頃や花の山
足袋洗ふ女中賢こし終ひ風呂
武士ならば仁義の將やぬくめ鳥
盃の數を重ねて菊の酒
切風や兄を呼／＼すゝり泣
秋の夜や亡き師に逢ふた夢に泣

皆不二に似て有る雪の草家哉
制札の墨の匂ひや初さくら
麗や乗草臥し駕の旅
婦女論す引出に風の柳かな
憂き中や月は澄とも胸の闇
世に残る徳は孤ならず釋奠
風呂吹の自慢や寺の忠實男
女房の手際味あふこもくすし
連歌巻き終れば花の庭かな
國の富飼廣めたる蠶かな
雁一羽竿にをくれて春寒し
裕着た日に見出しけり福白髮
義に堅き咄しにぬけす夏羽織
船の繪の敷敷や年の流る、夜
人去た頃を夜にして花明り
風に手を當てたし稻の花さかり
謀なつて膝打つ扇かな
日當りに鹿のかたまる二月哉
倒れ木の堰となりけり冬の水
喜ひの笑を手向る櫻かな
寺の子の門に遊ぶや春日影
大雪や天日くらき裏日本
貴婦人の見學園や秋日和
知らざるは知るに勝るや鰻の味
つかれたる義笠干すや五月晴れ

名月やをしき草家の向工合
雲に入る鳥にも惜む名殘かな
月花に憂き雲もかな早時
男らし風に職のあをつ音
大寺や供養する鐘皆霞む
連は入江の花か今日の月
着せ綿を洩る香の高し冬牡丹
松杉や天台山の春寒し
坂越して行隣りあり鹿の聲
湯豆腐に引止らるやさとの朝
蝶鳥の花にはあらず福壽草
繼げは咲く咄しの花や櫻炭
羨まる、齡や菊の客主
釣籠に駒鳥啼くや檜垣茶屋
鞠躬如伏して擬暗を奏しけり
紅梅や朝日を通す絹障子
染殿の匂ふ千絹や春の風
露に旭を受けて牡丹の見榮哉
鈴虫や大事の鼓を籠の外
不夜城の裏千頃の青田かな
夕暮に梯子に釣りし葱賣
辻か花未積む花の蕾かな
冬籠廻事に苦しむ日記かな
初夏やまた不二川は雪にこり
院の戸を洩る灯冷たき新樹かな

盃の底も千尋や月の影
稻妻や翌日ふる雲と降た雲
老の身の薬嫌ひや二日灸
額は勅軸は御製や臣か春
菜の花や自在に換る炉の手前
桐一葉世は空蟬と悟りけり
曳鶴の影海山に餘りけり
鼎から湧き出る寺の清水かな
門札は女名前や花の茶屋
懸すてふ名は柳から立にけり
繪馬負ふて登るを山や春の風
鶯も高音育ちよ瀧の傍
橋の匂ふ曇りや時鳥
門下皆揃ふて墓碑に詣てけり
ふたらくの花や南方無垢世界
川狩や智恵かして行く旅の人
旅先へ真心届く初裕
落る花に局々の灯かな
なひけてて風も吹くらん女郎花
鳥の来てこはす雫や朝櫻
花供養浮世は花の浄土かな
寝ても心置くや牡丹の花の上
花の雪菩提の鐘の響きけり
富士の雪解汽車の窓から覗けり
火桶撫膝撫今日も暮しけり

神童の机に倚りぬ梅の窓
鶯に筆の力らもゆるみけり
虫干や系圖も添へて有る鏡
落柿舎の棟踏む秋の鴉かな
夕焼や明日の天氣も蟬の物
濡れ給ふ丈六佛や花の雨
事足りし様の目元や孕鹿
梅咲て春に落付心かな
急行の電車に霞流れけり
歌種は幾世に盡す人丸忌
移り香のもるゝや花の小袖幕
一本の芒や秋の寂葉り
留主の用炬燵の上に並へけり
散り葉や碑も立皮の櫻蔭
初松魚價は問ふ可き物ならず
涼しさをまどめて散らす水車哉
萩若葉難波の春もゆるみけり
買うてから大きく見ゆる西瓜哉
揚貴妃の小袖にせはや今年絹
汗流し涼み直すや二人連
飢死すとも世はへつらぬ梅の主
温泉宿出て温泉に行道や冬の梅
鯉列て池に波立つや夏の月
聖にも歌をよめとや秋の聲
雛撫て妹の如に語りけり

大根曳手馴れぬ業も赤繩から
芳しき名は埋れず雪の梅
肩上げの取れて耻かし花小袖
断崖の巨岩奇景や紅鬮躑
遠牙へのする笛の音や薪能
水仕女の折目正しき裕かな
末は誰か根引の花を姫小松
笛にさす花も一重や更衣
薫風や五百羅漢の朝朗
脱替へる小袖障りも春寒し
人去て貝の沙ふく干瀉かな
舞ふ蝶の羽からやわらく野風哉
白魚や一ツ並への曠かまし
冠りたき花笠もあり鐘供養
鶴引た跡風／＼の松の聲
迷ひともなるや柳の道しるへ
比丘尼住む庵とは見へず唐辛子
大胡座君子然たるゐろりかな
押賣の薬断る日短し
新築の別荘訪はや春の風
花鳥の色音に明る彌生かな
門跡の御座丈け掃きぬ散る櫻
薬湯に酔ふて寝た夜や汗返る
摘草や氣安く話す針の友
軒端から交んで落る雀かな

古着屋の店から冬となりけり
句想無我に入つて聞へつ露の音
日の晝も知らぬ座敷や琴涼し
羅や小指に痕の有る女
雪洞も爲めに消へなん散る櫻
貸し借りもなく春待家庭かな
待つ鳥は鳴かて夜空の明易し
風切て鷹は我手に戻りけり
御身拭ふ唇から花の埃り哉
沙先を啼捨て立千鳥かな
宿引の客争ひや夕かすみ
寝心や雨もたしかに春の音
鶯に米洗ふ手を休めけり
月の雨もどけかひなき菫かな
川あれば柳や鑿と云へは桃
蚊柱に颯と打込む木太刀かな
泣く物を見て笑ふ子や涅槃像
みをつくし芦の茂りに隠れ鳥
鳥居から見揚る御堂の茂りかな
御遊寒の別邸薫る梅の花
江の魚の夕日に飛ぶや春隣
藤衣今日の祝の曠着かな
話頭いつしか時局に及ぶ年酒哉
盃も流した水を散る紅葉
雲の外動くものなし秋の暮

明易き夜を一ツ葉の雫かな
をかたまの若葉に洩るや朝御燈
佐保姫の懐る暖し兒櫻
蜻蛉や何へん来てもし杭
見す散し花や見たより惜まるゝ
夜櫻や何か禿の耳うつし
春の月戻る舞妓を照らしけり
此處のみの嵐か庭のこほれ萩
闇伽を汲む尼未た若し秋の水
成功の汗に油断のなかりけり
千代の友竹馬連や尙齒會
時雨るや善知鳥の軒のみのと笠
鉢植の仇花多き柘榴かな
花守や冥加に盡し粹の果
叱らすに牛を追行く日永かな
野の春を京に配るや若菜賣
時鳥啼くや木曾路は初櫻
師の徳を偲ふや花の大句會
寝心によき程遠し小夜砧
階級は動作で知れる花見かな
肝膽を照らして涼し夏の月
永き夜を人には秘めし戀歌哉
丹精に造り榮へあり菊の花
日の駒に晴るゝ在所や初霞
静かさの餘りを蝶の眠りけり

男迄包む比丘尼の頭巾かな
主婦に成る教の一ツや雛遊
撞き捨し鐘に餘寒の響かな
英雄の閑日月や菊の録
雪の橋たれも真中通りけり
煤煙に幾分黒き柳かな
谷越ゆるまては有しに落し角
家鴨飼ふ軒の流れや散る柳
イむは有縁の軒か寒念佛
蛤の夢かうつゝか蜃氣樓
日盛りの茶店を覆ふ板かな
島山の花見出しけり遠眼鏡
初松魚師の肖像へ供へけり
磯麗今日浦島の歸るらん
春の猫女三の膝を放れけり
香炷てゆるゝ待たん時鳥
菊活て恩賜の太刀も飾りけり
冬の雨鴉踏み折る枯木かな
田を植て一安心の在所かな
闇伽水の乾くひまなき彼岸哉
裸灯にも風なき夜半や露の音
送り火の煙暮色とあいりなし
自轉車や手に花の枝香に瓢へ
五月雨や鉢に残りし菓子紅
元日や洗ふたよふな人心

十方に聞なし蓮の朝朗
ぬかついて手向る水の寒さかな
氣候相和して静かな柳かな
戸さゝぬは心も廣し月の宿
あくる夜を木魚に譲る水雞かな
蓮の香や破鏡の果の昔門品
三日月の落る迄行く枯野かな
夕虹の俄日和や鳴水雞
人も斯くありたし花の散り心
百景の外に青田のなめかな
十六夜や一人の友は酒嫌ひ
蚤飛んた跡あと／＼と押へけり
雀子や寫生の繪兵皿へ糞
近道はわざと教へぬ深雪哉
餅の子に鍋貸してあり燕子花
花影や手向の御袖濡す露
詩に歌に句になりて座果にけり
我魂の詞苑に遊ぶ晝寝哉
迎もなら飛石埋め花の雪
足跡を行けば氣軽し雪の道
泰山に擬する師恩や奠典
傾城も嘘はつくまじ三ヶ日
敷の子やこれも御慶の祝ひもの
香を慕ふ鳥の小さし梅屋敷
蕎麥喰に遣入和尙や梅の茶屋

添い伏も仇とはならし竹婦人
松はまた隴や花の朝はらけ
隔なき色なり櫻梅落葉
切風を松に残して春を行
人聲の上に蕨舞ふ沙干哉
和歌一首贈りて菊を貰ひけり
植し夜やすか／＼しくも竹に月
世の春の中にも有るや竹の秋
田の保護を任せて歸る案山子哉
岩を出て松の根傳ふ清水哉
世の寂を知らぬ四季咲語微哉
芥子畑や鐵道ふにも氣を兼る
明月や琵琶は日本一の湖
ある筈の雛にさへなし同じ顔
菊咲や三夫三婦の恙無き
春の土堤雪解の荷物積きけり
八千代とはよき名の花や玉椿
梅一輪天下の春をまどめけり
眼に重き柳の影や臘月
まつ虫の聲に暮行く秋野哉
初蝶や野心浮む朝日和
繪行燈に灯せは地蔵莞爾たり
笹鳴や妻と戸口にのり仕事
つきへらす杖や梅にも櫻にも
松風に静に立ぬ千代の春

搔餅の藤一枚春寒し
名は月の光りに兀ぬ一夜かな
花果て、仕舞へど花の都かな
露の路戀にも濡れて通りけり
次の間へ立つて結ふや足袋の紐
蒲の穂に至孝の寒さ包みけり
叱られて拜殿下りる鹿の子哉
俳囊も振ひつくして冬籠
騒かじきものは人なり 初櫻
夫婦とは見へぬ二人や 臘月
錢受ける網にかゝるや花の塵
杖輕し菊に心をよする朝
雁風呂の知らせを撞や島の鐘
去ぬ雁やいつ迄白き峰の雪
雪ちらり〜更け行く常夜燈
手向たる花にも露の恵み哉
蟬鳴や名の有る水の湧く處
梅咲や濯足寒き能舞臺
鳳門の畑は廣し桐の花
翌日ありと思ひそ花の夕かな
君來しを栗燒まどて筆を焦せり
年男心に雲りなかりけり
火祭りや懸にかくる、鞍馬山
京へ來て鯛も夢見る櫻かな
落付た耳には世話し行々子

花嫁は唄も小聲に茶摘かな
睦み合ふ心睦まし花菫ろ
出藍の譽れも高き幟かな
寒念佛嫁どり〜家覗きけり
鏡着た程に重たし五月羨
紳士にも言葉傍らす菊の主
黒蝶に眼の散りて通らす針の糸
黒檀の柱に白し水仙花
夜になれど一段とよし秋の夕
蘭の香や數寄をこらせし口
氣の弱り見ゆる仁王や五月雨
八潮も來て香を配るあやめ哉
鶴一羽明月の松に下りけり
乳張て龍車に立寄る田植かな
梨の根に肥へする二月半かな
花の世に風情の盡ぬ柳かな
曇り行山さへ春の景色かな
夕顔にふみ伸したる勞れ足
山蜂の針しめし行清水かな
蓮の香や手輕き僧の朝料理
惚はるゝ光りや月も十三夜
咲盛る花に人浪淀みけり
鯛や沿ひ道杉樹古寺へ
春雨や折にふれては七部集
初日の出磯邊靜かな松の琴

鐘の奈良佛の奈良や月の奈良
動かぬか誠の花か蜂の雲
麗や山から汽車を遠望み
京馴し髪のみすびや盆踊
酒入れた程の重みや青瓢
廢兵の唄あわれなり秋の雨
養生に五加木摘なり夕餉迄
淋しさや野分の跡の花すゝき
打水や蟻の喧嘩の物別れ
鼓の音清くさへけり秋の聲
社祓て牡丹案内の使ひかな
常の子に戻すはをし、鉢の稚兒
八束穂や張弓形のたをみ振
稻妻やすれ合ふ汽車の硝子窓
垣にして浮世隔てる木樫かな
群衆に山門狭き彼岸かな
功は成り名遂て梅の主かな
一葉あはれに成るや桐一ト樹
色さめる野山に秋を惜みけり
散る柳月は古井を覗きけり
葉櫻となるや來週の日曜には
碑と共に名も立皮の櫻かな
尙更に故山の戀し歸る雁
禮帳や年々ふへる得意先
法りの月手向ける水に移りけり

人波を立たせて御輿洗ひけり
憂き知らぬ身にも通ぬ暑さ哉
蛸壺に桃つかみさす聲か雛
石女の不幸をかこつ幟かな
三日月のあやなく時雨盈しけり
花は葉に成りし曇りや時鳥
桐一葉晝寝の癖はやみにけり
是非もなし咲けは散る日の櫻
毛の生へた坊主團子や五月雨
畔を焼く煙りに芽組む柳かな
孝に賣る身の戀悲し春の雨
花一日關守もぬく鳥帽子哉
乗り競ふ千里の駒や加茂祭
天地皆狂奔に入る師走かな
進む夜や夏も化學の厚氷
出代の犬呼込て貰ひけり
名月や譽れ有る樹を歌柱
蝶々や保養に遣ふ銀の先
一つ來て海山暮るゝ螢かな
花を見る心に老は無りけり
約束の辨當枕や三尺寝
散る櫻諸行無常の浮世哉
盡未來際逝く水と切て落せり
白梅や今日も松から日の暮る
梅咲や雪も力らの抜て降る

誠ある文は短し郭公
松の雪消た跡迄光りけり
鶯も來す降り暮れて啼蛙
雷の跡心地よし夏の月
蛸たゝむ風の屈くや草の蔓
松風に月澄む律の調かな
緑り返す十萬遍や夜も長き
秋の雨そは降る妻の忌日かな
只惜しむ計りてはなし夕櫻
敷てある笹のみどりや雀餅
時鳥桐壺の灯かすかなり
山かつの眼を覺しけり閑古鳥
佐保姫のふどころ抜て歸る雁
嘴も脊にして鳥の浮寝かな
朝露にもすそ濡らす草の中
亡き後も師恩忘れず墓參り
子は君に仕へて楮の主し哉
露ぼどり〜靜や朝櫻
揚雲雀空一ぱいの景色かな
天穿や總武線より見ゆる屋根
忠孝の道貫くや弓初め
氏よりも育なりけり蓮の花
往き交す言葉に咲くや年の花
秋惜しむ月に萬戸の袴衣哉
是にさへ裏表あり花と水

後影きつと其れらし月朧
花に來て連の七癖見出しけり
言ひ古るし居る目出度き御慶哉
十日菊これや六日のあやめより
飛ひそうにして親呼ぬ雀の子
武藏野を思ふや月の芒原
師の机汚さぬ翁菊作り
干てある小袖も春の名残かな
木曾に行く春暮ふてや遅櫻
短夜や見足らぬ夢の懐かしき
春風や金銀腐る倉の中
五月雨や三保の浦邊も笹にこり
花形に障子繕ふ小春かな
老媪の心根やさし御難餅
稻妻に山の寝姿見られけり
時雨るやこはれて〜包の海老
濡杭に船虫這ふや雲の峰
涼しど餘處で聞たる我家哉
學校の裏に雲雀の高音哉
雨あとや夏野の百合の立姿
二ツ置く一ツは豫備や種瓢
暮れ風のをさまり次で一葉落つ
勝軍國の御旗に東風の吹く
花散るや遠寺の鐘の耳につく
半分は雪の光りや春の月

夜櫻や孝と不孝の別れ道
さゝく燈や弔ふ花の道開き
菜の花や赤壁目立つ長か家
碑に残る錦や草紅葉
降る雪を言葉に添へて衣配
夜や永し燈て親しむ可きは今
島千鳥短檠の灯にこたへけり
故師の影掛けし書齋や關かほる
水引の屑て結びぬ拂ひ箱
悲しさの中に目出度し魂祭り
潮に一夜宮造りして夏萩
撫馴し瓢叩いて春惜む
たよ〜と磯邊歩行や春の鹿
見る人に飄れかゝるや花の露
嗜みの見ゆる折目や汗拭
頼母しき春此所にあり梅柳
悟り得て見れば水なり雪達摩
石寂て苔青々し涌く清水
近寄て見よと仰せの牡丹かな
油花トや遊びに盡し上臈達
秋の蝶白ゆう花に狂ひけり
櫻花に附與と吾は警世の詩人
皆罪の無き人のみや花の春
塵りの世に蓮は馴染まぬ風情哉
自然枯に日のさす藪のわらひ哉

冷しヒール妻の心も溢れけり
家貧に仕て孝子あり蜆賣
朝寒の濱や勇める魚市場
平凡の中に雅味ある糸瓜かな
秋の蝶藥の花にどまりけり
旅うれし明日の泊りも花どころ
汲て出す番茶味よし萩の宿
花散るや人心引く水の音
古池の流れは盡きす枯尾花
名木と諷はれて散る櫻かな
雨に香や三葉を湯てる勝手元
二筋に迷ふ山路や閑古鳥
萩の戸に呼込されけり茶室賣
番綿や着荷争ふ船の順
風雅男の睦み美し菊合せ
朝風に氣もつれをどく柳かな
歌申せ花の下なる雨蛙
鬼灯のはしき昔しを思ひけり
五位驚の夢破りけり蓮の音
講和風途切れて年も暮にけり
亡夫を偲ふや花の笛の音に
仁丹の廣告いやし花の山
深草は古刹の敷に青花や
花さかり知らぬ程度は風もよし
撫て〜行く霞に消る春の雪
七十三

15 拾參

庭先の榜にからむ蚊遣哉
立かへて新に涼し手向花
紡績の女工姦し花の中
夢に見る鎌倉入や冬籠
飯餡の味や明石の雨曇り
わんはくはせぬ約束や初裕
明残る月に芭蕉の雫かな
盆の月照らすや彌陀の普門品
逢ふ時の合圖にも鳴子引にけり
酒臭き扇拾ひぬ夕さくら
何事も待つ間か花を時鳥
八乙女も落葉役なり神無月
花に月龍宮に遊ぶ思ひ哉
鳴鳥に恩賜の義足忍はせて
瀬二ツになりて温むや溪の水
明け方の際立つ峯の櫻かな
菊の香や机に匂ふ今日の宴
人の道踏は苦もなし年の坂
鳥居迄駈けて流鏑馬仕舞けり
鍍汁や買へば命も賣る男
夕顔や零落泣かぬ扶持離れ
此里の成金黨や今年米
湘南も飽きて故山に安居哉
老も來て添へる力や小松引
鷹狩や家に傳わる猿袴

15 拾四

初午やかつて戻る大布袋
蝶哀れ／＼身の秋知らぬ振り
揚る程聲の廣かる雲雀かな
腰折た言葉遣ひや梅貫ひ
鳥の巢に朝日の匂ふ椀かな
敷まよふ莖や爰もこゝも花
工風した功譽らるゝ花火かな
初夏や巖をつゝむ苦の花
春なれや祇園精舎も花の塵
末遂げぬ戀を包むや絹蒲團
田鼠の化せし鴉よ今分限
若竹の雨に巻きけり一歌仙
初東風や我南す鶴北す
雲の峰小町の歌に崩れけり
富士の影浮へて廣し春の海
長閑さや牛追ふて行く繩手哉
雉子鳴や消へて跡なきなれ雲
稻妻や斷食堂の荒格子
如月や雨の戸へ來る植木賣
追ふ人も牛も小唄の春野かな
施肥急ぐ茶畑に霜の別かな
寺門入るに木の實踏み音ありし
失戀に聞やむし音高軒
手の牙に梅雨の音なき鼓哉
薄くとも及ぶ色なし山櫻

15 拾五

松風の耳に澄む日や置扇
かくれても光りの見ゆる螢哉
富士白し野は若艸の青曇み
戸を締て見たり明たり後の月
尊さを覺へて寒し不二詣
炭つくや姑の氣に入らぬから
新涼や茶漬をはめる京の客
縹緲の雪に静けき菘かな
投網に散るや入江の雪の峯
月一ツ世はささ／＼の眺め哉
夏瘦て茶漬に大根をろしかな
高からぬ香こそ深けれ福壽艸
鼻たれか頼光と成りし壬生念佛
鳥の巢や塵一ト筋の工みより
いた人も静そ夕柳
若結や矢を射る水を逆登り
師の思は墨よりも濃し筆初め
立皮の櫻や句碑を守るかに
白萩や庵の出入をせはめけり
切風の行衛は八重の汐路哉
師に敬享て座禪や蛙の戸
公達の御意に召しけり奴風
歌は世につきし雲わく花の峰
雨一過御山洗ふて晴れにけり
雪佛一ち夜の内に生れけり

七十四

15 拾六

松も聲無き日を蟬の時雨かな
翔う手に涼味の通ふ清水かな
花の慾月に見られて戻りけり
梅はまた堅く垣根に残る雪
吳と越を隔てぬ垣の櫻かな
舞ふ程のちからは見へず秋の蝶
梅に添ふ月また細き餘寒かな
佛手柑や陳南嶺の軸の前
白蓮や思はぬ露に濡るゝ袖
假初めの曇りにあらず花會式
散る花に影引く法の燈しかな
一人足らぬ心地や爐の名残
供養ある寺や牡丹の眞盛り
殿に社は寂ひて松の花
嘘言はぬ赤心誓ふ繪踏哉
遷化せし高僧の居間や茶立虫
孝に富む娘はもてと娘賣り
挽きこほす茶臼の塵や冬牡丹
名月に鎌とく草の戸口哉
彼岸會や外面菩薩の聲撰
春樂し花と歌とに富る國
菩提樹の實散り三千院の午
月の海中や一ト筋松六里
朝顔の後ろにもせぬ隣かな
海にまで花の匂ふや櫻鯛

15 拾七

濡れ色に明て涼しき野山かな
名月や亡き身と今日の戀し鳥
憂さ秋は夢と忘れて花に月
園ひ女に身受せらるゝ團扇哉
行年や大事からるゝ海老の鬢
雨を呼ぶ煙草の畑や秋暑し
舞ひ上る鶴は花なり放生會
海底に届きて高し秋の富士
踏んで來た富士を見返る麓哉
世の義理は人に限らず寒苦鳥
百歳の齡を寒食に誇りけり
鳴や千鳥俊寛一人救にもれて
何を根に鳥の浮巢や水の面
曳拾た電車や杉葉を釣し門
波に根を洗ふて涼し大鳥居
春雨に師の徳仰く机かな
敷替て氣味よし初夏の青疊
万斛の露をく朝の廣野かな
親の跡しどふてつゝ鹿の子哉
釋奠や雀忠々鳥孝
人蔭に母のはゝ笑ひ踊かな
蝸牛曰く何故人は家を賣るぞ
冬の川早や一ト年の流れけり
掛け香や遺墨に薫る筆の跡
人造の露に涼しや庭の竹

15 拾八

ゆるやかな水車の音や梅薫る
身に開らく譽れの花や縣召
瓢腰にふらり／＼と花見哉
三尾共赤う染けり照る紅葉
年切れの柿と並ひて歸り花
散る花一重も八重もなかりけり
圓満の家庭目出度し生身魂
夕顔や押へられたる様な軒
雪積むや萬籟死して月淡き
剪り捨る髪惜まれて魂祭
人の山藪採らす五加木飯
隣り田は植こしらへや麥の秋
春風や大湖と前に家二軒
綿一重着せたり後の裸雞
桐一葉萬感胸に通ひけり
溜め欠伸隠す禿の團扇哉
枯枝に鳥とまらす春の暮
飯ひつに蠅一ツ來て夏近し
打水や心やしなう夕眺め
成金と見へぬ功德や施行米
此花と此君によき家想かな
棘け木踏み蘿掻き丘に墓探る
年の花四海一時に開きけり
素裕や兎角女はやせたかる
垂柳水に理想を描きけり

15 拾九

大船や雪と見込て水用意
佛舍利と思ふ光りや蓮の露
狸猫の噂の折やうかれ猫
鈴虫や雲井の奥に秋の聲
炎天や流れ藻ふかく潜る魚
海棠や櫻を餘所に物静
難抱て要領を得ぬ使ひ哉
菩提樹の蔭に一夜や渡り鳥
笹鳴や木の間も陽の座禪石
片袖の昔しなつかし螢籠
捨て世に捨ぬ道あり寒念佛
待つ花に一日千秋の思ひ哉
雨風の荒も見へぬや苔の花
靈魂は不滅ならぬや花供養
朝顔の這ふやぬかりし竹箒
月の雪寝惜しむ里に積りけり
双六の都入りする春の雨
花か雲か雲か花かや吉野山
洞穴に佛まします清水かな
矢を捨て孕む女や葵咲く
凡眼に愚とこそ見ゆれ溢紙布
大門の入口守る柳かな
西洋の禮儀嘲ける紙子かな
子供餅切る傍に並ひけり
礪や散りて残りし人の花

15 貳拾

書心を譽るや竹の植工合
無遠慮に夕顔窓を覗きけり
鶴は我が長壽の支や松の花
動なき國の基や紀元節
夕蟬や寝る木さためて一しきり
頭陀の底叩は句あり土用干
小供等は小魚あさるや春の川
鹿啼や隣家といへと小一町
島の灯の一ツこほれて夕霞
悟り得た刹那や蓮の開く音
功遂けて煙となりし案山子哉
假植の杉の根元や忘れ霜
子をはめて親に及ぶや鹹立
山茶花の白きか淋し雨暮れて
釜日する充てか手桶に梅一ト枝
白雲を蹴立て鷹の癖出哉
ぬれ事の覺へはしめか水祝
四眠四起神慮に叶ふ露哉
露の道羽織長しと思ひけり
五月雨に湧くや瑞穂の田植歌
書心も浮むや春の海と山
阿字塔を著きにひたし秋の水
水無月の花や日中の俄雨
花を見て思ひ出深き菘かな
ゆゝしさや雲の中にも笑ふ梅

七十五

まかぬ種とは言う物の艸の花
蠅一ツ和尚の頭よりけり
初世徳ふ三世の義務か花供養
天津人羽衣掛けよ松麗
佛の日折よく花も咲く日哉
叱るのも慈悲の餘りや二日灸
踊る夜や結ぶの袖の通ふ暗
初汐に鳥立つ芦の玉江哉
椎の木影に行脚の晝寝哉
子供デー遅日に御伽芝居かな
菲刈りて灰振る朝や渡り鳥
此奥に瀧も有りそう夏木立
人も来た餘所へも行ず秋の暮
鶴のふむ足音聞ゆ薄氷
御忌の鐘春一杯に響きけり
拾石も名の有る庭や苔の花
墨染の櫻に月の輪架装哉
道問へは雪に指さす櫻かな
いや高き天津御空や初日の出
伊勢をさす笠の揃ふや春の風
陽炎に立添ふ香のけふり哉
錢を蒔く旅も望ます畑け打
降り積る雨に色増す若葉哉
美しき手入や菊の花盛り
暮守の小家佗しや木瓜の花

かさし羽を衾に鶯の浮寝哉
拂ふ間に小袖で消へけり春の雪
日三尺鶯三聲鳴ききにけり
真心の薫る蓮の臺かな
花に噂叩いて無我の快樂かな
佛の座御法りの花に摘まれけり
涼しさやいつまで見飽かぬ月
又しても猫の飛付く手鞠かな
前向ぬ花の意地あり冬椿
史に漏れし御陵探くる春日哉
つくねんと一人樂しむ庵の花
出心のすくむ日もある二月哉
親心仇に着ぬ子や夏ふとん
枕廻張る乳抱へて覗きけり
かしく迄讀まさぬ文や火取虫
月三更芒も影を定めけり
肥遺ふて釘を利かせる頭巾哉
葉櫻や七日は夢の一昔
掛香や愛も溢る、薄化粧
五山皆紅葉の寺と成りにけり
鳴さして鳥居なをりの落椿
裏返す風美しき青田かな
江の島も景色眺めて沖繪
佛生の世に曇りなき會日かな
江の島の松百態や今日の月

氣にをうた咄しにたむ扇かな
葉櫻の京に名残を惜みけり
世に浮ぶ雲井草紙や雁の聲
星今宵天地に懸る光満つ
鶯も回向心か法の庭
曲水や歌かきそへし小盃
月涼し勞れし足を延ばす椽
乗るも憂し弘誓の船や秋の風
花嫁に縫はせん花の旅ころも
胸のすく薬とも言へ酢薑賣
一村の鼠賊さや百舌鳥移る
彼岸會や御堂に餘る法りの花
椿の實落た計りや菫の留主
參謀は六年生や印地打
菖切や芦にゆれ込夕日影
入込にならぬ樹ふりや遠柳
鶯に問はる人もなき昔
浮く鯉に重なる橋の日傘かな
世事總へて兒戯に類せり年の暮
春風や涼し待間の茶椀酒
今更にせまる涙や迎ひ鐘
牛を負ふ娘美し桃の里
やかて出る月に巻きけり青藤
體育の養生處や若葉山
雁風呂や燈臺守を一の客

日清の勇士も老て網代守
晃々と朝月冴ゆる法の山
白浪の裏吹きかへす芒かな
悟れ人浮世は桐の一葉より
辨天の祠は古し藤の花
關守りも七日は花の主しかな
惜まれて花も果たり春の盡
飛智恵の日毎増しけり雀の子
中浪の濁りも澄んで後の月
切風の行衛は八重の沙路かな
一日の爐に松風の名残かな
月涼し寄せては消ゆる浪の色
霧深く朝の景色を包みけり
汲切れぬ慈悲の泉や花御堂
送り火や早月代のひかし山
鶯に鶴の吸物冷しけり
色に添ふ香の豊なり稻菰
幾昔今日を忘れぬ時雨かな
編笠や何か忍びの人らしい
鳴かて飛ぶ一羽鴉や秋の夕
年木賣樽頂ひて戻りけり
ついで其處を雨脚をれる夕立哉
名月に秀句の下僕召れけり
子を賣た身の代塞ふ敷へけり
軒ひくう易者の暖簾や秋近し

花に來た家にてあり神無月
鳩ボツボツと鳴ひて宮麗
不二仰く眼前に舞ふ蝶々かな
袴着や瓶を割る智もあらまほし
道を問ふ人となりたし春の風
雁船の並ふ湊や戎講
生き延びよ七十五日初松魚
分け入れは涼味迫るや夏の山
春雨や居尻の長き遊客
命にも歸り花あり暖め鳥
袂紙昨日の松露掴みけり
何になく心に浮ぶ魂祭
隣から手紙の來たり冬籠
國寶の山門高し冬木立
濱萩の聲に引る、夜沙哉
半分にして子戻る甘茶哉
金泥の紺紙輝く夏書哉
亡國の古郷を流れぬ秋の水
河豚汁や風百の愚論何にせん
帽子脱く檜の宮や春の風
思ひ出す日敷と成ぬさし柳
魂棚に金鶏動章光りけり
琴の音の洩れて床しや青簾
若艸や雨の一日にのひし色
今一度蝶吹き返す風もかな

唐からし明家の棚に残りけり
朽ち果てし柳も青む日和かな
荒鷹の羽風に松の嵐かな
師の在す様な言葉や魂祭り
川狩りや机に倦みし身の保養
悟らねはならぬ浮世や花に風
露營士に猛き蚊軍襲いけり
家貧にして梅に好く長者かな
酒買にやる妹もなし秋の暮
寒菊に雨降り足らぬ寒さかな
香は六ツの花にはあらず春の水
春寒し野は三ツ山は六ツの花
山菊に俳趣味多き小道かな
見る物を見ぬ喜ひや蚊蠅の波
また足に添はぬ草鞋や朝の霜
禪機稍々熟せんとして時鳥
苦清水探りて雲芝見出しけり
松風の外は通さぬ夏書哉
杖にしてトネル潜る日傘哉
雨の月千々に亂る、心かな
琴の音や隣から散松の花
人の世の上には苦はなし飛蜻蛉
開くとは開ても嬉し年の花
閑伽を汲む細き流や枯尾花
失戀の戻る夕へを鹿のなく

蚊所や朝から聞らさ家のむき
ゆつたりと後れ毛かくや勝角力
存外や雨雲退て今日の月
須く天下美化して散る櫻
碑に其の名はうせぬ苔の花
月ヶ瀬の宿から來り梅曆
儉約の灰に包まる炭團かな
曉や千草に月の宿る露
世の慾をはなれて花の出立哉
天の成す地の成す美なり花に月
木の實探る祈願はどきの小半日
をたかに髪結合ふや花の友
水音の遠く聞ゆる茂りかな
俗腸を洗へど涌くや苦清水
日に餘る手業を掃の明りかな
花よりも氣の張る袖や御忌詣
松風も雪となりけり須磨の朝
時雨や卒塔婆の文字に浮く滲み
田の面に蛙の平和會議かな
人の世も古るし櫻の知る夕へ
人の名は石に残りて萩芒
鰯賣や女なからも江戸なまり
カバ履て足袋の汚れを隠しけり
近そうて遠き枯野の在所哉
若草や看板書のこぼれ墨

春はまた寒し千鳥の忘れ啼
弔意表す様にも見へて花電車
哀れ如虎河邊に鳴て春の月
口切や宇治は天下の御茶處
花ちらりほらり樂しや旅衣
腰にする猿の鬨や薬堀り
葉櫻や昨夜雨風強よかりき
花七日翁さくらの名もあれと
咲かせてはふりやむ雨や杜若
親負ふて花見の花と見られけり
出るひまの無き身も花を惜けり
時雨めく雲の走りて九月盡く
宮角力や日和もよくて月白押
別れとは聞く鐘の音や夕櫻
鳴集う虫や千艸のしけみより
散る花も名は千代迄の櫻かな
覗く方か前へ手の行く沙干哉
其色にうつるも露の誠かな
遣り操りの嘘も道具屋大三十日
花の雨鵲と憂を語りけり
用の有る振りして今日も櫻哉
朧月なまめき過ぎし女かな
昨日まで悪んでいたに初鴉
今日は夢昨日は花の主かな
順禮の戸毎に立つや今朝の秋

めく見合月日の忍や實る稻
灯とせは驚動さけり籠の虫
菊の香の高きを今日の手向哉
蓬萊や萬古不易の松の色
家起す鐵に錆なし畑打
菊根分して治豊酒を祝ひけり
氷る鐘酒屋の宵寐叩きけり
雲一去一來秋に隣る空
霧晴て船は湊を放れけり
遠くなる驚をしむ出船かな
鼠狩つて後の夜長の淋しかり
我子より大切にする蠶かな
打返すゆとりもなくて年の浪
父戀し菊萱堂の秋の暮
假面箱や昨日の花の二三片
色も香も男めきたる粽かな
心より引出す秋のこゝろかな
眼の慾に心の迷ふ花見かな
鹿鳴くや喜撰か庵も我庵も
朝風の清き餘りや初霞
頭陀の米雪の雀る減しけり
大望のあるとは見へす葉竹賣
高けれと履心よし手縫足袋
をたやかな水の流れや春の川
花鳥も謳ひ勞れて暮遅し

大岩の許水深ふ小船とふ
追憶の涙をそゝる落花かな
菜の花や尼とは見へぬ鐵道ひ
土と香に立つ日を菊の根分哉
白魚やさらりと輕き朝料理
佛門に入りて蓮の香慕ひけり
昨日機をろして今日の袴かな
散るにさへ一景色ある櫻かな
鎌入る小口も見へす稻の出来
在天の靈慰めよ揚雲雀
乗せて出す九十九笈や鮎繪
遠慮して衣手寒き火鉢哉
踊り子や勞れて休む艸の上
葛城の神と佐保姫遊ひけり
朝顔の花も昔しの夕邊かな
手の胼を見込んで嫁に貰ひけり
草鞋履く癖に出代さゝれけり
後ろから來る人早き枯野かな
初鶏や世も新らしふなる思ひ
鳴立て夕寂深し澤の雨
山里は櫻にうさし蠶とき
貰ひ合ふ風呂に睦みや麥の秋
春の夜に舞ひ勞れたる少女哉
素焼練る手陽炎のもつれけり
長閑さよ野邊に親子の二人連

鈴虫や琴引く手をひさに置
天に月地に白菊の盛りかな
蠶飼ふ村やひこりは生佛
神々は木曾を御料の茂り哉
手向けり君か手植の八重櫻
重ねても恥は冠らす鍋祭り
居留主をは妻に云せて大三十日
葉と成りて花の傍古ひけり
師の遺稿探る夜更や時鳥
筆止めて鶴鶴と語る日永かな
朝寒や口溢る藥石に吐き
八景は霞て見へす三井の鐘
月の出て廣かる梅の匂ひかな
世の事は耐忍にけり雪の竹
佛子拈の拳に月の雫かな
朝露の間に手向たし蓮の花
蓮の香や物に納まる朝心
泥足て嫁引合す田植かな
夏やせや若き文士の自然主義
菴道の夏戀き夜とはなりにけり
指折れば十三回は夢見艸
梅の主層の様な翁かな
竹垣に冠せて干や洗足袋
脚早き雲の往來や枯野原
鳴あかね心いとしき蛙かな

編蝠や土橋の下の砂篩ひ
花毎に墨染の袖ぬらしけり
露白し星の逢瀬もすきし頃
秋津洲を廣げる菊の根分かな
松風は眠りて蟬の高音かな
夢は覺め果てけり花は散る昔
笠持た人に義理あり虎か雨
迷ふ氣になりて雪道敷へけり
嬉しうてならぬふりなり蝶二ツ
惜陰と大書してあり桐一葉
田螺取鳥に頼み蹴られけり
玄關に返事待間の寒さ哉
天壽亭で菊に餘生を送りけり
芋畑は堀荒されて後の角
遠里の霞となりし夕煙り
世の富に舌を鳴らさす菊の主
心學の道話は果て露の音
水は世に出る道も有り閑古鳥
好な顔計り揃ふて十日菊
秋の鐘我が貧骨に對へけり
蝶の舞何そなたふて居る哉
納涼や噂の人に譲る席
淡雪や文箱提げたる蛇の目傘
水仙や厄は和讃の朝勤め
磁石出してはかる野道や春の風

彷彿として受ませや蓮の花
春惜む人の集ふや瓊曉祭
拜む碑に散るも紀念の櫻哉
澄切て晝をあさむく月夜かな
霞み入る船や湊に名の残る
献立の外の風味や露の臺
春雨や文箱明れは返し歌
日毎汲む朝井の温み冬近き
由緒有る國寶寺の櫻かな
一聲に影もどめす時鳥
白菊や法親王の歌の撰
最う汽車も珍らしからず田草取
餌にふじうした聲でなし雪の鳥
鶯や下手に啼のも面白し
葛の葉の裏も返さぬ暑さ哉
托鉢の僧呼もする彼岸哉
阿字悟る心の易し露の音
秋雨や神燈暗き森の道
天地の窮は知らず岩清水
寂た門へ納涼のむしろ戻りけり
露にさへあるや船の長みしか
獺毘を潜り抜けけり三十三歳
瓜の灯て履く織き足袋の主哉
草の實のつくや枯野の在所道
菜の花や郵便入れる村はつれ

花に雨鳥も哀れを謳ひけり
艶福を機待する妓や油花のト
雪解や鞍馬の僧の高足歌
梅の主歌仙の輿儀悟りけり
我戀の間は照らさす螢賣
懐かしき友は更たたり月の秋
木の皮の儘の鳥居や蟬の聲
戀の火の種かき探す炬燵哉
女郎花早夕暮れの小道かな
神力を頼んで雪の登山かな
散りかゝる花や雀の柿衣
春雨や別莊建てる木こしらへ
己か名の川を渡るや角力取
心なく切りし糸爪の雫かな
翌日は誰か夢も包むか旅の蠅
寝て伸す足や柳の伸る雨
花數百勿驚大牡丹
涼しさや月其儘の通り雨
鶺鴒ひの留主居を妻の念佛哉
花の留主世に捨てられし思哉
養父入のつまの揃ぬ餘寒かな
天地の力尊し四方拜
行春や史績拾ふて京に入る
夜櫻の人出す雨の格氣かな
荒磯も静かにあけて初日の出

花は數有も尊し稻の花
南無く入齒抜けけり寒念佛
炭焼やいの字も知らず事足る
鐵瓶に松の聲あり櫻炭
散る花や思ひ餘りて歌もなし
長閑さや理想の歌を磯馴松
色褪せし錦も交る落葉哉
青柳にすらり消へ入る二日月
夜は帛紗かけて置きたき牡丹哉
蚊屋の浪夢の浮舟うかひけり
茶の花に道聞く里の訛りかな
何時なく指輪のゆるむ夏瘦る
月の松一樹の景色かな
病葉や藥にもなる艸なから
朝寒や光る程ふく長廊下
思ひ出にまた袖濡らす櫻かな
寒さ日や焚立飯の晝旅籠
虚榮の夢包みけり絹ふとん
抱籠や塵の巻を越超し
眉白き人に親あり桃の宿
香も高ふ時雨る花の雫かな
入梅や雲に隠る塔の先
鳴く蟬や一トしきりつゝ處替
矢立曇氷る寒さや樽拾ひ
今年また花散る故師の忌日哉

青鸞のはねの下なり鳥の松
迷ひをも悟りをも照す燈籠哉
風包む雲は動かす冷し瓜
初職初實に一門の譽れかな
吹く風に色塵かせて草若葉
法りの庭苔の下露光りけり
涼しさや須磨全景を籠れ越
茶の寮に雪の友垣結ひけり
刺さへ茶臼挽とふ花の留主
史にもれて芒に埋る御陵かな
花の文雨の枕に敷れけり
勝の幸ちあれと菊の根分けに免
倭にも祇園精舎や花御堂
涼しさや實に極樂と思う風
涼ゆれる柳を移しけり
葉櫻や鳥の遊ぶ大悲閣
田の果に遠富士見へて青嵐
雨毎に山のかさます四月かな
三千坊包み裸せて夏木立
色褪せし簾に残る暑さかな
仇花も初手はかそへて飄造り
遺稿編む筆の淀みや秋の雨
三千の宮女顔なし白牡丹
素通りの心は寒し慈善箱
長閑さや窓明け放つ施療院

風に散る家根の五形や花見堂
彌治喜太の引ばり合ふや貨蒲團
龜鳴くや世に残る名の一ツ石
春風や堂建立の地鎮祭
志す伊勢桃山や春の旅
稻の香に世の豊さもふくみけり
行々子鳴くや芦間を潜る波
時津風時雨送りて来りけり
養父入の笑ふや母のまるけ髪
相繼に打川杭や唄うらら
斷尙残る時雨の岐路となり
泥足のかわひて目立晝夜をき
住馴た我家にもあり秋の暮
留主守る操に聞くや氷る鐘
梅か香を盲目の響て通りけり
一溪の水千町の青田かな
見更して孫に冷たし月の霜
舞くや柳の下は瀬もぬるし
憂百萬帝都の壯を陽炎す
風呂焚てあるとは嬉し雪の宿
惜まれて暮れる小春の野山哉
足らぬ乳に袖しほる夜や啼千鳥
蟬鳴や廻りのおそき水車
雨一ト日眠れる山の笑ひけり
種粉や鹽水撰に如くはなし

朝顔や明石の苦やはのく
花待やいつも在す心地して
淡雪や日のちら付て一とたるみ
蠅を出て廻に入る聞の勤かな
夜櫻や只醉眼に美の揺る
懐しき碑にをどつれる彼岸哉
大夕立巨砲の埃り洗ひけり
浮れ来し世のはかなさや花に風
朝晴の清き空より桐一葉
瑠璃の海瑪瑙の山や初日の出
須磨よりも嵯峨の物らし春の月
開澄す程寂の有る時雨哉
辻か花ならて海老茶は茨の花
琴よりも虫に寂あり嵯峨の里
一ツとは無心小さし唐辛
麒麟兒の出た里古し桃の花
鶯を籠に啼せて梅に月
新ら敷出来た道あり春の山
臺所に猫の噓や今朝の秋
人來ねは鶯も啼かす秋の暮
眉取た額のさひし秋の風
追へは又廻て來たる蠅蚊哉
功しを塚に止めて枯尾花
綺羅飾る菩薩に春の灯哉
百姓の赤禪や山燒す

深艸に闇もやふるに露明り
ホウ塚に枝垂る雨の柳哉
打水や京は琵琶湖の盈れ種
先つ了る華燭の式や絹布團
湧過ぎた風呂に水待つ寒さ哉
破れ垣も覗けは床し白牡丹
聖徳は普く廣し貫駒
梅か香や月は僕の上に照る
立聞の春中を叩く柳かな
摘艸や墓に参りし戻り道
湖景の座夜は水鳥の近か啼きて
生魚の戸棚に光る五月雨
梢から淋しさ告る一葉哉
人稀に七堂寂て冬木立
月花の味を汲合ふ雪茶哉
花散て人の心に戻りけり
訪ふ庵は空しく荒て破れ芭蕉
世の味や新茶に白湯も出しか
俗塵を詩化し美化して積る雪
注連張ていたわ神の櫻哉
雲井迄道ある御代や不二詣
夕顔に一人り酒酌む文士哉
よき風も月も出にけり夕納涼
祝砲の響く御空や初日の出
世の風に靡く柳の惻巧哉

麗はしき花形見や櫻の實
紅葉して驚く旅の日數かな
夕顔の葉越しの月や膳の上
聖人の意思に叶へし柳哉
洗濯の竿潜り行く燕かな
諦らめた目に面白し散る櫻
苦と樂の境や透し蚊屋一ト重
風かるふ吹くや彌生の嵐山
尼寺を吹なやましぬ秋の風
佐保姫や海邊の松を裾模様
一トしきり男松の琴や梅吹雪
灯を入れて際立つ雛の座敷哉
夕風は下りるに物價皆上る
吹揚の水に色添う西瓜哉
誰か末の戀衣かよ蠶守
花は散り易し月日は過易し
夜半の鐘十夜の鉦に紛れけり
先代の物好見へて土用干
橋へさす二階の燭や枯柳
虫千の經千巻や大伽藍
有し世の咄しやつきの魂祭り
夏の月馬乗り通す淺瀬哉
花の雲浴ひて鳥啼く山路哉
智恵粥や似て似ぬ人の歌袋
禁酒など言ふ人も有り花の山

腐りても鯛や編笠着ながらも
苦剃ひてよむ碑や梅の花
流笛一聲若草戦く堤かな
蚊は稀になりて殖へけり虫の聲
座敷廣う名刀の威に汗冷ゆる
聲に富む松は涼しき菜かな
月の梅折りに出た氣の恥かしき
鶴遣ひや一ト夜に罪を此處彼處
聲長ふ引くも名残や春の鶴
世に不足なくて見足らぬ櫻哉
繪踏せぬ男聲にはせさりけり
氏素性かくして梅の主し哉
雨の萩もの哀れを知る日哉
帆孕む風を取次く柳かな
秋風の吹くや芒の戦きより
汲こほす水は氷れど梅の花
とちらにも嬉し放した鳥と我
鏡餅一家目出度き丸み哉
何に利く物とも知らず薬堀
名月や俳句川柳詩の天地
寶櫻に過しさかりの説明哉
碑を建て師恩報ゆる紙衣哉
堂守に悟道の句あり散櫻
掻き分けて鶴の妻呼ぶ落葉哉
なき居士の追想ふ鐘や初時雨

富ますとも無事か實そ宿の春
曉けの江や漣み撫て風光る
葉櫻を待て生る佛かな
濡れ箋の片荷に重き蜩かな
月涼し水に亂る瀧の糸
寝た鶴の翅光るや月の松
淡雪や浮艸ほしき庭の池
酒肴運ふや花の庵まで
白魚の色に味さへ知られけり
折くは風も手傳ふ鳴子哉
庭たき神の浮橋潜りけり
秋風や誰か身の上を啼鴨
假初に見ては戻らす初櫻
葛水や脱ぎ捨て有る舞袴
藪入を呼び出しに來つ若旦那
文王の宴を罵る柚味嚼哉
愛らしき花見疲れの寝顔かな
忍冬を茶に呑里や鹿の聲
紫陽花に寮守る戀を語りけり
古池の水は盡させす啼蛙
虫啼や出水の跡の八重菘
玉簾の瀧と見えこふ水柱かな
蚊遣りして富士裾野を隠し鳥
母と子の二人世帯や秋の暮
掃除した跡の塵なり落椿

晝も斯ふ欲しき柳の螢かな
毛氈の裏はす春の別れかな
辛き年何も子故に暮れに鳥
荒景色さすんて虫の高音かな
羨冷くや鳥の抜毛の江を走る
笑ふにも種なき夜也萩の聲
達摩石を蜻蛉の輕う叩きけり
袖風呂に風暖き匂かな
羅や子猫抱へし袖の皺
人の田へ飛へとは追はず稻雀
孝々の茂る咄しや竹の秋
散る花に添ふて魚盤の響き哉
一聲に鼎座崩すや時鳥
名月や雲帯る間を夜の色
鹿鳴や山又山の杉木立
葛の葉の裏も願みや秋の蝶
湯は水に戻りし頭を茶立虫
深き夜の西に残りて郭公
蟹にも聞こへて淋し秋の聲
百千鳥鳴や水にも魚の浮く
園や村長一番の賞風呂
時鳥會や床の遺墨を偲はる
梅の雪左遷の衣濡しけり
掃く跡へ心の戻る落葉哉
落付と世は静なり蝶二ツ

漣も無き海原や初日の出
君か代を唄ふも嬉し雀の子
芥子咲や軒に謹む暖拂ひ
こはれ麥五月の草と成りにけり
馬乗てせまき渡舟や夕時雨
白菊の香にすむ朝の心かな
碑も響て見上る花の梢かな
鶯の鳴た木も夏木立かな
拗ねし身や世の花よりは筆の花
歌種も埋れし雪の野山哉
燭の灯に雛の黛光りけり
我に足る冥加を分けて粥施行
恙なく暮静まりて花に月
言ふて居た白菊に勝取られけり
小姑の口にさしたき終かな
雨も添ふ片われ月や啼水鶏
意氣揚々追手に舟の出初かな
歌塚やこほれ菜種の斑ら咲く
辻角力の關となりけり豫備砲兵
名月をしらぬ振りなる山家哉
此の上の望とてなし花に月
眺めく絹行燈の光りかな
辛抱の出来る見込や初帳
病院のカーテン古りて春の行く
梅に杖峻路溪谷辿りけり

峰入りて雲に隠る、後ろ影
経伏せて奈良の鐘聞く彼岸哉
寒月や小走りに行く島田連
虫の聲車軸の雨に流れけり
駕置けと御意ある山路百合咲り
雲かくれしても名の夜の光哉
亡き魂を偲ふか岡や月隴
引上し鐘にからむ海雲かな
馬小屋の前に柳や秋の雨
鳴て行く國は殖たも初鳥
鳥歸る空に雲さへなかりけり
萬歳の荷物めかした鼓かな
青柳に月の 雫か夜の音
鳩の杖まで雲に入る彌生かな
ゆるやかに曳出す鈴の囁かな
鶯の咽へさし込む旭かな
聲を待つ物に秋知る磯家哉
鹿鳴や或夜ひそかに若葉ちる
握る手に光りの餘る螢かな
献上になるは果報や若狭鯛
たしなさにさかして見よ櫻の實
鶯の來ぬ日は寒き庵かな
雪佛作るも佛心かな
夕立の跡土臭き在所かな
乃木公の逸話に圍ふ火鉢哉

稻伏せば世は起返る噂かな
梅は早蕾調へて春近し
二番茶を通る女なの唄た高し
朝顔や散らぬ力のありながら
羽たゞきは都鳥なり花の川
降りや雪我れに酒買ふ餘財あり
咲満て聞奇せ付ぬ櫻かな
から錦深むや秋の手向山
何姫と申さん春の富士の山
舞姫の扇に移る牡丹かな
柳柴の露猶清く思ひけり
つとひけり法の菫の花のかけ
清光を見るのみてなし今日の月
白菊に紙燭の利かぬ月夜哉
鹿は子を持て楓は若葉かな
朝顔や戀知らぬ身の色好み
河豚の友再會期して別れけり
若草に脱し草履や紅花緒
瓜の馬木魚叩けは列やせん
百合戦く風や温泉汗を欄に拭
枯れ切て世に名をかきす尾花哉
日毎瘦る柳や雨に吹く風
五月雨や手垢の付し普門品
花賣りの舌打ちするや落椿
石楠花や山又山の妙義山

風呂戻り頭巾忘れて出たりけり
追憶に寝もせぬ夜半や鳴千鳥
冬寂れて弦歌聲無き里の夕
山に満ち野に満つ春の光かな
朗讀のどたへ覗けは晝寝かな
散る花や風は無常の音深し
赤帽の職務に暑し停車場
難の箸客も主しも握りけり
温泉の町の奥に藪あり笹鳴す
笈佛の雪見せて宿求めけり
反り橋に人の淀むや藤の波
花散て鐘に恨みの残りけり
松風を宮に残して神の旅
白菊や色に並らへる人こゝろ
人里を離れて涼し瀧の音
散るきは散らして切々芥子の花
又しても露に手の行く日永哉
寒いとは稼かぬ人の言葉哉
花の雪匂ふ雲からこほれけり
初日の出天地和合の山と海
捨て兼る妾の意見や油花ト
菊に鐵只我足を知るにあり
客にとて別な茶はなし桃の庵
置替る納涼床几や松の月
花七日老行日とは思はれす

雪解や障子に映る水の影
蝶舞ふやうとく、眠き長煙管
總付る糸持なかし散る蓮華
家移りの日から物賣る師走哉
放鳥付て來た子ををしみけり
月重し五更の鐘の霜に消ゆ
一ト本の櫻にも有る曇り哉
晴れて行く行く丈花の霞かな
鶯や寝心地よりは起心地
曇き日の暮れて涼しき月夜哉
置む中字治の柴舟下りけり
花ちりて春も秋され心かな
暮残る子守の歌や年の暮
馬つなく樹ををひしに歸り花
夏瘦や机によれば旅こゝろ
いさ花と言ふ迄寒き都哉
若草や百万石の舊城跡
名月や流車の窓から見る小河
貫るた子の名々め菓子や地藏盆
贈られし花環に春の灯かな
鯉一ツ飛んで長閑けき入江哉
老衰の親にすゝめつ藥喰ひ
伽らんにも餘る彼岸の法りの花
子の末を思ふて泣す二日灸
白蓮の汚れぬ九品淨土哉

能衣の汗を乾かす額屋哉
法菫の一座黙する時雨哉
亂杭に睦み合ひけり石叩
類は無さ菊に我家のほこりかな
親しさや訪ひ來て我れも晝寝人
春雨の業や折鶴くゝり猿
雲の浮き橋を掛るか天の川
佛燈も隠す蚊遣りの煙り哉
三吉野の紙漉水も花の露
淨財の沈む甘茶の盃かな
寺くゝに佛の産湯貰ひけり
雨に名を残して虎の涙哉
みの虫や母に涙のもろき聲
妾宅へ居籠もする旦那かな
やかて散る物とは見へぬ牡丹哉
追かけて花軸添へけり送り膳
陽炎や草の匂も添ふて立つ
弔詞書く燈の薄暗らし虫の聲
袖笠てくゝる木間や花吹雪
さなきたに開け行夜や年の花
川に添ふ爪弾ひくし鳴千鳥
嬉しくも花咲く日なり瓊曉祭
箔光る襖の鶴や御命講
兄除隊弟入營の譽かな
能き友は得難し花は散り安し

碑や添う梅共に世に薫る
花嫁の襟眼に立つ蠶飼哉
娑婆界で見ると果報や蓮の花
片つけたやうに止みけり朝の虫
いさよき湊放れや初荷船
丸き世のかさり物なり鏡餅
よい道へめぐりて出たり花の山
氣の晴るゝ風の戦きや稻の花
若船や人の心の浦に寄る
今年竹雀一羽にたはみけり
白浪のよするか如し鱗雲
香焚て雨聞く秋の夕哉
戀も又佛果の種や文學忌
山櫻一等國のかさしかな
子も金子も育て上手や冬籠
鶴の毛に撫た艶あり木地爐椽
散る花や今に残りし門扉の詩
龍の吐く御手洗水の温みけり
外ト井戸や踊り崩れか勝手香
寝心や蛸にわかれし昨日今日
佐保姫の渡り給ふか虹の橋
日傘はかゝさす神は留主乍ら
覺悟して居ても淋しき魂祭
夏瘦を鏡に恥る女かな
花は葉に追れて春の名殘哉

さし引の汐や芦芽の見へ隠れ
禪僧の粥煮て在ます頭巾哉
子福者の旅運みして春隣
菊根分けく四方へ廣げけり
月出て、いよ、踊の盛りかな
陵に仕へて老ひぬ落葉かき
吹て食ふ芋粥味し雁の聲
噛み殺す欠伸に寒覺へけり
松影や扇疊めは茶のはしき
時鳥按摩も坪を外しけり
文箱から蝶も出そうや垣見草
數なきは二世の誠か筑摩鍋
咲花の裏や静に春の行
慈善家に行荷買はるゝ蜆哉
草餅に七野の色香集けり
宿取て花に出直す羽織哉
卵の花に纏りかぬる夕かな
惜しむ日の傾き安し春の山
田樂に扇のをいや花吹雪
春寒し呼出しかけて電話口
待つ癖のつひて寝られす郭公
笛悲し櫻散る夜の一月寺
和合には淋しみのなし秋の夕
駒下駄の素足も軽し宿浴衣
散る櫻昨日は花の昔し哉

春雨や女中宿直の貝合せ
足る事を知れば氣安し梅唇
暑くとも扇をたむむ神の前
立咄しとちらも花を惜む人
木屋町に逢ふた夜もあり鉢叩
歴史にも名高し花の吉野山
たのもしや梅も實生の花の春
怠たらぬ身を安けれ年の暮
筒井筒花や昔の初櫻
夏瘦を握つて見せる手脛哉
際立て暮るゝや秋の富士筑波
譽れ名を残して惜しや散牡丹
氣短は事遂られす郭公
月に隈あれかしそ出る踊り哉
動かすに働き見せる案山子哉
雪等も早陽炎のはしら哉
八州の山野は晴れて稻の花
懐かしや花の木蔭の君か句碑
運動は身の健康や子子虫
天地の玄妙はこれ玉の露
今更の悔悟及はす秋の蟬
神迎ふ笛に合すか松の琴
日毎折る木槿小枝て濟しけり
短日や糊付物の二日はし
鴨引て池に水輪を残しけり
八十三

17 拾參

恥かしい方へ傾く日傘かな
鐘つがて淋しき寺の銀杏哉
生國は何れの者を愧儡師
山檀の照り初むる日や渡り鳥
洗ひ櫃懸る手に来る蜻蛉哉
わさわひの門守れとや壬生念佛
灌佛や天地指さす寺の椽
桃陵を拜して花の觀光團
亡命の客訪へは一詩あり暮の秋
人の非は言はぬ柳の主かな
蝶鳥に麥の秋風さわりけり
蝙蝠や化粧の水の流し處
川狩や慾の届かぬ竿のさき
生身魂慰安に望み尋けり
小娘のたすき掛する難料理
見ぬ花に心のさわる雨夜かな
瀬音にもゆるゝと思ふ柳かな
餘所に鳴る雷聞て暮暑し
白雲の花に漂ふ夜明かな
初日の出乾坤和純新天地
掛聲も活して來たり初松魚
大寺の庭閑にして落椿
耳の筆玉なす汗に沁りけり
釣葱臭は舞子の復習かな
雪の門誠の友の叩きけり

17 拾四

公達の御微行もあり梅の中
手綱引生駒の山の霞かな
豊の秋降りく小判の色に出て
親慕ふ咄しのやさし角力取
糸遊や紙漉く水のさ濁り
身に咲す花の蕾か寒けいこ
聴もく皆耳よりや花のさた
大根引老も出て來る日和かな
蒼くも花拜むも花の御堂哉
蝶は舞へ我は謡はん花の中
遣ふ鶴に勞れの見ゆる淺瀬哉
花守や茶の宗匠と知らざりし
限りなき慾にも足るや稻の出來
葉香を作る見先やみそさる
尙齒會梅と桃との林し哉
一日は身を知りにゆく櫻かな
梅一輪天下の情氣を一掃す
東風吹や都見せむと友の文
負軍芒も槍と見へにけり
蝶く花折る心知られけり
師の蔭に倚れば涼しき身なり
碧麥粥や腕を資本の移民村
秋と名の變りて清き水の色
小春日や愛馬に鞭の打ち心
身の飾りひかへて床し慕詣り

17 拾五

苗からの辛苦や今日を曠の菊
院門や鴉時雨でなきもせず
すへて皆諦めよとや除夜の鐘
翌日の夜へ歌橋かけん小望月
柿賣て煩ひもなき庵主かな
罪のなき子の見て勇む燈籠哉
人も悟れ我れも悟るよ花七日
秋の螢馬蘭の葉裏照らしけり
妻連て禰宜は湯治に神無月
杖よりも水を力の夏野かな
野佛の手に黙するや枝蛙
人と成る人の鑑や司召
桃咲や馴れては易き一軒家
暮遅き日を待兼て戀こゝろ
寝場所も無き迄露庭かな
賣る罪に買ふは情けや放し鳥
札敷に丹誠見へて菊の園
早梅や昨日の鳥か又見へる
研學の机へ六ツの花明り
半五俵去年より多し豊の秋
添へて出す菓子も新茶の薫哉
聴法の庭に花散る夕かな
筆も寝る間はなし月の硯箱
梅檀に斧打ては風薫りけり
枯菊や過ねは知らぬ人の徳

17 拾六

八十四
鶯や口紅青き奥女中
船頭や柳に繫く命ち綱
八景を一ト撫てする夕立かな
献立に乗らぬ馳走や今年米
初雷にすへ落しけり肩の灸
禪房の奢り句ふや菊胎
日は松にしつみて花の眞意哉
祝はれつ祝ひつ年の初め哉
佛畫師の筆洗の水温みけり
辻角力赤揮も交りけり
歌に詩に月見の御宴更けにけり
せめて此辭世に脇を魂祭
皆鶴に乗て來たらし尙齒會
船頭の揮白し辻角力
朝顔や花にゆかりの水貫ひ
魂棚や千草の花の手向露
月三更馬上の君に詩をそはん
若草や色鉛筆の削り屑
捕るは勇放つは義なり暖め鳥
秋立や獨鏡に向ふ朝
大あくらかいて居寝積む男哉
八朔や華表潜れば梅薫る
明て行く野に飛くの時鳥
引越の馬車の跡より時雨けり
春の雪消て常盤の松青し

17 拾七

蟲干や三世を偲ふ師の手迹
畑を打僧鐘撞に戻りけり
初市に引値無用と申しけり
君か代や天地事なき月と霜
露けきに閉せは蟲の高まれり
虫一ッ踏ぬ心や墓参り
水長く山閑にして暮れをそし
び直す兜巾の紐や郭公
花咲て草も錦と成りにけり
鶯や拙なきものは人の口
語り合ふ戀の凄さや木下闇
月涼し根上り松を洗ふ波
音見れば碧水躍る蛙かな
羅や蟬の小川を夕歩行
蝶鳥の來て誘出す彌生かな
碑の墓を拂へは花の添へ明り
雨聞て居れば水鶏の叩きけり
碩學を秘して紙衣の一重哉
暖一ッ戀の礫や朧月
絶景や橋立長じ月の海
蝶舞や垣に干たる酒袋
一人打つ畑や急かす息らす
日和迄有難かるや報恩講
驚風や鶴みそなわす緋の袴
謹而師に捧けり花一枝

17 拾八

名と共に朽ちぬ碑石や松の花
指折つて待つ戀樂し花小袖
落葉する人の行術や秋の暮
夢のせる机と成りぬ春の雨
昔めくふしこそよけれ茶摘唄
句碑に散る花に懐古の涙哉
道開た人も居るなり花の中
身の無事も書き添ふ花の便り哉
分別の相手にもなる柳かな
女には似ぬ勇氣あり大根引
俄雨花に機轉の傘屋かな
幹に香を殘して散ぬ雨の花
花に來て見れば住たき山家哉
踊る子の浴衣見つめつ夜の鶴
碑を月の覗く利那や時鳥
手習ひの戀草なるか梶の歌
門松の大を役所の威嚴哉
蝶高し低し菜の花五形花
基に負けてそれはくの暑さ哉
雪の山遠退く様に暮れにけり
問題の美人は嫁して春行きぬ
伽羅の香の殘る兜を飾りけり
はなやかに月も出て有り若葉山
此の人にかくし藝あり五月雨
遊ぶ日の様な氣もして更衣

17 拾九

日盛りや蔭吹く風も生暖き
枯芦や入江寂しき暮の雨
驅事を試筆に頼む力みかな
秋寂て水に數書く狂女かな
灰汁桶に水さす朝や鳥渡る
時雨會や月花雪を三部經
永き日や獨逸のにくき立話し
旭さす枝に纏まる毛蟲かな
子の遊ぶ菴ろに散るや柿の花
拙者僕と言ふ身構や菘
日につれて稼く風情や車百合
千代八千代果なき菊の齡かな
じつとして濡る鳥あり春の雨
物の降るくもりてはなし春の月
老僧に培れけり白牡丹
橋立や時雨返しに松の聲
桃咲や日南に飽きし牛の顔
美しき水有る庵の柳かな
雲一ッなき日を花の曇りかな
田吾作は梅櫻より稻の花
團參の日増五十鈴温みけり
古雛や桃山時代江戸時代
駕止めよとの御誼あり山櫻
かつら脱く樂屋の窓や氷水
菊枯れて世も長の句一ッかな

17 貳拾

花守の屑屋になりて春の行
芽柳や程よき雨の日もすから
蟬まてか聲戦かはす古戰場
逃げ廻る中に手の有る角力哉
小謠は何か戻りそ朧月
醉李伯雪の夜道を微吟して
井へ戻る雫も凄し虫の聲
置きかへる机の窓や風薫る
雲重し雁歸る夜の月の下
言葉にも艶ある花の便かな
苦學五年研磨に長夜更しけり
在し世を思ひ出されて月と花
人柄の見へ透く夏の羽織哉
活てまて佛に見せる牡丹かな
紙齋切れてから風寒ふ思ひけり
佐保姫や花の袂の八重衣
朧夜や大守微行の屋形船
砂に文字書いて船待つ日永哉
吹くならは柳に吹け上櫻には
温泉の利目計りてはなし若葉山
爲す事も不規則にして日の長さ
咄好き炭取の底さらへけり
辭退して末座涼しき座敷哉
頬杖に疊のくはむきりくす
短夜や夢殿洩る灯の淡き
八十五

寒梅の咲き機嫌の月の照り
正風の守り神とや菊の主
腹鼓打て戻るや松の内
酒五升月に香まれて仕舞けり
病葉の赤くも淋し塚の前
蓮咲くや酒に太りし大和尚
漣に走る若葉の嵐かな
穂芒や一ト際目立つ狐塚
側へよる人にもうとし秋の蝶
白雲と見し世は夢か冬木立
開うとて松は植ぬと秋の聲
青樓の空に斜や天の川
青簾葵の風の渡りけり
廣前に真心匂ふ柳かな
蚤憎し居り直せは喰直す
田植して空見て水のかけはずし
出ては忠入りては孝の田打哉
虫の音に忍び車や嵯峨の奥
英勇も露の果かは舍利の塔
水に引く影や柳の花曇り
佛顔した鬼もあり大晦日
雉子鳴や麥三寸の山畑
白雲の動かで暮る彌生哉
力なく照るや枯野の夕月夜
年玉や末廣かりの祝ひ物

毛見竿のゆとりや徳政布く領地
万戸寝し月は隈なく牙へにけり
釜掛けて遠き鐘聞く時雨哉
夕風に川筋細き柳哉
逼塞と聞くと舊家や土用干
柳葉に幣も添けり麻流し
鬼女住みし家と聞く灯の枯野哉
赤心を込めし手向を白椿
折鶴や炬燵の上の放し鳥
聞き馴れて眠り催す蛙哉
見飽ぬやいかにも世界一の花
手傳ふて寺の戸あける蓮見哉
堯舜の民となりけり稻の出来
絹足袋や情賣る眼にも涙あり
鐘霞む寺に開基の供養哉
掬ふ手に玉の緒つなく清水哉
千態の松あり月に詩情湧く
方丈の伽僧からす竹婦人
鶯や京は眼下に東山
瀧計り音して山は眠りけり
管を洩る月はかたしき寢覺哉
炎天にペンキの乾く匂ひ哉
風鈴の音も涼しき座敷哉
明星の光り尖し寒の入
寂深き音や雨夜の遠砧

散る花を惜しむ勅ある芳野哉
慰めの心つかひや油花のト
笑ふ山浪なき海に移りけり
中へに千草に深し夏の露
峰作る雲や似て似ぬ昨日今日
卵の花の中に水汲む鹿哉
篋鳴や支考叱られ翁笑む
蜻蛉や未だ朝影の羽根遣ひ
花散るや亡き師を偲ふ机先
七日見る花より月の一夜哉
汗よくや石に載たる肌守
山茶花に冬暖き日南哉
散る芥子は枝に歸らす飛ぶ胡蝶
鳴門にもあるや小春の夕日和
蟬鳴や水なき川の川つたひ
見榮へけり法の蓮の初櫻
賤家打砧よりなる御製かな
美しき娘の子あり絹うち
門田より音信初めて秋の風
雪の日や黒木を削る宮大工
書にしたき賤か住居や梅の花
捧けたる花に明るき佛間哉
押せば明る庵の戸叩く水雞哉
老體を抱へて嫁の干菜釣り
巢を秘して脇から上る雲雀哉

奇抜なる廣目立春野哉
蝶鳥に誘ひ出さる彌生かな
置所を恵方へ向けて福壽草
家櫻妻と淺酌低唱かな
初午や立重ねたる新鳥居
人に付て犬も走るや夕置
夢乗せた道は百里よ春の流車
植留の稻や畦から及び腰
桃咲て書に入る里となりけり
乞食も饗て通るや稻の出来
禁酒とは無分別なり月今宵
孕女の息に残りし曇さ哉
行春や衣桁にされし舞衣裳
イメは鶏啼く軒や報謝宿
箸豆な男は病みて暮る秋
雪を茶に焚て雪見る庵かな
時雨して落付く庵や敷松葉
時鳥覺された夢惜しからす
枕蚊帳の中龜さん鬼さん
徐に初音こほすや匂ひ鳥
棚の灯に米搗く女明け易き
鐘霞む野や説教の戻り道
親の慈悲寒さ忘れし紙衣かな
盃焼破れ戸覗く狐かな
鶴舞ふて空にも芽の輪作りけり

香にも染む懐かしの碑や花の下
名を知て見れば氣をもむ關角力
星消へて露となりけり草の上
春風の吹くや理想の新家庭
散る牡丹子を失ひし思ひ哉
山寺の鐘聞く春の名殘哉
人は寝て涼しうなりぬ月の庭
なつかしふ聞くや忌日の匂ひ鳥
葉配りの花に従ふ牡丹かな
麥秋や手首の黒き嫁御寮
里近き清水に白し翻れ米
千金の春を墨染衣かな
鐘の音は何の供養を花盛り
親か子の寝顔覗くや枕蚊帳
春雨や師の恩仰く机
法印も珠數繰り出す古野哉
暖め鳥鷹も情を知る夜かな
麻をむす匂ひの強し雲の峰
誤字正す詩稿の窓や暮の春
麗や陽明門に日は斜め
散て世に錦を残す紅葉かな
煤掃や庭木に釣りし小鳥籠
氣掛りになるや晝寝の顔の蠅
綻ひし雲の袖より初時雨
碑は寂て若葉の雫かな

月の出て又も見直す櫻かな
事足らぬは我儘を梅に月
書そら事を實地に見るや地蔵盆
後の世の爲に經寫の夏書哉
清貧に足る事知りて葱と汁
祖師の日や許可なくとも剪花王
來て見れば來ぬのか惜しき櫻哉
白蓮や無常の闇に香を配る
木賃宿蚤に寝られぬ咄かな
人去て鴉も鳴かず秋の暮
黙れども靡く氣はあり枯柳
銅像の除幕に花の吹雪哉
奢らるゝ奢は曠よ牡丹の戸
炬燵番母には用の一ツかな
へたつれと遠く思はず花の山
花なる餅さへ吉野會式哉
寶引福は寝て待つものてなし
腹提た耳に這入らぬ念佛哉
水音は玄妙の寂か飛ぶ蛙
宿醉の朝湯戻りや秋近し
鯉望む親の有身か鯉賣
掛稻や豊の重さにしはる竿
投橋や紅葉の錦水赤し
不二の影投げし早苗に動きけり
濡て立つ鳥や櫻の朝雫

寒月や鴉一ト聲耳を打つ
行先を開きたき物そ時鳥
打返すゆとり澄むや浪の月
飛ぶ羽蟻籠の小鳥に喰れけり
旅僧に風呂焚せけり麥の秋
踊り子の後に山の夜明かな
花と咲き實も成り遂けて落葉哉
蝶々も一色てなし草の花
十薬の花に早の埃りかな
尋ねたき菴となりし柳かな
わさど掃きもらすや花の雪の庭
長閑さや風待つ蜘蛛の流し糸
勝男木も月日に錆て昔の花
水仙や佛師か腕凡ならず
名も知らぬ草木も露の恵み哉
咲く花は丁度見頃よ西行忌
眠られて駕の重たき霞かな
花嫁も交りて歌留多遊ひ哉
鶴鳴て若菜摘む手のゆるみ鳧
智恵は世の實に買へす司召
猫借りて懐重し大原さし
國運の強き薫りや菊日和
菜の花や兎糞地抜けて御行脚
朝風呂にとり花の嚼さ哉
魂入れて見たき思や雪達摩

迎もなら笠脱て見る柳かな
玉簪よりは硯よ月の客
鶯替や神慮の恵みを獨り笑む
古足袋や春戸の幾日を忘れ干す
彩りし畫師も位たか涅槃像
明残る月より高し揚雲雀
一ッ來て門田賑ふ蛙かな
夜は松に聲の戻りて秋近し
春にすら此寂のあり遠蛙
言ひ返す嫁に理のあり年の暮
魅引や峰から峰へ花の雲
寂滅の果は爲樂そ鉢叩
月代や切籠に届く草の風
月雪の陸みもさそな花の友
荒壁も雅に添ふ梅の庵哉
堪へかねて見に出る月の櫻哉
半泣の顔笑はれつ辻角力
瑞穂とはしたしき國や稻の波
飲かけて笠の紐とく清水かな
打なれて隣に合す砧かな
鳴かてさへ賑し蝶の友陸み
雪車曳くや馴れたる道を犬案内
松風の時雨や里の寂衆り
鳴もせず寂さしもせぬや時鳥
村町に編して春は暮にけり
八十七

18 九
碑はいつか古ひて苔の花
月涼し吟聲すさむ波頭
鶴塚に手向け句もあり御鷹狩
秋雨の佛間に黒き位牌かな
今日の事済して遣ふ團扇かな
身の花は千古に朽す縣召
角力草秋の錦となりけり
山蟻の道や牡丹に三千里
時鳥耳なし山の月夜かな
精進の汗を引立つ花袖かな
月ながら時雨る音や窓の竹
雜魚寝して鏡から棒の咄かな
村中の世話引かむる頭巾かな
任滿ちて御苦勞しやつた落水
漣に鶯鷺も涼しき姿かな
一仕事机にもあり年仕舞
彼岸會や夕邊の鐘の遠響き
雲水の世界は廣し春の風
何處で逢ふ時雨や旅の槍笠
澁柿や疑ひ深き爪の跡
稻の波打つや瑞穂の國豊
桐壺に武裝の衛士や雷の陣
霜の都府夜毎警鐘の續きけり
祭らるゝ魂は武人や歸り花
紅ひの中に眼立や白椿

18 拾
絹團扇親の眼鏡を嫌ひけり
鶯や無言廻しの小盃
筆耕に霞開く夜や臨冷ゆる
花所の花も見向かて御身拭
金ためる女は早し寒細り
桐一葉孤燈観しむ夜の音
籠枕榮花の見ゆる住居かな
心して撞やら遠し花の鐘
手鏡を出すや真如の月の影
若草や緋縵の鞭て風を切る
屠牛遅々と歩行ぬ土堤蔓珠沙花
細殿に朝の蔭置く若葉哉
幾世迄若葉す碑なり名の櫻
跡譲る子にも打せて門の畑
泰平の御代に弓持つ案山子哉
玉となる庭に寂はなし夏の霜
氷室守晩夏の櫻詠めけり
山城も宇治も新茶の香りかな
卒塔婆立つ手に牙へ返る寒哉
全盛の果を紙衣の奴かな
いさゝかな事に手のなる炬燵哉
鶯遣や案に相違の菩提心
踊らぬも同じ枕の朝寝かな
花衣たゝんて春を惜しみ鳥
虫干や今日も曇らぬ星兜

18 拾壹
濱涼し八重の汐風身に浴ひて
鶯や二町に足らぬ小松山
木曾山は雪と櫻の五月かな
雞に明けて野山に百千鳥
霧かくれしても尊し神路山
籠なれて都の虫と成にけり
山寨の鐵門堅し栗の花
白菊を今日のかさしや後の難
着惜しみの流行好みや土用干
雪解や軒の雀の日に濡るゝ
小春日や地には飛ひ日傘
葱汁や一抱へある寺の鍋
鐵鉢に米も溢るゝ豊の秋
暮ねらふ蛇を追はや佛の日
朝川や水汲に出る霧の中
淺からぬ契り遂げり春の猫
菜の花や河一筋を村界ひ
散る花や百首に餘る歌日記
八石も洗ひ揚げたる土用かな
和氣瑞陽満々として花の山
名のみ残る禁中行事や尾花粥
朝寝貧と知りつゝ春の朝寝哉
閉つる眼に保寒し枯尾花
口上に匂ひを込めて草の餅
中京や蚊の居ぬ内に蚊帳敷張

八十八
18 拾貳
未來記を今とこれとや散る櫻
區外れの火事疎みつゝ寝直せり
酔ひとれも寫真に取や花の中
木魚打つ如く聞ゆる砧かな
香に立や海苔の干揚る浦日和
春菊や別れの霜ををる屋根
花散るや追懐深き小窓先
兄弟の喧嘩收めて月の蠅
春の雪麗の松は雪かな
涅槃會の雨は衆生の涙かな
朝寒し蠅は天井にかしこまる
蝶の影霞む野守の鏡哉
折迷ふ枝は梢の野梅かな
花の雨花見の花を散しけり
寄集ふ友や櫻に碑に
羅やいつれも寺の御代參
椽に寝る小猫に冬の日の當る
親知らぬ子にも道あり登り鮎
白藤にまごふや法會の鐘の音
提灯を抱いて走る時雨かな
越しかたを思ひつゝ焚く蚊遣哉
鶯の影や冬至の膝まわり
蜆賣努力の重荷擔ひけり
風を待舟とはにくし花の空
夜嵐に見頃の花を散しけり

18 拾參
奇羅飾る名馬濡るゝや横の露
若草や鶴の腹する旭の光り
行く雁やほろゝと降る闇の雨
世に去りし事は昔そ佛生會
今日の色昨日の色や落椿
垣破れ門傾きて柿の花
秋晴の山を數ふる二階かな
猿橋を見たる咄や栗拾ひ
花咲て訪ふ人多き庵かな
菫戸に石釣り置や藥喰
なつかしや花は昔の未だ咲て
宇治川の勝をさんする千鳥哉
紙帳賣身に十徳は似合しき
膝向けてそゝろに寒し經机
花日記吉野の宿に誌しけり
牛追ひの牛に遅れて八重霞
七難と九厄をなくて庵涼し
去ぬ雁や我も物憂き旅の空
秋の田の波も豊や黄金色
市の生海鼠蜜柑の皮と馴染けり
子は椽に今宵の月を軒哉
振出した御圍透すや梅明り
彼岸會や花に富たる辻地蔵
草に風智將清水とさどりけり
常陸帯二世の赤繩を結びけり

18 拾四
住まぬかに冬の山家の閉しある
花桐や玉の尾光る朝の鳥
今日の菊思ひ出す事計りなり
風孕む船の行衛や春の海
約束の戸へ駈つけて初松魚
遠退きて見る碑や花吹雪
筆投けて蚤に魂取られけり
山吹や賤の伏家の歌枕
南無三寶花に一滾車後れけり
髭見せて花藻にひそむ小海老哉
藁火焚く傍や崩るゝ霜柱
言ふ事はよし嘘にせよ懸想文
魚飛て汐の白し春の宵
飛ぶ蝶の羽根に消えやシャボン玉
三夕の歌柱かよ月の須磨
此茶屋に寄る外はなし枯野原
水音の聞へて遠き枯野かな
未だ稻の戦も輕し初嵐
霜とけて錦に染まる紅葉かな
優渥な御下賜の沙汰や野分跡
花の留主室一パイの欠伸哉
足音もせて静かなり嫁か君
菓子鉢の山崩しけり月見客
八朔やあらたに下ろす白玉明
竹植る日を橘の薫りけり

18 拾五
あらたまる音や扇のをろし立
移る世の様や櫻も夏木立
遣ふ手に光る指輪や絹團扇
施しの水汲かへて晝寝かな
青丹よし奈良は若葉の都哉
立て見る春や梅より柳より
豊の世や稻の實らぬ里もなし
惜む夜は待つ日に明けて初鳥
桃咲や小肴賣の來る在所
枯菊の今に保殘りけり
師の恩も忘れかちなり年の暮
念佛を香負ふて淨くや放し龜
辻堂の掃除して居る彼岸哉
麗夜や湖に廣る三井の鐘
合村の議はまどまらず時鳥
葉櫻の影や蝶なく薄月夜
花に風寝ても心の休まらず
手曳てしはし保養の夕涼み
戊申詔勅に紙雜適しけり
淳朴の里豊かなり桃の花
女郎花思ひありけに戦きけり
見る毎に氣晴のするや稻の花
壯士老て豪傑ふるや蘭の主
姫君も手ををろさるゝ小松哉
寒梅や垣外の清く掃れある

18 拾六
月花の馴染忘れす雪の宿
牛追ふて出ぬ日は梅の主哉
吾影の吾より長き糸瓜哉
羅や衛門そなる育ちふり
桐葉無念無想の夕へ哉
名月やすりあけて居る春中の子
月一ッ千詩萬句の今宵かな
其努力柳に届く蛙かな
花鳥の心養ふ炬燵かな
自然芋のそろゝ持てなす鹿の宿
吳竹の春はつれなし青藤
歌加留多一度負けても何のその
忍耐は桐の御紋や子規
染かほる色うつ高し菊重ね
後より名を呼ばれけり冬の月
ゆる度に犬の寝返る柳かな
演習の跡は淋しき枯野かな
下萌や眠りを覺ます東山
青鸞や芦の若葉に戦く風
譽る内遠くなりけり夏の雨
鯉刻る度に山吹動さけり
しみゝと秋を見せけり雨の萩
鉢叩是も一派の教へかな
舞展る夕日の庭や秋の蝶
放生會や魚も佛になるためし
八十九

構へにもならぬ流や杜若
琵琶に聞く平家の夢や春の雨
つれ／＼や不二見に出て秋の暮
法の水冷たき谷や夏木立
今日にして根分甲斐あり菊の花
累代の尙武の家や軒菖蒲
花と人名残を月の隔てけり
青海苔や乾く程つく葉の帯
白梅や隠さぬ貧の美しき
豊の秋倉にきつきし儀不
二笛の音もなつかしふりや諸初
夏羽織大義な物と思ひけり
朝霞野外飛行に破れけり
六月や田にも届かぬ池の水
春風に吹れて這入る都かな
夕立に蟻の一陣流れけり
うつし書の様なり秋の日和湖
案山子の矢墓目の法に叶ひけり
何事も廓は早し初袷
焚く迄に枯れても菊の匂ひ哉
露深し窓から見れば青き空
初雪や湯豆腐客の御手かある
貝寄や袖に吹込む潮ぬくみ
憎まれの家よく残り火事噂
鶉の聲にも散るか芥子の花

舌を切る罪は未たなし雀の子
あきらめて居ても寝れず雨の月
落果た身を編笠の忍ひかな
秋の雨法蓮に泣く女かな
果物の味佳し夏の月夜かな
春申や妹の舞に姉の三味
開帳に稚子の御練りや春日傘
親しきは人にも見よし月と梅
悟る道あつて惜しまぬ櫻かな
張交の色紙なつかし虫拂
武蔵野や草に出し月草に入る
静さの中に寂あり月と梅
辻か花濡る、計りや愛の露
渡し舟呼へは齒にしむ秋の風
目標に松一ト木ある枯野かな
流れても月は崩さず春の水
諸事思ふ如くにならず花に風
男郎花流石に威ある姿哉
白川の關や崩れて芒吹く
嫁に行身とて叱らる晝寢哉
時鳥新茶の薫り逃しけり
夏座敷割白壇の香りけり
木犀の香や禪院の朝朗
響響くは雲の使ひか涅槃像
十六夜や稍黒みたる沖の鳥

梅曆讀む聲優し柳の戸
魂棚や露も百味の備へ物
花散るや辻法談の卓の上
戀に破れし男ありけり時鳥
袴脱て我が世となりし浴衣哉
花の雪薫る雲から飄れけり
撞く人も霜夜の鐘や身にこたへ
鳥雲に入るや出掃ふ浦の舟
一ツ宛春を呼出す除夜の鐘
散る程に咲く日の見芥子の花
砂川の一筋白し秋の風
紙燭して牡丹見廻る翁かな
檜一樹涼しさを呼ぶ軒端かな
三吉野や花には七日人の山
世を派手に渡る藝者の浴衣哉
牛の蠅一日ついて来たりけり
鳥雲に入る日賑はし所澤
轉寝に近よる秋を知る夜かな
窓に倚る無言の僧や桐一葉
暮れてから一群来るや雁の聲
姥櫻若い亭主を持れけり
祇王寺や尼の手際の五加木飯
朝手水寒梅に淡き月残る
作れ／＼露は皇國の無盡蔵
宿借りて曉見たき櫻かな

花王かなさもなき雨に傘の覆
師の句碑の笈に雄々しき櫻哉
雞頭に淡き日影や瓊曉の忌
春の宵家を忘れて遊ひけり
風風て聲の定まる蛙かな
世に賣らぬ身は安しよして冬籠
萩低し高し尾花のうねり道
只一人樂み深し遅櫻
飯入やいはれぬ味の古枕
千秋の思ひに暮て大三十日
兀山も同じ化粧や雪の朝
山里や六月寒き夢見草
電燈の臨時工事や菊花園
登へけり富士四方山を霞ませて
牡蠣舟や橋のたもとに向ひ合
足に隙なき水鳥の浮寝かな
欄干に貴妃の影あり青簾
笹鳴や半日を樂讀寫し居る
過て尙高き薫りや十日菊
見説て樂しき雛と吾子かな
負てさへ笑ふ愛あり角力取
春風や金殿建る桃の音
鳥や殺人犯を追ふて啼く
法の灯の悲しよ揺れて鳴千鳥
噓て戻る氣になる涼みかな

寒月や森羅萬象寂として
時雨會や亡き師の恩を語り草
荒磯に風和らきて萩若葉
山村や晝も風呂焚く盆二日
近江から誰か抜出した不二の山
玉子酒汲むや想恩の膳の上
一喜一憂花咲かす雨散らす雨
尼講の殖た嘶しや盆の月
花に蝶外に望みはなかりけり
不意打て儀式済すや水祝
白鷺に月牙へ返る水田かな
温泉へ置て戻る病と扇哉
植木にも水打ち添へて風呂仕度
濡れて来た手に燃かゝる柀火哉
雲かくれしても聲澄む雲雀かな
乳母の膝枕にしたり雛の主
静さや花に床しき鳥の聲
鶯や見へて居ながら釣れぬ魚
蓮の雨禪話静に進みけり
白蓮を刺繡とる佛事帛紗かな
花折るも叱るも同じ心かな
馬盥の湯囊掛けたる木槿かな
閑伽桶は手向残りか薄氷
飯汁や納所の部屋四疊半
断るや訪問記者を闌の主

風揚げて走る子に道かわしけり
鶯の玉吐く聲や鳳尾園
蕙敷て臣草はうの花見かな
百筋に千筋影たつ柳かな
蓮咲や未た水亭の朝灯
散り易き芥子にも宿る雪かな
朝顔や次第に咲て延る蔓
人去て灯くらし盆の月
極蓋に残る恨みや春の逝く
向き直る梢の鳥や初日の出
過し日を偲ふや寂し花の句碑
大望は無事の身にあり二日灸
南無三寶雨となりしか花の朝
散る花の名残を慕に曇みけり
眉剃て素人しみたる袷かな
長閑さや白鷺低う飛ぶ磯邊
追懐の衣手寒し花の夕
降て居る内は汚れず雪の門
日盛りやイむ影は笠の中
富貴草我も王者の心かな
絹布織る國は豊に笑ふ山
傘重し足元重し橋の雪
添竹に傳ふや菊の餘り露
鳴立や水のうねりに月うこく
白鶴も拭の儘なり年用意

夜櫻や儂移る水の上
花に来て今更古き女房かな
孫譽てかたたくかせる夜長哉
梅咲や詩人の腹を肥しけり
松に置く月も淋しや寒念佛
横町は見向もせぬや初松魚
開帳の日延もよけれ遅櫻
灌佛や天知る地知る我身知る
夜櫻や酔ねは友の承知せず
水入て八浪打たす角力取
臘八や曲突火を煽る山風
蚊を入れ責にちり合ふ蚊帳哉
蝶も散る物となりけり秋の風
名は朽ちぬ松に日のさす時雨哉
臘夜や只さへ逢ふ瀬待たる頃
牛に馬動かす蠅の力かな
放し鳥情の林に追れけり
人となる道を子に説く頭巾哉
浪の音和らく朝や百千鳥
慕鳴て草四五本の嵐かな
水無月や人の奢りも舟の上
二親の無事から祝ふ雑煮かな
男の子生れし朝や五月晴
万歳に一家集る戸口かな
竹にある春はしたわす去ぬ乙鳥

雨の月晴れて胸迄すきにけり
百花笑み百鳥謳ふ彌生かな
塵芥を離れて高し桐の花
春の山道ある限り登りけり
奕る、夜孝子の傳を講しけり
門松に年の餘慶を迎へけり
一山の法鼓にゆる、若葉かな
鶴龜と舞ひ納めけり御所の春
淡雪や御車寄せの沓の跡
牙へ渡る利鎌の月や三ツの花
富は身の働きにあり銀初
槍梅や會津城固守の彰義隊
絹足袋や松竹梅の裾模様
思ふ事皆氷りけり筆の先
萬籟を押へて雪の降る日かな
蔭ながら濡らす袂や翁の日
京の雪山と屋根との景色哉
日盛や筆を取るにも顔の汗
十重二十重枝葉榮へて松の花
月の出たはすみに鳴くや郭公
麗やきら／＼光る塔の先
花に出た跡や一ト間の取ちらし
老の手に自慢話や菊作
草臥た足にもつる、蛙哉
松風を横に抱へて晝寢かな

御身拭尊像黒く光りけり
春雨や机によれば旅の夢
花七日凡夫の慾の捨て所
絹蒲團重ねて戀の涙かな
戸さしても秋はかくれず虫の聲
初冬や未だ繩張も残る山
行く雁の空や燕と行き違ひ
得物なき鳥網手繰る寒さ哉
棒杭に川蟬去て蜻蛉かな
傘さしてよき人萩に参りけり
佛の間だけは閉ざして蚊遣哉
飼鳩に鳴き起さるゝ四月かな
百味にも勝る實意や魂祭
振り袖に戀文忍ぶ歌留多かな
雷の陣跡は月夜に譲りけり
春風や袂に重き握り飯
三昧に入て火もなき火鉢かな
未だ草に吹く丈けはなし春の風
莞爾りと笑ひ初めけり東山
枯野にも松は斯なり月の物
留主の戸にこかしてゝや雪達摩
月の雲拂へる虚に鞭打て
新宅の田まで延して鳴子繩
醉されに羽子そらさし怨み哉
圓満は生た手向けよ魂祭

智を磨く心たのもし蚊の机
風の香を入るゝ故人の土用干
散れば皆同じ木となる櫻哉
青柳や世に詔はす逆らはす
芹摘むや鱒は逃る鶯は立つ
虫なくや嵐の跡の夕月夜
見てあれは雲に鳥あり秋の空
夏羽織大人になつた印かな
花の塵掃きつゝ春を惜みけり
忠臣のひもどく花の七日かな
公達も乞食も友よ江の柳
戀風を煽きかけるや絹團扇
仙窟は所謂茲か花の山
花七日酔は八日に残りけり
今一度姿は見たし杜鵑
牛を追ふ聲に飛立つ蓋かな
亡國の遺物に泣や土用干
雪の松操の花と仰きけり
國富みて天高く馬肥ゆる秋
鐘の音も霞む向の在所かな
忍ぶれと猶あまりあり蚤の尻
稚子の手に愛らしき小菊哉
白炭の手前臺子に映りけり
雷の聲納めて松の夕日哉
神の名を指して道問ふ日永哉

灯移りに買かふりけり市の雛
外山まで引や御國の初霞
爐開や同じ流れの裏表
法の灯に語る夜長の姉妹哉
暮參り昔なしみに出逢ひけり
追悼會連の實も飛ぶ日なりけり
田舟さす甲斐しきさよ植乙女
奥殿に塵掃けは風薫りけり
西山へ光りそへけり今日の月
夕立や心の裏を桶狭間
とちらのか追れて居るそ蝶二ツ
蟬鳴や反かへりたる水塔婆
居酒屋を談合場所や鯉の友
陽炎や酒屋の門の洗ひ樽
初木の子籠の目荒う思ひけり
一満箱王も泣かん雁の列
船は皆沖へ向つて蜆搔き
翡翠や砂利搔く人の肌黒き
眼の届く限り眺めて放し鳥
はかどらぬ牛の歩みや雪解道
蚤確と押へる仁田の四郎哉
初虹や氣うつな日を窓に倚る
山越へてから船に乗る日永哉
打塵く都の町や御忌の鐘
船かろしぬなわたくれはって行

掬ひたき思ひ盡せず水の月
切干や賤か軒端の玉簾
座ても見たき茂りや佛の座
御忌詣京の着倒れ物もこそ
美しき言葉も添へて放し鳥
風や不思議に移る潮々の音
淡雪や即位記念の月桂樹
月朧合圖の琴に忍びけり
寺の名は白藤の名の聞へけり
菩提寺へ菩提子寄附や鳳尾門
月落て光は露に残りけり
夢なから子故に動く團扇哉
北風や晴れみ曇りみ雪の舞ふ
枯て猶其香の床し菊の花
尻を殺しなから経讀む頭巾哉
鶯に座敷の琴も止みにけり
一輪の名月天下照しけり
酒肴つきて淋しき夜長哉
米を出す奥在所や雪解けて
弓張て民草守る案山子かな
右左虫の音聞ゆ嵯峨野哉
鳩の餌を貪る雪の雀哉
移る灯に洩れそなり萩の花
茶柱や汚れぬ耳に金衣鳥
金計り寶てはなし初織

捨た世を拾ふ心や落椿
炎天や水も途切るゝ長寛
若草や毒も薬も同じ色
白蓮や迷ひの色は退いた艶
文机や玉巻く芭蕉窓の先
閑古鳥今日も昨日も山路哉
鴨川は船も動かす春の水
我儘を言ふ客來たり春の宵
雲の峰敵來襲の噂さかな
蛙から先に夜に入る山田かな
花と見し木も炭竈の煙かな
遠さかち近より譽めつ月と梅
春の水同じ心に流れけり
紅つけた口を忘るゝ清水かな
敵入や二君を持ぬ親の下
玉苗や悠紀主基田の麗しき
松一ト樹あつて高しや秋の聲
夏草や根引しらるゝ蝶
安らけき笛の高音や五節舞
古戰場の秋や馬追ひ兜虫
雨後の照り眼に泌り盡す木芽吹く
曠着さへ手向の花か施餓鬼旗
夢さめて我家てなし絹蒲團
餘所になき風の目につく燈籠哉
燈籠や真如の月に名を照らす

未だ風の底に骨ある餘寒かな
啼く聲は置土産かも雁名残
更るさへ惜しき一夜を雨の月
葉柳や雨の古驛の夕燈
鈴虫や鳴きよわりたる泉殿
草餅や女同士の長嘶
俄雨花に喜劇を演しけり
二ツ三ツ梅笑はせて除寒哉
日章旗見て退却や藝
冬の蠅拂子の先にふられけり
與四郎の猿は春に寝て春の月
阿柯桶や清き心に月も澄む
姉はもう子持ち編なり初裕
杖に手を重ねて老の雪見かな
基の責手思案に扇遣ひけり
よき庵に月雪花の眺めかな
積善の家に咲きけり菊の花
くねりたる梅と興あり春の窓
世に望なき身は易し冬籠
能き聲に手拍子揃ふ踊かな
京へ來た油断に寒し春の雨
花の留主仕兼て日脚覗きけり
今年茲に十三年や松の花
權門に媚ひぬ骨あり遊園扇
手に暖み覺ゆる坂や雪の杖

繪巻物見る心地せり加茂祭
待兼て夢に聞きけり不如歸
鷹に貸す力のあや冬の草
世の無常ちり行く花に知られ鼻
面白うなれば月さす鶴舟かな
廊下年を包むや派手浴衣
春も未だ寒し粟津の夕嵐
野の井戸の籠はせる日や雲の峰
見て居れば力の入るや枝の雪
賣れ残る雛うらみなき笑顔哉
春雨や鼓を焙る小傾城
白酒や赤ひ顔して笑はるゝ
山寺や花に無縁の借し硯
大雪や貧乏徳利も歌枕
鶯の聲高し藪にはちりゝ日
人の非も我是もいはぬ紙衣哉
紅梅や運ぶ化粧の塗り鹽
石碑に向ふて淡し花の雪
遺吟讀む我が碑の上や花の雲
鶯に明けさしの障子引かまはし
曲水や三千丈の友白髪
丸木橋渡りて蝶に遅れけり
雲に未だ色は移さず初紅葉
散り惜しむせぬか櫻の手柄哉
籠洩れた鈴虫啼くや御簾の内

埋み火や三従の訓七去の諭
見送れば又一ト竿や歸る雁
鐘つけば雲流れけり秋の空
心ゆく儘に夜長の燈かな
白藤の雨や薄日のさしなから
葉柳に河岸の道巾袂けり
母の慈悲籠るぬくみや足袋の繼
さなくとも悲しき秋を平家琵琶
旅僧の頭陀にも豊の實入かな
又鐘か唯さへ秋の夕なるゝに
路銀盡きて殊更淋し旅の秋
根に力見へて玉巻く芭蕉かな
市役所の午報聞へす水鳴子
花の下四十の顔に薄化粧
敷島の道連れ二ツ花の旅
長閑さや服を仕立に人の來る
芦の間漕ぐ舟に長閑けき小歌哉
夕顔や菫の 擗 眩 枕
紅入と紅なし交る踊かな
預け子を見による桃の蓑家哉
山莊の鶴人馴れて梅日和
放ちやる龜を見送る彼岸哉
道の奥廣げて枯るゝ尾花かな
水すくふ様に川越す乙鳥かな
七卿の都落ち行く花吹雪

19 拾叁

朝寒の僧雁山を下りけり
人に荷を持せて軽き袷かな
蛙にもあるや蓮華に乗る果報
秋の鐘數ふる念もなかりけり
裸馬馬士も裸の夏野かな
雪圍ふ山懐るや遅櫻
薫風や歸省日記の第一句
水見れば降てあるなり秋の雨
今に其傍残る清水かな
野狐を逃かす野守の駟かな
傘借た禮に草餅贈りけり
白菊や庵は自治區の一世界
佛生會奈良は佛の都かな
芭蕉忌や茶飯持出す名々盆
行春を引き戻さはや遅櫻
能き詞種もあさかし猷生子
粥枝や逃ける道なき長局
淳朴な民露の戸に育ちけり
鶯や無斷の客を座に入る
月一痕太平洋の玉手箱
蚊帳低う思ふや月の出てより
見返した柳に残る思ひかな
松は未だ夜深し花の山かつら
鶯に禮忘れけり水貫ひ
春風や鳥羽僧正の筆すさみ

19 拾四

大正の代は殊更に四方の春
通夜堂の疊冷たし秋の雨
清らかに年を寄せけり萩の主
鬼灯や智慧の早きは女の子
下賜の馬乗り試みる花野哉
百花亂歩みつかる、廣野哉
清貧の椽と親しむ柳哉
初霜や露營の陣の幕の上
隠逸の徳は香にあり菊の花
累進の身に光りあり司召
更衣して押開く書院かな
一ト夜さに海さへ氷る硯かな
大御代の春や克く忠克く孝に
朝酒の長ふなりけり雪の宿
長閑さや興作の妻の高笑ひ
のそくど牛の耕す春田かな
掻立る灯にさわりけり
高臺の廻り取巻く踊かな
風の雁一ト亂れして並ひけり
島山や眠れる裾を洗ふ浪
孤兒院に我財投して溢團扇
老ぬれば月にも溢す涙かな
菜の花や植生の小家に人の聲
筆捨て月の描いた窓の梅
加茂川の水に砕けて夏の月

19 拾五

寝返た様に轉ふや竹婦人
和らかに風のさわるや若楓
行暮て花に露けき快哉
汗も引き腹も肥たる心太
落葉して日脚の届く巷かな
青田はめ／＼て堂島狂ひけり
紫陽花の色に昨日を忘れけり
世は夢見草とささすや櫻の實
松風のあまりに戦く青田かな
うかれ出て宿迄遠し沙千狩
考への夢に移りし炬燵哉
紅塵の世に詣はす雪の不二
雲を生む不二を見て居る日永哉
素裸に蚊帳つる男世帯かな
松風も机に涼し須磨の卷
彈初や始め一手は八雲琴
御供田や沐浴をして種浸し
詩き幸や畑を見遠るよへの雨
脰笠に猪首の武者よ御鷹狩
夏籠や白雲かよふ机
雨雲は空に深へて啼く蛙
初花や手折た程の口土産
風響て扇た／＼ひや船の客
心からしめた願や常陸帯
養魚の母ともなるか春の雨

九十四

19 拾六

虫悲し只徒らに夜の更くる
生前に刻む墓石や秋の雨
萬歳や鼓に配る春の色
低う飛ぶ螢や更けし京の町
忠勇兩全有望の士や舟遊ひ
酒問へばをうす召しけり朝櫻
虫干や別間に直す師の遺稿
花の影水も豊かに流れけり
親の酒つゞける雪の草鞋哉
時鳥探題にして待つ夜かな
欠伸した涙てはなし川施餓鬼
花吹雪喜悲轉變は人の常
花の雪た／＼み込みけり舞扇
据へ處孫の覺へて二日炙
めつさり春めく村の端山哉
いやらしき咄に逃ける火鉢かな
村人の揃ひ浴衣や盆踊
枯添ふや尾花か下の名なし草
三味涼し夏の木屋町先斗町
千僧の櫻の中に供養かな
若草や野に滑らかな風の吹く
掛取やりちきな人は別の物
慾しなす薬はないか血止め草
井手の名は深し月にも砧にも
鳴鳴くや伊吹は白し湖黒し

19 拾七

衣更落ち附かたき日なりけり
春の野や思はぬ處に水溜り
黒塚に見越しの松や釣葱
攝待や昔を偲ふ椎か下
地蔵尊に笠着せてある夏野哉
降る事にして氣も附す入梅の月
其夢を問ひたし花に眠る蝶
菊香る庵に心學道話かな
今去んた人の又來る日永哉
然れども松は古ひす後の月
草麥や碑のみ残りし關の跡
蝶鳥の世は是からそ花の春
佛彫て眼は未だ入れず秋の行
葉と成て悟道教へん寺の花
身の罪と知りつゝ老し鶴匠哉
祝ひつゝ不二の咄しや水餅
猛鳥の残る雪蹴る羽搔哉
如是我聞佛師か庭の露の音
人の世も末廣かりや御田扇
掛香や誠の人は名に残る
椎の實も拾ふてなつかし庵の跡
亡命の客なくさめて納豆汁
花の雨曠着の袖にかゝりけり
あきらめてみる戸重し雨の月
手向けはや君か遺愛の梅一枝

19 拾八

五斗米に此腰折らす楮の主
白波と成行く磯の櫻哉
桃咲や書に見る様な里景色
見勝るや菊に置かれし煙草盆
老骨の盥登城や江戸の春
東山晴れて北山時雨けり
水音の和らぐ梅の月夜哉
蟬鳴て秋未だ暑き日なりけり
蜘蛛の所作見るや日永の筆勢れ
破れても夜には繼合ふ氷哉
あらず明治神宮や菊の花
山莊や花に侘しき晝の雨
二日灸すへて煙草をすゝめ鳥
菜の花や白壁續く長者村
先達に教へられけり郭公
爺婆の昔し戀しき踊かな
夜櫻や教へぬ道に迷ふ客
吉事聞く朝や暁の貫ひ福
時鳥珠數くりかへす夜なり鳥
花散りて寂しく乾く硯かな
蛭子講や番頭喜助は客心
未だ風に耻かしそな今年哉
春の夜や初て聞きし妻の琴
嗚呼無常浮世は夢よ散る櫻
冬籠秘藏の牡丹咲にけり

19 拾九

畑の井の明るく暮て梨の花
座も亂れ浴衣と成りし酒宴哉
山低ふ見た日を深き霞哉
虎か雨降るや幾世を貫ひ泣
湖も蝶の道なり鐘霞む
廓の泥踏さぬ妹や慈姑堀
梅は未だ唇かたし初蛙
陽炎や的干してある矢場の庭
山門も通り抜けさす櫻哉
名月の下や淀川桂川
翡翠のねろふや沼にひそむ魚
風呂加減譽て花足袋脱せけり
身にはしむ風はなげき今朝の秋
水底に神路もあるか御板川
香雷散涼むさほつて臥にけり
爪冷へて口紅しふる餘寒哉
柴に化す折の殻あり朝櫻
ふくらみし牡丹や鶴の卵ほど
桐一葉諸行無常の小夜嵐
雲助も足の揃はぬ新酒哉
雨乞や簀は錦の肌さわはり
人も斯く身を終りたき蓋かな
師の恩は朽ちぬ寶よ筆初
鳴の外立つ鳥もなし澤の秋
法螺の音に靈氣迫るや夏の山

19 貳拾

春の夜や衣桁に掛て見る曠衣
茶の花や廣き寺領の處々
初曆や嫁もよふ日も定まりて
花七日酒と討死仕たりけり
唯我獨尊夜終ら啼く虫を友
數人や話もしたし寝させたし
達摩忌や法衣まはゆき禪知識
散りて猶世に惜まる、牡丹哉
堆き花や雲添ふ山かつら
ストロブの一間や寒氣餘所にて
文豪に酒豪と舟の月見哉
松に降る音静かなり春の雨
秋の川蛙黙して流れけり
音つれを狸寝入りの夜寒哉
風かもて來る文月の便り哉
夜や静か川へ消へ込む雪の音
月澄むや踏めは冷つく松の影
茶柱や汚れぬ耳に金衣鳥
方便は釋迦に限らす年の暮
身の太る様に啼けり稻雀
國の爲ためす譽れや鎌の音
花に風月に曇りのある夜哉
草木にも小雨そゞきて佛生會
垣越に留守の禮云ふ夜寒哉
竹植て鶴飼はやと思ひけり
九十五

夜櫻や松へも届く灯の明り
櫻にも得難き桃の日和かな
残る雪殊更寒う思ひけり
草菴の荏屏風や冬隣り
年老へと未だ氣の若き浴衣哉
孫に花持たせてかさす日傘哉
月今宵親に別るゝ小芋かな
御佛の指さす空や時鳥
太刀魚に酒も劍菱備へけり
世は移り變れど花は櫻かな
物に物思はせて散る櫻かな
花咲や降らぬ曇りも厭う朝
花折た罪歌讀て遁れけり
歸り花歸らぬ人に手向けり
戀塚の由來聞はや文覺忌
照り負けもせて凌霄の盛りかな
祭る日は幣も風なし花鎮
盃割れば春の人なり網代守
今昔の感うたゝ夜の長し
雪の日や酒代に足らぬ渡し錢
うらたへて啼く親鳥や焼野原
祭らるゝ魂となりけり筆の跡
連山の雪紫に初日かな
客去た跡へ鶯來たりけり
納豆や給仕の身にも腰衣

世に高ふ薫るや梅の咲き處
ありてよき風を厭いぬ芥子の晝
遺訓猶耳に残りて火串かな
積み薪の焚き減る裏や雪残る
幸ひに恵方へ向ふ岡見かな
かねことは疑はねど油花のト
影居へて風の放るゝ柳かな
雲を覆ふ古杉の凄し閑古鳥
舞初や年は二八の柳腰
望千里只名月の光りかな
此處へ船着けと御意ある柳哉
食客は勤王の士や水雞の戸
瘦細る牛や曇さの腕
炎天に牧場の牛の欠伸かな
女房も三舍を避るゝ二日酔
夜廻りの金棒耳立つ霜夜哉
鮮麗な造化の街や花襖
先觸の客もありけり牡丹の戸
陽炎や長者の藏の幾戸前
梅一ト樹癡寺の門守りけり
鍔賣に安う見らるゝ命かな
九重の空や鶴舞ふ御代の春
儂の夢見残して明易し
醉これや櫻かさして祇園町
名月の見つめて居れば涙かな

亡き人を思へば彌生なかは哉
同じ頃枯れて詫しや萩芒
葉櫻やホトト出ず大學生
晝蚊遣り焚くや入江の掛り舟
禮讓は言はず知足の三尺履
松の花鶴は豊かな歩みかな
花の碑に花を手向て寂照忌
踊から戀思ふ身と知られけり
霞から人を産み出す春の山
畑打や未だ軍帽の跡白き
名月や鐘のみ暮るゝ園城寺
短夜やたしにもならぬ朝の月
小夜時雨智月は衣仕上けり
鶯鶯のたれかゝりし夜明哉
檢行の寺に座頭の涼みかな
顔に散る花の冷たき月夜かな
身の果は雲井に光る螢かな
押し分けて黒い手を出す踊哉
破れ芭蕉夢の枯野を偲ひけり
鹿啼くや山を脊負し一部落
羨冷しや油断のならぬ川鼠
花の雨鯛に捕ふる恨みかな
木枯しや規けは白し朝月夜
樂の譜も新たににつけて謠初
國家安康 大佛殿の鐘霞

白蓮や清きか上に朝月夜
花を見て思ひ出多き菫かな
近寄れば郵便函や臘月
掲げ見る吉書に蜘蛛の下りけり
能き聲に愛のこぼるゝ手鞠哉
十種香や檜葉の上の瑛曉佛
臨氣な晝の灯や魂祭
咄から酒を呼び出す火鉢かな
足る事に云ひ分はなし梅の月
物の香を離れて清し海の月
行く駒の足にもつるゝ蝶々哉
寶祚無窮千代田の城や風光る
吸殻の煙に戦く菫かな
虚無僧の長逗留や小六月
目に觸るゝ物に引き添ふ霞哉
添乳して春待咄し聞せけり
淡雪に女イむ軒端かな
鶯の籠にさし込ぬ朝日かな
さゝかたき數もありなん祭り鍋
雨止んで松に啼く蟬ぬれぬ色
浪音の磯を沈めて雪の聲
添ふ水や濁らす今も花の陰
思ふ事爰に失ふ遠見かな
涼しさを絞りわけけり浴衣店
散る花に啞の唇動きけり

啼頻る聲ほろ暖き蛙かな
給仕する僧の身かき櫻かな
散歩にも揃ひ浴衣や姉妹
足りて尙音なつかしき清水哉
胸襟をひらいて語る團扇かな
藥程降りし夜雨や百日紅
月朧六々山 峰 靜 也
知意捨て筆取る窓の月と梅
永き日や恩師か像を刻みけり
佛檀の給仕たけして冬籠
笠の紐子に結はすや田草取
海苔の砂臼齒の底に當りけり
垣潜る野良犬白し冬の月
魚藻打や雪の果知る比良風
蚊帳潜る程もあらせす高軒
かゝる世に何の隔てそ花の暮
人を知り人に知られて世は涼し
日は永し山登る舟下たる舟
梅活けて春めかしたる座敷哉
川舟や月見晴して八軒家
我影の映りて淋し秋の水
何鳥の跡とも知れず舟の霜
長壽得る家空氣よし桃の花
佛檀の鬼灯母を泣かせけり
松風として歸りけり汐干潟

見出しなは蝶の先なり初櫻
師に似たる我面影や汲清水
若水に星座の薄すれ仰きけり
都迄勞れも見せず駒迎ひ
反り橋やさちら向ても春の風
浮草や二葉も温む水の 上
月覗く丈け明けあり梅の窓
年の坂去年と今年を前後
さぬの袖を深雪に引かれ鼻
人にする子を叱り出す炬燵哉
空を掃く帚作るや 笠狩
如月や齡養ふさしも草
二筋の道迷ひけり 枯野原
遠山や花に日和をつなく雲
傘提けて行く春雨の絶間哉
梅林に歌人の集ふ床几かな
日障りもなく涼しき廣間哉
露の萩折る手へ月の飄れけり
野も山も花非々として草かすむ
葉となりて俤ふ櫻かな
行春や永く眠らむ小田の鶴
釜肌にあて凍とく茶巾哉
早蕨や焼け跡暖き南受け
塵捨に出て摘む春戸の木の芽哉
鞠袴まゝや牡丹の庭歩行

添へ竹に見ゆる牡丹の重みかな
時雨して鐘の音近ふ聞く夜哉
暑からん土下座で拜む乞食共
編笠や三面記事に富みし果
岩影に爪研く鶯や 涌く清水
我に句のなき恨みあり梅の宿
初花や植たる人の物語
過去帳の十三年や魂祭
秋風や野より山より人の上
桃咲や手造り酒の匂ふ門
參籠の膝冷かや鹿の聲
蛇も衣脱く日や墓に立て塔婆
比良迄は届かぬ春か残る雪
七尺は心に去りて墨直し
屈強な人に似せたまき山子哉
酒の銜霞交りに拂ひけり
女への能い教訓や壬生念佛
萩の戸や禪に趣味ある人の來る
春の夜や酒に己れを忘れけり
迎へ来る産婆の 鴛や時鳥
花に寝て羽化登仙の夢に入る
花か雲か動かす暮るゝ峰の花
鶯や薪割る男耳うとさ
股潜る人さへあるに絹蒲團

橋守の目水や團子賣り盡す
子に乳を呑せに戻る田植かな
鶉の咽喉は貧乏人の財布哉
物らしや長敷入の 曰く附き
鶯子啼や狭き庭にも陰日南
花曇り心に曇りなき日かな
又元の橋へ戻るや夏の月
月の船月の心に任しけり
雲迄は未だ餘有あり今年竹
繫かるゝ心の駒や花の影
打ち水をすゝる頃蟬の一しきり
墓園ひ覗く雀や冬牡丹
泥道やよへの春雪多かりし
小謠や朧月夜の障子影
蜀魂法會の座並崩れけり
馬繫く事無用なり藤の棚
句想無我に入れば崩るゝ炭火哉
なつかしき影や月夜の枯尾花
我に立秋の夕日をかこちけり
時鳥君の機嫌を直しけり
貝寄や落る日脚に浦の風
篝火の消て秋立つ宮居かな
雲雀から日の照り移る麓哉
心ある宿の主や朝蚊遣り
火の冥加知らるゝ雪の泊り哉

新らしき家の眼に立つ枯野哉
涼しさや金襴より銀屏風
雨乞の二た心なき願ひかな
梅干の味はかわらぬ夏行哉
櫻よし梅よし菴は柳にも
袖引た昔を偲ふ臘月
菊枯て世に長への匂ひかな
旅瘦を手向け心や翁の日
掃よせて春惜しむや花の塵
野は静柳冠て家一ッ
波明りして時雨けり遠岬
誰か末の色香は摘むそ辻か花
今日と言ふ盛り花の名残哉
月花や袖に冷たき一雫
煙見て四五人寄るや畑打
花重水はちよろ／＼流れけり
引鶴や夕へ明るき西の空
灘越る船も無事なり和清天
雨の虫途切れ／＼に鳴きにけり
菊咲て富貴揺せぬ心かな
柿むくや笑はれなから左利
淡雪や朝湯戻りの白拍子
烏羽玉の闇隔てけり白牡丹
乾き藻に爛れ小魚や雲の峰
舊殿や一ト樹の花に物静

合壁の喧嘩ものうく五月雨る、
出代や物はさし出ぬ里言葉
春雨や戀に落たる同宿生
蕨にも日蔭の出来て彌生盡
朝霜や人を屏風の野焚火
手に汗や奮闘苦戦難合せ
笛の音の蕃社に牙へて椰子の月
山越へて春に又逢ふ櫻かな
右近てふ相方もある櫻かな
雨乞や菅の小篋の濡れ衣
戦功の土産話や明易き
四阿に風致を添る紅葉哉
剣止て凍つく籠の鈔かな
露重し輕し寝た萩起きた萩
洗濯の雫に氷る餘寒かな
副業に遺産を富の蠶かな
別れともなければ旅の火鉢哉
描かきたるやうなり雪の霽標
恙なく鶴も孵化する四月哉
菊からの客續きなり後の月
光琳を偲ふ小窓や笹の雪
積善の餘徳も廣し放生會
床脇に飾り刀や鎧草
此花に此嵐ある夕かな
菊の香や絹地に輕き筆走り

草庵に客絶間なし薬の日
文明の風は通はず蛙の戸
鶯は老けり釋迦は御誕生
佛日の供養に放つ蜩かな
さして行傘の雫や春の雪
今も猶耳底にあり時鳥
白波の中へ日の入る寒さ哉
世の中をすました顔や氷室守
雛の眉其の夜の月に似たりけり
約束の柴賣も來ぬ寒さ哉
夏羽織衣紋正しふ出たりけり
残されし言葉なつかし魂祭
一ト座だけ明け置く花の莖哉
秋の暮笑ふ隣を覗きけり
白熊の柵にのたくる暑かな
散る花に悟り得給ふ禪師哉
家柄も見へて牡丹の老木かな
朝風の寺や法會の鐘霞む
夜嵐の枕馴れけり鹿の宿
大雪の底に渡船の燈かな
澁茶召せ草餅も候峠茶屋
冬の雨松の嵐と成にけり
其家に夫婦別あり蝸牛
力ら負罵倒されても關角力
はくれ子の泣きながら來る螢哉

有松の絞りを噴の浴衣かな
濤船は神代からなり神樂歌
師の魂へ備へつ蓮の走り
吟
豈天下敵なし花に酔ふ英氣
御降に成りて晴けり除夜の雨
出憎きは常よ誘引ふ花見哉
春の山うつら／＼と登りけり
警官は特に目立や更衣
朝晴れの儘て置たし遠柳
孝の身にまどふ錦の蒲團哉
風に乗る力や蝶の高上り
虫啼くや雨夜乍らの薄月夜
蝶飛ふや一吹風の花吹雪く
先に立つ犬は迷はず閑古鳥
冬空に何を願ひや一人旅
客送る箱提燈や臘月
枝に啼く雉子や地震を知る木樵
掃明り牛の鬚顔に届きけり
町切に新蕎麥配る地主かな
淡雪や名も芳はしき天舟山
馬洗て憩ふ柳塘青東風す
白糸の瀧に纏る／＼螢かな
蝙蝠や月にも暗き袋町
歌屑を掃き出す除夜の一間哉
薰風や行幸の沙汰の路普請

露の戸やはかなき命たもつ主
漁火はもう消へて湖畔の霜白し
陽炎や師の塚ぬる／＼手向水
松風の油断を吹くや風柳
鮮に見る夜は寒し春の月
入らぬ灯の有明てあり蚊帳の外
雨雲を運ぶ日癖や栗の花
春風や大師の慈悲に無錢旅
椽に干す糞蕪や冬至梅
雅に集ふ友や御法の花莖
桐一葉物のはかなさ見へにけり
長刀も持た嫁なり田刈鎌
菟障子をれさへ曇き日なりけり
月晴て宵寝の隣り叩きけり
千ヶ寺は若葉隠れぬ時鳥
冬木して櫻も只の木なりけり
秋の蚊帳別れどもなき匂ひ哉
森巖の神杉深し蔦紅葉
春の野や草に膨れし乳母の袖
送り火や歸る我家も假りの宿
暮入つて誠見せたる螢かな
打ればや氣の濡る／＼迄花の瀧
沼淵に明け行く杜や時鳥
練り香の匂ひ床しや木地爐椽
雲見草殿上人に馴染けり

短夜や眼覺し時計夢に聞
身の内の實は朽ちす縣召
蝶鳥の飛木はかれて霜の花
春風や我艦隊は地中海
花守はよい子持なり茶給仕
おこり炭何か嚼く氣配かな
天職として鼓蟲はダンス哉
阿字塔や古色蒼然苔の花
化粧して町はなれけり益狩
戀知らぬ袂は輕き踊哉
字させば泡立つ池や水温む
佳酒一瓢花は萬葉の夕哉
佛前の光りに逢ふか灯取虫
毒矢研く蕃社の群や梭欄の花
實生せし紀念の梅や初薫
干飯や雀も屋根のこはれ福
海陸の交通絶ゆる野分哉
引沙や船底すれる入江川
深山路や唯閑古鳥／＼
荒鷹や朝日さし込む武徳殿
天津女の移り香あらん落し文
一二目基も上りけり春の雨
花の座や下戸もそろ／＼酔た振
太刀山も蚤の力に動きけり
夏籠や壁に一念掛佛

鶴の來てつゝき出しけり露の臺
髮結て海士も遊ふか佛生會
一朝の榮華に消る春の雪
語る師は世になし孤燈時雨ぬる
初雪や惜ひ事には日の暮る／＼
手に餘る貝や沙千の戻り道
露の奥供養の鐘の聞へけり
行年や啞に生れて寺男
罪のなき麥藁笛や牛童子
惜まる／＼櫻は早ふ散りにけり
散りて尙世に橘の薫りけり
よき月にして納まりぬ秋の雲
雲の峰白帆遙かに並ひけり
着心の紫衣にも勝る紙衣哉
稻妻や電氣遮る硝子窓
蓮の露享よと絞る袂哉
國の富あつめて稻の戦き哉
日盛や醫者一人乗る渡し舟
奮闘の舞臺に入りて田打哉
色香立つ未來床かしき逢哉
鳴立や翌日の我身を思ふ時
雪の杖念佛唱へて渡しけり
よきなきに詩債濟せは明易き
大福や二口三口子供にも
はつれ毛は枕の咎よ蚊帳の波

思ひ入る心の深し秋の鐘
寒ふ引く鐘の餘韻や月と梅
斷りや中よりわる／＼栗の毬
寒菊や書齋の窓の南向き
梅柳京は流石に物静
尾花枯れて俳諧茲に産れけり
半菰に吹き積れかし花の雪
笛遠し近し入江の臘月
農は國の是基なり鎌初
眼に澄めは耳にも澄むや秋の水
夢寒き旅の枕や冬の空
睦ましき足のもつる／＼炬燵哉
達筆に似ぬ訥辯や菊の主
十六夜や往來の人は知ぬ閑
廢園に紅一點の紅葉哉
枯れ蓮の枝露骨なり冬の池
田の水にしむ月あり啼田螺
雜菓子賣一軒茶屋や柿旨し
松風に心を乗せて涼みけり
樂觀と悲觀や同じ月見にも
卵の花や月夜の儘の朝朗
刻そうな鯛持ち込や青簾
掃く程もなき常盤木の落葉哉
忙かしの言ふ人訪へは晝寢哉
花咲きし世は昔なり反古紙衣

20 拾七

金襴の匂み刀や土用干
霞山こはれて花の匂ひけり
弓矢取るのみ忠ならず田草取
蝶二ツをりく影を重ねけり
火をともす事も忘れて雪の家
葉櫻や瀧殿に燈の洩れ初る
かゝる夜を爐に更しけり初時雨
山吹や此庭といひ此茶席
捨石に座禪組けり雪達摩
雨乞や水一滴の硯より
蝶舞や香に遊ふ子這ひ出す兒
笛の音に保輔ひそむ芒哉
歸り咲く花の思ひや後の難
日盛や往來の人の土埃り
拜しつゝ露の玉垣廻りけり
旗風に豊かな秋や運動會
蜀魂更る先師の遠夜哉
散る牡丹西施の柳眉動きけり
菊千本又も白きに目の戻る
降り盛り見盛り雪も面白し
深雪や五山の鐘も包む朝
詩作の夜盃茶に更けて水雞啼く
世織子の一番筆や吉書初
油花トや朋輩多き奥女中
寂易き物は塚なり苔の花

20 拾八

家も喰餓喰ふ金の入齒哉
泰平の御代や兜は床飾り
高からぬ山から出たり春の月
行秋や柿の梢の忘れ籠
敷島の武は鑑なり大矢敷
竹伸る程は短き夜かけ哉
功成て歸る勇士や春の風
雨三日風の一々に散る櫻
貧しさは佛に見せぬ燈籠哉
吹貫の鯉たたくましく戦きけり
所望して切らす豆腐や朝櫻
澄遂て障り雲なし今日の月
煤掃て居心のよき座敷哉
竹婦人女客にも抱かれけり
翡翠の翼を干せる朽木哉
筍も輪も堅田の花や落る雁
湖を懐ろにして山笑ふ
鶯鶯の春に静なる朝日哉
竹婦人榮華の夢を盡しけり
夜櫻やなはと思ふ大かゝり
名月や橋を渡れば東山
見る物に心のふるゝ卯月哉
虫干や辭世を添へし大兜
簾越す風石筍に通ひけり
紙雜や質素を旨とする家庭

20 拾九

俵着て無禮も床し寒牡丹
なつかしき師の俵や土用干
水に紙うけた様なり初水
駝荷馬を叱る蚌や蟬の聲
君待つ間長し待得て明易し
水莖の跡なつかしき扇哉
二ツなき殿司の筆や涅槃像
松風や我も時雨るゝ一人旅
薫風や法親王の大廣間
待ち遠し隙ある身に花の沙汰
踊の夜風紀に時を限りけり
秋の暮親しき友の欠にけり
短艇漕く競争會や青嵐
五六丁奥に寺あり花木權
子一人にしやれ言多き陸月哉
櫛の戸や隠さぬ貧の美しき
汚れなき精舎の庭や白椿
巍々として雪の書に入る芙蓉峰
靈泉の鯉の所作見る日永哉
嫁の荷を藏へ仕舞て蠶棚
忘れ戸に目覺めて鳥の明易き
初瀬寺や牡丹に許す通り抜け
紫陽花や後添へ一寸若つくり
魂棚や千草の露は手向花
見つゝ行見つゝ書にせん雪の人

百 20 貳拾

御降やたつた今迄除夜の雨
買はて品撰む女や春の雪
炭焼の嫁を迎ふや山笑ふ
槍梅や京師跋扈の壬生浪士
行秋や尾花か元の忘れ水
江は暮れて船に人なし鳴の聲
今朝植た竹見る窓の月夜哉
獨取れば庭の葉柳地に動く
物言はぬ計りてもよし竹婦人
追憶に更ける夜毎やきりくす
掛乞や咄上手の拂下手
冬の汗冷たき金と成にけり
菜の花やこんな處迄畑の姥
鶯や未た半摺のどろゝ汁
夕顔や一ト役すみし裸牛
渡る雁月に羽裏の光り哉
釣瓶から蜜の出たり雲の峰
小松曳く力らにゆるむ鳥帽子哉
梅の戸や鼓負ふたる物囉
今朝の霜座禪の僧の眉白し
竹添へて高く咲かせん萩の花
新茶少し添へてくれけり里土産
恙なき田を名月の照らしけり
頂て虫拂ひけり師の遺稿
碑や手向の花の置所

21 壹

好き夜具は下戸に取らば花の宿
櫻炭ちなみの火花ちらしけり
半身の佛世に出る彼岸かな
箱中や此永き日を舞鼠
絞るほど柳は濡れて夏の月
女客計りてもなし十日菊
難題の遂に解せず晝寢哉
ついそこら掃て砧の座取かな
耕すや曉清く笑ふ山
願よし暇も出たしよ墓參
向替る嘴の光りや月の雁
梅や香や得かたき者は人の徳
燈籠や不歸流水に寫る影
紙衣着て世を捨人となりて覺
義經の八艘飛びや春の風
百舌鳴くや夕日か丘の稻林
散る櫻我れに無常を知らせ覺
鹿の宿酒白ふして飯黒し
難船のある風てなし稻の波
新らしき疊匂ふや福壽草
鳥飛んた枝の動くや雲の峰
水温ぬ日をめはへの卵かへる
花の雲三千坊を包みけり
積善の二字に富あり姪子講
破れても風新らしき古團扇

21 貳

在祭り戀初めし昔語り笑む
清晨や雪一種を幾乗り
旅に寝て寝らぬ蚊帳の廣さ哉
龍田川唯の落葉も旅れけり
送り出て別れ際なし月の門
幕一重外は花見の往來哉
南面の一枝に春意動きけり
雨ふくむ宵や火串の空移り
幕絞る皺に散り花溜りけり
花散てしみくゝと雨聴く夜哉
名有る庵椎の茂りに隠れ覺
卒業生を上座や雛の右左
置替へて日和になりぬ花の雲
引過て力の餘る鳴子かな
瘦馬の尾を吹く風や忍冬花
深か入りは心の闇や夜るの花
行水や春の名残りをうつす山
向ふても追はれてもよし春の風
遠風の海より明て松青し
子に家督譲れば安し花の旅
鳴立つや残月崩る池の面
瓔珞に響いて悲し小夜砧
虫の音もやうら枯て秋の暮
寒き日を母に尋る炬燵哉
時鳥鳴や机に筆の音

21 參

釣船の並ふ小春の入江かな
人酒を酒人を呑む櫻かな
小春日や棹にふくるゝ猿デンチ
花に風心も共に亂れけり
花の鐘撞かすもかなと思ひ覺
暖かき庵の日南や冬牡丹
雨乞や簑につれなき日の匂ひ
きくところか江戸と海苔の味
涌立て玉散る程の清水かな
花に風風に花散る夕かな
開傳ふ咄し懐し春の雨
暗け雀鶯のみの春てなし
佛の日月も暈召す夜なりけり
真心の花や誠の手向草
望樓に誰か明笛や夏の月
蓮の香や拭ふた様な朝の空
柴舟に添ふて廣かる霞かな
日の本や津々浦々に匂ふ菊
國々や味噌とすましの雜煮餅
大矢數賢者を凌ぐ愚の手練
花は實に成りて静や郭公
塵の世を離れて蓮の薫りけり
老功の商談つきす姪子講
白蓮や浮世のうさを聞かぬ處
流星に礎打つ手の亂れけり

21 肆

帛を裂く如く一聲時鳥
蚊帳の月織目きさんて走り覺
蜂の巢も知らぬ内こそ佛哉
歸り花歸らぬ人に手向けり
陽炎ややかて田に成る畑續き
降かゝる花に香の増す碑の句哉
さし汐に芦は動いて行々子
五月晴齋も翼を廣げけり
髮塞し根掛けは珠數に繋かるゝ
笛の音も澄渡りけり月の寮
つゝれさせ油断の我をあさけ覺
尻に根の生へて出られぬ炬燵哉
花物を云はねと今日の主かな
桐一葉庭の駒下駄かくし覺
萍の淺瀬へまわる夜明かな
鶯替へた袖に夕月覗きけり
明徳の二字を守りて釋奠
梅早し落温泉のかゝる一孤村
徐ろに水の流れに柳かな
若草や田の畔傳ふ鶏の群
母病みて伽する閨やさりゝす
淋しけな顔並へけり後の難
重箱に蒔蕪すつる彼岸哉
後に汲む人に濁さぬ清水哉
梅に月慾に限りのなき夜哉
百一

21 五

炎醫者の玄關構や桃の花
水にさへ若き名のあり今朝の春
雷鳴るや沛然と来る雨の脚
短夜や目覺て惜しき戀の夢
寒梅や君を諫める歌一首
咲く中の釋迦の光りや花供養
ひとつ音になるや鳴入蟬と蟬
草餅や娘見に来る奉公先き
煩惱に許さぬ耳や露の音
土運ふ軒の廣さや初乙鳥
鶴も世は千代とかきれり春の水
子子や魚に劣らぬ水こゝろ
馬に物言ふて枯野を通りけり
眞盛りの花に悼はし雨の音
子は眞似をして笑はずや壬生踊
旅ながら營む今日の時雨哉
虫啼くや細殿寒き拾圓座
國土皆風なき二百十日かな
開かねは扇も風の蒼かな
河骨やのそけは濁らす池の鯉
長閑さや浪のうねりに眠る鳥
忠孝は仕とけて菊の翁かな
演習の夜營に照るや冬の月
自轉車のかける埃りや風光る
勝か負か此却にあり算

21 六

啼りを餘所に無聲の蛙かな
耳に口扇屏風を圍ひけり
正月に追かけらるゝ師走かな
亡き友の噂さを花の庭かな
灯を消して席の定まる月見哉
師の去て早十三年花匂ふ
五月雨や苦から落る舟鼠
ゆるなき巖や苔の花衣
啼や虫嵯峨野は戀の捨處
綿々の懷舊談や春の雨
水入れて角力大きう成にけり
雪國は慘事都は雪見かな
一敷は風一敷は時雨けり
都には稀な黒さや水泳兒
柳から透くや孤村の夕灯し
世を捨し身にも名残りや散櫻
日は弱し鳩吹く聲の遠鴉
金の成る木の生立か福壽草
梅咲や峰へ晚歸るは何の鳥
名残とや老翁の藪に鳴く
冬牡丹蝶の來ぬこそ淋しけれ
高僧の下山を慕ふ杜鹿かな
嵯峨嬉し竹の奥にも櫻かな
奇峰皆湧き出る如し五月晴
葉柳や江を隔てゝ漁家娼家

21 七

牙へ返る古廟の鈴の響かな
失戀の間に淋しき虫の聲
蛸の來て瓜喰ふ畑や薄月夜
雨淋し歸り遅れし雁一羽
髪も結替へて出代る女かな
梅散りて櫻艶なり春の園
草市に貸して露けき軒端哉
水祝ひ戀のうらみもまじり鳥
摘草や子のあふなきにつみ負る
蝶の舞ふ羽風に戦くすみれ哉
閑伽井汲む切下け髪や蓮の花
掛取て戻れば掛けに取られ鳥
夏籠りや眼の下通る根なし雲
夢殿や如月寒き松の風
散る花に響く思ひや暮の鐘
親心子は知らぬなり二日灸
見るうちに雪の往き來と成に鳥
龜風呂の由緒聞はや八瀬の秋
來る人に時間問ひけり冬籠
前提に御慶も言ふて電話哉
頼むかひ有し小雨の接木哉
一心の聲は曇らす寒念佛
冬の月出水の跡を渡りけり
賑はしき市場の花よ櫻調
塔に残る夕日や蟬の高鳴す

百二

21 八

蓮の香や法りの教へは底知れず
招かれた團扇に走りる小婢哉
一鏡の鐘洛外に霞けり
夜も雪も深しと客を泊めに鳥
争ひの中に戀あり雪礫
山吹や去年の出水の崩れ垣
沙先の雲もはなれて五月晴
太郎には戻しとむなし鉢の兒
人の身の無常にあらず花に風
圓滿な家庭に匂ふ棕かな
家と身を保険にかけて花の旅
イむと影詠む人か雪の中
豊なる音や寝て聞く落し水
舞ひ上る蝶に素氣なき野風哉
忘れ浪打つや長閑な浦日和
徳を積む机のそはや夕蚊遣
庖丁も三味も持てるよ年男
外臣も召さるゝ菊の御宴哉
呼へはチ、と答へる聲も長閑也
雨細し寝ふ氣催す春の宵
白髪ふさくとして福壽草
月落ちてからも亂れず雁の聲
夕立や瓦の匂ふ町つゝき
時ならぬ小鳥鳴せて冬籠
里の夜や忍ぶ男の柿つよて

21 九

遷佛や東風に吹かるゝ稚兒の袖
封切れば香もあり花の誘引文
芝焼や村費負擔の新つゝみ
日盛りや水に届かぬ釣瓶繩
月高ふ残りて露の嵯峨野哉
鳳輦の尊し花の濱離宮
道端に七日過ての薺かな
嫁に行く娘教へて柳かな
蝸牛や樹々の葉裏を鳥羽繩手
此花に此世もかろき茶店かな
追福の鐘霞みけり眞如堂
青簾海見る窓となりけり
永き日と思はれもせぬ世なり鳥
丹碧の御堂に風の薫りけり
山海の珍味に飽きて納豆汁
氣任せの旅に日のこむ彌生哉
梨壺の鬼も泣くらん秋の雨
有かなき風に芒の搖き哉
掛乞も共に涙たの身賣沙汰
海外に出て國富ませ今年絹
師の恩をよと思ふ夜や不如歸
開馴れぬ山の鐘さく花見哉
長生の鶴や今年も屠蘇の主
蚊一ツ耳さわかして春の行
早るあり慈雨あり天の恵み哉

21 拾

滴りの水や一枝の花橋
頂いて夫の汗着を洗ひけり
涼一味風一過雲一朶かな
散る花や思ひ果さぬ人の上
煤掃て明るき神の燈し哉
遠霞すねたる松の面白き
船の入る聲にも止まず行々子
來る證に擲置けり出代女
横笛か涙の種や土用干
薬とて夏の朝起すゝめけり
夢覺て破る寫眞やそゝろ寒
冬の夜の心まどまる一間かな
霞む迄妻の見送る出船哉
遣る先を撰む牡丹の根分哉
をしむ日の暮ても嬉し花に月
翌日を待つ湯立の釜や月の霜
葉櫻に納まる京の埃りかな
是非もなき人に伐らるゝ牡丹哉
黄なる蝶隣の畑の日溜りに
鳴子振る輕燒賣りや春の宵
散る花さ共に汲るゝ小鮎かな
會者定離悟らせ振りや走馬燈
あれを折これ根引や草の花
鶴の聲霞の奥に聞へけり
酒の味覺へて花の散る日哉

21 拾壹

買ふて來る豆腐の上や春の月
田に足りし雨涼しさを配り鳥
雪の果ても過ても雪の山家かな
夏近し淀の夕へを鯉の飛
師の遺訓偈ふや雉子のほろゝ啼
山を出て海に隠るゝ渡り鷹
念佛の口癖はよし丸頭巾
花賣のつゝし計りをかさしける
花落て葉に千代を見る椿哉
振向けは白雲高し駒鳥の聲
七賢の宴涼しや竹の月
朝顔の花に語るや未亡人
ひや／＼と星の光るや關ヶ原
塗畔の中に蓋めく田螺哉
勤儉の杖たしかなり年の坂
鶴の曳くあとや静に動く雲
跡に氣の残らぬ沙干戻り哉
散櫻風の科にもなかり鳥
城跡に鷹も眠るや臘月
松はかり夜かけ添ふ今日の月
母と我無口二人の梅雨哉
蚊柱の崩れかゝるや溜り水
梅薫る茶寮に集ふ詩人哉
絹晒す女一人りや浮衰鳥
橋涼し五彩變化の灯も映わて

21 拾貳

梅壺や春を時めく匂ひ鳥
振り落す額汗の汗や峠茶屋
獲ならて母の覗くや蠅の夢
人の行く道さへ行けは櫻かな
瀬田廻りするや日永の出來心
ほろゝ打つ雉子に散けり山櫻
六月や水に際なき田の嘶
皮脱や色青竹の肌障り
玄海の浪は果なし秋の風
萩の露月を孕んてこはれ鳥
初雷や神祕を語る白羽の矢
鳥はかり鳴て花散る深山哉
裕着た日に見出しけり福白髪
形代や是にさへ有る浮しつみ
今日開らく雲井櫻や縣召
尊みし神や柳の花の主
蝶を追ふ鳴子かけたし芥子畑
世渡りの綱も濡らさず涅槃日
塔のみの向ふに見ゆる臘月
父は猶嬰傑として接木哉
傳へ聞く碑の苔深し閑古鳥
人氣には勝つて負けたる角力哉
火を打て旅の心や庭櫻
善は急く教へか梅の走り咲
戀のなき人は佛を春の月

21 拾参

丸髪の傘の柄漏りや春の雨
抱上る子の膝にせく難煮哉
新絹やちからの見ゆる底光り
香も添ふて流るゝ水や梅の里
春の草砂美しふ流れけり
閑人の机の先や緋桃咲く
往て見たき處の多きよ櫻月
夜櫻や浮世の人の眺め振り
藥降る日や露の戸の露嬉し
梅暖し寒し藁屋は冬の儘
口切や嵯峨のころ柿加茂の水
磯に来る鳥遠退くや萩の聲
蓬萊や人徳高き袋鞆
四顧既に入なし花に月と我
矢の如く流れ行世を浮寝鳥
衫著につく草餅の匂ひかな
寝耳にもよい月らしき砧かな
月の雲花の風よりをしみけり
初雁を聞くや網すく藁屏風
名月や奇抜な俳句詩の天地
長閑さを春負て歩く小鳥かな
田は人に作らせて菊作り鳥
手料理に色も香も有る海苔の味
笠一ッ小さく見へし青田かな
夏萩や女繪師住む表庭

21 拾四

寂照の反魂香や盆の月
紅梅や時代に寂し置井筒
鳥雲に入るや搖かぬ鳥一ツ
花よりも無事を手向や魂祭り
詩と歌の友あり月の一ト蕊
花咲て十三年の過去偲ふ
ぬれてある箸氣味悪し心太
水の垂る器量や雨の美人草
小町にも身の果はあり枯柳
水揚る利器に早田青みけり
冬の雨松葉の先にたまりけり
夕暮や此静さを散櫻
戀の猫瓦落して別れけり
さげ髪のリボン危ふし藤の花
物云はぬ戀は美し花に蝶
見果なきけしきや花の滿る山
緑咄し藪入顔を赤めけり
鶏に取られし牡丹大ひなり
久し振り高殿明いて山笑ふ
白菊の闇をつらぬく香かな
木犀や共同墓地の這入日
もどりく袴ぬくの暑かな
寒月や光りまはゆき不動尊
鷹狩や松原積く古戰場
麥秋や埃りまふれの石佛

21 拾五

陽炎や鶴に餌を遣る箸の先
鶯や思はぬ筆の止め處
鳳尾の舞ふや小春の和晴天
芝焼や焦けて残りし馬の杓
戀猫や下女か妬みの投げ火箸
奥深き山の裏や遅櫻
窓先の春閑て落の雨
なんどのふ野山賑ふ彌生哉
散際し首伸し切ぬ芥子の花
盲人の鶯に杖取れけり
花の旅京て日敷を重ねけり
蚊の聲の附ひて流るゝ夜船哉
時鳥鳴となりて明けにけり
布袋にも似たる和尚や鞆
馴染ふかき世を惜みてか歸り花
時雨るゝや籠鶯の朝眠り
山は呼び海は答へて秋の聲
散る花に浮世を軽く悟り鳥
明て有る夜を繕ふや時鳥
大漁や鱈滿載の船五十
梅か香に紐ゆるめけり鬘袋
漁季果て浦のさひれや鳴千鳥
瓢箪の尻も据へけり花蕊
山青く水白き夜や月麗
濡れ佛に象徴造る蝸牛哉

百四

21 拾六

櫻かも知らねと寂し冬木立
寒月や嫉み打込む釘の音
心急く時もあらうに蝸牛
善き事は人真似もよし放し鳥
梅提て長口上の使かな
春の川飛へは小魚の走りけり
鬼灯や母の言ひ足す流行歌
焙りなほ木の葉に似たる干蝶哉
立聞の罪に重たし雪の傘
詩に歌に讀まて須磨の秋暮
木雪と共に降りけり山の蛭
鐘聞かぬうちから暮て秋の雨
名月や此柴の戸の捨かたき
夢酔とは用意至れり沖鯨
迷ふ道悟れば廣し花の奥
落椿風の心を離れけり
星崎の星は溢れて飛莖
月ゆれて涼しき松の匂ひかな
長閑き温泉に染し浴衣干され鳥
口くせに小歌唄ふて接木哉
陽炎や舟に積みたる川に石
師の首途送るつくく法師哉
散て行葉も苦にはせし歸り花
受ける次の間廣し青簾
芹五寸水三寸の流れかな

21 拾七

門前に壁物乞ふ遅日哉
極樂のやうに苦界の晝寢哉
夏やせの戻る心地や初月夜
宇治て聞く丹波言葉や茶摘時
春の雲四澤の水に映りけり
玉床の花活け替て更衣
こそくと跡片付て花の留主
ひさ枕醉眼に見る柳かな
政岡の今や炊かん暮遅し
海棠や雨の眠氣の覺る色
鶯や小袖に包に咳拂
紅白の扇子や風の裏表
世の中を後ろに見せて散櫻
月涼し椎の濡葉に渡る風
虫除けの札のみ残る冬田哉
往昔の都も鹿の在所哉
世は旅と悟ればやすし散る櫻
風の箱百萬石を揺りけり
草の戸に酢の匂ひけり春の風
鍛練や星をいぬきし大矢敷
長き日を髻植付る面師哉
行春やベンチも寂て花の塵
廣き野を我が物顔や蝶の群
富岳白う日本晴や鷹の舞
荷の過て蔓にあふなし蝸牛

21 拾八

自畫像の遺墨に寒き燈哉
梯子田の裾に曳き鳥朝霞
菜の花や山遠く水長き里
花の蔭汲むも名残りや手向水
さして往た家は留主也秋の暮
團體の八幡詣てや春の風
雁鳴や枕にかよふ波の音
掛香に鶴の眠り覺しけり
飼馬の蹄打けり木樵の戸
盛り上げて凍りし床の粽哉
蹴られ落つ鶴鷹の羽をくわへ鳥
搔かぬ日も焚ぬ日もなき落葉哉
酒五升寺の紅葉に香まけり
安らかな夢や葉影に寝むる蝶
筆捨た名所てもなし土筆
鹿啼や弦月五尺峰を去
師の逝く日腐草螢を産にけり
夏瘦てよしなき噂せられけり
飛び得ざる蠅か障子に春の陽か
山寺や庭一面に花の塵
心たる一字書きたる試筆哉
鐵瓶の蓋に暫らく秋の蠅
紙燭して既見に出る吹雪哉
時雨會や来て鳴く鳥も手向振
炭の香や物らかな人造ひ

21 拾九

廣告の風船揚がる彌生哉
藏建る地を萬歳に踏せけり
餅搗や是て黄金の納め日
寝心や水鶏の叩く雨一夜
行春や綾羽吳羽の夢の中
さなきたに寝さき夜半や鳴く狐
寄に梅敷入送る片荷かな
鞍上に瓢ひわゆる梅さぐり
梅見客歌に酔せてかやしけり
観賣子寶多き裏長家
英魂は死す魏の世を蜀魂
若の花咲くや浮世に遠き庭
秋晴や眼鏡覗かす富士見茶屋
戦亂を餘所に平和の田植哉
苦むした座禪の石や閑古鳥
跡の友呼ぶや霧たつ峠より
魍魎の寝姿見たり秋の雨
尾花枯れ水又瘦て細りけり
能い中の垣か難の隔て紙
石礫いたちは逃て散る牡丹
花も實も有る横綱の分角力
笹の葉に千代を巻こむ粽哉
市の雑賣られて行や玉の輿
豚の子の年々殖て桃の宿
千鉢の佛や晝の蚊食鳥

21 貳拾

夏籠や松吹風も法の聲
若竹や雲振わけの一そよぎ
日の本の誇りは不二と櫻哉
蓮の香や朝燈明の物静か
用のなき人にとらるゝ火鉢哉
牛洗ふ春の小川や暮ゆるとる
心なき案山子にも立つ月日哉
彼岸會に忠僕茶屋の榮へけり
思ひ出る故師のすさみや月の笛
句に更かす夜の賜ものや時鳥
花の座に添わた哀れや忘中僧
暇乞するまで知らず夜の雪
竹涼し古聖を友の机先
窓の灯の草にこはれて虫の聲
曉夜やまた人なれぬ辻易者
餅の手に戴く春の小袖哉
葉柳や能く寝て知らぬ朝の雨
二タ時雨纏めて松の雫かな
紫紺色の夜店の空や春の宵
其儘を手向させはや花の山
水論の解けるひまなし雲の峰
吹く風に飛されもせず虫の聲
音せぬは忍車かかたつむり
天然の妙面白き瓢かな
出て見れば行連もあり梅探り
百五

いとけなき盃事や難の宴
積善の家に若はなし年の坂
大鳥の人を見下す冬木かな
手も足も濡らさす芋を洗ひけり
國庫や文の林に風薫る
淋しさや闇に椿の落る音
極樂の稼てはなし蓮根堀
送られて揚屋這入りや臘月
紙燭して花に物言ふ雨夜哉
雨多き伊香保の空や時鳥
九穀の秋豊かなる案山子哉
落鮎や彌勒は未だ蛇の腹
寒月や日本放れて行巨艦
薄月やちら／＼梨の花の散る
稱名の聲は埋れす雪の庵
油しむ枕つめたし雁の聲
入相や心あけに花の散る
醉易き丈け醒易き新酒かな
墨摺れば袖に寒し後の月
大平の風や花見の人に吹く
散るは待つ初めと花に悟り覺
片影の出来たと晝寝起しけり
花の雲吐くや芳野の夕嵐
坂道に杖の施行や鹿の宿
春雨に友引止めて酒宴哉

七賢の枝ともなれよ今年竹
佛果得し姿や蟬の殻衣
蓮の香や實に寂光の朝ほらけ
草の戸へ座頭戻るや夕時雨
晝寝には過た夢なり不二の山
菊咲や閑居主の名そ床し
改心の善は大なり放ち鳥
團體の廻遊船や島若葉
苗代や鳥除けに釣る欠け徳利
亞字欄に影置く月の芭蕉哉
吹くまゝに吹かるゝ風の柳哉
掛香や人にも花の一盛り
落付た庭の構へや冬牡丹
此外に望む物なし花に月
白蓮に達摩の眼据りけり
煙なき刻煙草や入梅深し
名月や盡ぬ眺めを明けて行
初花や母國を偲ふ新領土
虫一ッ啼て秋立つ庵かな
梅白し垣根の雪にはちぬ程
長居して鶯人にあかれけり
男振り上げて養父入戻り覺
捨る身に痛覺へて施行粥
雉子啼や大攻に落ちし城の跡
紅葉映ゆ溪や筏を流す人

國に依る難様々の名稱哉
蚊に逃けて蚤に追るゝ一夜哉
春の夜やつい湯戻のまわり道
今日も又啼かず短夜明にけり
獨甲の鉢に植へけり翁草
雷の陣一鴻千里の響かな
添へ乳した蚊帳に忘るゝ禱哉
送られて最合車や臘月
來る灯か待ては行く灯や枯野原
薫風や厚き情けの碑に籠る
破れても見處のある芭蕉かな
島守の墓に群れ啼く千鳥哉
春日和駱駝ノツソリのそり哉
隨夜や幽横切る畑け道
諸菩薩の在たわ如く蓮に月
長閑や書に有るよふな花見連
陽炎や猿共立てる椽の先
身の重き嫁をいたわる炬燵哉
七情の媚にも染ます蛙の戸
下戸の眼に一際著し酒の酔
物足らぬ臆に春の籠りけり
山の香を窓へ吹込む白雨かな
十心に春を惜しむや百千鳥
傾城の天下晴たる晝寝哉
萩の露蝶の羽風に盈れ覺

夜櫻や老も若氣に戻り道
此里に清水ありと記すや旅日記
名月や人静まれは松の聲
金貨の眼するとき師走哉
名の夜てふ月や七日の花心
古社一ッ包む茂りや蟬時雨
竹婦人風に靡きし夜もありし
寒月や神の井浴ひる人の影
愚僧住む貧寺の軒や釣干菜
蛟龍は壺中にすまます司召
鶯やふと明た戸のもとされす
寒月や亂れて凄し竹の影
己か身をかこち顔なり羽拔鳥
落る迄花は儘に寒椿
鐘の音のさひし佛の別れかな
飛行機の油の氷る餘寒かな
花の鳥立つや行衛も霞む中
國寶の拜觀許す彼岸哉
稻妻のあと揺立る燈かな
月の出て理想にかなふ花の山
かけるふや若むす庭の手洗鉢
春めくや梅一輪の笑顔より
橋姫の袂に霜の別れかな
卵の花の曉寒き小家哉
徒然や衛士も歌詠む今日の月

大内の有様寫す飾り難
高髻の根を崩しけり踊の夜
聲高に咄して行くや枯野道
開眼を兼て地藏を祭りけり
消へす有る法りの燈や寒古鳥
溢くさき網の夜干や磯の春
出来稻や藁にして迄譽らるゝ
非常線張る軒影や臘月
墓守に顔見知らるゝ寒さかな
散や花今は心に何もなし
辨慶の強ひ話しや二日灸
荷ひ棒立てかけてあり木槿垣
鶯鳥や名香薫る大奥の間
牛の脊を借りて枝折る野梅哉
峰高し俱岐羅一聲雲の中
長閑や船をこそくる春の水
碑の前や手向の水に花の浮く
柴よりも先に賣れけり初炭
苗代や水の都合もよき處
いそかしき市とも知らぬ海風哉
隔てなき談しに圍む火鉢哉
日車や催促受けし小晝酒
花や花花の花あり花の山
鯛や魚板のひく杉の奥
寒梅や下都をつれし歌つかひ

繪の如き三笠の山の若葉かな
寒村に慈悉ある毛見の涙かな
身鯨や寸にも足らぬ膳の上
千山萬河皆一色や六ツの花
弱く出て助けられけり冬の蠅
萬戸只死せるか如き霜夜かな
勤儉の門を港や賣舟
燒芋を袂に握る寒さかな
空に月水に月見て橋涼し
春もまた寒し雨にも交りもの
春の水花一輪に淀みけり
八重垣の風曇み込む扇かな
紅葉より心そ秋の色深し
船にさへ供へ物あり盆の月
下馬札にかゝる若葉の雫かな
大地皆只潤として草萌る
佛にも雪にも今日の別れ哉
混交せた鉢や櫻煮柳籠
初花や迷悟の此處か別れ道
鬼灯の色にも見へて秋立ちぬ
稻妻にしのひ女を見付けり
戀風に吹きさらされて鉢叩き
敵打ち遂げし氣分や富士詣
神の灯のかすかに洩るゝ茂哉
とされ／＼雲動き秋暮れんとす

雑段の下に舍人の遊ひかな
雁啼や月澄渡る湖の上
罪つくる手にいとま無き鶴龜哉
踊子の浴衣や戀の濡れ燕
あら嬉し奇妙鳥來不如歸
夕顔や世事には疎き人の軒
片袖は白し最合の雪の傘
早ふから戸も締よせて秋の雨
灯取虫二人に浮名たせけり
老同士脱かす頭巾の立咄し
三日月の下や鶉舟の出る支度
雪隠の窓滑りけり桐一葉
元日や勳章付けて妻の笑み
どんねるの岩割音や霧の奥
忍び音に啼くや櫻に夜の鳥
座並ひは女まかせや桃の花
夜櫻や二ツの庵に燈の臆
我足に成つたと撫る掃火哉
一人宛時雨て行や數寄屋笠
蝶も舞つかれて草に眠りけり
蝶も送り迎ふや花の御幸道
風入れる間も言まきや針の稚兒
寺寂て朝地濕りを椎の落
切髪の手自未た若し斷腸花
見へぬ眼も香をしたい鬼梅探

尺八の悲曲に月の別れ哉
飛行機の輪を描く小春日和哉
煤掃やこわい番頭の鼻の煤
糸遊や一望千里家まはら
欄干に身を投げかけて夕涼み
千歳經る松の蔭くむ清水哉
亡き君の名をば雲井に揚雲雀
誰か夢も蝶となるへき彌生哉
悔りて取逃したる海鼠哉
人に成るまでは歸らす年始狀
鶯や座禪の僧は知らぬ顔
封建の榮華も醒て網代守
片言を語る兒に春待れけり
よき流添ふや若葉の山つゞき
朝顔に一トつは隠す枕かな
大寺の柱つめたし牙へ返る
待し花名残りの花と成にけり
山寺に鳩の豆賣る彼岸哉
散さして持つ手に重し芥子の花
魚飛て月かけ崩す春の宵
太箸や木曾の匂ひの始め哉
櫓の傍猿も行義に並ひけり
嗜みの化粧に春の寒さ哉
虫干や悲劇に泣いた袖袂
銀色の時雨錦の木葉かな
百七

22 九
茶摘女の籠に暮れ行日足哉
耳塚に素通りしたり時鳥
人の行く方に寺ある枯野かな
目に利し新茶や耳の時鳥
猿の智恵遂に届かず水の月
橋越せは見勝る花の籠かな
雅の道をたどりて軽し傘の雪
更て汲む釣瓶の音や月の宿
築山の日和も捨てず飛小蝶
稼く人遊ふ人野の長閑なり
男賣る伊達の朱鞘や女郎花
雁來紅枯れて片野の雁寒し
虫鳴やを数寄屋の灯の薄明り
月二ツ澄む涼しさや水と空
形代や隠した年を水の上
春雨の音聞て寝る夜明哉
一反の梅に客ある藁家哉
隣りへの便りも遠し雪の朝
涅槃會や森羅萬象皆涙
散る沙汰の無目出度し年の花
笛の露秋の流れにすゞきけり
不足なき顔や晝寝も高軒
椎煎るか芳香高き籠茶屋
玉を抱く臥龍は是か松の月
あいらしき唱歌聞ゆや雛祭り

22 拾
若水や流れはるけき神代より
勝たせたき方は小さし角力取
月の笛一座は感に打たれけり
野地蔵の身も豆蔲の禪かな
子は親に譲りて花の留主居哉
俳仙の難句苦にして晝寝哉
花に風昨非今是の世なりけり
菜の花や雨にもならぬ鄙曇り
二枚舌の罪を責むるや年の鬼
雨も名を變て降りけり年の朝
落ちてから蜂のにけ出る椿哉
碑の寂も十三とせや夢見草
秋の行く方へ消込む煙かな
笈の中ひそかに見する夜寒哉
紺足袋や男まさりの内娘
六根の快なり爽なり春日和
仇し野の露とも成らず秋の蝶
身の蔵へ寶積む日の彼岸かな
立鳴の羽音に聞の動きけり
猛烈な戦ひふりや印地打
花名残るうしろさみや暮の鐘
薄墨に繪鳥塗り消す時雨哉
枯色は同じし朱雀野紫野
傘さして馬に乗りけり春の雨
乳母の無事機音に知る花野哉

22 拾壹
手初のふし不揃な茶摘かな
稻妻の見る跡もなく光りけり
突直す手まりや唄も跡もどり
白酒は笑ひ上戸の揃ひけり
定宿のもてなし涼し籠枕
致命傷難にあたへし鼠かな
藁苞に入れて雅味ある納豆哉
寂そゝろ詩情をそゝる時雨哉
鳴鳴や我問ふ道は跡戻り
寒梅や葛の根晒す手杵白
さゝ浪や隔てぬ鴛鴦の番ひ哉
亡き姉の好みし色や我亦香
カナリヤや俄分限の唐木椽
一里先の流車音高し夜の枯野
月は待限りも有るに時鳥
梅嗅てあたら答をこほしけり
翌日は誰か浴を待そ花の山
馬に鞭あてゝ夕立潜りけり
青空や雲雀一ツの大景色
波々星流るゝ星や天の川
眞直に垂て長閑な柳かな
花譽めし木さへうるさき毛虫哉
蛙骸あり鴨の糞と成ぬへし
切干や菘二枚を一袋
瑞雲に光輝充けり初日出

百八
22 拾貳
六尺に伸ひし男の晝寝哉
磯千鳥根上り松を潜りけり
飛ふと云ふ念は失せねど秋の蝶
譽たらず見飽す月に寝ぬ夜哉
美しき夢や彌生の京泊り
限りなき佳景や月の千松島
方圓の器にこそ傲へ春の水
木の芽摘や雀料理の宿の妻
芥子散るや松さへ吹かぬ嵐にも
長き日や歌洲戦の長咄し
ゆつたりと一と睡りせん春の雨
過去未來現世に咲くや花一樹
五加木撰る内侍の尼や庵の椽
沖の帆はかもめに似たり遠霞
假の世にまことを拜む涅槃哉
蕙帆に風光らせて山笑ふ
何時盡きる涙の種や虎か雨
僧一人孤村の寺や茗荷畑
秋立つと知るや草木の戦きより
竹婦人寝心妻にとはせけり
散りきはの清さなめや薄櫻
歌添へて送るや菊の忘れ杖
泥溝や落葉の中の古端書
花曇月はもとより日も朧
傳騎二三飛ふや花野の夕まくれ

22 拾參
なかもよき時の坂や草の餅
虫鳴や忠魂眠る古戰場
惜めども花にかへらぬ入日哉
法の聲聞き澄しけり盆の月
鷹狩りの話しに鶴の玉子かな
慈悲深き家や燕の巢拵
花に眼の盡てイむ山路かな
今朝一ト葉秋の始めを知られぬ
氷る鐘聞て小さう寝たりけり
江上や殘霞一抹暮ゆとる
埃り立つ人出洗ひか花の雨
花もよし苔も玉の桔梗かな
を手討を免りて落行霜夜哉
青柳や相合傘の風呂戻り
寂語の過去を偲ひて花の宴
加茂の灯の若葉へもれて時鳥
年々に枝は茂りて梅匂ふ
六つとさく花の苔か初霞
長らへて結句はかなし冬の蠅
冬の雨遠山白う晴れにけり
櫻てふ名もはなやかや市の鯛
世は易さ色や青田の朝そよき
鳥瓜赤し故郷の秋偲ふ
落し水吳越も和して流れぬ
勞れ鶉の濡羽に煽つ簪かな

22 拾四
大御代を謳歌して屠蘇酌に晝
九頭巾百二十五歳論者かな
鹿鳴や巨木の奥に透く孤燈
柿かふるお染のをかし猿芝居
後から誰そや籠の紙礫
仙翁の鬘の白さや木下閣
碑を中に太鼓叩かぬ祭かな
雉子啼て不二の横雲離れけり
散る櫻春にも寂のある夜かな
越す先は梅よ柳よ年の坂
長閑さや蝶の鬘吹く風もなし
世に譽れ残して花は散にけり
花を見る心は花のこゝろかな
鶉ともならて麥喰ふ鼠かな
岩走しる水にも春のゆとり哉
大浸の里皆伏して山眠る
懐かしき此細道や枯尾花
初午や馬頭稻荷の兩部寺
立志傳讀みさしにして晝寝哉
郭公すけなき懸に寐ぬ夜かな
露のまゝ手向て嬉し杜若
好嫌ひ叩き分けたる團扇哉
青き踏む心に慾はなかりけり
風鈴やよそを夕立つ餘り風
茶の花や山の麓の一寒寺

22 拾五
草餅に澁茶を添て進めけり
里へ又酒買ひに行く寒さかな
池めくる百姓もあり夏の月
釋奠人道迎る導師かな
蛙にも僧正の有る鳥羽書哉
川狩や柳の元の鮎鬘
廓の夢覺し身にしむ寒哉
春雨や草木の色も頼母しき
旅馴れた人の合すや雪車の唄
蝙蝠や眼鏡の利かぬ筆の先
養冷しや葉越の月を膳の上
朝顔の姿みて馬車の待遠し
長閑さや双眼鏡の客二人
鶯に乗運れたる渡しかな
德行は顔回し習へ粥施行
むさ／＼と梅に物干す山家哉
一高み村をはなれて梅の宿
耻かしや學はぬ窓を飛螢
三萬餘佛若菜に暗し京の寺
花の世にこひぬ姿たや竹の秋
雨一夜／＼に春を深めけり
上げ汐に向き直しけり帆立貝
空滑く水澄み我山粧ひぬ
不知火の燃ても淋し鳴千鳥
雁の棹雲の浪間に沈みけり

22 拾六
景氣よく町々積く初荷かな
敵前の架橋工事や雪解川
辿りけり嵯峨の花野を市女笠
天地唯月と我あり草の庵
三申のいましめ守る紙衣かな
美しき豊草原の瑞穂かな
菓帖はる着て公に奉すへく
雨の日は忘れて通る清水かな
花の果萬燈消へし思ひかな
柳から水雨村へ岐れけり
風か風追ふて青田の戦きけり
白蓮や須彌檀上へ露の儘
碁の勝負爲水を入れにけり
朽ちたれど時雨は洩れす庚申堂
墨染の袖やれさうな吹雪かな
二足目の足袋も指出てしまひぬ
松譽めるゆとりも無くて春の雪
出代や母の持ち出す縁はなし
春雨や机に眠き筆遣ひ
糸遊や睡疑して見る宇宙
年毎に榮へる庵の牡丹かな
鍋焼や小僧も知らぬ隠し妻
椿埃り眼鏡の曇拭ひけり
王城を巡りてゆるし春の水
鐘ついて見下す町や冬木立
百九

標本となりし蝶々の數千種
暮るゝ迄野に置く牛や春の月
落花かと思ふのか勝つ競馬哉
箸置けは眠し蛙のめかり時
温む水魚も花笠冠りけり
春風に吹かれる牛の涎かな
郭公十とせの昔し惚ひけり
靈泉の言われも高し苦清水
遣り人から大切かるや菊の苗
炭の香や目出度事に夜の更る
魂棚やかき立る燈も一ト手向
雨晴れて野菊眼に立つ徑かな
姿まで見よとは言はず郭公
永き日を丸めて猫の晝寐哉
強か手に櫛やさしき彼岸哉
長留主忙しげに打つ砧かな
盛り上る手向てあるや梨の花
魁てこそ寒梅の譽れかな
蝶番ひ高瀬の網にもつれけり
月の暈蛙鳴く田に寫りけり
うかれ出る花見小路や月隴
身の花は老ても散らす司召
椎はらゝ歸る樵夫の斧を打つ
今年酒我に自網の鮮魚あり
雜煮餅三椀かへる上戸かな

袴着や蛇は寸にして人を吞む
狸ともならて老けり鳴子守
咳礫斜にそらす日傘かな
落飾の女や庭に桐一葉
煙波千里日は東天に霞みけり
明星の山をはなれて時鳥
花の雲東半球を蔽ひけり
方角を鐘の音に知る霞み哉
罪浮む淺き寢もなき鶴川哉
暮れて聞く鐘を名残の櫻哉
白牡丹露さへ花の汚れかな
稻妻や太平洋を一トたり
醒易きヒールの酔や春の風
世を捨て世に捨られず朝茶の湯
煩惱は光りに退くや月の雲
煙地を這ふや夕立の後景色
月の雲奥齒に物の心地かな
陽炎や玄關透す金襖
武に富める村や木太刀の寒稽古
粥杖や花嫁逃る裏戸口
梅に手をかけて這るや報謝風呂
掴む手に情やこめん暖め鳥
弓に湧く清水に朽ぬ動哉
手向はや今日の佛に花一枝
駄馬行きし遠鈴響く枯野哉

勤懶の功を主席に蛭子講
茸狩や遠き麗へ貰ひ水
佛前の灯に澄む秋の心かな
常盤てふ木も落葉して去ぬ佛
蛤壺に酒くむ蟹の月見哉
下枝は折荒らされし野梅哉
あさやかな手入や菊の花配り
揃ふ手も幾世の數や苦清水
世を遠く思ふ句ひや蓮の花
霜の夜の已待の燈吏にけり
讀つめた目を右に巻く曆かな
茄子畑見超して赤し唐辛子
無花果や山吹と對照如何に
獵犬の主待つ岐路や草の霜
月澄むや松も聲なき終夜
夕立に啼く戻る家鴨哉
遠里の鶏聞へて霞かな
筆止めて聞や芭蕉を叩く雨
米一升地代拂ふて菊作り
香も添ふて落るや梅の朝雫
繰返す會式や花に拾二度ひ
秋晴れや一刷白き後れ雲
木食遊つて幾年今に椎の落つ
鹿笛や樹々の嵐の底にすむ
一入や若葉に更へし嵐山

虎突きし槍も出しけり土用干
指角力とるや火鉢の差向ひ
菜の花や史跡に残る塚一ツ
秋雨や肅條として坊暮るゝ
師と親の恩忘れなよ年忘
ハンモック風に揺らせて晝寝哉
水の上に散際清し六ツの花
笛の音に添ふ鶯の初音かな
名に残る文士の塚や土筆
彼岸鐘草葉の翁の墓はしき
月涼し涼し芦間を渡る風
蓮咲や若き尼僧の普茶料理
又海に成るとは見えや沙干湯
紗をかかまふ君に進めけり
ぬれ網の人見下けけり蓮の花
剃刀の上手にぬむし春の雨
蓮飯や世に亡き人に花もそへ
島一ツ小さく見出しぬ揚雲雀
鳴子曳月に預けて戻りけり
照鷺の鳴くやきのふは雨の鶯
鶯子鳴や入日のすける藪の中
棟木曳く毛綱に汗の雫哉
灯ともしていつそ夜にせん秋の雨
養父入の母に見せけり貯金帳
忙中の閑ありて師走句に耽けぬ

長へにゆるかぬ富士の初日哉
抓む手に知るや益の劊力
虫干や下書したる俳諧紙
爽清に開く微妙や蓮の音
無事萬戸潤ふ二百十日かな
能く饒舌る鸚鵡に日永忘れ鳥
つと入やふと見し女奮 馴染
咳すれは驅け寄る犬や霧の中
鶴遊ふ程は田もあり花の蔭
法の灯のうつりて清き蓮かな
身にしむも早し桐の戸柳の戸
梅は未だ早し柳に匂ふ風
夕雨雲行者の列を崩しけり
木も春の夢や見つらん歸り花
鳴鳴かす飛はす銃聲の響きして
咲けは散る花に浮世を悟り鳥
梅干を漬て軍事に献しけり
奈良漬に酔たと和尙申し鳥
朝顔や提提て出る渡舟守
世にまさは座に洩ましに月の友
渡し呼ぶ歸山の僧や暮寒し
送り火や人の影さす水の上
仕事手間取らぬ花鳥も農の徳
鳥雲に入るや動かぬ峰の雲
輝も餅も昔しや絹蒲團

送り火の消つて寒き心かな
棹つゝし低し西山東山
名物にうまさ餅あり桃の花
饅頭の座や度胸鏡への花川戸
花踏て參禪の僧のほりけり
米搗きの米白うつく深雪かな
圓山や花は散ても名の一樹
枝川に飛ぶや螢の十文字
新築の白木造りや風薫る
雨に日をどられて重き日傘哉
鳴立つて夕暮迫る澤田かな
後朝の離愁に散りぬ柳哉
老の春憂して見し世を戀しけれ
砲聲も鐘も霞むや花日和
師の影や供養の庭の初櫻
並松の蔭や田植の臺所
參禪の僧無言なり落椿
雲か霧か古杉にからむ佛祖の地
虫干や蘭麝の薫る白書院
花散るや思へば早も十餘年
名を繼て師を迎ひけり魂祭り
小田守る案山子も瘦て秋の雨
鳥の巢や洗濯竿をさかす母
晴れ衣裳出来て春待娘かな
プロペラの音や夏帽動く丘

初夢や夢の浮世の夢は夢
淀む間もなき年の瀬の流れかな
追はきに裸の夢や明け易き
火宅出て淨土の春や華頂山
湯元への道は途絶へ芒かな
巢の乙鳥店の商ひ覗きけり
航海の夫を見送る寒さかな
心まで映ると思へ秋の水
絹糸の細工にもして合歡の花
虫干や所士か紀念の俳日記
來て暫し花に取らるゝ心かな
山吹や茶席に近き庭續
穴を出た蛇なら語られ地下の靈
酒買に遣る妻もなし秋の暮
出來秋や豊頬垂るゝ村夫子
鶯の啼きは殊更靜かななり
應狩や妻の貢し駒の代
君か代に埋れ木はなし司召
朝顔や無理に取附今年竹
春風や好いた同志の伊勢参り
導も無き旅路なり暮の雪
子を連て俳材殖へる春の山
卵の花の間を動かす芥子の花
春の子も鼻に重き曇さ哉
露の戸や夜機械織る灯の草に散

葉櫻や俤残る峰の雲
熱心の竹刀に落つ顔の汗
春の風草の細道廣けけり
摺墨も池月もあり饒へ馬
百禽の王冠なれや松の鷹
白牡丹達摩の眼 据りけり
虫干や祖師の生死のト座敷
追かけて子守に渡す日傘哉
片腕は君に捧けて鳴子引
鹿啼や杉間洩る灯も唯ならず
落かゝる月影塞し枯尾花
畑打ちつ妻の機唄聞へけり
亡き人に逢坂山や時鳥
慕はしき音もするなり青簾
白酒に舍人も酔ふて眠りけり
牛の尾を押のけて掃く落葉哉
角出して探る碑文や蝸牛
柚味噌摺や大悟の聖庫裡に來て
綴り讀む師の文殼や土用干
御降や神代を忍ぶ杉の森
川下に舟こく音や朧月
穂先から風の立けり芒原
芽柳や未だ結はるゝ縁もなし
溝板もかたつく路次や計り炭
茄子切つて鉄冷たし朝の雨
百十一

花盛りはかなき夢の浮世哉
 青みある程猶ゆかし飾藻
 唯一人イむ橋や夏の月
 送り行や机に残る眩の跡
 功能を受次く蚊遣線香哉
 春の夜や隣もかける音機
 曉の半鐘勇まし出初式
 落し水慈母に別る、思ひ哉
 夜半の秋列強の王者夢如何に
 寝て思ふ過去や未来やうす
 古い花なきを椿の風情哉
 白酒や口紅にしむ貝杓子
 軍港の秘密洩らすな揚雲雀
 短夜や捨松明の消残り
 洪水跡の河岸の雑木に鳴の鳴く
 春寒し懐炉の灰替包
 孟蘭盆や日の駒早き寂照忌
 虎杖の 塩漬譽て時鳥
 陽炎や静にさしる柴車
 文章の名はしらす珍らし花のさく
 一本の花に名高き御寺哉
 手向たる花は心そ翁の日
 曙の海邊の松見る日課哉
 美しき花は散りよし芥子花
 世にかさぬ耳澄しけり時鳥

活花のさし水利かぬ殘暑哉
 初蝶や漉て出したる紙の上
 呑みほして枕にしたたり花の瓢
 虫聞きや中の一人は女書家
 窮措大寓居梅のみ恣ひ儘
 田の爲に田にさ池やかいつむり
 而して後の光りや十三夜
 史跡只碑の苔深し閑古鳥
 鶯や霞む詩の 山歌の鳥
 ともし火の涼し庭木の枝うつり
 歸る雁音なき雨の降る夜哉
 文庫建て、幾株も桃植にけり
 山と山雪、解け合ふて笑けり
 松一本有るも風情や紅葉山
 朝晴や花を放る、峰の雲
 日暮しや雨の間よけて鳴す、む
 花の雨錦を濡らす思かな
 吟虫寂あり詩腸煉る窓灯淡き
 庭下駄の濡り重たし梅の花
 飛行機の不備を嘲ける乙鳥哉
 麥畑を立つや小雲雀親 雲雀
 炭の滅る嵩の目立や霜の聲
 香に酔て障られもせず茨の花
 見切けり時雨をしほの夜商人
 松風に緋總の動く御簾哉

七五三張た社頭の松に初日哉
 新らしき月日敷へる曆かな
 夕顔や其夜、の開きふり
 花にさへ斯は更さす不如歸
 吹殻の卷葉敷へる日永かな
 重ね暗雉子や小雨の晴小口
 春もまた寒さを花よ積る雪
 賣買の調生きてあり葉月沙
 關守の夢破らる、千鳥かな
 世に在す時の 噂や魂祭
 茶の花や道細ふして寺寂ぬ
 岩に添う流は清し川鹿鳴
 片鶉百夜の夢を啼く日哉
 栗拾ひ草のふどころ探りけり
 温泉の宿の戸も開けす有秋の雨
 梅貰ふに禮に短冊贈りけり
 桑門は家なし蝸牛果報者
 桃の花四五軒村のまわり風呂
 道連に別れてをもし傘の雪
 勤儉の民かへり見す絹蚊帳
 十三度遺愛の菊を根分けり
 俣の江に浮す空や子規
 養家ある小村や霞む朝煙り
 心まで行先明し花の山
 水も香の有りなん梅の下流れ

みの虫や我も親なき一人旅
 歌にして置や牡丹の譽め上手
 時鳥禿に墨を摺らせけり
 紅裙の似顔批評や菊人形
 献酬に裏表なし菊の酒
 心此處に寫して見たり月と水
 義に沈む冠湘女や暗千鳥
 色々の話し植込む田植哉
 血祭りの太刀洗ふ夜や時鳥
 人真似も恥かしからず生身魂
 瀬戸越ゆる船の夜あけや時鳥
 旭に刈りて月に焚き蚊遣草
 天國に入るの思ひや花の道
 軍神に武運の願ひや初詣て
 花に酒一日の勞忘れけり
 出嫌ひを誘われて行嫁菜摘
 露ころりつら、思ふ浮世哉
 笠置来て袖濡らし鳧松の露
 芥子散て轉た無情を感しけり
 暗涙にむせふ史跡や虫鳴く夜
 其敵きの見へて嬉しや春の雨
 青葉して大社半分包みけり
 そほと降る雨音寂し桐一葉
 豆腐賣る笛の音遠し夕時雨
 猿澤や白藤の影鹿の影

屠蘇祝ふ心に曇るちりはなし
 南朝の昔を語れ山櫻
 葉櫻の葉蔭にしたる石碑哉
 鞭知らぬ馬の艶よし神の留主
 案内も殿 自らの 牡丹哉
 祇園會や人を吐出す電車汽車
 郭公先啼く物として待とふ
 草刈つて塚の殘暑を拂ひけり
 花咲や凡て浮世は繪をら事
 造り込む酒屋翌日から寒の入
 笠ぬけは松の蔭澄む清水哉
 朝寒や活動にふき池の魚
 仇し野の月も淋しや石佛
 曙の色に戻るや夕柳
 長き夜に咄し合ひけり襖越し
 花に鳥淋しみのなき眺かな
 一摘まみつ、烙りけり梅雨菫
 子は哇に君か代唄ふ田植哉
 駒を張る木に事かきし花の山
 出代りや嫁に行程開合す
 摘草や妹草臥れて負へと云ふ
 歳時記に洩れたる花も彌生哉
 祖父か手に剪られし梅の若芽哉
 子子や世のありさまの浮き沈
 花の香も笈の水に移りけり

楨の葉の露も馳走や魂祭り
 水の垂る化粧や涼し柳腰
 梅柳春の足並揃ひけり
 狐拳果は打けり鐵砲汁
 國體の美を發揮する櫻哉
 古池や啼かぬ蛙の聲戀し
 法の門廓然無聖雪達摩
 時鳥聞く耳のなき恨みかな
 惜まれつ且又譽めつ月の雲
 春雨やうるさき人の長嘶し
 秋の蝶零一ツに打れけり
 菜種殻焼けば雨來る卯月哉
 薰風や千歳不磨の頌徳碑
 丹精の誠に咲くや稻の花
 灯の入りて人の波打つ櫻哉
 舟はまた柳離れぬ春の雪
 笑ふ女男泣かせて春や行
 鹿笛や有情に寄れば無情なる
 短夜や瓦硯に残る水
 意氣己に天を衝くなり雪戦
 萩の餅出す口取りや朝茶の湯
 行年の苦を餅搗に忘れけり
 昇格の沙汰や櫻のありし塚
 時雨る、や掉急かしき渡し舟
 忠臣に贈位の沙汰や菊薫る

問ふ人もなき山奥に櫻かな
 湯上りを軽く着流す浴衣かな
 辨當のからに魚あり田植時
 物に添ひ物に放れて秋の聲
 日の當る露や美し草の家
 雲深き満山花の夜明哉
 義仲の名高き古碑や青嵐
 腹にまで夜寒の鐘の響きけり
 行々子一水樓をめぐりけり
 水無月や寄ると障ると雨の沙汰
 葱鍋やかまい立せぬ内輪客
 蕘打ては棚の糸瓜のゆるき鳧
 佛縁をつなく蓮やたへま寺
 酒呑ぬ人の聞きけり時鳥
 眼障りになる制札や萩の園
 行春や世を幻しの夢の跡
 時鳥聞く耳持たす親の伽
 時鳥啼くや殘んの月五尺
 涙雨笑顔うつして御田哉
 朽ぬ名の碑に輝て今日の月
 紅白の幕張る馬場の櫻かな
 千代と云ふ菊にも秋の行衛哉
 僧に耳借らる、までを鳴く蛙
 しらす讀む念佛より此牡丹哉
 只寒き冬にもあらし歸り花

拵へた人によく似た案山子哉
 江の泡に紛る、芦の穂絮かな
 酔て寝ん櫻に月のかゝる迄
 元日か原へ一里や年の坂
 師を思ふ夜を松風の時雨哉
 山を出て山見かへすや秋の暮
 廢城の松高ふして蟬の聲
 石てさへ流る、川をのほる鮎
 子は軍に召されて老の田打哉
 時鳥駒の足掻を止めけり
 摺小木もへり幾年も暮れに鳧
 菖蒲太刀妹へ一太刀浴せけり
 心練る道場寒し水仙花
 残りなく花見盡して更衣
 丸窓にふさはし梅の影法師
 見上くれば眼も草臥ぬ揚雲雀
 旅僧の雲、物言ふ枯野哉
 西湖に棹せは芦花清梵たり
 巻返す狩場日記や虎か雨
 計畫の人工瀧や夏近し
 足跡のくはみだよりや坂の雪
 山の井や汲み直しても花の塵
 猿引の干支の数は子持哉
 傘もたせ追かけてやる時雨哉
 湖望む櫻の灯白し秋の風
 百十三

23 拾叁

薄す開き仁王の門に吹雪哉
鉢に乗る兒ややさしき美少年
其奥に琴の響や青籬
曳迷ふあやめならねど市の雛
涼しさや心にかゝる雲もなき
虫干や感状付の血染服
鶯や刀鑑定の奥書院
遺志未だ成らて慚かし魂祭
壯圖ならす行秋を温泉に怨の詩
名を替て僧も酒酌む夜寒哉
拜ますにをけぬ朝日や稻の花
鈴成りの青梅提し女かな
白骨となる憂き連か秋の蝶
敷殖す庭や豊の秋仕舞
撫子は刈り残しけり草刈女
なつかしき友垣のみや花庭
着倒れの春や大丸高島屋
花か待つ様に出仕度急きけり
養父入や我植置し梅も咲
假の世は夢とおしへて涅槃像
限り有る春とは見へす遅櫻
舞子とはよき濱の名や八重霞
校庭に涼むや月は静かなり
騒かき鴉のつれなし秋の暮
世の秋を春めく竹の庵りかな

23 拾四

この辻も踊り嘶しや盆の月
鬼去なす後妻の舌や大三十日
淋しさの餘りて淋し春の雨
日永さや一人役所に待されて
水鳥や今鳴る鐘は園城寺
葉隠れに鳥鳴く春の名残哉
菩提樹に月は隠れて時鳥
涼しさや月をこぼして通る雨
萬機皆公論に決して子規
甚五郎も又平もあり土用干
石楠花と向ひ合せて座禪かな
散れば又散るとて響める櫻哉
萬燈に貧の一燈秀てけり
山越して見ゆるや他所の風
梅遠近茶店ちらはら酒旗高し
春中の子も手を合せ免涅槃像
明け放す障子に春の別れ哉
屠所急く牛あはれなり秋の暮
青馬や草堂閑に鳥の聲
門標の字もなまめけり桃の家
糸道の血走しる指や寒稽古
鹿啼や奈良に旅情の記を綴る
泣かすのは何の佛を二日灸
させ掛てきぬ一借む頭巾哉
踏て行道も明るき十夜哉

23 拾五

夕空の灰色にして冬木立
花に氣をとられて手綱緩み鳥
日盛りや京は行義の良い處
惜みけり雲隠れせし夜半の月
鶯に打つ礫は戀の嫉み哉
日の本の土魂は是れそ山櫻
蝶を見て腹立たしけり蜂の振
錦着て故主の墓へ参りけり
鐘一つ一つに年も暮にけり
顔見世や月雪花の伊達揃
枯柳不性一に動きけり
吹荒む風物凄し冬木立
形見とて紙衣も母衣の名也鳥
雪の松千代の白髪を重ねけり
露含む百合清し朝の月
花の句碑花咲毎に思ひけり
天降る久米仙人や水温む
茂り鳥寂けり嵯峨も麥の秋
鶯飛んで柳は水をはなれ鳥
世の無事を神に供へて今年米
世渡は一樹の蔭や心太
手向たる橋は青し初時雨
白菊の眞盛刈りて發心哉
北風の秋となり來る心かな
初雛やまた振袖の似合ふ母

百十四

23 拾六

難問の解けて涼しき扇かな
遊ふ灯と罪造る火や夏の川
また炭の香に立つ春の寒十哉
誰やらの戀に似てあり郭公
古布子幾年吳下の阿蒙かな
佗住みや夕顔棚に灯の透る
こぼるは花か夜露か月の萩
松風や著からこぼる心太
行く春の襟に眠るや孕み猫
方便の腔間にゆく彼岸哉
梅の戸に宿乞ふ歌の法師かな
乙鳥や一去一來雨斜め
炭焼の鏡見たかど問はれ鳥
空高く舞ふを名残りや春の鶴
道連となるや蝶々を跡や先
黄鳥の聲も替りて遅櫻
環珞に法の灯さむし蓮の花
貴族とは聞けど氣輕し菊造り
落て來て水這ふ虫や柿若葉
明月や葉枯はうつる世の慣ひ
明寺の門のあはれや忘れ霜
米壽も出て豊年を踊りけり
馬士唄の長ひ繩手や月籠
鍋焼や廓戻りのたんぼ道
朱の硯に萩の露磨る内侍あり

23 拾七

雪よりも心は赤き甚兵衛哉
鶯や唯其儘の敷松葉
日盛りや濡れては乾く海の岩
仇に見ぬ人の揃ふや朝の花
一人身の鶯に昔しを懐ひ鳥
懸香や侍女連て乗る迎ひ馬車
元日や注連も張たき富士の山
墓石を載せて船出す朝寒し
綱曳や本家分家の向ふ前
美しき日和に花の曇りかな
呼びとめし松魚は人に買れ鳥
嵩摘てしつとり重し番茶籠
萬物に皆涙たあり涅槃像
鶯や朝寝の耳を驚かす
月涼し櫓聲遙かに漁火遠み
素顔ては淋しきものよ花に酒
星今宵雨は降など祈り鳥
唱歌止みすみれ流れつ春の川
南天の花さらしけり枝蛙
切た氣を静めて活る牡丹哉
梅潜く引出す神馬哉
満開の花満山の曇り哉
梅咲や子守上手の乳母か來る
いさり火の罪をふりけす時雨哉
流れにも影有る月の櫻かな

23 拾八

貧なから庭凡ならず月の宿
客數を云ふて花袖の所望かな
歌を讀む鳥人に歌讀ませ鳥
虎か雨竹に降るても無りけり
負角力老ては鶯馬に劣りけり
思ひ出に秋猶我を深めけり
芳草の夢は流れて秋の聲
風の來て富士を動かす青籬
大丈夫を祭る社や楠若葉
白牡丹塗雪洞に映りけり
送り火や見へぬ別れの懐しき
奉納の能狂言や梅の宮
暑いとて熱ひ湯に入る夕哉
柳千年禁じし山や閑古鳥
静なる社頭に鳩や春の風
咲く迄は田舎物なり山櫻
寒月や海原千里無一物
朝寒や笑ひに曇る塗篋筒
牛下りて篠笛洗ふ清水哉
義の爲に命を捨てとや散る櫻
出代りや心の残るいとま乞ひ
草の戸や萩の朝露月の虫
徒らは親にこそあれ雀の子
炭付た馬のつゝや鞍馬道
虫一ツ古廟の秋を深めけり

23 拾九

地をこる月に扇は離れけり
入らぬ世話して嫌はるゝ頭巾哉
白蓮や何時迄残る朝の露
静心動くや花の朝またき
掛行燈出たる男や朧月
道問へは唾の手眞似や桃の門
淺岡の烈忠談や雀の子
名を二世に流せし川の施餓鬼哉
羅に着皺も見せず京育ち
種茄子の紫さめて秋の風
日の廻る迄寝る家の若葉かな
鶯や火にはたされて玉の聲
翌日は我身の程知れず散る櫻
鏡提た片手に貧乏徳利哉
虹消へて端山の松の青さかな
滴りや若葉かくれの長筧
畫像丈け命日にして土用干
栗の毬蟻螂の斧押へけり
蕎麥からの中を這出るいと哉
亡き人を思ふや今宵の花に月
鐘供養精舎は花の盛り哉
雲消へて月の時雨る川瀬哉
菜の花や朝餉焚く間を深呼吸
花に出ぬ日も花に置く心かな
白菊の白さに据る心かな

23 貳拾

色分けて暮るゝや雪の海と山
さりとては酒を酔へす秋の暮
夏の床花も白きを撰みけり
薄命は美人に多し筑摩祭
泥足袋や炉邊十里の霜煙る
佛ども鬼どもならず蟬の殻
葉に露を露に月置く運かな
雁鳴や月影長き磯の松
慕はしき筆の跡見る五明哉
焚て待蚊遣りにそゝく涙かな
一夜かる竹林院や時鳥
菜の花や家々向きと向き
逆夢と侍女はなためつ杜鵑
短夜や夢の半はへさす日影
簾入に話しのつきぬ一夜哉
埃り立浮世の嵯峨や御身拭
謙遜な人に威のある牡丹哉
落鮎や田の利河の利得る孤村
蓮の香や勸學院に啞暗の聲
永き日を市勢調査の巡查哉
よき日和牛は野に寝て揚雲雀
鶯の聲に咲きます梅の花
又骨となる衣更着の衣桁哉
初雪や炭たくかまも薄化粧
秋風や百里貫く信濃川

百十五

是にさへ夫婦別あり箱の難
極樂と地獄の上に納涼船
潔白は花の花なり鍋祭
袖垣も濡らして霜の別れ哉
秋立て虫の鳴く音も調ひし
人馴れて心もどかし放し鳥
清浄な身に勞れなき夏書哉
木に倚りて魚を求る丘見かな
雛の箸覺束なくも握りけり
蛸越の咄に隔てなかりけり
煤掃隣近所へ答へけり
秋は來にけりな雨寂鐘溢る
摩耶戻る馬の曠見る霞哉
水底に秋の色見る月夜哉
壁隣蚤の小言も聞へけり
夏羽織着て人柄を見られぬ
直く歸る筈を夜更て春の月
潔癖のありて獨居や梅の主
玉山も崩れかるや桐火桶
長き夜や明けを待間の教へ草
夕立や風追ふて行く雨の脚
鹿鳴くや孤閨淋しく夢に入る
山吹や名も玉水のさゝ流れ
病む親にそつと釣り鳧孝の蚊帳
嫁の荷の調ふ後の社日哉

歌は世につきし雲涌く花の峰
玉と成て大抵露は碎け鳧
蝙蝠やすまして通る左側
花咲た昔なつかし櫻炭
歩み倦む灘の小道や行々子
丸頭巾隣の除夜を覗きけり
隨夜や娘呼出す謎の笛
海士の戸や汐のさす迄鳴水雞
隣田へ轉け込みたる田螺哉
名月や露にしめりし琵琶袋
蓮の香の親し忌日の朝朗
花は過去真如の月の光る哉
面影の見ゆるや花の散し跡
花見ても涙こぼるゝ日あり鳧
箸逃て膝にころかる小芋哉
馬叱る聲酒臭し焼野かな
春の月月の妻かと思ひけり
野に山に溢るゝ和氣や百千鳥
散る花の忘れ記念よ峰の雲
衣更着や又重たけな襟の垢
散て名を殘す櫻の譽れかな
京へ出て籠居居せり嵯峨の虫
蝶を追ふ眼にはまはゆし雲の峰
青嵐丘に草喰む小馬かな
断りて畑横きる梅見哉

亂杭も蛇籠も寂て下り鮎
分け入てこそ知れ花の寂菜り
鍋祭尻の輕きを見られ鳧
啞蟬のころり落ち鳧秋の風
空に雲戻して暮る櫻かな
虫干や系圖添へたる鳥帽子箱
萬歳や俵に狹き舞處
庭下駄は片附てあり苔の花
鯉刻て暫し啼止む蛙かな
餅搗や力自慢の下男
經を讀む机も花の明り哉
百川を呑て醉けん春の海
逢に來た母か拚の手さすり鳧
夜は蛙晝は雲雀の在所哉
除隊する兄待ちかねて田刈哉
鶯一ツ哀れしよんほり雨の夕
牛の子は無事に育ちて炳の聲
諦めのついて寂られす時鳥
貫ひ風呂其茶の過ぎて夜長哉
晚酌の料理手輕し木瓜打ち
鼎座して文珠に近き火鉢哉
糊強き夜着に漸寒覺へけり
放し鳥高い木の方へ飛しけり
我よりも先つ馬にかふ清水哉
美しき置き所なり蓮の露

上京は宵寝勝なり鉢叩
白蓮や凡俗の我耻しき
見ねども其香は高し闇の梅
秋は來ぬ野は朝露の十重二十重
春の鐘吳山覺よとうなり鳧
奉獻の太刀捧け行く櫻哉
山吹の力に歌を勤めけり
月に打つ砧や古歌を偲ひつゝ
絹足袋や都なれたる裾捌き
玄妙に聞へず蓮の開く音
静さや疎き耳にも露の音
玉を抱く姿や月の臥龍梅
虫賣や都へ運ぶ寂菜
切惜しむ牡丹に鳴らす鉢哉
枯れし儘の杉垣殘し陽うらゝ
罪のなき願ひ事なり風薫る
花咲くや六根爽の感に入る
蛸喰うた齒た替ぬけて寒念佛
蔭日南なき働きや種卸
竹縁に運ぶ月見の火鉢哉
茶に寂し素焼茶碗や福わかし
白桃の咲て目に立つ緋桃哉
雨乞や靈山既に雲動く
鳥刺の一人時雨るゝ徑哉
耳に筆さして初荷の差圖哉

鮎餅や忌み嫌する女客
油断して聞き洩しけり郭公
ふと横見する間に上る花火哉
舟に焚火に動きけり枯柳
身の徳は人に譲りて安居哉
水音は聞かねと涼し銀河
衰へし母いたわりて玉子酒
浮かれ來る蝶や舞子の漬積さ
大店は人手の多し煤掃
雪の不二見ながら暑き旅路哉
紅梅に唇黒き佳人哉
鶯や山の一角日の表
松ありて雪に又よし嵐山
見て嬉し眺て悲し月今宵
孫負て繪日傘さすや雨の軒
草餅や姉か筐の掛け帛紗
白銀を江に引く冬の高根哉
瘦寺の裏の凄さや秋の月
涼しさや瀧の落ち來る繁蔭
握り飯を片手に揃ふ清水哉
初蝶や心も尻も輕き朝
霧の香や見へねと近き瀧の音
釜風呂の煙るそなたか時鳥
春風や我行く先を人に問ふ
かゝる夜に師の笛もかな梅に月

病牛に葉香すや蚊の唸り
峰高ふ雲隠にし時鳥
露の蒼呼へど答へもなかり鳧
窓明けて家を温むる小春哉
山吹の雨や精舎の晝灯
跡からの暖に追るゝ枯野哉
花吹雪業平袖を翳しけり
雪の日や親に替りて渡し守
皇族下乗の山尊しき茂り哉
初秋や野は未だ殘る夏の花
花に花埋みて花の御寺哉
世を捨て師走を餘所に樂寢哉
京に來て豫算超過や春の旅
少し計りの水の溜に陽炎へり
傾城の化粧うつくし月今宵
木枯や梢に残る柿の蒂
切れ風の名残を花の梢哉
五石會表彰されて種卸
瀧滔々飛沫に濡るゝ萬紅葉
思ひやる廓の娘や寒の入
手傳に來て覺へけり茶摘歌
毒蛇射て起る蠻歌や青嵐
六藝も揃ひし菊の主哉
咄しにも去嫌ひあり納涼臺
初花や靜に人を驚かす

句碑墓ふ蝶や飛ふ蝶眠る蝶
出來のよき青に涼し宵の月
曳先へ心のとゞく鳴子かな
千體の佛に根あり青嵐
泡立て流るゝ春の小川哉
時雨や月を後に走る雲
大判の茶托出し鳧牡丹の戸
小店迄賣聲高し年の市
寢るたけの夜を打ち殘す砧哉
暮て行鐘の蹟く枯野哉
大空を角て探るか蝸牛
田に肥のまわる夜雨や啼水雞
關毎に異界の月を浮へけり
軍港も較更け行て啼千鳥
夕立雲吞込て行く白帆哉
畑打や天與の富を鎌の先
墓所に灯のさゝく時や盆の月
田草取り木の蔭壽命延る哉
行春や梵論乗せて戻る船
利き過て山葵に涙こぼしけり
露置や路邊に捨てし菲草鞋
葵橋中は渡るや時鳥
夢の世を只夢の間に櫻哉
夕風の暮るや鳴の重ね立ち
涼風や千筋の髪の手に亂る

俣の机に残る牡丹かな
何れもよき女計りや花の茶屋
碑の人に贈位の沙汰や梅薫る
伽羅焚くや櫻月夜の歌蓮
釜を掘る鉄は持たねと露の臺
雪佛凡夫の手から産れけり
白萩や染まる斗りの秋ならず
松影や重荷卸せは風薫る
内閣は變るか儘よ釣案山子
あかゝと水に澄み鳧花の影
心なく花見る人の笑顔哉
枯芦や大河に落る日は斜
嶋の如く山見へて村は霞哉
憂き我の浮きを忘れて夏の月
半散る雨後の庭や月涼し
野に山に春は余りて櫻調
治鹽酒や眼は霞めども耳長者
さり／＼と啼くや籠の月白し
毛見すむや袴の儘の小酒盛
若竹や雀の荒らす枝もなし
靈廟の晝寂として蟬涼し
埋れ木の世に現われて司召
開古す迄の夜はなし啼水雞
捨てある葱の赤葉や霜柱
踊り子に鍋の咄を聞せけり
百十七

青芒涼しふ戦く夕へ哉
鳥雲に入る日や蝶も高上り
蛇莓釣鐘草をからみけり
櫻てふ名さへ芳し明石鯛
竹杖や新刀試す腕の牙
雲かあらず雪にもあらず峰の花
搗立の餅試るきな粉哉
鶯の口にほうはる旭哉
門の柳は懸草よ月隴哉
行秋の鏡にからむ白髪哉
白酒や年頃捕ふ女房客
映る月残して水の流れけり
啼渡る諏訪の狐や厚氷
極樂はこんな物らし蜆の中
一連は茶毘の戻りか枯尾花
栗もさや下て弟鼻ねふる
大男足とらるゝや螢狩
出して見る寫真冷たき夜寒哉
長閑さや香の物賣の伊勢訛
朝寒の戸口に雞の落羽哉
舟人の命をつなく清水哉
陽炎や砂利新らしき御陵道
夕紅葉七堂の舟荒ひけり
雲の流れ涉て富士に昇りけり
暮しき事のみ多し晋子祭

遊廓の旦那なりしを網代守
世を拗て賢者は寝たり三ヶ日
男賣る江戸に生れて初松魚
貴夫人の姿に似たり雪の松
錦織る手を世代の土産哉
花は貴女松は美男の姿哉
叱られた門なつかしき燈籠哉
塵一ツ流れす秋の水清し
幾千代も朽ぬ石碑や花櫛
春の行道一ト筋の流れ哉
運は寝て待つ世はなし田草取
落橋中に若草を陽かひたすらに
旅人の袖も濡らさず春の雪
柳にも風なき二百十日哉
佛にも浮世の風や土用干
治聖酒や下戸同士の尉と姪
里へ出て干すや萩見の濡羽織
見返るや曠着を競ふ御忌参り
啼立る蛙の聲や雨近し
高僧の偈化ます夜や時鳥
大木の薪となりて閑古鳥
我も泣く人の數なり涅槃像
露の戸や牛を賣の瘦世帯
千町田も手加減揃ふ田植哉
分合ふた水落合ふて流しけり

降足らぬ雨風となりけり
柳にも釣るや一ト隅舟の蚊帳
子に行義教へて飾る雛哉
是からの日數は長し種卸し
御車を停む櫻の譽れ哉
不取敢もてなし振の水哉
物忘れしても忘れぬ頭巾哉
むしろ寝て蝶にや化す花の留守
二君には仕へぬ櫓の主哉
年若き耳には入らず秋の聲
吐き去し血の入染たる杜鵑花哉
長閑さや鶯ホイヒロリ人ふらり
月青し黒岩攀る臘胸臍
眞如照る月影涼し法の庭
開くより待つ間の長い火花哉
雪の不二冬其儘に夏座敷
亡き妻の記念に咲や美人草
目勞れを思むる花の流れ哉
忠臣の俤ふ櫻哉
螢賞暗き場所を撰みけり
散るや花除香は未た去りやらす
沈丁花蝶帳の佛に薫りけり
作事出初手振に紺の香も立て
夢十歳故山戀しき櫻哉
斯く迄も遊び更しか橋の霜

鹿笛の妙技を母の涙哉
冬の梅恩賜の御衣に薫りけり
蓮の實の飛や院主の遷化沙汰
芥子の花蝶の羽風もいどひ鳥
鑽毒に寂し川瀬や啼河鹿
三國に跨る山の青葉哉
世をさけて心の安し菊の主
自動車の嵐に散るや辻か花
花やかに見へて寂あり水燈會
朝顔や卷帯なりの深呼吸
响の朝の小川に米とさき女
是程のものに聲なし夜の雪
戀知らぬ身は只寝たり雁の聲
散る花や過ぎしを慕ふ人心
虎杖や蛇籠をからむ長堤
筆先を噛て思案の花吹雪
春雨やさしかけ傘の溜車迎へ
置土に草鞋とらるゝ雪解哉
雨後の月若葉の露に光りけり
生垣の自然ゆるみて秋の風
隙な手を捨て世に貸す鳴子哉
腐り持つ圍ひ蜜柑や春の風
玉を巻く芭蕉に似たる粽哉
豊の秋千戸萬戸を満しけり
夕顔に微醺帯ひけり獨り者

老たりな惜き名を世にこゝめ鳥
月涼し名も住の江の浦景色
楳立て見ても身に染む灯哉
春風や伊勢路は笠の國盡し
埋立の海に突出す青田哉
奇の子も取入れものや村時雨
今日から云ふ日のなくて冬籠
山鳥の尾も日も長し人丸忌
雨の禮申して涼し神の前
春の波笈の上をこりけり
今年は月夜で嬉し大三十日
羽勞れの見ゆるや風の亂れ雁
唇の綻ひやすき夏断哉
子を連れて行くはやもうか地蔵盆
竹籠も流れて雨に青田哉
昆布茶とは刀自の機轉や萩の庵
有爲の門に入る女あり秋の暮
天高く指呼の山河秋に入
山清水辨當開くや草鞋會
嫁入の日を示しけり初曆
憂人の今は篋や捨扇
煙草吞めは欄間の山も霞けり
雲一重さらは垣かも歸る雁
更しにやかく迄も置く橋の霜
聞とけて世をはかなむや萩の聲

碑の文字讀むや櫻の月明り
鬼灯の尻に敷るゝ亭主哉
店の名も餅の名も此櫻哉
枯てさへ月に親しき尾花哉
油引く傘屋の傘に蜻蛉哉
月に雲少しはあるも景色哉
隔てなく配る匂ひや庵の梅
鳥雲に入に覗くや遠眼鏡
學生の引越し包む毛布哉
啼やいつ來しか孫の手鞠歌
雲を吐く雲に隠れつ五月不二
難解の書に更されて明易し
寄る波の砂に消ゆるや春の風
銘馬盡きて骨を埋むる枯野哉
山に雪懸れば寒さ動きけり
野に山に遊ぶ夢なり春の雨
物忘れしよな日なり遠霞
隠れぬは漣の響や若葉山
勅語讀む間は皆たゝむ扇哉
夕立や簀も曠着の宮詣
草の餅桃と柳の風情哉
油断なき手綱捌きや眞手番
飽足らぬ物に雅味あり梅の月
鈴虫や一人娘の戀に泣く
無事な世や民の煙も殖る秋

南天の實を眼に雪の兎かな
未だ山の寒味を握る蕨かな
待合の行燈淡し朝茶の湯
奇勝ある保津下りや舟涼し
白骨の文に灯の名残りかな
世を捨て見れば可笑しき師走哉
様々の世を一筋の夏書哉
蓮の香や蕤音なから寺は寺
秋風や意馬に一鞭入れ所
菜の花や新妻俱して一日旅
飛梅や恩賜の御衣に洩る涙
初生りの色に戻りぬ秋茄子
様々の遺徳數へて魂祭
千町田を縫ひ行く様な螢哉
夕焼に鎌研く人や赤蜻蛉
春の旅都を先と定めけり
苦闘せし浮世見返る頭巾哉
峠まで登れば涼し夏の旅
皇居に輝く燭や政事始
唐壘の干割聞く夜や牙へ返る
師の遺稿繕く窓や梅薫る
戀故に死すふひんさや火取虫
月今宵御微行仰せ出れ鳥
洛陽に時めく家の幟かな
隨てふ寂のある夜や歸る雁

摺り破る燐寸の箱や藤の雨
庖丁に凍つく鯉の鱗かな
新調の俗衣吹すや祇園風
御留守とて曇らぬ神の鏡哉
鶯に曇らぬ聲や法の山
許されて裏門くゝる牡丹哉
頬撫て見る肉附や今朝の秋
春雨に三味流し行く小路哉
我心我に忙しき時雨かな
目張する壁のすき間や冬隣る
たしなみの大根汁や春の雪
柴の戸に此兒童あり筆始
遠足の疲れ慰む清水哉
谷川や流れ任せの花笈
駒鳥の齒に絹させぬ高音哉
草深き御陵や露にしほる袖
漣と成りて晴れけり湖の霧
足入れて猫に驚く炬燵かな
遠霞眼鏡のさかぬ日なり鳥
六齋や念佛の所作と思はれず
雛の主戻りは乳母に抱かれ鳥
帆を巻て江に入る舟や夕涼し
米點の様なり雪の群鴉
夏断して迎る高野や法の道
月を脊に琵琶弾く法師哀れ也
百十九

五月雨や手垢冷たる繩暖簾
 近う来て鶯琴をとめ
 祇園會や家に譲りの飾り付
 寺は只鐘つくのみを山櫻
 圓満な家庭に咲くや年の花
 行秋や嫁斯逸したる女俳優
 いと輕う竹も戦きて庭涼し
 世心の曇り勝なり秋の空
 さも嬉しさうと舞合ふ蝶二ツ
 勝難の抱れなからに歌ひけり
 白蓮は如來紅蓮は菩薩哉
 花は誰そ我より先の墓参り
 筏さす其川上や時鳥
 此里の佛と呼ばれ門茶哉
 高山の花を土産や夏の旅
 悟に入れば秋儘なり露の音
 三夫婦の揃ふて祝ふ難哉
 上り風要塞の秘密見しとなん
 遠來の客をもてなす掃火哉
 争ひは知らぬ孤村や山笑ふ
 十三糸弾きて花の夕吹雪
 晝餉する探險隊や石楠花
 順禮や暮る枯野を急き足
 落胤の姫に幸あれ紙雛
 蠅を出て顔の汗拭く二人哉

麗や機に織込む鳥の影
 萩咲や散るや雨にも日和にも
 呪ひ打つ丑満頃や子規
 樹々の香も添ふや落葉の下流
 白蓮や來迎佛の宿る露
 分別を變へて花見る月夜哉
 剛借れば糸瓜の後敷へけり
 嘯や奇石に富める宿なりし
 罪洗ふ業にはあらず花御堂
 偉の夢一人見て雁渡る
 百萬の敵は防げと花に風
 春風や便り開たき移民島
 墨客の杖曳き入る梅か里
 龍宮の城も見ゆらん沙干潟
 草臥た聲て舟呼ふ霞かな
 龍ひそむ湖面靜かに花藻浮く
 春風も入れぬ笛打つ小家哉
 階子酒屠蘇から登り初め鳥
 湯豆腐や居續けすへく一決す
 白粉や是も花野の粧ひ草
 一歳の逢瀬重ねて後の難
 賤か家の幸か戸さぬ夏の月
 したるも清き若菜の雫哉
 八重に咲く花に實はなし小鷹狩
 逆も散る花ならふけよ風

鯨取るとは見えす小春風
 祇園會は邦國一の祭り哉
 摘草や叱られさうな處まで
 遊女にも名高き句あり時鳥
 腹の立つ事も笑ふや年男
 大雪の中より夜明け鳥哉
 物祈る後姿や露時雨
 堀出す古金赫く春日哉
 マントの月や那翁か悲夢の跡
 木から降る昨日の雨や閑古鳥
 旅僧の道問ふて行く花野哉
 骨と成て案山子イむ秋の暮
 秋の鐘撞かぬ我にも響き鳥
 春の水洗ふ繪の具に濁しけり
 栗拾ひ一風欲しふ見上げ鳥
 新築の床に蓬萊飾り哉
 青春の血潮わくなり歌留多會
 限ある夜を更しけり今日の月
 行く春の願想に飄撫て居つ
 花桐や句會を覗く寺男
 忠果す迄と二日の灸かな
 飛螢汝計りの夜にあらず
 寒梅や月にしみ込む月の冷へ
 睦しき鶯の尻追ふ家鴨哉
 書にしたき姿や雪の市女笠

二度に夜の明るや雪の海と山
 召されたる御前揮毫や風薫る
 其程は手こたへもなし雪の傘
 涼しさや松風の音瀧の音
 壁に耳ある夜は深し霜の聲
 牛曳て戻れば月の主かな
 崩れ土塀に驚ひる枯れ西陽
 夜は秋のつれ行く音や高瀬川
 淀川の水産出して山笑ふ
 翌日は何焚て聞うそ小夜千鳥
 蛤や蜃氣樓吐く朝うら
 雲の上迄響くや孝の小夜砧
 七夕や願ひの糸の篋もつれ
 長閑さや袴もどらす庭なぶり
 藻の花や兒等か争ふ盃舟
 東風吹や波悠々と鴨浮く
 散てこそされども惜き櫻哉
 池涼し眞鯉緋鯉の水巴
 末廣は太郎冠者の日傘哉
 鳴く聲は思ひの丈か戀の備
 渡し守眠る堤や櫻散る
 未だ母の力頼母し小夜砧
 雁啼くや平家を語る琵琶法師
 火を焚て客引く冬の茶店哉
 朝寒や蟻に引かる虫の足

漁火を妻の見える夜寒哉
 爰嫌ひ二日の故事を笑ひ鳥
 春の月無能の我を照しけり
 涼しさや流に鶯も知らぬ魚
 花嫁の養父入早う歸り鳥
 戀知りて櫻の丈けの餘り鳥
 言の葉も薫るや菊の禮手紙
 憂きは世にふるもかは雨の花
 追やつた田も餘處ならず稻雀
 酌交す酒の冷けり後の月
 漣をつくるや花の筏より
 火ともしに雨戸締切る夜寒哉
 走る帆に景氣動くや春の海
 夕月や暮る青田の露配り
 新涼や障子の欲しき川二階
 躰灯に風の通はぬ霜夜哉
 信念の數珠は碎けす御難餅
 牡丹餅よ酒よおすしよ在祭り
 大膽か愚か黄蓑を門の蓑
 推敵に黙す詩僧や月の門
 道邊に苔蒸す碑あり枯尾花
 嗚呼秋秋々と撫る頭かな
 初秋や紅の香のする京土産
 笑ふ子に紛る秋の夕哉
 精は花徳は香にあり梅の主

祇園會や屏風は四條土佐狩野
 未だ咲ぬ菊も十日の眺め哉
 書生節歌うて行くや春の月
 夏の川情死の一人助り鳥
 下間や吉野を下る歌行脚
 鶯や殿の耳にも在る果報
 嘯や天下の春を恣
 風の尾に微風の見ゆる花日和
 咲き遂げて自ら落る椿哉
 櫻見に行く道端の櫻哉
 酔ふ迄に見て置く花の景色哉
 静まれは水に音あり花の中
 松風も水も黙して霜の聲
 戦死者の遺骨に菊の花環哉
 子福者の豊さ見ゆる頭巾哉
 白重や髪蝶々の濡れ鳥
 堪忍の秘訣は是こそ雪の竹
 美しく散て寂ある櫻かな
 土取りし小口崩れを春の陽か
 老て猶あまりある世や鳴子曳
 大浪の音膝元に磯の冬
 観念の枕につくや花の雨
 一日の斷油を花の盛り哉
 七五三張りし巖の松や初東風す
 曙に誠を匂ふ櫻かな

空定めなき五月雨の晴間哉
 詩趣持たぬ我には只の蛙哉
 編笠や覺悟の上の七轉ひ
 梅に來て思ひかけなし初櫻
 春の子の泣止まず母汗しと
 隠されて按摩の探る頭巾哉
 碑の寂は佛の徳よ苔の花
 棟上げの餅に垣する牡丹哉
 下駄探る裾に取付くいと哉
 網代守月にも白髪さらし鳥
 客待の車引行く夜寒哉
 右手屋の棚を變へけり秋の風
 數珠の手に菩薩と拾ふ落穂哉
 灯のさして聲なき鳴の行衛哉
 日も西へ落て花散る木間哉
 若水や我俳腸の洗ひ曠
 郭公五十四郡の空に啼
 鼠尾草の下や泡吹く子持蟹
 散る櫻見惜しむ顔にかり鳥
 遠響する一ツ家の枯かな
 落水と知らず小魚の登る哉
 曉夜や湖水を渡る三井の鐘
 鳴立や水に二日の飄れ月
 冬枯や苞から覗く赤筋
 初夏や白きに移る人心

嫁の荷の走られもせぬ師走哉
 春の香をこねた味なり草の餅
 舞ふ蝶につられて遊ふリボン哉
 蓬生に明易き夜の残りけり
 鶯や素足冷たき長廊下
 月の物なりけり庵の萩芒
 神國の華や戸毎の注連飾り
 風揚げやスミスに擬る雷返り
 青柳の窓に魚焼く匂ひ哉
 松は未だ夜なれど花は夜明鳥
 不圖夢に入る手枕や春の雨
 鶯に木魚叩くや山の寺
 西京の雛東京の幟かな
 花に富む吉野なからも冬木立
 春の戸を開く人氣や二の替り
 千石も此一粒を種卸し
 後ろ髪曳かれて寒し蜀魂
 裏庭に蟻多く集ふ死蝶哉
 風に袖引れて寒し衣更
 初空や見渡す限り雲もなし
 霞む野や水は流る音のして
 花に鳥酒の相手となり鳥
 御座近く神童召さる試筆哉
 山は只高きに如かず初櫻
 一まうけ残して町の雪解哉

雪連塵逡巡尻目に通しけり
繼子にも二日糸裾へし美談哉
思ひ出の多き小袖や土用千
桃の花何處やら機を織る音は
輝きに松も氣高し初日の出
獻立ては有職めくや雖料理
冬の月捨子の顔を照しけり
一丈に餘る糸瓜や夕日影
若緑たつや千歳を得たる松
平凡にふらりと下る糸瓜哉
足音に咄のかゆる火鉢哉
伽羅炷きし昔は夢か萩の主
蒲公英や妹か出茶屋を取巻て
春風や堤歩かす春の猿
今年また笑餅を搗にけり
色白の美髯鬚負や競へ馬
蒲公英や芝を擽に牛の夢
嗚呼夢か花に言間に遠芳忌
小春日や昨日の曠着今日の竿
つき出す遠寺の鐘や夕時雨
別荘は手ぬかり勝梅の花
腕の力膽の太さや鯨突
八宗の鐘も時雨も都哉
焙り海苔是にも春の輕み哉
去ぬ人に寒さ覺ゆる一間哉

踏む足も心も輕し花の旅
月涼し雷雨去りにし印度洋
由良の戸や如月寒き海苔砧
女手に入學迄に育てけり
笑み漏らす西施か窓や秋海棠
忘れ得ぬ人を櫻の咲て尙
夢占を待つ夜を叩く水雞哉
春の水丈の黒髪洗ひけり
一葉舟管蟹乗せて流れけり
羽二重の手障り寒し梅の花
焚添ゆる沙木匂ふや雁の風呂
曉風や蓮に殘る月を吹く
雪に手を突た跡あり神の前
菜の花や山野も富て孤村の美
初櫻春の關の戸開きけり
嘗て知る百味の花や今年米
霞消て行く山に見ゆる塔のみか
人間へは留守と答へよ軒の藤
小枕の垢に冷たき夜寒哉
笑ふ山朝毎近ふ思ひ覺
寢ても又寝られぬ花の七日哉
若水を汲むや不老の松の影
遠き帆は鷗に似たり春の風
入相を寝て聞く旅や春の雨
晝顔や荷馬車の積く砂埃り

時鳥邪魔な豊の軒かな
商人の早く着て出る裕かな
横顔の能き女なり夏の月
雀さへ聲なく暮て秋淋し
紙雜や未だ春寒き懐ろ手
夏瘦や水にかつかく思ひより
花に眼も足も勞れて戻り鳥
雛棚の猫鶴程に騒きけり
風さつと飄る、萩の川邊哉
庭下駄を並へた儘や後の月
法の灯の溢る、池や蓮の花
照り添ふて濡色深し杜若
景色添ふ物は瀬音や飛螢
伊勢参りする咄して年木樵
號外は大火の報や水無月
昔語る國難の碑や松の花
法の灯に闇を放る、十夜哉
各牡丹百性ながら茶室あり
丹精は花の語るや菊の主
初空の拾ひ物なり鶴の聲
雨誘ふ雲の立けり秋の山
袖をれて萩三尺の嵐哉
夜は人を散らして月の櫻哉
越かねた安宅は知らず年の坂
打ち寄する浪に花あり櫻海苔

乗初や木馬曳く乳母の嘶きて
護摩木屑焚や夜寒の坊宿り
陶土堀る凹みくや温む水
澄む空に眞砂の箔や天の川
忠孝の道に全き年男
顧る母國の空や雁の聲
蝶々のうつ、心や琴の上
學校迄引道附けて雪の家
藤咲や手の鳴る方へ鯉の浮く
散る花に向へばなやむ心哉
小原女の花召しませと時雨鳥
半生は氣樂に送る頭巾哉
月を抱く懐もなし冬木立
忠孝の道は盡さす釋奠
太郎作も泰平樂や三ヶ日
春風や浦曲の白砂さくと踏む
能き種は誰も蒔たき彼岸哉
山里や枯れし野末を駄馬急く
曇りなき月にも露の時雨かな
訪ふ家の名はすく知れて梅古き
白梅や詩戰の疲れ蘇る
遠き帆は鷗に似たり春の風
妻を戀ふ猫を呵て待夜哉
見忘れぬ眼になつかしき難哉
座布圍て躰の蓋する晝寢哉

今日親に逢ふ心地せり魂祭
麗夜や籬の内外の咄し聲
帷子や雪の越路の肌障り
磯千鳥蛸壺の中覗きけり
荒浪の上を千鳥の世界哉
立鳴の羽風にゆる、小草哉
蝶も來て遊ぶや春の風車
宿坊に碁を圍む夜や鹿の聲
兒の頭撫て行きけり秋の人
一輪に富貴溢る、牡丹哉
武に譽れ文に秀て菊の主
年の瀬や危き棹の取廻し
藥喰するより狩の御供哉
鼻下長の客は去んたり時鳥
手障りに雨知る宵の紙帳哉
涅槃會や九品の淨土目の方り
炬燵より他事なき爺や寒に入
鬢の毛のゆるさも見へす秋日和
日に幾度髪結ふ侍女や松の内
豊年の煙は太し里の秋
鳴二ツ月をはさんで流れけり
初雷や濡身の儘の風呂上り
鈴の緒の手垢冷たし神の留主
花と酒人にも酔ふや櫻狩り
詩人病む窓訪れり秋の蝶

束の間に八重山包む霞かな
日時計に飯焚く藤の茶店哉
背景に川岸の灯や夏百日
紅梅に位備る宮居哉
御成婚の御儀洩れ聞く玉簾
碩徳の大なる碑や梅の花
親の夢煽く孝子の團扇哉
落ち椿笈と共に流れけり
樂らしき夜毎や秋の空晴れて
涼一味雨後の汀を歩む鷺
降るや雪面白からせ寒からせ
松に富み竹にも富て梅長者
佛とも法とも知らず韭の宿
花の雲花の都を包みけり
青柳や穂先は湖のさ、濁り
香久山の後ろ向きけり春は行
下手らしか焚を上手の蚊遣哉
手枕に雨聞く春の別れかな
四阿の話途切れて山笑ふ
青史讀む窓に月あり梅薫る
開て待つ翌日の遠さや初櫻
柴の戸を内か、叩く糸瓜哉
植木屋の戻り荷輕し夏の月
噫一ツ秋は鼻から來たりけり
振られ男の顔逆撫る柳哉

秋風やふらりと下る大糸瓜
大文字爪繰る數珠に映りけり
是とても普茶の百味か露の臺
踊子や我花あかき親心
引舟の底する音や夏の川
掃分て玉串捧く落葉哉
山蔭に啼く聲悲し夜の鹿
色かへぬ松にも朝と夕邊哉
鶴程に壽命保てよ放ち鳥
雲雀鳴や歸順の蕃社麥青し
只青き松にも添ふや春の色
風裏に夢安らけし浮寝鳥
笛を吹つ、君來ます春夜かな
下す影見せてそれけり風の雁
荒彫の師の木像や春寒し
裏の藪に途切れ、の霞哉
一寸の先は開なり閑古鳥
佐保姫を誘ひ入れけり新別荘
千鳥鳴く夜は立易き炭火かな
帆に配る丈けの風わり春の海
晴れかしと祈るや花の會式前
八重霞引や詩の山歌の山
淺草も上野も暮て春の月
河豚汁や治外法權の方九尺
雪解て山新らしふ笠へけり

小狐の何をあさるか隴影
萬國に秀つる國は櫻かな
曉の雨に愈花眠る
獨酌の趣味此處にあり虫の聲
商人の腰折歌や月今宵
細道の寂迫りけり初時雨
時雨ねは成らぬ姿や笈さし
白蓮の上やかかる、夜の明る
超然と百花の中の柳かな
簀着ても心は清し初時雨
一ト位持て散り行櫻かな
花守や庭を清めの玉簾
花散て變るや心の置き處
梅咲くや朝月牙へて池にあり
浪の音霞となりてしまいけり
居寝りの夢となる日や藤の浪
蓮の香や無念無想の朝朝
朝露の其儘霞む日なりけり
梅を纏ふ一路あり牛吼る里
勤業に模範の里や桑茂る
雨露のかたしけなきや如月田
漉く迄の手際や海苔の水配り
合歡花咲や水車見添て寫生せん
桃陵へ詣てる櫻衣かな
又しても普請場覗く日永哉

25 拾叁

金屏に光るや除夜の福丁子
潮光りのする程鮎の登りけり
雪早し世界に名をも舉し山
鹿の聲聞くや浮世を離れ里
初賣や内も日の出の店飾
秋風や夕日淋しき堤かな
花踏た草履並へて朝寝かな
人形の母に摘る、董かな
包まれて木魚の遠き茂り哉
雨の日を中にはさんて返る
日の高さ見て二の鷹を放けり
添ふ竹も折れて哀や枯る、菊
鶉鳴啼や岩間を水の逆落し
尼寺や未摘花の 仇に咲く
黄昏る、並木の空や鳥叫ぶ
一聲の虫から秋の立にけり
月と風放れてほし、秋の宵
寝る迄は太き工みや寶船
砧打つ家や書になり歌になり
地之りの凹みに雪の残りけり
見のかしてならぬ柳の素振哉
暮れかゝる花に名残の山路哉
豊なる世の様うつす稻穂かな
夕風や鶉鳴去て降る 小雨
端座して苦學に春も花もなし

25 拾四

年の瀬や鬼と佛の浮沈み
人迄も追ふや蚊遣の焚上手
初日影師の蔭共に尊けれ
藪入の態々奥様言葉かな
鯉料る舟に柳の雫かな
鶴も曳く空とはなりぬ浦曇
花の世へ流れ渡るや寶船
紫雲立つ甘茶の湯氣や花御堂
雪の不二日の出の國の飾り哉
花の寺鐘の餘韻も匂ひけり
置霜に色つく紅葉衣かな
涼まねは寝られぬ夜と成に覺
今出した舟も霞に消へにけり
静かに見る初花の雫かな
安らはて寝なまし夜を鳴水雞
良き教うけて涼しき御堂哉
雲か山か霞の網のかゝりけり
目を入れて頬笑む木偶や梅日和
曇然として月高し梅の上
落選の書を断つ汗の恨み哉
笥や人に 短き夜を伸る
曇りなき御代にも花の曇かな
牧方の菊京阪に 匂ひけり
雲の峰崩れて高し比枝の峰
むつまじや蛙歌の手向草

25 拾五

散る花に六時の鐘のひゝき哉
枕廻はつして覗きけり
鳥邊野をさまよう蝶の黄白哉
根を分けて菊の友垣廣けり
古郷の名乗たのもし相撲取
雁啼くや隣から張る壁の穴
乳貰の張物助ける日永かな
居直れば露けき月の蕊哉
散さねか蝶の軽みや芥子の花
山茶花や暮際早き蕊の戸
葱提けて耳貸せと云ふ戸口哉
組合て 落る 雀や藪椿
御身拭尊像黒く 光りけり
磯近ふ来て聞く鳥の砧かな
麥飯の味から秋の立ちにけり
辨財の池の邊りや女郎花
夕立の後や木の葉に光る露
稻妻の散り込む竹の小窓かな
桐一葉悲観の我に答へけり
梅一輪天下の春を廣めけり
草餅を喰ひつゝ休む立場かな
今日咲ぬ君が愛てにし鉢の梅
噓して惜しき誓去なしけり
雀子に飯分て遣る和尙かな
雲か否雲か霞か花の山

25 拾六

涙こそ人の眞や涅槃の會
月の雨君か遺墨に濕きけり
虫干の風は昔の薫りかな
眞似しても笑ひ人のなし放鳥
大寺の空に更けけり盆の月
今日迄の日切りか雨に歸る雁
石てすら折には 啼よ郭公
初冬や未だ香の残る菊の株
搖る、度影なつかしき柳かな
曲水や汀に並ぶ杏の鶯鶯
物言ぬ人に逢ひけり秋の山
梅咲や女詩人の 寓居かな
花に月此世榮華の盡しけり
捨湯氣を澳に夏の雨の晴
消榮へを松に残して春の雪
人違ひして出迎ふや臘月
春曉や梅の白きに雨晴る、
無量壽は花にも欲しう思ひ覺
行雁や亦來る秋も有ものを
猪口すゝく懸中てなし玉子酒
出代の當座小さう座りけり
親二人我は我年 惜みけり
今吹た風の行衛や芥子の花
翌日嫁く娘の室や菊薫る
冷やかに成けり 蜩の肌障り

25 拾七

埋火や磯松風を壁一重
松風の音に暮けり 菌狩
啼されて翠したる若菜かな
山僧の古き抱籠洗ひけり
待遠く思ひし花に追れけり
太刀佩て乳母の脊に寝る端午哉
頭巾着て南朝を説く聖かな
譽足らす見足らす花に別れ覺
舞の目立や寒き眼鏡越
駒鳥啼や廊下を急ぐ御乳の人
身を終る 露や残す綾錦
僧正の唾みに秋の立つ日かな
破れ網を綴る浦家の小春かな
苔の蒸す石燈籠や 閑古鳥
雨乞や泰平樂に 鉦太鼓
賤か家に殊更目立つ幟かな
面白う松も老ひけり苔の花
鶯に啞は 灰吹叩きけり
手料理にすぎた香りや櫻海苔
紅梅に思ひ出多し 尼か菴
故郷へ送る 寫眞や衣更
廻に餘寒海鼠に けりけり
鮮人の驢馬繫く柳枝垂けり
夢の世の夢と過きけり花七日
大徳の忍び姿や夜の花

25 拾八

花の雲女神の裳匂ひけり
千鳥の間鴛鴦の間に敷く蒲團哉
胸襟を開いて花の圓居かな
鈍よりも花に心も曇りけり
果は唯煙と消る 落葉かな
東海の名山白し 初明り
匂ひ程枝に花なし 冬の梅
散る花や惜みても 猶惜みても
儉約に鯛と味は へ根深汁
積めや積め功德を雪の高根程
長閑さや果なき海の薄曇
頼みにはならぬ翌日と花に雨
正氣爰に溢る、須磨の月夜哉
白蓮や手向心に 叶ふ色
當分は雨ともならず 月隴
庭の木に芽ふくや 今日も煙る雨
拜む氣て蝶も來たのか花御堂
早昔程時すぎし 手向かな
茸狩の手柄隣へ 配りけり
魚刺た水輪へ 落ちぬ芦の雪
紅梅や妻戸を 叩く文遣ひ
色も香も勝りし 小町櫻哉
去にし雁は來る日もあるに魂祭
世につれて骨さへ細き團扇哉
落書はへのへのもへや大系瓜

25 拾九

辨慶の鍋に散り込む櫻かな
苔蒸した碑文尊し 若楓
持行し酒もつきけり 沖輪
惜まれて消る 譽れや春の雪
蝸賣て芋買ふ海士の月見かな
山寺に二日泊るや 春の雨
隙のある人に 隙なき彌生哉
重ね着の葉や衣紋めく水仙花
馬の尾に飛た馬追止りけり
追ひ上げて月に 古る、蓋かな
露深し玉敷野邊の 桂影
其儘に夕日隠れて 冬の月
桐一葉天下の秋を 教へけり
菊の香や大國主の 鎮座式
濡れ色に鳥影のさす若菜哉
出代女口より 針の軽きかな
海ならぬ八島や 桃の花鳥
龍は寸に昇天の 氣あり 初幟
鞍上に立て手折るや 野邊の梅
採集の網ぬけて 舞ふ蝶々哉
叱ても吠へつく 犬や傀儡師
祭禮待つ間小魚漁るや 水温む
時鳥碧天 萬里月一ツ
更けしとも知らず 長居や月見臺
豆を煮る豆殻の 詩や時鳥

25 貳拾

仁丹の廣告塔や花の山
初蝶や節にかけし土の上
春の夜や解けて嬉しき君か謎
天地に限なく照るや今日の月
法名の人夢にある 夜長哉
捨られし月と二人や 網代守
枯てさへ風の添よき芒かな
鳴く蛙夢の手枕は つしけり
古曆鼠に 年を喰れけり
繪馬提げて鳥居を 潜る人長閑
精進は我身一人よ 山櫻
樽も手を汚して 戻る田植哉
雪の人雪となる 迄眺けり
喜ひの續く日柄や 櫻鯛
鐵つかふ乙女あり 麓水温む
怠りの身にやる 瀧なし年の川
萬代や花咲揃ふ 供養佛
懸に寝ぬ夜は昔なり 郭公
消息は窓に鶯鳴くと 書く
南書めく菴にて 今日の日見哉
突きそれし袴に 柳の搖き哉
箱庭の植木倒れて 五月雨
敷島の道連はあり 月の旅
嫁入の續く在處や 桃の花
野も山も取込む 月の座敷哉
百二十五

流車道に旗ふり一人時雨けり
義の爲に身を賤めて葉竹賣
巻餅や服切る織きは幾處
金銀の慾に離れて菊の世話
籠の鳥遊けて歸らす春の行
いつ迄も親は持たし盆の月
旅衣花に日敷を重ねけり
鶉の眞似をする鳥あり雲の峰
見送に出たる戸口の夜寒哉
着衣初出度年を重ねけり
葉に暮て穂に月の出る芒哉
冬近し門田の月の白地
九重に召し出さるゝ蓋かな
見るは秋遊ふは夏の月夜哉
鶯の亂れ直して着衣始
雁鳴くや南京堂の古ひさし
盆市や見では涙の種となる
白蓮の上に置たき心かな
羅の膝に重たし左り馬
時鳥啼き計りの夜となりぬ
世は旅と悟りし人を寒念佛
無我の月無我の禪座を照し覺
身の無事は堪忍にあり暖め鳥
一ト嵐花に本意なき別れ哉
樂天の人世觀や置炬燵

盆の月九品の淨土照しけり
入學の門を賢愚の分れかな
笛一管涼萬斛の月夜哉
子は君に捧けて老の年男
葉櫻となりて虚榮の夢醒むる
長閑さや海を見て解く笠の紐
曼陀羅に花の香の添ふ開帳哉
師の墓へ一筋雪の搔れけり
今日は又嬉し泪や魂祭
幽明を隔て花の薫り哉
菜の花や聖代歌ふ小國民
門の田の青みに朝の起き心
屠蘇汲ん吾も千歳の男なる
時雨會や床に掛たる師の遺吟
麥刈りは巢立ち迄待つ仁者哉
金屏の鶴も舞らん初日の出
茜濃く彩る峰や夕櫻
奉る百味の中や初茄子
普陀落を諷ふや花の粉川寺
蠅一ツ打たぬ手の彫る佛哉
御宿も煤けし行燈春の宵
花の文かくや日和を確かめて
蝶一ツ花屋について這入けり
世の外の菴とわるや花の罪
貰ふたる牡丹に耻する庵哉

木の骨のうつる流や冬の月
千鳥賊や齒に必用の妻揚子
佛門を潜る日のあり秋の蝶
氣にかゝる夜の小雨や芥子咲て
無造作に出来て尊し雪佛
女郎花鞠にも思ひ引れけり
雫から雫に戻る氷柱かな
伸た芽もいたいけそうや忘れ霜
絹足袋や男勝りの水貫ひ
鳴と鐘こも胸を襲ひけり
愛嬌は母の手入や辻か花
肅然と更けり月の歌薙
伸を打つ婆の話や今年蕎麥
矢の如く水は流れて登り鮎
天地の柔らき初めて初霞
天の川流れて露の光りかな
初時雨横の雫となりけり
高低に開くや棚田の遠蛙
指折て昔したわん花の春
香より輕し新酒の口あたり
獲し鶴に鷹匠の意氣昂り覺
掃負けて梢見上げる落葉哉
藥壺藥の味は知らぬ人
白蓮や懺悔の尼憎涙あり
咲く蓮の音微妙なり曉の月

笛と聞く松風涼し須磨の宿
巻揚る簾や月の山放れ
月深更松より漏るゝ薩摩琵琶
實櫻や老鶯の嬉し鳴き
曳すとも松を見て來ん初子の日
授戒會の札新らしき茂り哉
野施行の提灯行くや大徳寺
猫の妻野守の鏡覗きけり
入撰の我に春あり詠進歌
落つて居られぬ花の日和哉
初蟬や物張る板の新らしき
月照るや掃き清めたる神の庭
若鮎や雨も降らぬに濁る川
九死となる田に天祐の白雨哉
限りなき御代の光や初日の出
勅に御車返へす櫻かな
調和して此千金よ月と梅
七賢の住居は嘸な竹の春
花に寝る蝶見て莊子を偲ひ覺
孕み帆を見る濱邊る長閑なり
着ふくれて子に笑はるゝ紙衣哉
ふつと見し鳥鶯てありに覺
手の届く花に罪あり梅探り
土用干祖先の遺墨匂ひけり
造林の苗木見廻る雪解哉

學ふ書の中に銀杏の枯葉哉
星合や下界に遠き雲の上
赦山高し麓の村は若葉して
摺り物て残すや菊の勝姿
百度石光る古ひや呼子鳥
鼻に利く山葵や鯉の生作り
物馴れた案山子に鳥の休み覺
蓬にも麻にもよらぬ柳かな
雁啼きて八景の數揃ひけり
鳴蛙夢の佳境を辿りけり
鶉鳴啼や石と化す木の茂る山
行燈に落書一句花の茶屋
梅の風御笠暫し止めけり
並松の茂みに出たり春の月
苔に身を染むれと朽ちぬ石佛
突く人に聞せて見たし秋の鐘
能登節を灘て聞く夜や寒の入
梯の遠く香るや梅の花
至誠遂に神を動かす落葉哉
御威斜ならず勝得し今日の菊
出放るゝ光に散るや月の雲
抜殻を殘して蟬の高音哉
弓將に折らざる案山子目の丸き
輕う持つ心の重し芋殼著
名香は幾代變らず時雨るゝ日

身の花は老ても散らす司召
菊十鉢客待ち顔の主かな
不景氣の風も空吹く蜻蛉哉
浦淋し芦の穂綿の散る夕
幽ともなるや胡瓜の蔓たくり
雁低う江尻の芦の戦きけり
眉の霜頭の雪に頭巾かな
世に光る基や苦學の汗の玉
花七日斗酒倒に了んぬる
膳濟めは一度に開く扇かな
積徳を頭巾に秘めて閑居哉
すれゝに笈の下の柳哉
風薫る清き佛間や青疊
廣々と見渡す海の初日哉
内職に鹿の子絞るや桃の家
雪達摩一夜は月に光りけり
水口に民福祈る祭りかな
蓮飯や夫婦相氣の佛こり
落成して除幕待つ人長閑なり
寒古鳥月も尖とき夜なり覺
雨毎に笑ひかゝるや山の色
御忌詣都の春を飾りけり
散る櫻京へ來た日を算へ覺
貸しもせぬ垣に隣の糸瓜哉
反別を拵て計りて種卸し

散紅葉見ぬ奥迄も語り覺
肩上げを下して肩の重さ哉
相槌のやうや砧の雨隣
約束の拾子拾ふや臘月
明進む花に放るゝ曇り哉
貝の出た跡もあり鳧芦の角
戀すとは思へず猫の聲替り
あの鐘も此の鐘も皆十夜哉
梅白し夜は未だ寒き月の冴へ
出不足の咄も春の名残哉
瀧を見に行くや夏書の筆勢れ
八房の梅咲初る雪解かな
名月や平家を語る琵琶の曲
花咲も散るも風雅の一葉り
啼よりも猶面白し目白押し
曲水や奇才詠る筆走り
有中に世話の甲斐あり春の花
葉櫻や茶寮人なく雨煙る
鬼灯や氣儘身儘に暮す嫁
若かへる年の用意や事始
梅か香に曇りて薄き月夜哉
春風やリボン黒髪長袴
手向には伐り惜みせぬ牡丹哉
未來ある活動振りや蛙の子
春惜む話疊むや曠小袖

波止に出て書を讀む人や夏の月
月の雲花の雫となりぬ覺
春の山重なり合て暮にけり
涼しさや水にさす灯の長短
蜻蛉に虫なく須磨の月夜かな
重き身も花には輕き歩行哉
法厄の昔偲ふや御難餅
遠山の雪紅ひに初日の出
啼さかけて飛去る蟬や暮近き
石地藏目をしはたけん花吹雪
散る櫻返すゝも惜みけり
雨近や蚊か一つ來て臘月
元日は禮義もありて睦しき
錦上の花や襲爵叙位の沙汰
花も實も其腕か産む接木哉
燕いさごり
河鹿啼く河や耳目の洗ひ所
殘雪の一塊か草に赤き陽か
逃水に汚れた儘の野菊哉
旅先の無事な知らせや二日炙
眉刺た女も酔ふや櫻狩り
訪ふはつの人に訪れて冬籠
千年の歴史を包む芒哉
二人り散る花の數寄屋の俄雨
桶杏の輪も入れ替て冬近し
百二十七

村小町戀に落ちたる踊かな
茶につなく唄の蔓や春の雨
象に藝仕込む美人や花吹雪
川の字に寝た夜は易し蜩の月
欠德利糸瓜の水の溢れけり
水馬湖にさゝ波起しけり
誰ぞ来て陸など咄せ秋の暮
加茂の月羅寒う更しけり
苔に降雨に音なし郭公
虫鳴くや尾花の袂萩の袖
花待や身の老行くに氣もつかず
春風や葎荷て戻る瓢賣
花咲けは豊かさ深き稲田哉
襖にやる夢は結はす藥喰
長閑さや化石の様に眠る山羊
散て後猶したはるゝ櫻かな
香焚けは石に聲あり夕時雨
四隣なき我家氣易し鳴く蛙
月花の世を雪垣の隔て哉
催した雨の恵まぬ暑さ哉
春雨や美人の車母衣深き
露寒し碑前に絞る袖袂
念佛て巨材を運ぶ彼岸哉
行年の水心なき流れかな
肌迄舞込む花の吹雪哉

死神も祈らん程や菊の主
短夜やよへの儘ある人力車
桶伏の鮎は逃けて石路の花
秋の月さら／＼水の流れ鳧
永き日を寛々鶴の歩行けり
大寒に汗の滴る竹刀かな
武に文に聖旨輝く國の春
學成りて故山に粽はとき鳧
國境の山越へてくる月の雁
引て行鶴や雲間に見へかくれ
弓矢持つ時世後れの案山子哉
初東風に只一輪の梅かほる
眞珠とる浦や卯月の沙曇り
義にからむ席や扇の貫ひ風
朝茶の湯松風添ふて泌り鳧
春の夜や謠の低き佛の座
定宿の行燈古りて春の町
歌心誘ふや雁の渡り初め
鶯や閑居の我を覗き込む
遠柳牛曳く人も見へに鳧
松風は松に戻りて風霞む
未だ散らぬ言葉の花の土産哉
秋の夜も樂し逢ひつゝ虫開て
芋虫や足かあるとは思はれず
御野立の跡に床しや草紅葉

河豚喰て昔の乳母に泣かれ鳧
春の人蟹の脳味噌せゝりけり
から川を風の流るゝ落葉哉
少きも又風情ある螢かな
御代振りの見ゆるや花の人通
暮遅し出ればあの神此の佛
秋立や芭蕉に障る風の音
入相の鐘満山の落葉哉
石地蔵に赤き頭巾や冬木立
風もなき津々の長閑けし松の花
不二筑波浮島にして八重霞
寝て見ても起ても見ても夜寒哉
ぬれ色の若葉の上や虹の橋
成金に媚賣る美妓や春の宵
釀得て先手向へき新酒哉
冬牡丹智恵三代の長者哉
引放す矢にも立けり秋の聲
日撰みは人の常なり神の旅
花曇り大八洲を包みけり
花に月戀よ理想の私語洩るゝ
秋の蝶過去追ふ窓を覗きけり
種蒔た様を田毎の蛙の子
琵琶の曲はほろ／＼と飄れ鳧
妻の愚痴聞くに忍びず晝寝哉
澄み切て山彦遠し秋の山

鳥鳴て山茶花寒ふ散る日哉
人数より下駄の少なし雛の客
身に入むや芭蕉に蹴く夜の雨
珠曉忌や言葉の花を手向草
降過ぎて悲觀の雪となり鳧
到る處詩趣に富めり春の山
長閑やをり／＼牛に當る鞭
晝よりも夜の目によき花茶園
節分の夜を際そうな寺男
咲く花に花を飾つて見逢哉
左義長や古代の儘の神路山
美女と化す櫻の精や薄月夜
山雀や籠三尺を我か天地
移り替る世にたにかへず雛の衣
花に風神飛魂驚の思ひかな
單線の交叉待つ驛の櫻かな
草萌や打つかげ畑の鎌の跡
取り入れぬ門まで麥の埃り哉
笹さす人も景色や櫻川
摺り合て秋立つ音の木賊哉
猛虎の眠るに似たり春の海
美しき曇りや花の嵯峨御室
蓮月の一輪生や朝茶の湯
笹鳴や湯治戻りの荷拵へ
急き來て流車に遅れし暑さ哉

七夕やいろは書ても歌心
うたゝ寝の人酒くさし春の宵
後の月豆柄焚く火照しけり
雪達摩六つの花衣重ねけり
程よきは程迄やすし花に酒
徐に春は行なり和歌の浦
言ひやうて明日の遠し今朝の春
遠見する程なつかしき櫻哉
泰平に見る血戦や難合せ
春風や追ひ出して見る二歳駒
惜しまるゝ花は先へと散に鳧
薫る風鼓は船か樓か
赤貧の洗ひさらしや薄布子
音なしに動く芒や今朝の秋
鉦の音も月も冷たき十夜哉
逸し去る鶴や鷹野に雪頻り
歸り花散る日の噂さなかり鳧
影淡き夜明け月夜や時鳥
日曜は唱歌も交る田植哉
通天の霜未だ淺し薄紅葉
虎杖や蛇弄ふ里の兒より
鶴の曳く空や雲さへ消て退く
入心の美の極點や粥施行
身を賣むる角を落して馴る鹿
拵へた様な花なり歸り花

血の雨を降らすも金よ鯉の友
命日に旅僧泊めて草の餅
春の行く足音はなし草の雨
花見ても吟腸寒し御忌日
散る／＼と見る間に花の吹雪哉
初櫻常は寂しき庵乍ら
豊年や祝ふ踊も神の前
萬歳に輪問はれつ老夫婦
長閑さや縁迄出ても花心
金雞三唱年新まる旦かな
雁風呂へはる／＼秋父順禮哉
身も花と飾る十三詣かな
徒らに過す日てなし初時雨
八重櫻特別保護の伽藍哉
我影か若草に大きくうつれう
桃山や先正月の初参り
時鳥茶寮に人のなき如し
書にうみし心誘ふや花の友
國寶の壁畫拜する彼岸哉
炭のたつ音聞へけり屏風越
奥深く陵拜む若葉かな
詩箋置く青貝卓や水仙花
遅咲の花を筐か春の暮
色黒き子か大將や水泳場
風に添ふ遠音や雁の浮沈み

聞なれし鐘の耳たつ霜夜哉
涼しさや浪も静な島の影
忍ふれと聲に出にけり戀の猫
涼風も願へは吹くや籠り堂
豆引た畑の廣さや後の月
蠅釣て寝た子請とる戸口哉
翡翠や船の腹干す向河岸
幽玄を曉に見る櫻かな
月三更故郷戀し雁の聲
人知れぬ山の奥にも落葉哉
白髪には氣つかす花を待れ鳧
青饅や膳の向に伊良古岬
温泉の客の遠く遊へり秋の山
賢は賢愚は愚に年の暮る哉
一頻り時雨て松の月夜かな
泰平や矢にする竹も菊の杖
雪の果佛は娑婆を去り賜ふ
曳舟の綱も切れよと初松魚
葉柳や拾ひ客待つ辻車
糖雨に目見への母子軒つとふ
東莊の梅西莊の柳かな
子を偲ふ母はそゝろの霜夜哉
答ふるは山彦のみを呼子鳥
一渡し仕ては芦焚く時雨哉
奥殿に羯鼓の音や花に月

春の人酔ふた振して通りけり
物々の姿に晴や雪の朝
治世酒は利くかど醫者に問れ鳧
酒あひて月あひて戻る櫻狩
一輪の花にも蝶の迷ひけり
消へて行く燈火細し年の暮
山買て見たきも春の心かな
彌高き竹の園生を飛ぶ螢
鐘樓も塔も朧や花曇り
桃の奥太古の如き處なり
同じ種蒔て五形花の長短
花の瀧大和心を酒しけり
残る餌に行衛思ふや放し鳥
投げし石か蛙の柳をゆさふれり
碁に負けて無念晴しや印地打
静さの闇を縫ひ行く螢かな
呵見事花眞盛や嵐山
門通る僧呼ひどめて蕎麥湯哉
青鷺や水輪重なる池の雨
綻ん花の裾吹く春の風
富嶽の影白扇に似たり鳧
笹鳴や池の後先き右左り
一陣の風夕立の突貫す
雪に膝折られてすかる團伊裏哉
唐壺に風薫るなり白書院
百二十九

鳴突や沼田の畔を迂りつゝ
花の人臚の清水探りけり
四五軒の村や枯野の前うしろ
奥嵯峨の有明寒し雉子の聲
鳥追や昔杵柄取りし果
蝶一ッ壁に二日の達摩哉
祝事ある買振りやや櫻鯛
澄む月に孤宮詠りやかねの歌
橋上に雲見流して夕涼み
菊園を長生軒となつて鳥
幾度の雨にも末黒の芒哉
草の戸へひく隣の砧かな
蝙蝠や賣れぬ土蔵の建腐れ
六千萬菊譽ぬ人なかりけり
朝顔に昨日の色はなかりけり
鶯に針運ふ手の狂ひけり
雨後の月梨花は白きを誇りかに
初冬や障子つゞくる老禪尼
燒野遠く立志の門出見送りぬ
花よりも勝る景色や雪の杉
鶯の聲につまつく筆運ひ
花に月天壤の差もなき夜哉
摘草や禽にとられし握り飯
蚤飛て變な騒きや手術室
水晶にも勝る氷柱の光かな

仰く碑へ鳴か冥途の鳥一聲
献上の牡丹に船の重荷かな
琵琶歌や癡兵慰撫す櫻餅
降り出す雨や櫻の散る夕
冬枯て三句も早や過しかな
花に雨三千丈の白髪かな
開運の音待ち受し朝朝
南朝の事思ひ出す櫻かな
紗や賣りに北方在所より
銀盃に麥酒の泡や夏座敷
山冷を晝は放れて初櫻
絃樂の椅子や避暑の縁の先
朝の陽か一はいにさす若草に
白濱の砂吹上げる野分かな
擔ひ込む聲も勇まし初松魚
散る人を景色に酌むや花の雨
猫は戀人は櫻にうかれけり
田も少し刈りて時めく月見哉
扇やら團扇の風や門納涼
巨砲に優る案山子の一矢哉
蜂の巢や崩れかゝりし板庇
雨乞の太鼓盛るや蒸暑き
夏布團囀してから冠りけり
よき男振編笠を洩れにけり
夏近し雌瀧雄瀧の太る音

辻か花散らすや雨の夕嵐
雛の座に窮屈かるや男の子
見つゝ来て這人は暗し雪の菴
待ぬ鐘見惜む花に響きけり
惜しめども散るを櫻の手柄哉
折うとは花見ぬ内の心かな
闇の夜の星程光る露の玉
蚊を知らぬ里へ逃たふ思ひ覺
治世酒や久振り聞く鳥の聲
屋敷守る神を鎮めて秋高し
散る牡丹風なき闇の動きけり
歌薙更け行く月にしめりけり
勝菊や牡丹にもなき今日の曠
長閑や經を讀む鳥諷ふ鳥
雨乞ん村讀ロマンエチツク哉
花御堂甘茶に魚し佛かな
蝶百種採集の期や野に山に
人は老ひ易く櫻は散り易し
歸りにはしどろもどろ御慶哉
雲の上の人をも泣かせ虫の聲
雉子鳴や日和崩せし朝地震
打解て樂しや花の小酒盛
敵人の日や月花の待ち心
朝顔や六十年は夢の内
救ひ呼ぶ船は何處を霧の海

花堤十里緩流後に下る船
花散るや熊野か名残の舞の袖
通る人見兼て曳し鳴子哉
陳列に聲高々と河鹿哉
とり／＼に花の噂や春の雨
家買た町切り餅や初乙鳥
船涼し浪の鼓に松の琴
國のため一肢報ひて司召
人の氣を養ふ風や夕涼し
飛ひ／＼に残る菜の花咲に鳥
歌讀にあつらへ向や月に雲
何事も忘れて通る青田哉
花は物云ねと春を語りけり
踏み迷ふ道の菜や佛の座
桃の咲く家やころ／＼子も育つ
夜や短か達て寝るなり明るなり
木瓜の實や破戒の僧の隠し酒
百度踏む女の聲や臘月
寝不足の眼をこすりつゝ西瓜哉
隙な身と言れて世話し菊作り
身の程は不言不語夏斷哉
咄す間も唯行秋の日脚かな
雀子や案し氣もなき釣瓢
月落て流るゝ浦の霞かな
無事な顔揃へて出たり門涼み

小坊主の聲よき踊念佛かな
濡れてある鬘斗にも匂ふ新酒哉
破顔一笑天地動揺初櫻
蜂飛て吹矢の狙ひ狂ひけり
夕顔や春戸に女の瓜刻む
船造る州先の廣し夢の花
寫真屋の遅き卵の花くたし哉
火を足して炬燵の朝寝起し鳥
旅ながら寝易き春の雨夜哉
恍惚と一人月見る端居哉
雪見舞掃せた跡へ來たりけり
打水や客待茶屋の夕景色
天覽の飛行日和や風薫る
天然の音なし雪の海と山
なつかしの友思ひ出す秋の月
法の庭月も静に見られけり
雲と明け雪と暮たる櫻哉
引鶴やよへ過ぎし顔かくす龜
傾城とやらやんて居る田植哉
菊に客預けて酒の仕度かな
嵐山花にあふなき名なりけり
紙籬の袖にも花の匂ひかな
月の露瓢の肌にも匂ひけり
押入に隠るゝ妻や水祝
叱られた師を思出す試筆哉

虎杖や首の落たる石地藏
桃源に入る人遠く霞みけり
心せは踏む土もなし花莖
見ま欲しき琴の主や青簾
神垣や春未だ寒き松の色
輝や鉄一挺の小百性
浩然の氣を養はむ梅の花
花の咲く眠たき雨の降る日哉
浮き沈みして鳴く池の蛙哉
散るや花幻の世の教へ草
掃き立の跡に又散る紅葉哉
鳴く聲に腸断つや寒苦鳥
駒曳けは鞍の上にも櫻かな
十三里来て日は高し花の旅
心ありや櫻散り浮く手向水
夜の底と散るや櫻に月静
辻に立つ阿保陀羅經や春の風
衆目の引くは美人よ花の中
探梅や昔は志賀の都跡
蝶鳥の世にして霜の別れ哉
石碑に其名は朽す苔の花
破芭蕉頼みならぬ日和哉
徳を持て知らるゝ梅の主かな
雉子鳴て犬共ひそみけり
分け入れは苔蒸す岩の清水哉

一時雨來るか茶臼の引重り
東餅肩に掛けたる豆絞り
萱狩や琵琶の湖下に見て
紅芙蓉咲き揃ひたる眞晝哉
初日さす軒や雀の朝機嫌
桐壺の中山吹の盛りかな
草履さへはかぬ子多し蜻蛉釣
雉子鳴やのつと朝日の昇る時
詠め入る花や蕙の重ねつき
今年酒今年も祝ひ過しけり
月の出る迄のつなきや今年蕎麥
菜の花に曇りの取れぬ日和哉
鶴の間や召れし鷹の羽繕ひ
虫鳴くや昔を思ふ古戰場
鷹か鷹生むは常なり司召
月花の古ひや雪の檜笠
寺の名の極樂に咲く糸瓜哉
藪入の女見に出る女かな
鹿の聲風と成て明しけり
冬籠り屏風に春を畫きけり
竹の葉も戦かぬ夜半を時鳥
大雪や壘も積りし鍋の尻
國體の精華を誇る櫻かな
戦く芦入江の鳴を立せけり
飾り氣は言葉にもなき目見江哉

海棠や机に眠る歌法師
菊咲ていと御殿の奥床し
世に仇を那須野の石や冬の月
師の忌日云ふて所望する牡丹哉
夏木立供養の鐘の響きかな
彼岸會や忌日果報の佛達
鶯に先立れけり今日も又
嬉しふてならぬ振り也蝶二ツ
見る人の有のに散り出す櫻哉
乙鳥や富ます貧せず草の家
苦學成り寒梅窓に薫りけり
流れ行く水は返らす鳴く蛙
水選みさても禪味の新茶哉
練供養蓮の曼多羅拜しけり
窓の蝶莊子の夢を誘ひけり
佛彫る鑿の光りや秋の暮
一山に善男善女十夜かな
春風や書になる人の若作り
隨月意中の人に出合ひけり
花に風有爲變轉の浮世哉
草に露沈静に夜の明にけり
漸く入れは漸く深し花の奥
草餅や思ひ出多き咄しふり
夕立は譽めて居る間の眺め哉
家内相和して夜長の咄しかな

紅閨に優るや月の膝枕
稻妻や野の一ツ家の四方より
雛の柿の花笠冠りけり
翫て見る月や須磨より明石より
夕刊の記事名月に照しけり
とれ見ても舟足遅し春の海
難見ゆる丈け捲上る簾かな
粒雨の土になしまぬ暑さ哉
灯のうつる草を立けり露の虫
二階から見て居る雨の櫻哉
南朝を説く禪僧や花の雨
餅搗に來て親の無事聞かれ覺
山越して棚田へかへる雁の群
濡り持つ苔の匂ひや暮
只ならぬ曇や今日の初時雨
著にさしてくれと子の云ふ小芋哉
釜みかく春戸の流や杜若
鶯鶯ニツ心一ツに流れけり
散る櫻仁玉の屑に積りけり
花の嵯峨砧の嵯峨と成にけり
夕榮や黒髮山に月の櫛
あやう氣な橋の彼所や花菖蒲
香に曇る月や更け行梅林
兵書伏せて畑打つ隠士かな
白蓮や悟れば廣き法の道

赤面を隠す娘の扇かな
鬼百合や炭屋亡ひて幾昔
鎌程の月にも秋の光かな
眠る猿蚤とる猿や小六月
瀬を越した人に味あり登り船
春淺し未だ消へ難き今朝の霜
春の月水徐ろに流れけり
至る處花ならざるはなかり覺
人戀し雨に灯す萩の宿
花の匂も雲と集まる供養哉
鳥居から奥は並木の茂り哉
靈魂の在ますか如し花供養
洛中へかすむや御忌の鐘の音
鬼灯や未だ解け兼る戀の謎
苔の花九百九十の寺涼し
石室に六月寒く寝たりけり
竹垣の一節のたまり陽炎へり
雪達摩日のさす迄の悟りかな
待つ一ト日より短かし花七日
耕や戻りに廻る水加減
咲競ふ園や黄菊に白菊に
金魚賣る聲に讀書をうほし覺
帷巾の皺のして起つ長居かな
矮屋に苦學の友や霜の鐘
水音のをり／＼變る落葉哉

見られしと隠すや雪の簀と笠
客を待つ車夫木蔭に眠りけり
二度も眼の覺めて夜更し鳴千鳥
木屋町や二ツ這ひ寄る蜘蛛
藏番も酔ひつふれけり戎子講
讀み添へる歌さへ床し燕子花
五歩十歩花近からず遠からず
それ鷹や夕告鴉立さはく
有明に心をかけて不如歸
春風や不二は霞の薄衣
露次に干す鶴の餌箱や冬至梅
夜にぬれた茶巾の儘や時鳥
花うつる影も手向けん阿伽の水
咲満て雲も動かす花の上
山とても眠らし風の吹きまわし
白梅の闇をし分し梢かな
出代りの名残春には似さり覺
耳の用濟して疊む扇かな
降らぬ田は鶴の遊び、時雨覺
叢の露に影引く燈籠かな
忍び來る子猿三ツや櫓の宿
春寒しちらつく六ツの歸り花
演習の砲彈受けて山笑ふ
敷島の大和心を散る櫻
初寅や朝の閑踏む鞍馬道

遺留品遂に返らす年の暮
寶榮籠や浪花を飾る年行事
逢ぬ戀可惜蛙に鳴れけり
行く秋を無能の我と糸瓜かな
打ち起す用も君の爲國のため
大海を一ツの月の光りかな
納飛や日和乍らの雨催ひ
細き手に國産握る繭繰女
春の夜や何を上臈の聊ち言
風孕ひ袂の輕き浴衣かな
畫師文を俳師鼎座に口切茶
鶯なくや雨晴て日のさす山路
雪解けに角野守の鏡曇りけり
咲に覺句碑の匂ひある八重櫻
固そうな物を枕に畫寂かな
湖渡り來し舟欄に春の風
見心の斯くては果てし花に月
風なくて散る日を花の名殘哉
八卷の跡のみ白き皇月かな
電華百萬馬力を見せて水温む
鶯替や見込みし人を失ひぬ
今更た跡のつきけり蝸牛
金泥に無量壽經や香る蓮
暮れたれは踊り場なり寺の庭
笏持て落葉を拾ふ圓座かな

涼風の音を運ひけり夜の琴
瀧迄は廻る日のなし夕紅葉
姫瓜やある夜桂男月に抱く
蛙の子雨の八ッ橋渡りけり
郭公麥の穂波を立せけり
晝の窓青田の外はなかりけり
鴨啼くや雨は柳の骨をうつ
寝所へ入れぬ夜寒の手遊箱
鏡汁や疊の上の丸木橋
灰占の解けて抱き添ふ火鉢哉
宿り木の松は榮へて冬木立
庭の蝶假寐の夢を誘ひけり
月花の供となれかし青瓢
野は枯れて地蔵や冥途の力草
曲水の跡を櫻の流れけり
切る音に風の生るゝ西瓜かな
早飛脚霧蹴散らして隠れけり
旭に光る舞の剣や朝神樂
八卦も見ると申しぬ曆賣
朝寒や停電の不平洩しつゝ
入相の松風寒し御忌詣
鶯や笥に硯洗ふ翁
花の香や殊に都の朝朗
老ませし親いたわしき寒さ哉
碑や數萬の蛙歌申す

妻木折る音鶯に障りけり
萬物の氷る夜を鳴く千鳥哉
池殿の雨静かなり花菖蒲
雨の長萩一入の眺めかな
日傘並ぶ野路美し草紅葉
ふら／＼の下に浮雲乳母車
花堤十里蛇籠に續く柳かな
夏瘦の羅綺にも堪へぬ風情哉
露深う青田の果は霞みけり
中啓に銀蠅乗せし和尚かな
獵止て椎茸作る山家かな
師の愛た花買て行彼岸かな
靈松の花唐崎に薫りけり
旭に美々し涼し曠野の霜の曉
十薬の花白き畑や梅雨晴
子は徳の門に殖へけり初轍
花七日風は柳に遊ひけり
丹精は青田に出たり作男
蓬萊や黄金の波の打よする
ふら／＼と酔ふ足元や花の散る
静さや芭蕉葉に聞く露の音
庭廣うして苔深き泉かな
揚た手に春も伸さうよ勝角力
蝙蝠や掛行燈は廢す廓
露の野や碑にぬかつけは濡る袖

親あらは遊ひさかりを覗賣
蓮見舟彌陀の浮土へ棹さ／＼ん
袖拂ふ音は雪らし軒の人
月の雲掃捨よかし帚星
養父入や今年は梅に手の届く
枯尾花月迄寒くしたりけり
蝶々や浮世の夢を花枕
一本見て櫻譽めけり嵐山
花なれば苦にする夜也積る雪
晴れ渡る空に少なき雲雀哉
舟唄の尻聲引て霞けり
其中に日も輝て花の雲
日や嬉し時雨かけぬく塔の先
留主守の主待ちけり冬牡丹
入る月や山の後ろも人の里
柔弱な男に似たる生海鼠哉
失戀の腹暖めん玉子酒
雪の夜に赤穂の義士の話哉
海を歴す巨艦橋頭に月呀る
匂ふ梅自得の一句浮ひけり
鳩の舞ふ鎮守の森や山笑ふ
夏瘦は心盡しの餘り哉
瀧壺に置く影清し藤の花
一村を富ませて桑の落葉哉
船の付く度に賣れけり草の餅

大膽に櫻折りけり醉美人
吳か越か將又雲か花朧
野山から笑ふや今日の初櫻
水車小舎若葉の匂ひ籠りけり
雨晴や花に再び來る使ひ
比翼塚無縁法界枯尾花
洪水地秋は悲慳に暮にけり
湖遠く白帆の見ゆる青田哉
吾身を煮れて人に取れつ初釜
呀へ渡る青葉の笛や須磨の月
塵の浮き世は白蓮の主かな
桃の戸や朝靄破る勿釣瓶
僧堂に齋の魚板や納豆汁
白鷺の立つや狹沼に蓮赤き
若芝や木馬に遊ふ小公達
親に杖花も見頃と進めけり
大雨の晴し案山子の阿彌陀笠
一洋萬里青き海原や風薫る
買て來て一坪庭も櫻かな
菊いろ／＼入さま／＼の眺め哉
智も學も隠して鳥の主かな
難題を一人てかむる頭巾かな
手向花散るや弗子の煽ち風
散る花や譽し浮世も夢の跡
水汲みに下り／＼谷間や車百合

多枯れし樹程花咲く彌生かな
葉苞の納豆に通ふ鼠かな
分入れは櫻や雲の峰つゞき
見す知らぬ人とも語る暑き哉
知らぬこの詞美し鮫の味
青空を底をにして澄む清水哉
冠る波ぬく波涼し鏡岩
落葉籠樹々の諸寂集めけり
千代八千代迄も榮ゆる岩の松
先菊の名札に神酒や勝祝
大空に満る名の夜の光りかな
虹の根は枯野の果ての墓場哉
花の山海見ゆる迄登りけり
花潜り行や硯の水貫ひ
起したき隣の遠し月の晴れ
賑はしや雛の籠も立煙
綿入れの重を知る夜や初蛙
花散りて吾に残りし酒債哉
散て行く花や歸らぬ水の上
凍解や足に重たきコム雪踏
表彰をされし貞婦の砦かな
誰か来て摘み荒せしそ土筆
蜜蜂や女王の國は豊なり
春惜む寂光院の御幸かな
澄み渡る月に吹き消す行燈哉

極樂は此處か夏籠る山の寺
暖かき草に寝轉ふ小犬かな
鶯に話の腰を折られけり
人も子に氣の置ける夜を霜の鶴
臘梅の月射る窓に琴の音
門弟の傘下に集ふ時雨かな
日盛り舟待つ岸の日傘哉
尼講や素人交りの寒念佛
半部に吹き入る櫻吹雪かな
共に汲む一河は盡す桃青忌
帷巾や懐紙の置どころ
面影の見ゆる紙衣や土用干
鄙曇、雁來紅の煽かな
八重霞九重の空包みけり
里へ出て廣がる春の流かな
日曜を待つ樂しきや土筆
梅薫る園や庵の柱立
見る物の皆春らしき心地かな
惜まる、仕官を捨て、菊作り
世に媚る腔は飾らす澁紙衣
雪空や風呂もあると泊らる、
寝姿は人には見えぬ紙帳哉
雲井から出てけり花の文使
虫干や返した筈の本かある
鳴の立つ羽風に戦く芒かな

置く露や蜘蛛の糸にも毛虫にも
三十三歳雪見燈籠を潜けり
睡一人合點顔なり壬生念佛
松の雪散る度花の思ひ哉
今鳴た鹿より遠き隣かな
橋脚に月を砕くる女浪かな
木立枯れて目立つ七十二峰哉
稻妻の見せつ隠しつ岩の鼻
虫籠の戸も明てあり魂祭り
酒と云ふ病持けり薬堀
手を抜き、花壇の寂や霜柱
山里や蠶の中の雛祭
水見るも心地良き日や補卸し
時鳥叶はぬ戀に泣夜かな
炭挽た手て撫てらる、子犬哉
山鳥の羽に叩き消す霞かな
義足叩く政論に火鉢灰散りぬ
春寒し薙髮の尼の鏡立
鶯に女三人静まりぬ
秋立や君か忘れし扇より
天盃に満つる笑顔や御代の春
土底の魂や暗けん秋の聲
蓮白し水は澄みても濁りても
御遺跡と聞て笠脱く櫻かな
毀傷せぬ身は忠孝や二日灸

香の高き里やなつかし稻の花
風の中に狂女の叫び哉
向替て月見る迄に更しけり
神棚を雪に動座し煤掃
飼鶴も温室にあり冬籠
蟬鳴や木影に一ツ石佛
牙へ渡る鐘ついて来て掃火哉
栗飯や念佛すみたる夜の供養
折て来て親に見せよと奥の花
果樹園の櫻褪せたり夕月夜
心學の道話夜長の燭更けり
淡路黒し野分の雨となり暮
榮衛は限りあれども牡丹哉
花一枝手向の幣に折にけり
納群れて梢動かぬ日なりけり
花の世の花と向ふや新机
風呂貫ひに行くか、衆や春の青
白菊に耻しぬ主人の心哉
賢なるに似合ぬ鷹の繼尾哉
十丈の松三尺の牡丹哉
花七日八千八聲不如歸
彼岸會や無縁の塚に手向水
星飛ふや故郷の空は幾十里
魚にさへ紅葉の名あり秋の川
花の旅奥の千本探りけり

教よし知れよし梅の花郎
打水や日は未だ寺の屋根にあり
歸り花よりもしほらし二葉三葉
袴着や落附ふりも育ちから
句碑一ツ寺の誇りや初櫻
花と降り遂けて雪野の日和哉
草の庵虫を寝て聞起て聞
川風の簾叩いて月涼し
手細工も子ゆへの間か笠籠
更衣さすか三條四條哉
くちる迄老ても梅の色香哉
一日丈け牛も洗はす御坂川
握られし手のゆるみけり時鳥
出て見れば野にもあり晝秋の暮
軍服を着た身も今は紙衣哉
夏瘦や處女作に筆を染てより
世に隔て垣して冬を籠りけり
鐘と雞曉覺めて山笑ふ
長安の月に萬戸の砦哉
高砂や幾世壽く謠初め
蟬の聲漁士の光る春中哉
引試す弓弦は切れて秋の風
怠らぬ鎌に鈍なし畑打
香炷いて夜すから開かん遠時雨
古池や音も静かに落椿

稻妻や遊女の凄き格子先
時鳥夢にもかなと思ひけり
冬木立山懐に家二軒
家は皆桑の中なり蠶處
納涼や水面を渡る高笑ひ
黒いのは鶴の巢あと冬木立
花に風世に迫害のなかりなは
櫻にも軍酒は入れす坊の門
世を忍ぶお高祖頭巾や裏小路
耳に數珠かけて花買ふ彼岸哉
野分日を牛あへき渡る水の郷
琴の音は何處やら床し夕櫻
身に咲きし花はしほます司召
月花の外や御陵の松の雪
乗初や智者と勇者の顔揃へ
色あらは縁ときめよ春の雨
近う鳴く鴉つれなし秋の暮
打込みし木太刀の透や薫る風
茶の花や家はあち向こちら向き
無量壽の經文置て涅槃像
文臺に影さす梅の一間哉
夕立や行水の湯のわきし頃
剪鷹の羽打ち尖し峰嵐
文讀むは月の化身か橋の上
眼に思ひ述へて進めつ玉子酒

孝と云ふ文字は知らねと観取
一時雨して分れけり蹴合雞
山里はよい水もちて梅の花
獨體云はす芒語らす秋の行
鶴に迄よく見知らる、頭巾哉
長かれと思ふ渡りしや夏の月
糸遊にからまる牛の涎哉
花の巻開くも今日の手向哉
兵伏せて曉を待つ寒さ哉
塵塚に瓜の二た葉や秋の雨
人真似に猿も涅槃の涙哉
迂る露轉かる露や萩の風
水鳥の岸に片寄る嵐哉
刻々と迫る月日を晝寝哉
長閑さや空氣草履にコム草履
惜む欲待つ樂や年一夜
慈姑田に残る人あり月織し
月と日は産の父母なり稚兒櫻
菊活けて床しくなりし大廣間
咲すんは咲く迄待ん山櫻
ゆつたりと砂に影さす牡丹哉
春近し柳を見ても梅見ても
今日曠や花の供養も十と三ツ
月の下孤雁淋しく過にけり
稻妻や手飼の猫のをとなしき

塵の世は雪に隠れて鳴く鳥
君前に歌讀む金衣公子哉
知らぬ間に夜は更に覺門涼み
雲か花か先師の句碑に風光る
末寺の風致にもとてさし木哉
旅しても今日は忘れず練供養
初歲暖み握て生れけり
さわるなど言葉垣して接木哉
沓脱石朝露の疎ら竹の春
宇治の夜は寝られす燈時鳥
美しき世の捨ふりや梅の主
春山や懐に入る鐘の音
勝負遂に互角と決す關角力
半日の世事をのかれて櫻哉
茶を酒にかへても淋し後の月
卯の花や佳人粹士の塚垣
念入れし足のかまへや蟬の殻
五月雨や伴猪膏は三味の疵
月添へて見たし湖上を渡る雁
一本の樹もなき原や雲の峰
寝仕度もして勤めけり玉子酒
曳舟や爰は牧方戀し鳥
菜の花や逃場失ふ畫狐
煽かせる團扇も輕き産家哉
訪ふ人の聲から這入る寒さ哉
百三十五

手の内の玉と育つる蠶かな
炭に炭咄に咄繼く夜哉
師の教胸に刻んで釋奠
泣かぬ子に涙の乳母や二日灸
新らしき墓標に秋の雨しと
牛叱る聲のみ急く時雨かな
紫陽花や雨に濕りし伏魔殿
沖荒の耳立夜なり萩の聲
未だ人の渡らぬ橋や朝の霜
奥殿も菊に出入を許しけり
祭り見に京へ着て来る拾哉
富士高う成りて晴けり秋の雨
炭團屋の日切り仕事や寒の梅
六慾を忘む清貧や梅の主
再建の寺の寄石や苔の花
知らせたき君は未だ來す時鳥
新綿や月の籠と思ふ色
着心の改まりけり時雨笠
禮と儀を要に込めし扇哉
神も伊勢海も伊勢なり風薫る
能き事は人も育よ菊の花
人心動かぬ花に動きけり
芭蕉忌や灯ともす頃を一時雨
花に月歌の趣かへにけり
兎も角も柳につなく小舟かな

春の宵笛に巧みな若衆哉
醉客と嬌く聲や月朧
見勝るや床の白菊故師の像
雉子鳴や朝々霞む野の静
咲きし日は身の限かも芥子坊主
庭石を置き替て見る日永哉
日の出る方に聲あり雨の鹿
籬入の梅の在所に戻り鳥
散る櫻我瓶全の耻しき
時鳥待つ夜は更けて明の鐘
三日月のさし氷りけり水車
墨の香も立ちけり梅の歌日記
清貧は誰に耻ちす後の月
様々に吹くや姫百合誘ふ風
竹の子や四五寸に早千代の節
賣に來る酢莖や京の暖さ
川狩の是も一ツや貝貫ひ
元旦の戸も明け揃進歩哉
碑の影を七尺去て時雨けり
海苔垣に寄する小舟や春の海
句碑仰けは風薫りけり眞如堂
鶯に杓を取る手を止めけり
雁鳴くや山河自然の寂乘り
長閑さや春にまどろむ稚兒の夢
義を守る人は勇あり椿の主

用のなき歩行ふりなり角力取
貞叔の龜鑑は萩の主かな
賣聲に眠り催す金魚かな
湯上りにあつさり涼し薄化粧
香曇りのして月淡し夕櫻
引き鶴の虚空遙かに聳へけり
四海浪静に春の移りけり
飾氣もなく床しき紙衣哉
日當りを選るや干菜の繩配り
這ひ出て夕晴のそく蝸牛
あの時は斯ふかと火鉢叩き鳥
霜白し黎明告る二番雞
茶釜割る音静かなり露の雨
淋しみも親しみもあり月と鹿
鯛や其日暮しの油賣
鶯は雨後の櫻か後の雛
八重に咲く花は譽るに鍋祭
虫鳴くや裏表なき草の庵
刺りたての頭冷たし秋の風
添乳した儘て拜むや三日月
偉觀なり虹に彩る春の不二
今取た鯉賣に來る雲かな
黄昏て鳥の偷立ッ狩場哉
上る舟下る筏や春の川
佛果得て蛇も淨土の穴に入る

高卓に盆栽の柳枝垂れけり
徳は世の群に秀て司召
世に高く文武に名あり菊の主
雲に化すとは潔き櫻かな
風寒しされども春の人通り
覺無き寫經の膝や鐘氷る
摘草の妹は遅れて在にけり
籬椿石碑は馬頭觀世音
花に來て月に棹さす隅田川
月に戸をさすや枕に虫の聲
香煙の紫冷へて梅白し
飛行機を見て來た話天の川
小人も菊見る時は君子哉
右左競ふや峰の郭公
春の夜や後妻打の宵たくみ
川狩や蟹の這ひ行く岡の方
蟬も來る程面白し床柱
矢の如しとは花に立つ日數哉
若竹に露の光りや朝朗
渡る雁千樹萬葉に月の影
散る花も無常を説くや法の庭
山門の普請際立つ紅葉哉
伽羅薰す局か部屋や春の宵
築き出した波止場の煙る野分哉
行軍の兵士橋ふ新茶哉

邂逅十年立皮の櫻かな
霜枯や橋の袂の夜泣蕎麥
花は散り主は歸りて寮淋し
狐火に近道出来る水かな
傍らぬは清淨無垢や墓詣
貧乏は果報や月に明放し
一頻り嵐も添て夕時雨
馬引の馬にひかる新酒哉
蝸牛竹の裏葉に雨宿り
聞く人にこそ心あれ送り鐘
寄せて來る音は聞ねと年の波
人らしふ心も洗て釋奠
死下手の仲間入りせん納豆汁
蟬鳴や殘せし旅に憩ふ樹下
捨扶持は鶴の餌にして菊の世話
閑静を探り當たか三十三歳
傾城の涙か歌の文句かな
先共は霞みて見へす大井川
加減して寐ても寐餘る夜長哉
松風にかさしの葵戦きけり
買はれ行先は都そ市の雛
世の榮華盛せし果か秋の蝶
摘草や衣手寒き比叡嵐
行春や空くなりし歌篋
藁啣て蛤苞にひそみけり

播磨路や只松風に秋の行
舟唄の後にうこくや行々子
一寸の虫にも五分の魂祭
蝶追て猫の飛込む牡丹かな
絹絞る家の小庭や鹿の子百合
戀猫の幾夜本意なき別れ哉
虫の嗟峨春の筮寂れけり
客の氣に任せる筈や船遊ひ
敷島の國の基礎や田草取
仙骨に沁み入る梅の匂ひ哉
花の儘荷ふて戻る樵夫かな
愆はる太刀断々や御難餅
櫻散る墓所の香煙夕風けり
摘草や皆學齡の罪なき子
崩れでは又輪を作る踊りかな
散る櫻浮世の明日を悟りけり
黄昏もない程に野は枯にけり
未だ山に雪はあれども春の風
芥子散るや魚板を叩く尼法師
酒欲ふなりけり庭の夕櫻
動かねど動く様なる芒哉
鯨曳く濱の群集や風光る
刺ひ能き松風を初時雨
臙めく夜もあり冬に隣る月
算盤の玉にも入梅の重み哉

風や水害跡に残る池
蔓草の蛇籠這ひ出る五月哉
水浴る小鳥や花の酔さまし
夕蚊遣いふせき軒を焦しけり
異國へ國振句ふ新茶哉
小枝とは望の淺し梅貫
都鳥長閑に水輪つくりけり
瀧道を聞く小路や夏木立
用のある鬘とも見へぬいと哉
馬叱る顔や木樵の垣隣
水仙や立志さす子の教へ草
樂觀に悲觀に雨の日永哉
月一ツ無二の友らし大和尙
藻に虫の喰入る聲や夜の雨
八九歩は卑下の詞か當り稻
下る程人は譽めけり藤の花
間引菜や一日置いたら伸過る
溢柿の櫛から生れ變りけり
下りる鶴若菜摘すに戻りけり
網干た日は静なる彼岸哉
輝の手て金に子を産せけり
柳あり池あり池に金魚浮く
梅に月會者清談に更しけり
心斯く直くなれ門の飾り竹
百味より孝の一味や蜆汁

自動車の續くや御代の初登城
空讀の證何かせん放ち鳥
鶴鶴や石は神代の苔衣
樹を植る庭さへなくて釣葱
舞姫の烏帽子掛けたる櫻哉
寒山か吹かれて戻る落葉哉
初難や剃り惜しみる嫁の眉
月花の裏に立つ日の師走哉
新らしき壁の匂ひや春の風
なつかしき京に鴨川水温む
北窓や寒き残りを破る風
楠に大和櫻の接木哉
塔の朱も塗らて彼岸の櫻哉
干棹を吹き飛ばし行野分哉
堪忍の良き教なり雪の竹
白蓮や御菩薩か池の朝月夜
山よりも高き風あり春の風
二羽の鷹一羽は命拾ひけり
うつ櫻寺僧に問ふや花の旅
我知らず物言ひかゝる案山子哉
水のよき里は住よし梅柳
勞すれば功ある世なり司召
鶴の聲雲井はるかに霞みけり
清水迄影下しけり峰の松
寒山も拾得もあり落葉の戸
百三十七

風暖き土手八町や蛙鳴く
口紅に箸の汚る、難煮哉
蠶の蛾わりなき仲の連れけり
譽れこそ盡まし松の花幾度
羽音さへ未だ高からず難雀
手爾於波の足らぬ鳥なり春隣
魚屋の日傘大字を印しけり
稻の波遙に海を見越したり
電燈を低く提たる炬燵かな
過去十年老師と語る夜永哉
光信の美人添へたし時代祭
魔威風に蝶も櫻も飛散りぬ
日に勤め夜は寛きて月を友
珍らしう濡色見たり百日紅
月もよし水よし今日の納涼哉
春の海霞の外は吳哉越哉
神に無理願た水も落しけり
歌屑て直すや花の切れ草履
寝も聞もせぬ草臥や時鳥
耻しき人と並んで踊りけり
霞み鬼八洲の山河夢の如
驚知らず汲むや糺の薄霞
喬の兒を覗く跡や茶摘歌
師の徳に一郷化しぬ薫る梅
名月や歌讀まぬ身の耻しき

花に酒我も心もなかりけり
東雲や花の誠を見る詩人
山吹や太刀持一人戀の供
鶯の啼く有明の木の間哉
千代経へき松にも春の落葉哉
花に取る筆の香や春の風
月一ツ汲みつこほしつ沙車
鶯の來れば日のさす新居かな
長々と夕日の影の糸瓜哉
粥杖や一打祝ふ嫁の臂
雉子啼や演習すみし小松原
裏方の三十一文字や花菅浦
三々五々雁の亂る、野分かな
氣に入らぬ風もあらふに柳哉
雲ならぬ花や明け行山かつら
啼て行堤の猫や朧月
思ひ出す居士の逸話や梅探り
散る花を筏に乗せて降り鳥
時雨けり山の端走る千切れ雲
書筆持ては眠氣誘ふや鐘霞む
智仁勇整ふ色や種瓢
笠掛けて雨聞く春の一、間哉
何の家も寝て居て寒し舟上り
海老腰を伸して仰くや轅鯉
釜風呂も人なし冬の八瀬の里

五形踏踏切番に追れけり
若様へまいらす文や蝶結び
咳礫梅折る八にあたり鳥
子福者の座敷賑ふ難かな
碁に力入れて遊ばす火鉢哉
花賣の花に推し込む日傘かな
見へさうて居さうて春の水の魚
芭蕉忌の興となりけり一時雨
世に疎き庵の涼しや竹の奥
菊作り浮世を春中合せかな
家出して煩悩の夜や時鳥
離るゝは寄る樂しみか池の鴛
鳴飛て人なくゆるゝ小船哉
新しき寒さとなりぬ風呂上り
今日の月隣に勝る草の家
拾烟や菊は寝て咲く起て咲
夜は白き花に明け行四月哉
見る人を力らに更す踊かな
梅は早春を隣し答かな
鶯や生活難を知らぬ里
下影の寒し櫻の夕月夜
獨寝得て生華豪語す夏の月
世に風の垣は出来まし散櫻
世の粹を集めし花の都かな
電燈の幾億燭を今日の月

時雨るゝやあれは御江戸の夕灯
笛になれ御座になれとて今年竹
研き上げし太刀に瀧くや寒の水
鶴遠く光り消へ行く霞かな
霞む鐘御法尊し涅槃哉
石山の月を都へ昇りけり
初裕涼しき窓となりぬ
谷深う落ち行く水や百合の花
噴火山笑ふ姿もなかりけり
賑やかに飛て静な螢かな
名木の櫻も遂に散りに鳥
棹させは千々に碎けて海の月
十三年の御忌巾ふや時鳥
此窓へ梅匂ふ迄冬籠
焚盡す掃の不自由や春寒し
煤掃や提燈箱に旭に當る
人散りし後や誠そ夕櫻
踏しめて見れば水ある落葉哉
献木を曳く村の衆や風光る
艱難は人に是非あれ年の坂
観賣己か學資を作りけり
谷深し石橋高き紅葉かな
觀提て簡易保険尋ねけり
蚊遣火は宿の情けや安旅籠
夏瘦の肩けり鳥相シヨール

九重の奥にもあるや蠶桐
身を風に任すや蜘蛛の巢拵へ
天晴な散り際譽る櫻哉
蠶一重及はぬ戀を隔てけり
飴賣の家臺に日傘くゝり鳥
叮嚀にしられて暑き座敷哉
歸り花誰か來さうな日なり鳥
白露や自悟觀念の膝の上
散る花の行術は何處極樂寺
鶯や殿の御居間の物靜
新芽ふく沼田の芹や寒の雨
湯の泌る音して雪は積り鳥
先祖を思ひ出しけり盆の月
麗や目を細ふして寝る猫
魂棚や叱られた世の懐しき
人は其友を撰めよ朝櫻
垣外に庭火も焚て朝神樂
何事もぬからぬ人や梅探り
運は只天に任せて鯨突き
雁鳴くや靈魂の火の燃る海
君瘦て吾瘦て夏こかれけり
手向たる人も立派や白牡丹
様々な國の詠や花見客
天津神惡戯なるそ花に雨
逢へぬ戀柳結て戻りけり

一ト曇一ト晴れ寂て月の雲
後朝の廓を見返る柳かな
馬の顔長しと打つや落椿
長閑なる春の響や彼岸鐘
駒鳥や斷崖高う迂へる聲
宗匠の尖りし肩や初裕
秋豊に孤村に太き朝煙
抱上て乳呑したき鹿の子哉
佛像の金泥はけて梅散りぬ
撫子や唐も大和も一ツ垣
雨の萩友と語りて惜しみ鳥
團樂の一家真如の月見かな
献上の水を荷ふ暑さかな
輪飾やはつし忘れて小一月
鞭先に智識を見せつ猿廻し
誰か種を蒔しそ野邊に萌る草
すら／＼と日の落かゝる枯野哉
詩に耽る窓閑に霞む山河哉
枯柳駿馬の骨と見上げり
一輪に折枝太し冬の梅
己か愚は己に見へす秋の顔
餘興には淨瑠璃もあり天狗宴
山笠を雇ふ時や閑古鳥
大原女の花買へは露こほれ鳥
身の果を殘す蠶の譽れかな

下駄脱て反り橋渡る日永哉
山吹や翁の句偈ふ池の寂
苗代や蛙も歌の種をろし
乗合の舟に紅一点の日傘哉
短いと云ひつゝ人の來る夜哉
寢て開ぬ秋の名残を竹の雨
靈廟の畫靜なり夏櫻
流れても曇崩さす蓮の花
鶯や傾城は未だ夢境ひ
慕はしき移り香のある紙衣哉
夏瘦や樓はちと風過さる
朝研し鏡の曇る暑かな
杖笠も積み上てある花の宿
弔ふ人は名のみ残りて花薄
斯く迄も淋しき物か花に雨
月冴る夜をつき足らぬ寢酒哉
手入した松も曠せす雨の月
城跡は名のみ残りて枯尾花
斷琴の友や此の花此月夜
夏の月水に落して戻り鳥
松風や月や宇宙の涼一味
葉櫻となる公園や蟬時雨
露の音法の御聲は身にそびむ
鳶高う舞や海苔干す浦日和
鷹の巢の眞下通るや春渡し

思ひ出の多き硯を洗ひけり
白萩や清き書院の夕月夜
筆閑にならぬ便りや初櫻
新米やわか身の代運ふ牛
里寺の山門低き青田哉
春雨に聊か酔て寝たり鳥
紅葉なす山番畑や蕎麥の花
眞心にな、む扇や句碑の前
行く春を琴に運婚の恨み哉
重さうな萩のうねりや朝の露
子子や蚊になる迄の浮沈み
書初や字は千金の身の寶
初寅や摺りへらしたる墨の寸
佛手拵や念珠を握る菩提心
麓まで來て恨なり花の雨
凧に鳴く／＼走る鴉哉
長閑さや疲れた様な波頭
黄昏て時雨告るや山かつら
細に影のもつる、柳かな
一在所低う見へけり冬の月
鞆や平民的の御公達
年老て輕き綿入重ねけり
芥子散や雨の小庭の寂として
螢火で讀やまいらせ候かしく
牡丹見の御覧や初瀬の化粧坂

仇裾を重ねし果を筑摩鍋
酒は茶になるや月見の別れ際
繪日傘や乙女姿の文使ひ
友すれも秋の聲なり窓の竹
萩焚て笠置の時雨聞く夜哉
輝や人の魚鑑となる勤め
青くとも甘くは見へず唐辛
物凄き僧正か谷や閑古鳥
松に来て石路に届かず初時雨
我物にして見る朝の櫻哉
琴の音もどこやら深し松の内
大笑ひするや案山子を拵へて
口あいて闇を追ひ出す柘榴哉
蝶舞ふや大和河内は色の海
許されて出た夜は廣う踊り鳧
身の果は露と化しけり秋の蝶
敷入や今日は断機の母とて
世に響く無量の聲や御忌の鐘
夏草や物の怪ありて池青き
一曲の笛を名残や須磨の月
影さへも寒き姿や釣干菜
秀嶺の雲 幽谷の櫻かな
菜の花や國は替れと一ト續き
満汐に涼しき芦の戦き哉
子に傳ふ琵琶の秘曲や月の秋

雨乞や民の至誠に動く雲
松の内手鞠突く子となりて鳧
何なりと降るも葉りや翁の日
梅か香に置き直したる机哉
花咲や情夫も叔女も皆動く
深雪路や空眺れば飛行船
潜り出て朝日頂く芽の輪哉
這ひ初や夏の隣りの男の子
曉や重き風情を萩の露
柱にも皆花の花く茶店哉
感状を添へてあるなり飾太刀
舟玉の燈明光る餘寒哉
頭巾脱て隠した齡を笑ひけり
菜の花や壬生狂言の鐘開ゆ
山茶花や箒放さぬ掃除好
騎馬三五走る暖や風光る
露は世を隔つ葉や不二詣
月の雲思案の筆にさわり鳧
貞操の妻色黒くして田草取
心程ゆるまぬ春の寒さ哉
崩れ井を芒の包む廣野哉
雲の峰急瀧巖に激しつゝ
海の皺伸して包む霞哉
鶉追ふ犬萩殿を潜りけり
風も附物で貸けり夏座敷

月と日の間を潜る鵜舟哉
雛の客十軒店に若夫婦
師走にも持ては静な扇哉
夜を深く灯て菊の白さ哉
客去た跡に秋知る扇かな
山寺や燈一ツ見へて花の散
山は月吐真夜中や時鳥
貝殻の器も譽めて松露汁
湯豆腐に過ぎたる雪の旦哉
注連飾り貧しき家も尊さよ
雉子啼て不二の横雲動き鳧
珍らしき物に戻りぬ秋茄子
春の風輕き袂に孕みけり
散る花の中に産るゝ佛哉
菜の花の果や是から都の地
鈴虫の鳴く音も絶へし枯野哉
未だ寒き比良の夜風や時鳥
すきに切る牛の草鞋や冬日晴
暮遅し早し梅の戸柳の戸
見勝るや朝日眞受て咲く黄菊
岸頭に何を狙ふぞ鐵砲百合
普門品淨寫の窓や蓮薫る
散る花や兵共の夢の跡
咲き満て月も洩さぬ櫻哉
行年も盡さぬ光や門の松

矢の盡きて見送す鳥や枯尾花
春の句を師に見せ行や初霞
初御空雪紅ひに明けんとす
臺所を覗く狐や藥喰
はかなさや雪は残りて人の果
刈藪積む泥舟乾く土用哉
遠目には盛りと見へて萩の花
竹と名の附く頃は最う裸哉
二三日蝶も氣遣ふ接木哉
世に思ふ事なし月を友心
菊植る畑の狭きをかこち鳧
賣物にしたし此儘笠の雪
裸火を襲ふ風なし花の奥
差し汐に聲の廣かる千鳥哉
苦海とも見へず炬燵の客嗜
名物の餅も休みの露飼時
軍港の秘密を包む茂り哉
椎拾ひ／＼坂道登りけり
禍の門閉しよと壬生念佛
餅に敷蕨も豊の笹哉
奈良朝の昔偲ふや藤の花
茶の水に合ふ山吹の流れ哉
茶の會へ着替て出たる裕哉
抽の味噌に梵妻の肩動き鳧
詔らわぬ言葉遣ひや椿の主

遠山の景色に續く青田哉
瀬にうつる花や静な朝明
是程にはせて音なき柘榴哉
嫁菜萩姑路に押され鳧
盆燈籠釣りて淋しき増に鳧
行く春を惜しむ簾亭の燈哉
猿橋のかゝる溪間や寒古鳥
春雨や傘借り替る朝辰
際立て暮るや雪の海と山
掛り風つい取さうに動き鳧
河骨や網打騒ぐ土左衛門
雪の山海引き寄せて明に鳧
打水や風の産るゝ笹の音
怪童の古蹟あたりや呼子鳥
囀の是も一ツや朝雀
しめやかな法の蕨や花曇
賢も愚に戻る晝寝の姿哉
現代の女や花に新體詩
白魚や櫻豆腐も肌の艶
世は次第／＼送りや散る櫻
小女子の巴氣取や菖蒲太刀
黙禱に更る牧師や桐一葉
貫にして清し糊かふ更衣
天心の月水心の涼味哉
鬼もすれは書も捨勝や花七日

默讀の一燈更けて霜の聲
枯て迄其俤の尾花哉
飼鳩の時雨て戻る軒端哉
壬生は皆啞かと思ふ踊哉
山吹の亂るゝ儘の空家哉
落鮎や清き川にも秋の寂
夏百日夢の世にして散る一葉
在所から桃添へてあり草の餅
癡兵となりて世渡る寒さ哉
時なれや寺の座敷に櫻鯛
一夜借る宿に親しき萩と月
花明り橋の關奪ひけり
清水へ代參に行く日傘かな
在し世を月に數へて寝ぬ夜哉
枯骨に天恩の碑や歸り花
山雀や紅葉し枝に陽の疎ら
飛行機や長閑な空に見へ隠れ
船もよし陸よし月の松六里
萬歳の素袍に狭き戸口哉
練兵の號令霞む廣野哉
田の人に算へ込るゝ案山子哉
吟聲は李伯の詩なり春の月
睡蓮の目覺を目虫夕間あり
行暮て雪に木幡の宿りかな
餅店の乳母問ふ僧や秋の暮

夏寒し雪の高根の宮詣て
野口迄隙な水なり杜若
清流に雅笛を吹て川鹿取
演習や水き一夜を草枕
いたつらに蓬はたけて春を行
人の名は尊き花よ至情塚
稲妻やさほにもなき雲の色
水に輪を給かく柳の雫かな
澄み透けて萩も聲なし月の晝
月の雲かゝりて淋し鹿の聲
點の料を持たせて初松魚
忠の名も流れて清し湊川
短冊の名に雅趣あり苗代田
最う里に近き山路や引板の音
月暗も世のうたかたや散る櫻
謹談を煮る帳舎の上や雲の峰
田樂に紅の唇よこしけり
我儘に菊も寝て咲明家哉
事あらは報國の身を畑打
菜の花や鄙にも起る起業熱
相傳の秘薬や胡地に入て掘る
船に米研く女あり春の海
月の出や花に別れを惜む夕
兵書讀む書齋に咲や白牡丹
忽めに禁酒約して春惱む

仕舞まで手に汗握る角力哉
野の景色山の景色や草の餅
佐保姫の忘れ篋や松の藤
花の散る眺めも惜しき名殘哉
虫の音に秋は吸はれて暮る鐘
安置した木像古し花の寺
何一ツなけねと矢張梅に月
寒聲や觀世實生の門弟子
紅に寒さ冠りて冬牡丹
天の川淡く梢に流れけり
激測な鮎賣に來る餘寒哉
土佐日記繕く窓や春の雨
月花の露諸共の手向哉
花の世にうつる吉野の雪解哉
湖逆る帆に初春の風満てり
旅に寝て懐かしふ聞く時雨哉
明日は誰か添寝そ旅の竹婦人
萬歳の旭に風孕む渡し哉
鷹の巢や斧も這入らぬ御料林
葉は夢を結み姿や合歡の花
喪穢れに神も拜ます春寒し
喪に會す寺裏戸竹の皮散れり
疎き日も濡れはぬくし歸り花
草家迄目に入る月の景色哉
乳母問ふて行は桃咲く在所哉
百四十一

盗まれた舟の行術や芦の花
捨團扇榮轉ならぬ臺所
學ひには疎き童や蜻蛉釣
奈良へ来て昔偲ふや八重櫻
盤舟片寄り勝に流れけり
太箸や律義に並ふ膳の上
苦を積た樂や年木と飾り米
打つ人は知らず砧の聞き心
櫻咲く國に産れて男哉
菊活けて十三絃や國歌の譜
丸ふ出て見ても淋しき冬の月
虫干や牛頭旛檀の薫る厨子
足る身にはあまを嬉し今朝の春
傾城に誠ある夜や時鳥
豫報にも洩れたる風や散る櫻
餅の名も花に因むや萩の茶屋
月花に今年も逢ふて里神樂
紅梅や女文士の佗住居
億兆の心一なり四方拜
蓮の池弘誓の舟の流れ鳧
政論に卓を叩けば落椿
緒を断ちし伯牙の琴か雪の松
奇石種々有る廣庭や苔の花
なくてはもの古證文や年の暮
我心知らず虫啼く夕かな

東風吹や若き返る老の袖
白酒になまめく聲や局部屋
明月や光の淡き古戰場
照り返す夕日美し花野原
碑に残す居士の篋や苔の花
誠忠は幾世朽なし詩の櫻
數人の虚榮知らぬ頼母敷
鹿笛に母は南無阿彌陀佛哉
野は霧の立込し儘明にけり
美濃の土近江へ運ぶ乙鳥哉
花衣飾る十三參りかな
威を競ふ諸鳥もなし時出鷹
一條の水に數鳴く千鳥哉
湖濁り芦ある岸を稻妻す
有なしの水に日のさす枯野哉
時鳥月半分は海の上
京へ嫁く鳥の娘や初霞
良藥の苦みを説くや遊團扇
遠水雞聞や孤園に燭淡き
山にあり野にあり春の人心
斯の道を説きしと惜み瓜の花
山吹や武者の耻入る歌の妙
取りはつす螢にゆれる小舟哉
極樂に鬼のみちあり蚊帳の穴
芦の芽や池畔を鶴のきさみ足

黛の流れ醜し百日紅
七夕や飛鳥井殿の鞠の式
あら無慘一陣の風花吹雪
唐染みし黄葉山や風薫る
板橋の半を隠す芒かな
冠らせて笑顔を覗く頭巾哉
衰へす榮へす久し鶯の家
袷着て並んで見るや姉妹
櫻は葉梅は酢に出て時鳥
朝寒や調子の高き箴の音
干城となる骨格や畑打
坂形りに葉家並ひて柿紅葉
重ねるも宿世の縁や鍋祭
雁啼や靈境に澄む不滅の灯
白き物縫ふて夏待つ女かな
御神樂や崩さぬ膝に草臥る
水仙や枯る計りの冬ならす
銀初や忠實業に服すへく
惜可夜の月を灯にして窓の雨
野狐禪のかへそ秋やうら悲し
餘花白く春の餘情の思はる
蓮咲や青田の袖に少しつゝ
緋けは袖の時雨る遺稿哉
春寒し荒神松の深緑
駈る駒駈る駒牧の霞哉

翌日麥刈るとの沙汰を暗雲雀
風悠々天地も動く陰り哉
廣き野に糸一筋や風
幻に過る日數や夢見草
蝶低く我行く先に我れ先に
吳の笠の雪と積るや楚地の花
寺涼し琵琶湖の水を吹上て
名月や庭一はいに松の影
鴻の巢や白檀香る坊の松
萬目の賞る千本櫻かな
梅に香は讓れと花は櫻哉
墨客の詩箋を散らすや梅の風
蚊遣火に暮れ行く儘の家黒き
文臺は二見形なり花の宴
漣もなき海原や初日の出
都路へ駒曳く人や初霞
寄る年も忘れて春の待れ鳧
釣りに取る鏡生臭し小結賣
雪も降りて豊年の瑞兆なら
弘濟の船と蓮の花辨彼岸押す
造艦の音も賑はし國の春
泣く子にも勝れず親も螢狩
蘭田蓮田左右に寺の納涼哉
明け際の嵐に開く蓮哉
燒栗や焼けぬ内から後すさり

繪行器や京馴顔の薄化粧
新調の茶器試みる新茶哉
三猿の所作ものにして遊團扇
中直りらしい咄や玉子酒
花寒し手向連歌の香煙り
白いのは何と申すか百日紅
賣らるゝを知て鳴のか籠の虫
花咲や好きな着物のよこれ跡
教訓の儘に咲けり藤の花
雲と湧く興や日毎の花の嶺
世の塵は掛れと清し蓮の花
永き日や探かす名所の七不思議
思ふ人計り眼につく踊哉
初と云ふ名に愛らるゝ茄子哉
菊の主酒も上手に造りけり
虫啼や納骨堂に月冴る
四斗樽底を叩いて春惜しむ
撒水の功德涼しふ濡にけり
念佛に虫の飛出す木魚哉
善に増す財や彼岸の放し龜
山笑ひ野霞み水温みけり
初産の三十女や歸り花
入月を惜みて鳴や蜂の鹿
人同しからず夜櫻朝櫻
彼の美人偕ては狐か朧月

鳥の住む山なつかしき彌生哉
來る雁の羽風に今日の寒さ哉
舞初や鶴の姿に似た立居
菜の花や石垣高し目に餘る
小櫻の鏡着せたり菖蒲太刀
國越に物言ふ筆や冬籠
露たとふ花野の月や虫の聲
梅か香や十徳連の數奇屋入
若公家の鞠の稽古や暮遅し
引残る鶴や山陽の一角に
神は伊勢佛は奈良や春の人
役所の黒塀添を櫻かな
旅人にふさがる花の都哉
さす鳥は逃て落たる椿哉
萬歳の鼓日和や梅の里
友情は無量よ花の誘ひ文
紅梅や折戸をくゝる緋の袴
鶴曳し跡や名残を止とむ松
鉢草の花の露間を石冷ゆる
稻垣を取れば冬田の姿哉
木に咲かて譽れの高き梅花石
夏座敷雪の遠不二見上けり
鬼灯や一生嫁入せぬなど
夏瘦と答へて醫藥退けぬ
片膝は琵琶に綿けて花紙衣

愛誦する詩集手にあり若葉蔭
朝顔や嘶し相手の隣から
飼馴て聲麗しき川鹿哉
鐘の聲霞の中を潜り鳧
今日の色作日の色や翻れ萩
驛近に驟死噂あり霜の朝
池堀た土て山築く日永かな
太閤も蚤には得手をさゝれ鳧
君か身に添ふを輕羅の願哉
足る事の一ツにみり今日月
治豐酒や數鶯は日終ら
破鏡女の月に城や池の鴛鴦
釣臺に献上粽句ひけり
夕榮へて櫻は雲となりに鳧
春の旅豫算を越る日數哉
若水や君か化粧の初姿
雨に啼く鹿や悲哀の情籠る
行秋や門へ出て見る獨り者
湖北の灯湖南の月や涼一味
簾入や親に耻し岩田帯
會長は死して善舎に枯尾花
日の脚も三千丈か藤の花
離愁轉た埠頭に立は春寒し
美の神の眉書く山の霞哉
雁啼くや隙間をもるゝ月明り

月一ツ身一ツ秋の夕かな
急ぐ程彌々遠し雪の道
行く年や念佛申す遊茶哉
雁風呂に呼れし僧の讀經哉
文展や美に悲観する書師の汗
啼き弱る虫や夜明の星月夜
三芳野の春を墓ふか登り鮎
紗の粉に水臭き繼母哉
踏めは雲行は花なり閑古鳥
天と地の春見る窓や月と梅
露消ゆる日を淋しふに虫の鳴く
芳野路や花の香もある苔清水
時なれや梅も櫻も夏木立
梅か香も高し北野の宮柱
春風や裏耻かしき旅衣
猫の懸梅にも月のある夜哉
我庵は垣なし蝶も鳥も來よ
墓參そゝけは草蜘蛛水走る
桐の實の鳴る日を秋の別れ哉
新寺も深う見へけり青柳
八束穂や露の恵みの淺からず
蝶の舞ふ様に野を行く扇哉
初夢にたよるや年の謀
月渦に巻けども盡きぬ鳴戸哉
刺鯖や山に圍ひし奥丹波

29 拾參

哲學に頼みある身や露の庵
似た人もあるや頭巾の後影
後朝の思案に重し雪の傘
咄し人の歸れば元の日永哉
花の雲動けば心動きけり
菊百種目は白菊に戻り鳥
漣に織込む不二や夕納涼
既に玉巻て世に出る芭蕉哉
西へのみ響く思ひや彼岸鐘
鳴寒し比良の八講舟出す
琴の姫笛の朝臣や月今宵
去年の餅雜煮に皺を伸し鳥
好さも又自慢の内や唐辛
淺草の名を賣る海苔の薫り哉
稻積や酒池肉林の宴果て
俣もかなと更しぬ雨の月
瓢箪へ約束の紐くさりけり
桐一葉婆娑と學窓叩きけり
春未だ寒し家蔭に残る雪
冬の蛇化けて來るかと思けり
行春を惜みて鳴や樹々の鳥
雨と見た曇は晴れて花柳
粥杖で打つて晴れけり戀の仇
月曇て戻る道連れ祭り客
静さや野は白露の朝朝

29 拾四

踏み迷ふ道に月澄む枯野哉
人事の花の花なり放し鳥
深雪にも知るや人生の行路難
蕪れて來た吹矢せらるや雀の子
秋深し野をはいに虫の啼く
爪櫛に心露けき別れ哉
霜害の茶園に及ぶ彼岸哉
切れ風の南無阿彌陀佛水田哉
浪涼し玉と砕けて雪を吹く
蘭の花や朝風の潮を遙か見る
芳はしき走り香のあり冬至梅
打水や生憎く多き人通り
小春日や鳥の影差す南窓
縁談は破れて春の寒さ哉
爛漫の花に王妃の愁かな
俣の暮はし雲に入りし鳥
やるせなき新愁に燈籠作れり
辨なき鳥啼く夜の寒さ哉
包まれぬ鐘のひびきや青柳
蛇は寸に人呑む氣あり菖蒲太刀
風に手を添へた跡あり田植笠
忠孝の二字芳しき試筆哉
一燈に眞心籠めて魂祭
登り龍下る星見る花火哉
登り詰めたか身の果か釣瓶餅

29 拾五

茸山や處々に立つ煙
初難に残る神代の音色哉
稻妻や折れて曲りて舟の先
千丈の瀧や萬樹の風涼し
羅馬字の正札もある櫻哉
流れ雲よけて淋しき冬の月
麗や子は搖籃の夢に笑む
折くは止みて事なし五月雨
佛書く窓に卵の花下し哉
初笠一つは竹の雫かな
もつれ戯る蝶に矢先の狂ひ鳥
馴染程心に輕し澁紙衣
農村を富して行くや通り雨
商戦の前哨隊よ初荷出し
虫悲し雨の夕へは別けて尙
兒七人憂秋知らね夕哉
送り火の後や淋しき風の吹く
國の富家の富産む蠶哉
雲や花と詠みし翁や苔の花
散り残る花に卯月の曇かな
五位啼や梅雨の夜空の月明り
月既に凄し枯野に笑む美人
草餅を土産にするや都人
黄昏る枯野を急ぐ僧一人
行届く鳥の夜飼や冬籠

29 拾六

行く秋や無念無想に我もなし
珍らしき發明もかな冬籠
長持も簞笥も輕し雛の棚
雁啼や故郷の親のなつかしき
椎降るや宗祇留たる夜の情
立ち寄りて不沙汰詫ひ鳥初裕
蓮の香の立て曉動きけり
青丹古る寺静かに花の雪
汗しみし襦袢干しある棋枰垣
世盛りに飾り曠なり初雛
船よりも陸なほ涼し松六里
雨に名を得るや志賀の一つ松
桃咲くや慈善に富し一孤村
仁丹の袋落ちある清水哉
鶯や思はず泥む筆の花
草市の小暗らみそはき淋うす
白菊の癖なく過る十日哉
書残る石碑に袖を濡しけり
蹄鐵も錆て瘦けり夏の駒
月涼し餘所の詠に膝鼓
暮る日を沙に別る櫻哉
智惠粥や太き箸より直な箸
萩咲や菴は朝野の紳士客
顔に散りし紅葉の果か孕み鹿
虹の橋百丈石に渡りけり

29 拾七

花ならば昔よ雛に並ぶ客
留主勝な男世帯や鳴水雞
名月や秋の一夜も明易き
大名の行列くゝる蝶々かな
古寺の松は榮へて枯柳
青物の騰貴に負けて野葱和
其色を其儘に散る紅葉哉
筒井筒朽ちにけらしな苔の花
涼さや月は柳に灯は水に
池中に近道のある冬野哉
活上げて疊に寒し梅の塵
拜領の駒も飾りて花見哉
田舎にも來る商人や年の暮
村雲もなく名夜の夜空高し
葎の泥に引付く暑さかな
暮はれし菊を今年の手向哉
學を修め業を習ひて冬籠
退いて護國の鬼や櫻の實
公達の弓の稽古や桐の花
花咲て一山鐘の供養哉
神の留主社の鼠荒れに鳥
眼につくや春は梅にも柳にも
思案して渡りぬ霜の丸木橋
筑摩鍋悔むは後の祭かな
貧々も愚々も越すや年の坂

29 拾八

徳思ふ心の花の供養哉
春の日や愈々花も雲となる
好い月に見とるゝ人の影法師
尙齒會老の友垣結びけり
八重櫻九重深き御園哉
佛壇の外に灯はなし露の家
天を擣つ怒濤巴に飛ぶ千鳥
工場の煤一はいの牡丹かな
司召御歌所に召れけり
基の相手如何と扇遣ひけり
今散ると見へぬ櫻の色香哉
御手洗のあるに事欠く氷哉
蝙蝠や舟から來たる風呂貴ひ
錦着た夢結ふらん花の宿
憂に住み思ひ出あらた魂祭
吹て來る風筋見ゆる尾花哉
夜舟を帆にもしつゝ今朝の霜
品のよき尼に逢ひけり朝櫻
雉子啼た後に手ぬるし鳩の聲
幽蛭香た聲らし雲右衛門
帷巾や肌さわりよき越後産
香炷て一月見る庵かな
茶摘女や轉はす様な聲の範
大盡の寝る宿はなし啼く河鹿
番兵の夜嵐凌く頭巾哉

29 拾九

追れても行先廣し稻雀
借傘に添へて送るや初櫻
菜の花や二文渡ししの右左
水引の結び目固たし對扇
語らわて貧一貫や楯の主
月吐て雲は自然に消にけり
道中のさしかけ傘や散る櫻
舟呼へは柳の下に欠伸かな
食に疎れて病む我悲し秋の暮
皆酒に成るらし雪の渡し鏡
受る手に情こほるゝ施米哉
春雨や机に結ふ花の夢
坊の宿抹香臭き布團哉
事多き世をよそにして玉子酒
讀返す句碑や涙の露時雨
種類より育方にあり菊の花
陽炎や賽の川原の石地藏
心太杉の割箸匂ひけり
散る櫻丸きは月も一夜哉
初冬や是から誇る松の色
軒一ッ馬宿らせる時雨哉
月一ッ照すや限りなき海を
繰返す旅の日記や日の永き
釋奠や世に人道のある限り
鶴嘴に岩伐る空や鷹の聲

29 貳拾

はつきりと影の寫るや今日の月
旅幾日花の名所に追はれ鳥
金襴の打敷に散る連かな
菜の花や投し小石の蝶と化す
碑の前の花に舞寄る胡蝶哉
春の宵にふき神灯の社頭哉
信濃路や二里も三里も蕎麥の花
是もよし是もと迷ふ店の雛
人心蝶より輕し花の頃
縮賣り都の暑さ語りけり
隣からふらりと覗く糸瓜哉
夕立や親子笑顔の作話
靈柩を鼠の荒らげふつと灯を
默然と膝抱へけり雨の月
初旅や親は行李へ風薬
水を吸ふ夕雲低し啼蛙
氣任せの畑仕事や鳴雲雀
茶室出て頻に扇遣ひけり
て、虫と仇名呼れて蝸牛
打寄する浪も色取る新樹哉
今日計り松も聲澄む涅槃哉
美しき尼の由來や萩の寺
初雪や一刷毛残る屋根の上
碑と共に幾代古ひね櫻哉
碑の柳枯色寒う倒れ鳥

卯の花に暗いそく戸口哉
怪石に不動の像や涌く清水
門納涼時を問ふ迄更しけり
藪村の晝も夜も焚く蚊遣哉
旅笠や昨日は時雨今日は雪
梅清し院の舞樂の月に澄む
瀧涼し名家の筆になりし軸
奴門飯餉提けて潜りけり
青梅を盗む子供や晝寝時
朝顔や夕立程もまいた水
水祝猫は炬燵へ隠れけり
絹足袋や新生涯の第一歩
雉子啼や雲に耕す一軒家
月の暈吹ぬかしたる野分哉
厭世の身は更へ易し墨衣
入る月に輝き涼し海の上
名の夜にも勝るや花に昇る月
夏近し石搗の水も日々新
青柳や船は朝から動く川
皆花になるや夜明の山の雲
踊から夏瘦陸にしられ鳥
梅か香や詩情に筆の伴はず
桃の戸や飼ひ太りした牛自慢
慕しき此細道や枯尾花
鐘の音も澄み切る秋の彼岸哉

抜穴に蔽の溜る岩かな
名月や何處へ行ても友の居る
秋に勝つ氣は動かねと虫の聲
勞れ鶴に眼の落込むや朝の月
久々に刀自の手前や炉の名残
板橋に小魚のはうや五月雨
散り初て世の寂誘ふ柳哉
陣中に筆は執る夜や歸る雁
五月雨や圃に遠き緑草履
近道をして遅れけり梅の花
氣の永き人は待れぬ櫻哉
朴訥は仁に達して年の花
姫か寮の豆盆栽や白菫
雲や花の句碑や拜讀感無量
動ぬと見れば櫻よ峰の雲
靈を慰む頃は彌生の半哉
出代や惜しみ涙の袖屏風
歌留多會や寶石光る金指輪
張替る燈籠や布施の包紙
秋の蟬枯木抱いて鳴んとす
元日や横には踏ぬ人の道
勤勞は致富の基や歟初
摘草や乙女心に怨知る日
雲や花鳴呼俳聖は昔と化し
雲上に杖曳く韻や夏の旅

用もなし寝る隙もなし花の留主
月の出て雲の浮浪静めけり
薬を刈て浮世を渡る小舟哉
貫ふたる鯉は放して袖味増哉
今も眼に残る戦きや花芒
手の平に欠伸もみ消す日永哉
地虫にも盆の仕着や薄羽織
一組と成て儘かな踊哉
敷島の道は野にあり初霞
をめく旅籠に暮る春の雨
髪洗ふ盥に浸る柳かな
陽炎や耕す鉄に日の匂ふ
雷の陣弓張月に崩れけり
啼き負る雀は逃て行々子
傘の雪梅を噛へて疊みけり
物思ふ間に氷りけり筆の先
一道に牛の歩みや露の道
跡戻りする道もなし萩の花
薬より薬とて踏む青き哉
碑に添ふて名高き彼岸櫻哉
驛鈴や蹄に寒き春の月
濡れ笹に朝月にへる鯉哉
七夕や嫁に進める供へ琴
氏素性よき黄鳥の附子哉
賣さへも憎し紅葉に鬼の面

名月や都の友の偲はる
行秋や夏炉冬扇の我淋し
月雪に馴染の果か竹婦人
舍利に似た雫や雨の木蓮花
稻の波田に限りて落し水
壬生寺や桶取濟て人の減る
大平の御代に蛙の戦かな
痛ましき妻や雪の姫小松
曉の雲は放れて枯尾花
短髻の大正式や春の風
出代や數多逸話のある男
威勢よく嘶く駒や初登城
踏青や隻脚翁の松葉杖
花の香に酔ふや公侯伯子男
山茶花の一樹にもあり過去未來
雲縫ふてほころ細工花火哉
食自慢食はぬ自慢や鰻汁
柿紅葉秋を軒端に配りけり
繪日傘や五常の道も一歩より
蓬萊や實に浦安の國つ振り
時鳥枕頭の燭影淡し
清貧に餘生の軒を梅薫る
小雨して蛙のはろ鳴く夜哉
訪問飛行除處に晝寝の厨哉
蝶花と育てし果を筑摩鍋

羅や流石講しき京女
譲られた羽織着て焚く芋殼哉
紅梅や世を泣き捨し若き尼
秋に入る門よ茅の輪潜鳥
讀經に風薫るなり陀羅尼助
鳥追や編笠洩る三ッ輪の香
薰吹く此處紫野大徳寺
香曇りのして春深き月夜哉
輝や身も冬枯の物の數
散る花に知るや昨日の花盛り
白髪にもならて古ひる雛哉
琴の律鶯の音に亂れけり
水滸や蟻か塔積む賃仕事
花筒は千家好みや水仙花
短冊につらく残す梅の茶屋
馬よける間に遙かなり歸る雁
雁啼や芦間に落る二日月
兄は兄丈の知恵のり掛り風
花咲や寺は供養の晝の鐘
丹頂も飼ふ豊かさや牡丹の戸
最う一度揃ふて見たし月の友
月花に大事の身なり二日炙
盃を置けは間のある花火哉
獨居や物はかたらぬ秋の暮
教乞はんと月に草扉を叩き鳥

花に來て知るや浮世の裏表
詩に歌に名残とめて梅若葉
藤咲や松に千年を契りつゝ
芒野の後に彼岸の入り日哉
天險の孤城寂ひけり残る雪
今日の日の御法尊し花の寺
立開の罪は重たし雪の傘
世の苦き味知る露の臺の味増
花供養雲湧く峰を仰きけり
菊薫る朝や嬉しき起き心
衆生皆法の味知る甘茶哉
笛も脚絆脱きけり雨上り
引残る鶴に物言ふ聖かな
蟻一つ這ふや萩見の提茶箱
浦島の行衛訪はや春の海
松賣れて水音遠し冬の月
日の駒を繋ぐ木はなし年の暮
照鷲や雀の浴ひる蒲
さらりと秋立つ竹の林哉
布袋など初午の人危けに
春の雨くして木の芽萌ゆ
日の本を被せる花の匂ひ哉
貸した針箱に受取る炬燵哉
手すさひの折鶴白し春の雨
羽力の弱りし蠅や秋の風

櫓の禮讀經誦して去られけり
別荘は皆花物の接木哉
欄や延せは蓮に手の届く
茶の友や雨の若葉に利久下駄
泰然と王者の威あり白牡丹
不二詣他山の雲に雨を見る
嫁入の門火は消へて冬の月
煩悩の櫻菩薩の柳かな
世の寂に松は連れねと秋の聲
近過て賤し礎の耳障り
風流は鄙にこそあれ田植唄
孝行と思ふ氣もなし初手水
雲の峰風の通路塞きけり
色紙田や引く遠山の春霞
冬瓜のいつ迄青き寒さ哉
旭も研きた上た光りや玉の春
七景は名も埋れて比良の雪
蝶々や井戸に散り込む八重櫻
白蓮や清淨無垢の朝心
籠の鳥珠數潜らせて放しけり
山の手を斜に走る時雨哉
花時の花と十三參り哉
他所へ遣る子を見送や秋の暮
精神徹に入る壁畫あり秋の寺
朝顔の種干す秋の扇哉

吉野見た果か案山子の破れ笠
燕に肩を越れし男かな
紅蓮の香に煩惱の迷ひ哉
月涼し此所は南洋新領土
子に乳房哺れて覺る晝寝哉
帆に風の見へて涼しき夏座敷
此心何日も持ちたし初日の出
山茶花や天下治めて茶の指南
雁低ふ鳴く夕暮を納豆汁
菊の香や我も此世の幸運兒
燒雲の人馬に低き夏野哉
八景もある公園や風薫る
兩國の曠や花火の川開き
佛に入る人凡ならず秋の雨
朝露も若葉の露となり
世を太く短く送れ飯汁
大船の帆は霞みても櫓音哉
聞て來た一里は遠し枯野原
紅梅の咲て出しある貸硯
遠山の雪はつきりと晴る朝
下り鶴の羽風に戦く青田哉
遊説の勞れを夜長揮毫の紙多き
涼しさや沙に流るゝ鴉鷗
雨晴れや又新らしき蟬の聲
茸狩や里も便利の汽車電車

語ひくゝの聲や彌生の真如堂
弓弦もゆるむ豊田の案山子哉
玉川に月澄む夜半の砧哉
秋は來ぬ昨日は只の薄煙
墨染の吹雪に白し寒念佛
をさまらぬ汗や心の急ぐ程
小鼓の音にも入梅のしめり哉
よけて待つ蹄の音や夕霞
脱替て雨聞く春の小袖哉
懸想文理想の笑顔溢れけり
樓に手の鳴る月の出汐かな
煤掃や南無阿彌陀佛鼠の子
曲水や思ひくゝの歌の胸
草餅や手拭取て客になる
才藏や御物見窓を洩る笑ひ
茶話に花を咲かせて時鳥
行春を誰も語らん吉野山
兄は繩綯ふや妹は砧打
吾戀は婆々になりつる十夜哉
涅槃會や木魚も鉦に灯のゆる
師を慕ひ寄る立皮の櫻哉
草の戸や芒の上の夕月夜
秋の月落て蓬窓荒さみけり
紗や茶を呑む迄の口もつれ
雨一過簾外の松風薫る

宇治橋を行く僧淋し秋の暮
花は根に戻りて春の餘波哉
忠誠の十字は散らす八重櫻
分け入れは花の香もある霞哉
一輪の梅にも春はこほれけり
虫干や錦の家憲の一包
人魂の出ると噂す秋の雨
住捨し庵の跡や桃の花
寒巖の枯木に霜の鴉哉
手に戻る鷹や小鳥の血汐落つ
心學や世は泰平の風光る
初日の出紅一点の光り哉
蝶此所に陽報得たり散る一葉
白魚にあしらふ京の水菜哉
されはとて鶯啼かす小六月
掃初や塵と見るへき物そかし
花に月實に自然美の極致哉
春の陽一はいに野梅ふとみぬ
梅に月乾坤一致したる哉
皇城を見返す朝や初霞
旅勢れ語る卯月の蟬居哉
彼岸會や善男善女京に入る
曇り日も負け色見せず辨慶草
井の椽を飛て危き竈虫かな
歸り花佛の留守はなかりけり

酒と茶に暇もあらず菊の主
雛の顔我子に得たき思ひ哉
千金の鷹や御獵の試し狩
鬼か島へ渡る土産や吉備團子
誠より腔に程よし玉子酒
千早振る昔なつかし神樂歌
思ひ出の多し花散る夕曇
梨壺の礫てもなし郭公
世に鍛ふ艶や新絹今年米
花の宴師に許されし禁酒哉
繪團扇や初かねかぐす遣ひ振
鶯に届くや待ちし我心
如意式の朝顔咲きぬ遠ひ棚
子を寝せて針持つ手元春近き
雪の簑嫁の出て來て脱しけり
揚雲雀宇宙の春を恣
抜た跡さへ美しき蟬の殻
塚の上に手向の舞や秋の蝶
東風吹や頼て名のつく庭の草
蚊帳にさす月や草家も阿房宮
伏兵に雁の騒くや芒原
世の許す貧は尊し梅の老
照癖も曇る夕を煮酒かな
運咲や無一物なる朝心
紅葉より名の流れけり龍田川

蘭の香や酒々落々の老詩人
落椿地蔵の膝に止まりけり
雁啼て夕暮淋し芦の雨
折る手にも香こほすや梅の花
新領に肩巾廣き初日富士
即答を仕兼て撫る火鉢かな
奥は尙深し裾野の朝霞
深雪路や旅客一人に暮迫る
斷崖の高樓圍む新樹かな
罪のなき婆々や助炭に張る紙幣
桃山や神々しさを郭公
女には踏せぬ雪や残る雪
霞む程隔て、袖の嘶かな
雪達摩兄は眼を入れに來る
掃初やこほれ松葉も歌の種
朝鳩の聲から曇る卯月かな
羊呼ぶ牧場の笛の麗かに
梅蕾一日くゝにふくれけり
何處見ても不足なき世や花の春
鶯や禱擲きよき長廊下
贊櫃の注連吹ゆる、芒かな
朝顔に寝足らぬ丈けを晝寢哉
安心に酒買ふ二百十日かな
松傳へ竹傳へ來て今朝の秋
冬枯をせぬ樹に孕む朝日哉

鶯に一間借し切る音色哉
こつそりと見て來て花の噂哉
慰みに活けたてはなし枯尾花
風少しある様に飛ふ螢かな
成金の戸に時めかす幟かな
玄妙の無量間はや初蛙
能き夢もかなと恵方を枕哉
馬を追ふ力やなくて猿廻し
合衣擔孝女か門の月衣哉
鶯に掃て渡すや朝の庭
朝寒や遠目にゆらく神燈
最う家もあるらし梅に干蕪
見をなはん暇府の君も今日の月
積善の家に盛ゆる幟かな
涅槃會や吾に悔悟の心あり
鶯日和阿闍梨も下山せられ覺
漸寒や法の蓮に並ふ膳
降り暮て雪充滿の明りかな
蛇は寸に人呑む氣あり印地打
渡場の岸に一株芒かな
夕鳥鎮守の森に雲れけり
五風十雨青田に見ゆる世柄哉
虫干や美卷に故師の物語
金談に白く更け行く火鉢かな
別れてふ霜を菜やさらは垣

錦着て歸省する日や梅薫る
夢の戸を叩く人あり蓮の花
葉に風を見せて豊な牡丹かな
闇の夜の人叫び行く吹雪かな
塵塚や若菜は誰か落し種
往來する野路の遠さよ朝霞
花咲て狭き都となりけり
董咲く野邊や自然の幼稚園
塵芥の世に離隔なり花に酒
抱た子の覗きたかるや奇卸
洋服に竹の子笠の案山子哉
三吉野や霞の奥に匂ふ雲
輿入りの夜やしつほりと春の雨
敷島の道を探らん人丸忌
月の雁眞一文字に渡りけり
讀さしの田舎源氏や春の宵
春悲し櫻と共に君逝て
ぬす立ちの羽風に草の戦き哉
水音やどこを限りの去年今年
秋淋し碑畔に迷ふ蝶一つ
蟬螂やしやと構へたる面魂
馬盤の金魚やさしく泳ぎけり
思ひ出した様に咲けり歸り花
捧げはや紅葉は嵯峨の許し色
遠砧谷を隔て、聞へけり

書も賛も書く手を持て白扇
最う一度盛を見たし散櫻
年の瀬の濁りは澄て初手水
よき事の目にふれ安し恵方欄
添ひ送けた戀かも月に匂ふ花
子心や蚊に喰れても親の傍
言の葉の花も手向を翁の日
風呂吹や忌日營む俳諧寺
稻妻や太平洋を一迂り
夜櫻や踊へ折れる祇園町
月の夜は聲も冴へけり鉢叩き
整いし天地和合や梅に月
別れ惜む花に氣強し暮の鐘
崖十丈藤の世界となりて覺
鶯子啼や挽茶の匂ふ松の寮
手向にも白きは床し菊の花
馬鹿に似た正直者や鳴子曳
守り札汗の襦袢と離しけり
水仙や戸締りもなき片田舎
逢はぬ戀に濡らすや秋の文枕
亡國の城傾きて羽蝶かな
月今宵思ひ出多き夜なり覺
荷の上に梅置く舟や春の川
遠蛙寫經眠たき夜なりけり
斷食の業者醒めけり時鳥

吹けは別吹かねは消る粉炭哉
山吹や静かな里の小柴垣
流石春遊て居れば日の永き
菊の主人魚喰たかど問はれ覺
名に戀し花の吉野へ入りて猶
御先祖の徳に榮へて家櫻
蟬鳴くや木も動くかと思ふ程
雨の月招待状も反古かな
不器用な聲は目出度し福は内
夜櫻や満都の雅人狂酔す
近ふ來て見ても霞むや塔の先
梅の主地勢は人を産むとかや
鳴て立つ鳥も哀れや西行忌
鐘の音も添ふて時雨る、五山哉
大畑に一人耕し陽炎ひひ
花散るや線香煙る師の石碑
三月の花は萬世不滅かな
醫者乗せた計りや雪の渡し舟
簑壁や雪の用意に馴し里
開捨にならぬ竈虫の鳴く音哉
金銀の慾に迷はす系瓜の戸
過し世の時雨思ふや椎の影
白菊や恩賜の卓の高詩繪
切戸打つ音も烈しき野分哉
開分る溪間の寂や河鹿會
百四十九

30 拾七

春の野や茶種は黄に麥青し
菊畑へ行は逢はるゝ主かな
水際なたつ羅の女かな
佛日や露に濡らせし花缺
畫も夢の浮橋かける蛙哉
失戀の我は物憂し秋の雨
拜まるゝ迄樹は老て閑古鳥
鶴折て吹せて見たり春の風
新聞を繰へ持ち行く小春哉
明近き鐘や柳に細る月
鶯の朝から鳴くや藪長者
御二人や曇さ知らすの夏の旅
最うないと叩く日永の煙草入
時雨や松の唐崎橋の瀬田
宿取て佛見に行く小春かな
稻菴朝日拜して廣げけり
早乙女か戀のはめきや小室節
水仙や雪見の外の儲け物
養老臺の中の冠たり籠枕
鐘のせて風の行衛や秋の暮
十三州見下す山や夏寒し
渡守霞の中に答へけり
四つの緒は吉野落らし散櫻
花の雨鯛を皆食て仕舞けり
新涼の空氣入れたる枕哉

30 拾八

月白ふさやかに更けて橋の霜
稼く人遊ふ人あり揚げ雲雀
仇し野は枯れて狸の鼓かな
一房に心足りけり藤の花
君寵を獨占したる牡丹哉
紫陽花に疑惑の多き家出哉
夏籠や澤庵漬に事の足る
治鹽酒の利目ためずや電話口
花咲や電車満員流車満員
女房に任すや雛の遣ひ物
晝の蚊帳恙きかと問れけり
日の入り子を子にも拜ます彼岸哉
霞けり霞みにけりな須磨明石
此里は桑の茂りて蠶飼
寒肥や年中麥を食んとす
萬世一系變らぬ御代や君か春
牛とろく眠る軒端や桃の花
逢へぬ夜の歸路に聞く千鳥哉
朝顔の三番咲や露涼し
男手を頼む用なし魂祭
草枯て尊き塚の目立ちけり
麥秋や夫婦別ある稼き振り
俳席の馳走は輕し今年蕎麥
雲井にも隔てはあらず今日の月
鬼灯や狸して居る枕元

30 拾九

麥秋や日南臭うになる娘
蝙蝠や橋場今戸の夕煙
霞む野に勵みの歎の光りけり
養父入や故郷も草の錦時
清貧の奢は易し納豆汁
蟹の露に光るや月の駒
行司迄裸で出たり辻角力
水垢の濁りに易すぎ金魚哉
鶯やさりと膝も崩されす
蛙鳴く宵千金の價ひかな
眠る山雪の白綿包みけり
時鳥紀文の宴の夜明哉
家貧にして孝子あり田螺賣
佛手拵の香りも床し翁の日
夢の世と知る手枕や涅槃像
枯蓮の池覗きけり破門僧
馬曳て霜の板橋渡りけり
質家出て酒場に寒さしのき見
皆花と成て匂ふや菊の露
良薬も利かぬ頭痛や花の雨
破獄した飛報や毒蛇穴を出て
雨讀晴耕樂し餘生や蛙の戸
舌切らて翁は鳥を放ちけり
玉磨く窓の明るし冬の梅
草臥るゝ日は未だ高し春の旅

百五十

30 貳拾

無量壽瑞穂の國の初日影
賣れ残る辻占寒し木賃宿
燈明の蔭を往來や嫁か君
山茶花の散るや風士の笠の上
甘茶焚く僧現なのどろ火哉
珍客に二度の譽れや櫻炭
七夕や笹にもつるゝ飾り糸
宰相の都逃げ出る暑さ哉
我家とは知らぬ長者の碓哉
井に屠蘇汲む男同士哉
志士の名と共に匂ふや庭櫻
隠れても見へても涼し竹の月
玉の緒もゆらく眺めや花に風
米拍をして冬寒を忘れけり
年の波越すや詔書の渡し舟
鴨啼くや焚火取巻く復さし
公卿果の昔堅氣や後の雛
釣竿へ又しても来る蜻蛉かな
妻は布夫は藁の礎かな
椎の實や札所巡りの忘れ笠
解かけた口舌に酔ふや玉子酒
杖の手は被布に包みて梅見哉
見る人の眼に眞如あり水の月
山吹や野鍛冶か跡の飄れ炭
吉野踏む草鞋作らん冬籠

31 壹

夜櫻や喧嘩へ急ぐ町奴
梅一木有て踏るゝ畑かな
釣葱名妓の果の小窓先
花と産む雨の暖みや歸る雁
持藪の一番竹や門幟
活て待つ萩も逢夜のはたし哉
田植女や茶摘み馴染の話好き
膝に來て其顔もせず猫の戀
引しほる勞れも見へす弓案山子
峰の松鶴の巢立を日晴たり
脱げは又元の景色や雪の跡
淺茅生の露に濡れけり落し文
萬歳や月花ならぬうかれ人
口切や月雪花の友揃ひ
紫陽花の色々にたつ日脚哉
假初の戀にイむ柳かな
蛇覆盆子雉子の羽打に盈れ鳥
許されて宵寝も春の暇かな
瀬に移る灯も又涼し月涼し
松の香も腫に深し須磨の春
松の香の磯に瀧れて春の月
出ぬ人は世にも花にも遅れ鳥
終夜見飽かす月と裸山
佛體を得たる様なる安居哉
淋しさの未だ新らしき一葉哉

31 貳

梅の月詠の勞れ忘れけり
釣人の足許に鳴く河鹿かな
花の宴解語の花も召されけり
虫干や筆の花見る師の筐
泊る氣に成て酔けり春の雨
思はずも膝叩きけり不如歸
後の世に花の種詩く彼岸哉
千早振松に神代の露涼し
曼陀羅に幾世佛の供養哉
野の梅や我は自然の美を愛す
春風や川越に見る牛の顔
三拾二成りて妻なき寒さ哉
若草や野路に染りし妹か足袋
雁風呂や訪ひ來る客も旅仕度
心迄冷たき花の吹雪かな
學校へ逃げて行きけり二日灸
重ねても身に耻はなし鍋祭
春風や天下獨歩の俳禪師
訪ふ人の枯ても絶へず菊の門
暑うても呑む丈け酒は香に鳥
瑞雲の中に燦たり初日の出
枯果て日影の遠き野原かな
菅公の化身か梅に遊ぶ鳥
夜雨降る木の丸殿や不如歸
奥都城に花の吹雪や極樂寺

31 參

影は水聲は空なり揚雲雀
水清く砂白し晒尙白し
奇僧住む無縁の寺や柿の花
日の筋に下りて眩ゆし雪の鶴
花の碑につもる立皮吹雪かな
庭織る身も行く雁を名残り鳥
碑の傍に桃栗去て梅實る
珍らしき内は鳥待つ鳴子かな
商ひの暇をしはしの晝寝かな
塗炬燵華燭の圍を暖めけり
葛水や勤め濟して脱く袴
禪房に白梅薫る二月かな
萩の戸や操に纏ふ墨衣
蛸市や目利顔して冠る壺
三月や晝も眠りを誘ふ雨
淺くとも清き流れや昇り鮎
春の留主旅は伊勢かど問はれ鳥
翁丸雪の佛をけかしけり
咲替りして世を慕ふ年の花
十三越の遙々歸る春乙鳥
新らしき簀に香の立つ時雨哉
授戒會のひら春風に戦きけり
戀人の方へ芽のはる茶摘かな
時鳥今宵も咄計りかな
西に向く聲も手向そ時鳥

31 肆

留主守と一夜假寝や竹婦人
蓮の香や池を隔てゝ法の聲
陽炎と成てなつかし手向水
よき手當されて花見の留主居哉
釜にも生れ替れよ火取出
山葵にも葉の出る雨や時鳥
連翹や草に落ちたる鳥の影
蟹の子の集ふや月の流入塚
時鳥來す句も成らす夜三更
温室を出る眼かすみて梨の花
通夜して慈悲喜ふや見眞忌
玉米の古歌を傳へて耕し初
築山に羽子つく音の訝かな
花に世を取られし國の光り哉
隣より三日後れて初茄子
菊の戸や風雅に書し釜日札
屠蘇に吐く抱負や髭を捻りつゝ
我庭や手向の菊と祝ひ菊
種下す日を撰みけり祝ひけり
年玉や子等の嬉ふ新貨幣
夕立の癖も放れて初嵐
實となりて再び桃の譽れ哉
恭に飽て腹這ふ様や月涼し
有耶無耶に十三年の花見かな
蘭の香や山の靈氣の身に迫る
百五十一

冷やかに團扇の手垢目立ち
鳥の名も一碑に古りて花芒
今日も又餘所の雨なり蟬の聲
棹閑に鶯を聞く筏かな
温む水交はる魚に淀みけり
稽古した様に揃ふや田植唄
稻の穂の黄はみて國の力かな
夕立の空より廣き夏野哉
蛇喰たと思へぬ雉子の眠り哉
握り飯の中に梅あり夏の旅
散り残る花に雨ふる卯月哉
戀嘆き人は交らす雨の花
怪談に春中の寒き炬燵哉
筆を取る今秋色や花の影
初櫻遠くの人に見られけり
熊祭る軒や氷柱の玉簾
虫いろ／＼花いろ／＼や秋の草
花に増す香り手向る新茶哉
棠の花や晝説教長き寺
春雨や茶煙もる、利久窓
朝櫻見て戻りけり神詣
身請して冬籠る氣に成にけり
錦木の昔連立つ十夜かな
見る人の心や如何に思ひ草
遊ぶ身の置處なき暑かな

紫陽花や雨後の雫に旭の光る
傾城の筆も磨なし星の歌
啼鶯す鶴や長閑な空と磯
鶉鴒や幾代盡せぬ五十鈴川
時鳥聞とは寂た女かな
武門去て佛門に入る頭巾哉
日向葵の露吸ふ片輪蝶々かな
夕月や松に射せる歌机
賣石に粧ひ水や夏隣
餅白き古佛檀や御取越
蝶に成る迄嫌るゝ毛虫かな
得も言へぬ景や彌生の四方の山
貴族より許さぬ門や三十三歳
寝た町に一つ淋しや軒燈籠
蓬萊に向ふや老の扇杖
化粧水捨た飛沫や紅牡丹
心して汲はや花の下流れ
鐘抜く轆轤の音や朝霞
初雞の聲賑はしき大家かな
明易き夜も沙のさす垣根かな
悪想文意中の人に讀れけり
尾を引て寒に入るなり流れ星
爐開や今は紀念の霰釜
勤儉の匂ひ嬉しき菜飯かな
泣子より泣かるゝ母の暑さ哉

鳴鳴くや星で時くる渡し守
仰山に裏を見せたる芭蕉哉
今の世の人は少いさし涅槃像
勿體のつくや牡丹の伐惜み
客にさへ踏さぬ庭や苔の花
世にみれん残した花に櫻の實
海棠の雫受けたる硯かな
晝寝して夢の浮橋渡りけり
炎天や紫蘇の呼び出す梅の色
散る花に及はぬ心遣ひかな
震ふたら猫も出そうな紙帳哉
朝寒の道や聲澄む般若經
詩人窓に嘯く梅の月夜かな
歌の友茶の連もあり尙齒會
喜雨一過踊の動機つくりけり
六月や肥る青田に渡る水
若楓將軍老いて閑居かな
白牡丹大臣の詩會夜を徹す
笑ふ兒は抱き人の多し門涼み
儘ならぬ世の様知るや花の雨
三度笠幾度濡らす時雨哉
方便の飾り物なり花御堂
朝からの日和崩れや雁渡し
官辭して花を友なる庵かな
黄昏や雪刻み込む豆腐賣り

憂き我を思ひからせて雨の虫
歌使ひ賜はる梅の伏家かな
水上は霞の中や百千鳥
乙鳥の子も育つ戸や初轆
達摩言はず武帝悟らす秋の暮
臍の緒を落して祝ふ卯月かな
松風も添て時雨るゝ夕かな
梨咲や野鍛冶か家の崩れ垣
蓮手向け亡き師を語る師弟哉
冬越した葉の中に咲く椿かな
青霞や夏にも欲しき味のある
夜櫻や雨の丸山物靜
實業に付かせて嬉し鮎の友
振り袖に笑みを包みて懸想文
屠蘇酌むや冥加に餘る恩賜盃
亡き親の池に集ふや蛙の子
水入れて跡で花咲く角力かな
受てらるゝ名なり花也福壽草
善き師より良き弟子ありて生身魂
笑顔して見る老将や菖蒲太刀
無花果のひしやり落て秋の行
蓮咲や僧と相酌む般若湯
鮎好や囉ふて機な菩提心
夏の旅雲の上迄登りけり
五月雨に霸王樹の杖倒れけり

寒月や哀れに長き鹿の足
髪置の風流や流石京育ち
春の夢見足らぬ内に覺にけり
峰の松雨こぼす迺霞みけり
尊客に蘭湯匂ふ豪農哉
欄干に舞衣かけぬ春の宵
團基の客戻れば菊の主かな
絹團扇金柑の皮鳴らし鳥
夏寒し岩菌採の繩梯子
船造る音や霞の向河岸
稻の香に豊葦原の旭かな
折節は氷る夜もある二月哉
都とは鳥の名もよし春の川
どちらにも世柄見へ鳥衣配
萩の中羽織長しと思ひ鳥
露の儘手向て清し蓮の花
吾宿は馬も知りけり木槿垣
一としまり付くや夜寒の水の音
葉櫻に心静けし修業僧
勝角力鹿島の神もゆるすへし
鶯や思はぬ筆の止め處
草の戸や露有餘る物の數
時雨るや山の上這ふ根なし雲
記念樹の無事も知り鳥歸り花
ゆるむ氣に附込む春の寒さ哉

大福の名によし翁友白髮
扇未た要の堅し夏隣
橋下へ盈れて涼し眞の火
夜櫻や刀預けて頼冠り
角閉て陀羅尼聞くらし蝸牛
雲雀野や畑百姓の家三五
茶摘子の人に戀知る小唄かな
寝た人を寝よと起すや涼み臺
徒ならぬ三保の景色や松の花
國體の美草や不易の紀元節
出來秋や雞も榮よの食撰み
青霞や隣迄利く酢の匂ひ
更科や田毎の月を歌枕
酒に明け酒に暮るゝや己か春
蓮の香や清淨無垢の寺の池
水仙の行儀そなへて咲けり
門松は動きなき世の例かな
日は眠る様に春く彌生かな
公園や長者に譲る花の椅子
散る蓮の皆浮ひけり水の上
蓮の露享けよと絞る涙かな
鷹啼や嵐に向ふ羽繕ひ
暫くは旭も涼し波の上
穗に出て桂男招く芒かな
横綱になる子も出たり桃の宿

散る櫻よるへの水に匂ひけり
如意を打つ仕業に出たり寒念佛
草餅に國は雪のる便り哉
引鶴や名有る松に一ト休み
新らしき風を荷ふて團扇賣
捨て育にも愛らしき小菊哉
禪僧が茶を挽く窓や時鳥
元日の宵寝二日の朝寝哉
風を切る羽叩き猛し癖の鷹
空籠に施主の名もあり放し鳥
忘れても干支忘れぬや初曆
夜櫻や歌舞の菩薩も出開帳
一目の負に座布團はたきけり
曲水や世は太平の遊び振り
魂棚の臺や主の置机
經勞れ寢釋迦を真似る小僧哉
鳴一羽秋の夕暮作りけり
花の暮あくや棧敷の三軒家
涼しさと寒さとけぬき拾哉
雇はれて鳥帽子も着たり秋祭
出舟待つ宿や枕の並ふ春
花鳥の世を深めたる彌生哉
二三寸水に降り込む霰哉
大奥に輝く春の灯かな
雛の客響應過て泣しけり

心置く物は嵐か花の宿
世の無事を人の出に知る踊哉
動く物我と雲なる枯野哉
鶯は老いけり伽藍傾む鳥
勝角力酒にも強き男かな
利根下る舟唄遠し春の風
舟つなく迄に伸ひ鳥濱の松
屋根は草障子は反古や梅の宿
ひら／＼と蝶や黄金の波の上
模範村包む新樹の匂ひ哉
更衣子等は一見せ歩き
合作の歌も不二なり西行忌
さゝれ石の巖となりぬ千代の春
借る鎌に竹植るかど問はれ鳥
帆柱にはさまれてある春の月
紅梅や謠の聲のるゝ家
秋悲し小僧に遣す鐘の聲
漁歌樵歌流るゝ川や水温む
神燈の光尊し若葉山
蓮の香や酒水に發る菩提心
剃髪の鹽に澄むや秋の水
夏の山老將軍の微行かな
冷やかに勇むや牧の二才駒
行々子啼くや黒戸の妻社
松の月涉し待つ間にはつれ鳥

31 拾參
蘆も芽を組むや小魚の遊び處
駕お染船は久松霞けり
成金の夢見る龍の油花のト
紅の襷揃へて茶摘かな
小春日や翁も出て、藁砧
繪日傘や菓子に汚れた口の端
來た蝶に静さ移す牡丹かな
養父入の殊勝に申す念佛哉
船唄に鳴り物もかな春の海
未だ淺き深山の春を霞かな
金屏て取まく雛の窠かな
獨體棚椰子の月下に光り鳧
蟬鳴くや怠り勝の水車
達摩忌やこほれ日寒き利久窓
水亭や藤三尺の君の袖
初蟬の來て動かすや人心
家一つ見へて淋しき枯野哉
燈籠や都の秋の夜は錦
春の野や蝶に踏割る小盃
物足らぬ思ひに更けて夏の月
締てある庵とは知らず梅の客
時雨るゝや三枝隔てし松の鳩
名にも似ぬ色あり香あり翁草
戀草の種まく春の雨夜哉
啼く虫を賣りてれ哀な身過哉

31 拾四
旭のさして菊の着せ綿ふくれ鳧
出初式富士も筑波も晴にけり
孫末寺甘茶に暮て花朧
長かれと願ふ命や藥喰
初雷や鐘の寄進に僧來る
破れ家に死殘されて霜夜哉
流車は出た後也蟬の諸音聞く
身にまごふ綴れを曠の田打哉
筆で喰ふ器量は持たず傀儡師
照り續く瀬も見へす天の川
陸まじき家内に狭し納涼臺
山笑ひ海は霞の風日和
野遊や心の駒も放し飼
柴折れば鳥の立ちけり雪の軒
由緒ある橋の袂の柳かな
銅像につかへてあるや入梅の雲
萬事如意極樂園の花の主
白梅や尻輕いと流行醫者
蟬の殻即阿字觀の姿かな
忠魂の石碑に並ぶ櫻哉
落かゝる日を抱て啼く鶉哉
投入れの花も覺へて敷入女
紅葉して三十六峰夕榮す
人の踏む岩角丸き清水哉
宵寝する若世に釣るや紙の蚊帳

31 拾五
常に見る庭も珍らし青藤
色附きし蛙の卵や水温む
鶯に梅なき庭をすまじき
油断して鷹に取られな放鳥
碑の雪を掃くや孝子の袖箒
散れば咲花に暇のなき世哉
幽邃の奥に茶を煮る若葉哉
列見やかさしの花の旭に匂ふ
温み來る水にたけたり根白草
梅と松吉事の床に飾り鳧
炬燵から急ぐ髮結の返事哉
田五作の力自慢や秋祭
掃焚て脚絆しゆての立惜み
虫の音や善光寺詣の御堂の縁
狩衣に雨の山吹匂ひけり
踊から立た浮名や縁遠し
短夜の鐘や逢ふ潮の花に風
なぞ中に焚火の見へて寒哉
濡れ色は何處の時雨そ夕鶉
陽炎や青瓦朱樓の雨の跡
初秋や暫時抱へし松の色
庭の松理想に叶ふ月夜哉
ピヤホール近よる夏を飾り鳧
鍋祭耻かしなから重ね鳧
金屏に師走隔て、樂寝哉

31 拾六
乳人召す雲井の使者や桃の家
瀧風に瓢箪提けて吹かれ鳧
山廓の梅水郷の柳かな
雪駄ちやら、河内編に敷入す
除夜の鐘聞く耳もなし椿の主
大きな眼の愛らしき蜻蛉哉
山燒や窓から見てる隣同士
涼しさや裸て勝る瀧の糸
業の網も濡さす十夜哉
刎釣瓶刎た儘なる枯野かな
白梅や草の庵も俗ならず
未幾世汲むとも盡きす岩清水
乗初や下手と言れて五十年
遠足す野邊の眺や舞ふ雲雀
手放せば咲きけり筒の杜若
南山の春暖かし初櫻
鶯や加茂の社の森として
祭壇の燭も涙や春寒く
歸り咲き潮の花も見る日哉
水音に張り合て啼く河鹿哉
瘦馬の重荷にされる芒かな
鶴の居る松は殘して時雨けり
急須迄買改めて新茶かな
文礫花の明りに探りけり
鶯の糞や美人の化粧料

31 拾七
磯喚きこもくの中や桐の花
折鶴の腹から出たか秋の蠅
鶯鶯の梅を月の照しけり
新米や早餅にして御佛前
蝸牛や生れかはれは何佛
雨を聞く芭蕉や庵の歌柱
夜櫻や松へも届く灯の明り
枕神去て寝られすきりくす
九重の奥にも育つ蠶かな
解け易き夫婦喧嘩や春の雪
雪の松鬮を氣高く放れけり
香に心移れば白し闇の梅
月映して珍ら梁瀬の秋の水
吹く風の返しに近し時鳥
暮惜む鳥や櫻の枝傳ひ
遠洲の庭の餘情や苔の花
皆陸の溜り屑なり夷裂
とちから吹たそ花に向ふ風
樂燒の瓶面白し玉椿
花爛熳暫時はうつ心かな
面白ふ泣て戻るや初芝居
よき嫁に成ると出代り惜み鳧
竹伐や法の衣の玉襷
酒好の客に餅出す師走哉
落胤の産湯沸すや桃の宿

31 拾八
佐保姫や霞む詩の山歌の川
思ひ切る眞刀の音や白牡丹
薄れ日の小窓に蟬螂太り立つ
句も歌もならず此春兄逝きて
十六宵や座敷する間を庭の間
是を此浮世の様を花に風
敷入や戸を閉ちられぬ人の口
氣輕うに出るや花見の素綿入
手傳ふて寺の戸明る遠見かな
散るや花破鏡をかこつ小窓先
料理場の組板逃る小芋かな
杖を曳きたら、坂や梅の花
菜の花の中を電車の走りけり
春風の行果見たり土埃り
珍らしき發明もかな冬籠
山吹に狭し産屋の通ひ道
虫の音を録込む珠敷や極樂寺
直切らぬも慈悲や放して遣り
松風に取りられさうなり夏羽織
露堂々世は冷やかに成にけり
櫛入れぬ寝亂れ髪や鏡草
浪に乗る聲の軽みや磯千鳥
雪も解き思も解けて笑ふ山
曇らねは花も盛てなかり鳧
石葛の水照らし行や螢哉

31 拾九
鳴く蛙京にも田舎ありに鳧
花咲や世に汚さる、寺もあり
初時雨遺愛の机拭ひけり
世の塵を押へて出たり今日の月
句碑の文字探るや花の月明り
草に病む虫も有らん秋の暮
飛梅や誠には木も有情なり
紫や海老茶や雛の袴客
古さる、身に知る秋の哀れ哉
物思ひする姿なり雨の百合
いさ笑へ梅も十三回の花
萬卒を埋めし墓標や花芒
鬼灯や色には戀の出やすき
旅勞れ都の春に忘れけり
敷入や七夕程の忍ひ逢ひ
着心に朝夕のあり單物
折からの雲井草紙や春の雨
餘り日の永さに唇廣げけり
流れ木の尻聲寒き蛙かな
雪の風呂樂念佛を唱へけり
往た先をさるゝ海苔の土産哉
五形摘乳母に抱れて戻りけり
草の戸や明ても虫の残る聲
梅咲て碑を擡る足場組れけり
大蛇伏る夢も菖蒲の枕かな

31 貳拾
魂棚や昔好みし供ひ物
戸明れば芒すれ、の二日月
小夜雨の晴れた朝聞く雲雀哉
出離れてさわる物なし海の月
咲く度に主を偲ふや桃の花
師の遺墨繻く刹那や時鳥
花の酔月に醒して戻りけり
投石の走る音あり厚氷
麒麟野に鳳凰天に君か春
玉巻て露もこほさぬ芭蕉哉
一ト嘆し船から願む神樂かな
走る流車見て休みけり畑打
葉に春を握て伸る蕨かな
福引や家一はいの笑ひ聲
灯ともして花に客待つ菫哉
俳諧の遺鉢を受けて袖味喰哉
蟬時雨七堂伽藍寂として
松島や松は變らぬ色を秋
水燈會宇治の川霧破りけり
大寺の構へ床しや桐の花
山の井の水も世に出る櫻哉
乳貰ひや吹雪の中を夜の鶴
立易きものは月日や魂祭
村々へ月入渡る踊かな
戀破る磯の廓や鳴水雞

探り寄る松虫塚や女郎花
大原や年の一夜を戀探り
柴賣た錢や親への今年酒
形代を流して易き思かな
呪はるゝ人は知らしな冬の月
月影も朧も今宵初めかな
冠の疑念起らす梨の花
鹿は角落して春の心かな
机から見頃の池や燕子花
戀語るつなき舟あり夏の月
過去七世慰む徳か水燈會
過し日の猶餘りあり十日菊
花や雲雲や花経て十三こせ
懐かしき句碑の濕りや花の雨
落花踏む禿の下駄や鈴か鳴る
睦ましき中や雛の女客
先つ無事の煙立けり雪の里
身に開く長壽の花や縣召
敷島の花と知られて櫻かな
鶯も水浴びて来よ御身拭
九官に言葉教へる日永かな
春雨や石も和らく苔の花
何時晴るゝ五月の空か又今年
駒鳥啼や氷室園ふ翌槍
親しみの道改まる御慶かな

曳て行く祭の馬や花の原
蟬鳴くや咄の眠き四疊半
江の上も春を廣げる霞かな
麗や松の六里を覗く股
蝶鳥や七野を八重に狂ひけり
研き澄す莫耶の劍や秋の水
主の喪や飼鶯の震ひ聲
海上は海上てよし春景色
乳岩の乳も途絶へけり秋無草
太平の御代や雛煮に腹鼓
探り得し梅や幸ひ佛の日
青空や黄はむ足り穂の里續き
月見るや自問自答の獨り酒
月を笠に麥詩道を戻る哉
月譽めて歌に悠々自適哉
存外な押しかけ客や雛祭
奥深し花の都の花曇り
陽炎や海士か軒端の簑と笠
思ふ儘風を産出す團扇かな
隣迄鎮まり切りぬ詠初
朝負た昔語るや二日灸
天恩に皆暖かき斯民哉
葛飾の詠り床しや初菜賣
有れば有る物よ師走も二日酔
雲と詠む陸美しき櫻かな

一頻り雨一頻り落葉哉
夜は寺の鐘から明けて蓮の花
物乞の春に子の寝る小春哉
時雨るや時雨に煙る地藏院
あちらてもきりん峠の時鳥
荒れ走る鼠や猫は戀の留主
炎天や眼に力なき空の色
朝霧や顔に冷たき笠の紐
面白し月も時雨も松の上
樹竿に凹む石あり縞芒
白露の果か夢野の忘れ水
梅提けた肩叩かせる炬燵哉
豪傑も眉ひそめけり散牡丹
霞れてとろく眠し馬の上
曼珠沙華共同墓地を飾りけり
花見酒枕と迄に酔しけり
物の香を離れて清し海の月
桃咲や午砲静にひききけり
咲や花散るや日數の過ぎ易き
蓮葉に投し巻葉や紫煙り
忍ふ夜に糸瓜に頭打れけり
佛には遠くて近し菊の主
勉れば皆良き日なり初曆
額けは草も露けし墓詣
湯加減を見た手に匂ふ菖蒲哉

庭石に欲しき巖あり夏の川
船の跡引く日は湖も霞みけり
夏の川牛追込て洗ひけり
誰か氣にも合ふ様に咲く櫻哉
明け残る月や櫻の一ト寒み
星祭供へし瓜も二つかな
暗音より飛て名高き蛙哉
罪捨てに来るや彼岸の閻魔堂
團茶正に苦戦に惱む暑かな
俳田を潤はすらん初時雨
大君の御代は豊かや諸初
詩にも富み歌にも富て菊の主
秋雨や辻古賣の聲さひれ
艶麗の美に咲く華や京の春
戸さし置く金佛壇や麥の秋
月涼し我を忘るゝ橋の上
若竹や起き心よき朝の雨
成金の善美盡すや夏座敷
光明のさす露もあり蓮の池
靈鳥の空舞ふ日なり魂祭
色褪し花に衰寵を歎きけり
乗物に落花の泥や京の雨
秋に此の忘れ草なり若良
つれづれに茶を焙し鶯梨花の雨
京雜の乗り合もあり淀の舟

氣をかへて螢と遊へ火取虫
羅や身柄も軽き洗ひ髪
明けぬ戸に鳴く犬叱る野分哉
咲満た桃に静な小家かな
彌陀佛の御手に絶りて繪踏哉
月の雁夜の景色を纏めけり
怠りは人にこそあれ冬の梅
節のなき友計りなり竹の月
軍書に飽く眼蟻螂に移しけり
髭計り剃て置たる寒さ哉
家の秘事さやく下婢や朧月
黄鳥の初音や梅も北叟笑み
清貧の我にも許せ福壽草
鴨啼くや水田に残る夕明り
金瓶を掛けて淋し秋の暮
花と共に歌手向け行く僧都哉
春の月眠る羅漢に灯を配る
大事なる髭に飛ひ馳走り炭
雲の峰千山萬嶽の姿かな
驚は雪に助けられたる鷹野哉
木の芽吹く風に和らく日和哉
矢文讀む櫓の月や時鳥
百日の筆置く日なり桐一葉
六ヶ數名のなくてよき野菊哉
乳取て牧場出つれば蓮の咲く

問ふて行く家の知れよき幟哉
梨花に雨精舎の夕静なり
脱けて行く夢涼しさや籠枕
折る人を叱るや餘所の梅乍ら
妖僧の太刀を枕に午睡哉
妹山の白粉程や春の雪
柿賣て宅地租納む山家哉
のひやかな日影を浴て冬の梅
春風や木の香の高き作事小家
愚痴に入る思ひ出多し魂祭
出して有る枕も入らす月の宿
亡き人の數とは悲し花の友
世は花の色とはなりぬ國の春
小流に洗ふ漬け菜や霜日和
枯てすら名の慕しき尾花哉
酒はすれして徳のつく炬燵哉
泉水へ水をはる日や雲の峰
氣短に掃けは廣かる木の葉哉
火に酔て覗く小窓や比良の雪
俳居士は蛙の如く冬籠る
竹植し夜や七賢の夢に入る
月の友待や野はすれ町はすれ
袖香爐いつしか消へて梅に月
風涼し裏は田甫の端の町
感念の眼や閉ん暖め鳥

身の疵は錆かけも出來ず鍋祭
國風の見へて涼々しき幟かな
花の辻はれ藥賣る男あり
鳴かぬ間の處作や蛙の浮沈み
佛縁も深し忌日も彼岸中
田樂の木の芽匂ふや峠茶屋
見逃した後の待たるゝ花火哉
守銭奴となるより萬の主哉
芒野や露千石の曉の鐘
虫に灯を消して客待庵哉
酒盛の中へ新酒の披露かな
海見るも馳走の内や夏座敷
須磨琴の聲や松虫さりくす
珍らしき客を取まぐ團扇哉
時鳥恭盤の城を崩しけり
うたゝ寝に花の夢見る彌生哉
菜の花や眞白き蝶の夢淡き
花は葉に過ぎし吉野や時鳥
折りく泡吐く水の温み哉
立開の耳をすれ行く葎かな
子實に貧も苦にせぬ蚊遣哉
釜の鳴る音の芽出度し福わかし
色くの花も夢なり枯野原
時雨ねは見附ぬ月の細み哉
有耶無耶の夢は破れて蓮の咲く

吹返す風や涼しき露次口
遺徳世に薫る句碑あり若葉寺
繪日傘や軒屋通ひの高島田
恵方棚遠摩すらりと並ひけり
朝顔に登山の白衣清めけり
糲糲や秋の夜なから賑はしき
彼の森や此の川や此の雪景色
世を隔つ寺の往來も師走かな
虫鳴や嵯峨野の春も過去の夢
門覗く喪家の犬や垂れ柳
菊咲や栗戸覗く筈賣
見る戀をさりけなくして花の宴
雲雀鳴く下は成金普請かな
氣の毒な程に利きたる山葵哉
松風の時雨を夜の月夜かな
木枯の吹き草臥て暮の月
朝飯に旨し茄子の一夜漬
蚊帳に夜を殘して立や旅行脚
幻に寝た間も見へて花の雲
池の鯉水温せて躍りけり
雲深き草蘆を訪へは閑古鳥
片鶉啼やつれなき戀の跡
芝能や煙に閉ふ太郎冠者
鉢の木も焚く真心や雪の宿
雪の宿焚火に馴染重ねけり
百五十七

和らかき手さわり嬉し草の餅
高荷積て放る、舟や蚊鳴鳥
香に立て仕舞にせぬか焙り海苔
鞠ゆきて茶を呼ぶ日永哉
鴉さへ月夜は鳴くに杜宇
鐘うらむ曉もなし竹婦人
繪を踏て心の花の匂ひけり
草渡る風に蟪蛄の怒りかな
一棹に替る景色や月の舟
僧の來て嘶のかわる月見哉
松に富む庵や世に出ん月の秋
月の濱與謝の浦人踊りけり
硯取り渦巻く浪を潜りけり
田螺賣聞けは繼子てなかり覺
梅咲や窓下暖き木地爐椽
句に耽り時鳥とて明る窓
名月や詩に殘されて晴る雲
菊石女を笑ふて水を祝ひけり
一面に顔のはれけり蜂の毒
百迄も踊り忘れな雀の子
接木してをろかに急く月日哉
散る程の未た色てなき一葉哉
行秋や尾花隠れの家一つ
世を悟り切てか僧の長午睡
白菊や千代の色香の置處

下駄軽くする間に重し傘の雪
魚市の臭みも取て今朝の秋
野社へ繪馬掛けに行く春日哉
蓮を見る内は佛の心かな
不老富貴や聖護院なる落種
鳴くや蛙我無風流を笑ふかに
月花に透ひ疎くなる師走かな
梟や見聞き言さる庚申塚
盆点の茶を佗しかる萩見哉
夕鴉松嶺秋を深めけり
神に我罪謝す夜半や時鳥
奉額の裏から出たり三十三歳
皿に水の水の音や鼓屏風
花の鐘孤獨の我を泣かせけり
山間に入海見へて鐘水る
虫干に忍ぶ恩師の遺墨哉
晴た日を見ず散るのか栗の花
しほくく秋雨淋し推か宿
孤兒院や世の同情に暖かき
黒牡丹菴主六朝の書に熟す
出れば露戻れば月の庵かな
如月や孔子を祭る草の宿
木枯や軒にからひる木の葉蝶
米壽あり喜壽あり菊の友圓居
物思ふ風情に似たり雨の萩

春風や日本丸の船卸し
花に酔ふ人を見に行く東山
陽炎や垣に干したる濡れ茶巾
踊子や晝はましめな顔をして
利香の催し文や春の雨
瘦せる鶴肥へる家鴨や五月雨
籤入に例として切る西瓜哉
冬籠ても雨よりは日和かな
人の手に見るや小春の杜若
下戸連の菫は寒し夕櫻
春の日を人の墓碑彫る男哉
まどまらぬ咄に更る火鉢哉
引鶴の影や臚に殘る富士
牡丹咲く庵や標札茶の師匠
窓近き葉柳や雨の脚青き
叩く氣の門明てあり蓮の庵
村長の庭に牡丹の盛りかな
解や君水とかけた文の謎
水音となりし何を呼子鳥
秋菊の童の笛や夏野原
咲迄は雨も待れて初櫻
月花と見立てられ鳧鴈角力
蟬鳴くや三伏知らぬ山の寮
師走とは思はぬ鶴の歩み哉
青簾翠替眉宇に迫りけり

初雁や未だ鍵になる連もなし
繪馬堂に雨を避け鳧狩の衆
接心の耳に開けり霜の聲
相共に松も夜に鳴千鳥哉
田園の詩趣たへつ納涼哉
風毎に伸る様なり門柳
三密の靈地や蛭の笠に降る
乗り出した航路左舷や霞む島
糸遊や纏ふてたる、小袖垣
宿を乞ふ巡禮の子や秋の夕
聖恩記繕く刹那や風薫る
尼寺や芙蓉咲て人艶めかし
月待や心に高き東山
待ち兼た月夜廻りや梅の花
頼母しき色や青田の朝明
年寄を物知にして事初
子を連た乞食の來るや秋の夕
和書洋書館麗かな詠めかな
薫風や閣に居て聞く採蓮歌
衣配り朝日も乗せて來り鳧
姦しき物は人なり初櫻
變る世や花は昔の花なから
半開の菊も十日の古ひかな
籠に似た家に歸るや螢賣
初雷にしては慥なひき哉

牡丹皆咲くや見頃の十日前
普化僧に手の内取らす彼岸哉
水底に魚の腹見る小春かな
大工等の酔て戻るや春の月
笑ふ兒の教育談や蚊帳の月
冷やかや別寮去る日名殘琴
朝顔や花むしる子は未た起す
花鳥に心移らぬ今年かな
鶴遣ひの家も彼岸の供養哉
孫すかす勢乳や麥の秋
葛水や宿直勞れの枕元
短夜や親を思ひの建襖
師の忌年弔ふ花の庵かな
獨り寝る樂天地あり蚊帳の月
枯蓮の音にも似たる紙衣哉
時雨夜や何を淋しき鳴く鴉
足る事は千に一つや種瓢
湖に影なとうつせ時鳥
神木に繪馬新らしき若葉かな
清淨な地は雲深し時鳥
川形りに道も曲りて枯野かな
蟬鳴や手先の鈍き碁石摺
愚に活て玉も抱かす生海鼠哉
寒垢離や裸木削る風の音
短冊の砂子も寂て菊枯る

糊紙めし雀の宿や竹の秋
魚の腹咬はへて鴉時雨けり
養父入の hands 本五兵衛の子
悔悟して世を白ら萩の住居哉
史に名ある古廟の池や龜の啼く
寒月や氣合の凄き弘道館
行春を静に暮ら、礼所哉
見返れば跡形もなし晝花火
三十て目的ならず畑打
花の庭眺めつ服茶の批評哉
雲雀野やピーアもパンも茶店
虫干や思出深き行脚衣
花のなき坊に泊りし寒さかな
初蟬や流石に聲のをどなし
小春日や山の裾引く夕煙
黙讀の灯に來たり火取虫
香に酔て花の美徳を頌し鳧
夕顔や燭采り出る女藏人
轉寝を叱る親なき寒さかな
引上くる四つ手を潜る燕哉
子守りする婆は豊や留女鳥
椎の實や名もまほろしの菴の跡
鹿笛や口には罪の多き物
陰に未だ殘る寒味や梅日和
今日のみは帆影も見へず春の海

落し角袖か拾ふて歸りけり
出代やつい十年も夢に過ぎ
早人の訪ひし跡あり雪の菴
風の中の涼しさてなし華頂山
敷入の櫓齋にらす小舟哉
影凄き桂男や冬木立
見て行や早苗の縁里の蔵
燈籠に釣處替る葱ふ哉
埋れ樹も譽の花や司召
譽られて嬉しき雛の容色哉
冬の月傾く景色なかり鳧
山茶花の垣や冬なき家構へ
雨近し蚊につき當る庵の夕
大雪に隣り遠く思ひけり
三布に寝る貞婦の夢や小夜時雨
今朝散るや一葉に秋を數へ初
俣の見ゆるか如し花供養
行く船の歩むと見ゆる若葉哉
曇りなき日を頂て司召
若竹や月にも育つ戦さふり
蟬鳴や枝に糸引く松のやに
梅に月捨てし世歌にして拾ふ
稍暫し牡丹に睡うつしけり
花なる雨や一群歸る雁
猫の懸日挽く音も更にけり

神劍に妖魔拂へど月の雲
待たるは反哺の徳か初鴉
枯れし野や風狼の吼る如
大雪に埋りそふな歩哨哉
御降は國を潤す始かな
鳥部野や涙の跡の白堊
鯛にせかる様な入日かな
陽明の門に日長もなかり鳧
麗や師徒和合の榮螺取り
若葉からちよんはり出たり塔の先
名月や筆も寝かせす我も寝す
見た事もない草もあり閑古鳥
五月雨や封切り惜む茶の袋
かきむしる様に鳴き鳧行々子
年の潤や尻まくらねは渡られぬ
貴妃櫻我を玄宗にしたけり
五月雨や自刺息る罷痒し
橋裏へ入日の傳ふ紅葉かな
鶯や墨を誤てる朱の硯
櫻とも桃とも呼す返り花
濡足袋や櫓炬燵の香渡し
涼しさを人に分けり竹床几
老の身に氣實そなわる頭巾哉
無き人を偲ふまどひや梅の散る
一色に事足る色や杜若

吹く風もなく涼しや夏の月
木枯や野を吹ぬけて磯の松
百福も手輕に遣ふ團扇哉
大粒な雨に倒れし桔梗かな
物好きな庭や冬には冬の花
梅は未だ月見の春や年の内
手の珠數に見添へて淋し白扇
黄鳥の聲先き傳ふ筈かな
春雨や心のひまの眩枕
耳借りに來てから寒し絹布圍
近江路や雪に名高き八景風
虫啼や土手八丁の月澄みて
極樂の莊嚴いかに花供養
意地の有るねらいするとし水祝
浮れ女や蚤も夜毎に替る肌
伐りに出て濡らす袂や杜若
仙境の碑文の寂や秋の聲
手向には作らさりしに白牡丹
月の出や松に吹き添ふ一ト風
狩り暮る太郎次郎や夏の川
鷹狩や六尺の草風に伏す
落花浴て僧南朝を語りけり
舟呼ふは淀川筋や朧月
龜啼や十方暮の月の暈
谷水を離れて百合の胡蝶哉

若草や鹿も肥たる三笠山
野や長閑牧童耕夫詩歌に入る
風高く夕日を惜む童かな
差し汐に蘆亂れ伏す酒かな
露を帯ふ花海棠や京美人
献立の外の馳走や蒸し鯉
國寶に這入る岩間の櫻かな
艶麗の花に心を取られけり
潑刺の銀鱗とふや沖繪
勝菊の餘榮見飽かぬ十日哉
日盛や杭打ちさして人も居す
勇ましき市の八氣や初松魚
峰の花扱は雲てもなかりけり
其徳を仰げは高し峰の花
干城の二葉頼母し初蛾
夏羽織脱ぎ捨て、統に對ひ鳥
似合ふ迄年は寄たき頭巾哉
矢文して連歌を挑む日永哉
嘯きは戀にやあらん朧月
桃流す咄に夜長更しけり
世に薫る物の司や菊の花
清淨の靈地色めく紅葉かな
寒梅やかほとこの寺に尼一人
永き夜に心うつるや茶の馳走
角力にも謙しき花輪贈り鳥

見る限り何不足なき名の夜哉
牧場の片角赤し桃の花
秋立て禪味増し鳥居士衣
息杖の深き跡あり雪の朝
暮遅し踏み草臥し不二の裾
仁和寺に女の客や雨の花
鯉刻て陽炎松に昇りけり
春も未だ寒し難卵の吸心
持つへきは子也秋さへ笑ひ勝
笈から洩る水太き氷柱かな
虫啼くや嵯峨野に近き庵の窓
我戀の心を叩く水雞かな
酒の醉朝の櫻に醒しけり
催促の顔に飛たり起り炭
世は夢の中を櫻も冬木立
散るからは萩に少しの風も哉
稻の穂の重みに輕き心かな
名に花を咲せて太る角力哉
色黒き男の晒す生布かな
簀入や玉樓に勝る草の宿
竹の秋追想縁を草しけり
須磨の月落て水雞の叩き鳥
鉦叩き外は松風時雨かな
靈廟に名残の霜の匂ひけり
法難の身に照る月や葛の窓

梅に月松は静な夜なり鳥
秋空の癖や晴れたり曇りたり
豊秋の守りなりけり田の庵
七賢は浮世の裏よ竹の春
狹庭や座をしめて知る月の冷
開け放つ病後の窓や白牡丹
枯れて名も彌高し園の菊
梅ありて俗たらしめす草の庵
木槿の戸仁に名ある人住めり
家の棟の草か馴染か鳴く千鳥
笑み初て富貴の見ゆる牡丹哉
春も此雀に喜て旅硯
星一つ梢に見へて夕櫻
詣てたる富士を繪して戻り鳥
詩趣湧かす餅喰ひ鬪す詩箋哉
松風も無事の友なり冬籠
雅印曾朱肉に埋れ春の行く
山櫻下戸にも酒を呑しけり
霜天に満る夜頃や鳴千鳥
君嫁して花の小さし庭の菫
新蕎麥や茶の湯の後の小酒盛
讀上る句に魂來ませ今朝の春
山裾を淺うめぐりて春の水
雲水の僧に供養や蓮の飯
桂男の袂を出しか落し文

水取や清淨無垢の朝こゝろ
黄はみたる麥に卵の花降し哉
働いて汗や身の爲家の爲
海原も春の色あり櫻鯛
毒草の花は盛るに羽拔鳥
暮馴む春の景色や東山
餅搗や見にも寄りたき程の音
白菊や蓬生ながら氏正し
競馬決勝點の鐘か鳴る
泣く石は泣かねど淋し秋の山
待兼た人に酌たる新酒かな
菜の花や幟立てたる流行神
磯千鳥龍燈の松を澄りけり
匂ひ鳥糞迄大事かられけり
花の戸や鱗ふる鯛を朝料理
花鳥に富む神泉の温みけり
拾着て疊かたしと思ひけり
瓊曉忌や手向の膝に花の莖
鮎飛ふや槌を切落す水煙り
雪の竹今年生から撓みけり
養老の保険も満ちて冬籠
月花の浮世は捨て鉢叩
忌籠の日々を寫教や櫻花晴
さなくとも淋しき秋を暮の雨
勤儉の美を守り鳥干菜の戸

見れば見る物に感して秋の暮
思ふ業なりて涼しき心地かな
一日つゝ小春狭みて時雨けり
梅雨晴や晒布干す一縣
八束穂を掛けて案山子の供養哉
撞き捨てし鐘の行衛や春の盡
寝て待し果報は遅し時鳥
曇りなき心かのそ弓初め
我慢する手につふれたる熟柿哉
雲を吐く峰から咲くや千代の春
風に吹かれて落葉落葉かな
紫蘇干す静か日を糸操る音
花爛漫幽魂地下には笑まん
歪もない所どりや散る櫻
供養の日は花も有情の曇り哉
蘭の香や媚を賣らざる白髻士
勅題の松を立句や初懐紙
物言はぬ口美しき誰かな
進む世に昔なから案山子哉
長閑さや筏の上の唄ふ人
紫陽花のあせ行雨の日數かな
草庵に不時の茶會や爐の名殘
其徳や塚の苔迄花の咲
鎌入れた畑の白し春の風
見古した雪より白し梅の花

我夢の浮橋渡る胡蝶かな
媒人にうつむいて出す團扇哉
國の巾廣げる芦の芽組かな
早起の心も清き蓮見かな
積塔や目に見ぬ友も馴染聲
夏霞耕馬の戻り暮れんとす
蚊に蚤に木賃の一夜夢ならず
掃ひまのあれは雨降る落葉哉
入てさへ撰れば數なし種瓢
藏開き梅の小庭を通りけり
投てやる間も伸さうな早苗かな
土用東風紀念の袖を通しけり
雉子啼くや小松の雪旭の光る
隙惜む人程早し年仕舞
月雪の陸みも嘸な花の友
小座敷に薫る新茶の風味かな
軍談の講議や櫓の薄明り
肩掛けの雪拂ひけり格子先
筆先に真心籠る夏書かな
言付た事はせずして雪丸け
芭蕉の碑濡らして晴る時雨哉
また落て水輪かさなる椿かな
布晒す加茂の邊りや春の月
蟬の鳴く下や静に水の行
塗笠の光り眩き鷹野かな

朝夕は雲雀を揚げて和晴天
師の坊の冷たき飯や納豆汁
師走氣を養ふ梅の一枝かな
狩り暮れて花の眞價を見出し鳥
俳諧に連歌に春を惜みけり
水無月や未だ明ぬ夜を花使
元朝や隙もる風も陽氣めく
雨の日は雨の日で照る紅葉かな
鶴も來て松に宿るや千代の春
米高くなりて貧者の日長かな
宵月夜浦さわかき鯨とどり
葉櫻に二度引く杖や吉野山
涼しさの鏡にうつる流れかな
玉造る露や澄む月風の隙
信と義に越す關門や大三十日
薬子や羨むすれぬあゆみふり
世は易し皆白菊の下明り
あゝ涼し吾も一茶になり申さん
自から心の澄むや梅の花
不意と聞鳥の初音や佛生會
御法山月は眞如の光りかな
春風に飴屋の狸脹れけり
見つくさぬ不足を月の櫻かな
傾きし下弦の月や露氷る
百六十一

白梅や黄昏の一ゆとり
國寶とならて羽蟻の柱かな
行水に其日の苦勞流しけり
魁けて春の知らせけり梅の花
勝馬の餘威止度なき足掻かな
濁しても濁らね水や啼河鹿
夏も早やあれほど高し今年竹
虫干や志士の涙の筆の跡
春の月平安城の眞上かな
鬼灯や子の寝顔には秋もなし
翌日と言ふ噂見て来る櫻かな
鶯や梅の日南を今日もなく
鳥糞む鳥の眼凄し冬木立
譽過て出代り涙ぐませけり
漣も匂ふや志賀の花日和
面影をうかんで菊の根分かな
病む親に花一ト枝の無心かな
むつとして廊を出たり月隴
灯を入れて世のさま見たり走馬燈
只ならぬ客迎へるや盆の門
寒月や汗へる小鍛冶の櫓の音
雪の山遠退く様に暮にけり
芋小家の屋根を抜たり桃の花
時鳥啼や一吹風白し
待てこそ聞曠もすれ時鳥

祭り鍋輕し操の重きより
花はさて葉に味わりて菊の出来
袴着て氣味よく寝たり蛭子講
温泉煙の白し若葉の寶塚
蝶眠る程や牡丹の搖れ加減
秘めし戀白酒に口迂りけり
草臥し足に纏ふや夕霞
男にも稀な女の繪踏かな
月われはあるし淋しき尾花哉
山茶花や赤き布干す破れ垣
鐘しきりラッパ人聲火事火の粉
寒菊や女官嫁すてふ噂あり
世を遊た身のたしなみや菊作
待し盆正月程になかり鳧
一重すら愛する物を八重櫻
涼しさや鳥の灯の又一ッ
幾度も浮て見せけり放し龜
鯉の膽涼しき皿に動きけり
魚屋の狙淋し盆の月
植込し杉の太りや春の山
裾はよき畑に開けて春の山
鼠にも笑はれそぞろ浮れ猫
春雨やみの虫菫の屋根の洩
作戦の巧妙はなし鶏合せ
早苗取る姿御製と成にけり

力無き鐘の餘韻や花曇り
秋の水寺も銀杏もうつり鳧
網桶にむらがる鮎の香り哉
添ひぶしもならでいた箱の雛
喜んで狂ふか如し勝馬主
俤の散りても残る櫻かな
朝顔や焚火取れたる箕盆
紫の雲や彼岸の東山
茶に酔ふて寝ぬ夜の伽や遠蛙
無駄に日を送るてもなし冬籠
米点の如し若葉の夕筑波
春もまた淺き色香や小野の草
神の鹿湖干の鳥居潜りけり
渡し呼ぶ聲や霞の右左り
白桃の自家緋桃の分家かな
交際の徳て賑し菫の梅
骨と成る門の柳や冬の月
尻を吹く夕風寒し沙干狩
飛ひ／＼の根なし咄しや門涼み
暖拂高し湯婆のさめしやら
しのふ夜の戀の重荷か笠の雪
無爲にして治る村や桃の花
五戒して寢釋迦の夢の長さ哉
頼て吹く風か蝶高ふ飛ふ
風切て霜の朝空曇りけり

猿酒に酔ふて狙仙の揮毫哉
難に似た乙女連あり桃の園
戻る氣になれは見當る菌かな
名を聞けば皆ほし氣也菊の苗
鐘供養美しう萩盈しけり
鳥は野に平和を謳ふ彌生哉
散榮のして惜まる櫻かな
野も山も景色調ふ彌生かな
飛さうな馬を書伯の試筆かな
愉々快々浮ふ彌生の御空哉
春風や土手行人の帽子轉ふ
宿取りて人に降る雪眺め居り
五十年撫て親しむ火鉢哉
菩提心こゝらてをこそ古火桶
嫁譽る言葉聞よき田植かな
鳥にも反哺の孝や親賣
花明りむしろ電機もなくも哉
花咲く鳥啼けも居士ましまさず
足元の危険思はず虫の聲
靈山に巡禮續く彌生かな
蝶も起き蜂も舞けり花供養
煙突を苦に病む梅の主かな
花桐の匂ふ代官屋敷かな
重鍋はちを包むや頬かむり
起しよき君か朝寝や初櫻

雉子啼や旭の煙る小松山
見て居ても能きのに老の田植哉
草むらに光る螢や細流
母屋から男手借りて齋打
羽拔鳥我も長途の一人旅
筆を持つ手元の輕き袷かな
豆腐さへ奢り心や鹿の宿
悔悟して戻れば母の砧かな
嵐にも後は見せぬ松の鷹
牡丹咲く庭や孔雀の飼放し
客立た跡に秋しる扇かな
不二はまたた起ぬか春を雪襖
金屏に春新らしき燈しかな
明石とは名にも背かぬ上布哉
桃の戸や御乳の血統は慥なり
長閑さをつなひて通る小牛哉
月の屑雪の素肌や水團扇
明る戸に今年の影や青疊
筆の手を團扇に替て思案哉
秋の暮何を思ふと問れけり
青梅や見れば葉隠れ枝かくれ
風や馬に追はるゝ九十九折
初雲雀襟かき合す春の風
若楓にも錦あり手向山
夏帽や洋杖片手の伊達眼鏡

白露や夜明けは物の美しき
細くとも味よし新の薩摩芋
中庭の日暮は早し水仙花
茗を煮て雨の櫻を悼みけり
山主も我物にせぬ清水かな
白酒や酔はしてほしき人かある
日の足に人の追るゝ冬至かな
訪ふ主はあらて蝶舞ふ庵かな
出る船に一步後れて啼千鳥
是非來ひの電話嬉しや花の春
出來稻の中から荷物列車哉
輝や春戸に鍋尻かく音す
花咲や京は山水明媚の地
聞なれて鐘にをそれす巢の雀
初嵐亂の噂古ひけり
菊の香や咫尺畏き緋の袴
風聲は拜れかゝる霞かな
琵琶遂に雨を呼び積塔會
夷講一藝はしふ思ひけり
句碑や雅に賑ふ花の大供養
園伽を汲む水も乏しき落葉哉
天上の花降りかゝる芳碑かな
奈良はよい山の並んで春の月
節分や待福も來す鬼も來す
仇に見ぬ人の揃ふて朝櫻

籠抱いて寝るや本来無一物
へつらわぬ味也名なり唐辛子
腕により掛て叩くや十夜鉦
包みても玉は光りて縣召
荒れ寺の殊に目立つや今年竹
菊守や傳へて古き歌硯
新らしき家や涼しき人の聲
菖蒲太刀局の部屋を襲ひけり
白魚に一ト房海松の青みかな
瀧音の溪に涼しき響哉
初空の塵り美しや千代の鶴
願る世はまほろしを散る櫻
寢酒買ふ瓢てはなし鉢叩
香に酔て啼のか花の朝鴉
養魚池の泡浮き出て水温む
山笑ふ日に白雲の引にけり
圓山の雪や寫真機の此處彼處
掛香やとかく噂の有る後妻
白蓮の開て立し靈氣かな
松風の果は時雨と成りにけり
武具の保存咄しや御虫干
屈原の戀もあるへし隼月
春暮て父母の慈悲知る旅寝哉
生壁に雪のちらつく日和哉
觀光團古都の春を探りけり

たしなきは物に奥あり初櫻
月の夜や門に京染はわしけり
茶の錢を置けば又來る時雨哉
松魚賣江戸生粹の男かな
嫁入の日取延して田植かな
眉刷て素人染みたる袷かな
散る花や我に心の戻る朝
草高き野道に残る暑さかな
大和路のつぎぬ眺や桃櫻
花吹雪山も崩るゝ響きかな
紅葉して川原に酒宴舞妓哉
寒菊や手洗鉢の薄氷
錦着たふところ淋し秋の山
あらためて見上る花の匂ひ哉
芭蕉の戸や世に詣ぬ人の住む
雲を出た月の圓かや松の上
なまめきし聲は洩らさず青簾
來る筈の物賣も來て年暮るゝ
何とのふ枝に薫るや春の雪
山里は殊に静や朝霞
藪越しに空のあかるき火串哉
戦は天にも有て雷の陣
降りどけて雪の月夜や金閣寺
指先て器の紅や春の水
身の花は堪忍にあり年の暮
百六十三

33 拾參

珠數切た曉寒し露の主
嫁は今日極樂に住む十夜かな
絹足袋や静に運ぶ茶の給仕
憂世見ぬ友の集ひや積塔會
技師の來て試みさする田植哉
鳥立て淋しう成るや冬木立
近道を水の横切る芒かな
芭蕉にもわら衣着せて冬籠
大原女の都見ぬ日を落葉かき
なまくさき風に九字切る芒哉
時鳥啼や二世の思ひ草
大瀧の裏見せにけり青嵐
結立の髪に長閑な埃りかな
花なればこそ蝶も来し鬼薊
保守の里進歩の涙霞けり
春の野を隙にわさせぬ雲雀哉
鶯は籠に啼かして冬籠
賣切の鳩の餌豆や宮長閑
樵街の床や浴衣の伊達くらへ
翁忌や言葉の花を手向草
ごうするか見たし葉末の蝸牛
落し水月も名残りの夜なり鳧
時鳥我日の本の開を暗く
吹散らす露か螢か草の風
根を分て菊の友垣結びけり

33 拾四

三井の鐘湖上に消へて暮の鷹
新道の出來て世に出る柳かな
質素なる家風頼母し較衣
出干に偲ふ祖先の威徳かな
威を振ふ蚊に凄し座禪堂
濃々淡々霞匂ふや東山
極樂は寝た人に有り寒念佛
月影の疎き一夜や鳴く田螺
落て地に咲た様なる椿かな
豊作に秋を落付く心かな
胼の手に握る紙幣や牛蒡賣
寒菊や椽外れたる日影かな
郭公夢のやうなる初音かな
鶯の來てもどかし給仕哉
散るや花過しを慕ふ人こころ
梅らしき香の立つ野邊や春の風
月の瀟車須磨と言ふ間も鳧
道問へは顔出す牛や雪の家
蒲公英や寝た牛よける廻り道
春日野や登る朝日に鳴く鶉
短夜や早御朝時の鐘に鳴る
賑なやむ下女勞わりて水仕哉
椎に降る村雨冬を隣りけり
連想や川鹿の聲と水の音
苔の花養のふ瀧のしふさかな

33 拾五

今日切の様に出来るなり花の人
鶯は糞となりけり散柳
神の名の妻持ちながら寒念佛
芽生へより早三歳なり桃の花
南天の花や晴間の見へぬ雨
花の酒喧嘩に花を咲せけり
初雁や不二ありく見ると朝
拜領の鼓み打はや此花に
貧居士の佗寝に低き蚊帳かな
散る花に埋れて居る酒上戸
返らしと誓ふ屏や花の寺
虚榮張る人に似合す白扇
碑に添ふて花の名に立譽かな
白酒や乳母は毒味の舌鼓
日盛りや水の上にも日の匂ふ
風を春に除て身拂ふ接木かな
桐一葉峰の白雲崩しけり
路の藁梅盗人に踏れけり
花七日人の五十齡をさとし鳧
譽足らて歌讀て行く櫻かな
海譽て扇をたむむ二階かな
夏の月濡れた山から昇りけり
温泉の窓に煙渦巻く五月雨
よれて出る茶臼の重し五月雨
樹呑みの酒の酔ひ知る椿火哉

33 拾六

彼岸會や門前の孤兒食に飽
有無の日も怠らぬ念佛かな
伸んとて屈む身てなし冬籠
獵犬の輕う踏行く落葉かな
安居して竹のさゝやき開夜哉
驛の灯の遙かに見ゆる吹雪哉
富士詣浮世の夏を忘れけり
自動車物珍らしや桃の里
祖父の名を洗ひ出したる机哉
世や寂し降り積む雪や雪の上
荷車もたまには興や紅葉道
椽に据す李白に詩あり今年竹
あたゝかき妹か馳走や蕪汁
廻り道したとくあり梅の花
宇治の夜や螢は開の花吹雪
菜の花や千早降りて奈良宿
宿帳に雅名もあるや花の旅
踊り子の笠着て覗く鏡かな
春雨や膝に重たき孕み猫
音のせぬ浪の見ゆるや春の海
親の筆詩く種札に残りけり
天刑の病ひ苦にして飯と汁
鶯や宇治關白の脇枕
よもやとて友も誘わす初櫻
來た蝶に汚れそうなり白牡丹

33 拾七

戀に泣た昔は夢や魂祭
月の影天地曉にしみけり
蛙啼や五作は戀の頬冠り
梅か香や寝牛の角に結び紙
釜の儘飯提けて行田植かな
白蓮に照る日も白き匂ひかな
湖程に見ゆる水田や隴月
三吉野の史談の花や桶の鮮
濡佛の袴も枯れて蟬時雨
朝風や牡丹切る手に雲動く
さぬくの恨みや柳散らす風
暮るゝ日に聲の哀れやかた鶉
粹鏡ふ浪花芦邊の踊りかな
揚雲雀鱗は泥に躍りけり
葉柳や飲食茶屋の町はつれ
長閑さに子校の地謡詣て哉
咲もあり散るも有花の吉野山
若草や飛び越す水の幾所
金力に立たぬ五月の幟かな
未だ曠のあるに本意を十日菊
つゝ井筒覗きに來たり蝶番ひ
花に似た儂もなし秋の蝶
人の眼を尻に集める螢哉
語り合ふ昔嘶や花供養
春の色花無き樹にも餘り哉

33 拾八

笹の香に籠ます籠や櫻鯛
月の雪松の葉透に盈れけり
目の届く限り吾田の蛙かな
蓮薫る室に天女の壁畫有り
襲はれた寝汗冷たし雁の聲
惠方からよき馬買ふて戻り鳧
古池に月新らしき今宵かな
寒食や爐邊に和合のあふり餅
銃置て獵夫も閉けり經讀鳥
子寶の缺けて淋しや芋の秋
熟柿とれば群れる童木の下に
南天の花も咲きけり今年竹
俣のかふるや花を見るに付け
見のかして遣るや拂子へさ蚤
秋寂もさまゝあれと遠砦
南朝の風にふき散る櫻かな
鮎汁や月見戻りの瀬田泊り
目に立ぬ女の用や煤拂ひ
花爛漫七尺去つて拜む句碑
老樂の古社寺巡るや春の風
朝顔や初て咲てあちらむく
漉きこんで詩箋にせはや散紅葉
名月をよけて通るや根無雲
堪忍を風の柳に並ひけり
葉を染て秋の樹と成る櫻哉

33 拾九

黃鳥やしひれ切らして出る厠
侍人は遂に來もせて露の音
輕う打つ振袖かわす胡蝶哉
炉寒きて疊の匂ふ茶の間哉
鹿毛栗毛鏡ふ馬場や風薫る
詩聖病て蜀に入る案山子遠見て
谷間に忘れた様な晩稻かな
白骨に似て淋しさを麻木箸
白雲や花に翳く山かつら
風呂吹や和尙にもとす奉加帳
鹿鳴や風の染め出す山の色
典に入る矢文の歌や月の陣
運動會湖干の濱に開きけり
夜櫻や思案の外に廻り道
梅咲たとし見頃とて郷の文
投上た様に麥立つ雲雀かな
忍ぶ夜の螢大さゆ思ひけり
敵入や待人母の外にあり
只ならぬ身とは成り鳧蹄の夜
霜の鐘足らぬ乳房にこたへ鳧
鳥雲に入て海士は海に入る
行年を水にまかせて網代守
若竹の雨に三曲奏しけり
馬刀取るや薄き身過に世を渡り
時鳥啼や蹟く糞盆

33 貳拾

旅笠や故郷の道の暖き
移り香も清し菖蒲の湯手拭
最合風呂落し文あり春の月
春惜む西施か老の化粧哉
衰龍に紙魚は隠れて古雛
花の雨思ひ切つたる朝寝哉
散る時も重みの見ゆる牡丹哉
新米や心落付く小百姓
鯉に目を遊ひ添へけり藤の花
井の蛙丁度我身に似たる哉
露踏んで兄の祈願に詣る宮
色鳥や朝顔種の朝しめり
拾着て其日歸りの旅出かな
うるわしき色や夜明の杜若
消へた夜の曉方清し月の雪
春風や史跡を語る杖の先
歌添へてから傘戻す月見哉
顔に出る酒に寒がる女かな
額に袖にあひけり花吹雪
はる酔に花見戻りの機嫌哉
八重らしう見へて一重や遠霞
煤煙の都霞の田舎かな
鶯や夕日春く大悲閣
ひらくとは何事もよし年の花
霧晴や松を離るゝ鳥の聲
百六十五

行秋の跡追ふ蟻の往來哉
篝火に舟の數知る鵜川哉
落ながら姿崩さぬ椿哉
無い酒か思ひの種や秋の暮
柳やめて酒の小賣や花の道
生身魂不老の秘藥尋ねはや
聲に聞へて高し揚雲雀
鶯や鳥様々の聲の中
蕨取る重も軍資献しけり
今朝髪も結ふた儘なり勝相撲
曙の草に消込む笠哉
春風のゆするまで寝よ東山
銀燭や月に障らぬ置所
菜の花や假面提り出る寺の門
弓と成る力見せけり雪の竹
俤に残る逸話や魂祭
門口はむすんで這入る柳哉
叱られた人程こひし魂祭
黄鳥や頭是なき子を眼て叱る
佐保姫の戀する夜か臈月
うらゝかや動物園の賑しき
朽て猶嚼に殘る櫻哉
百薬の酒も座にあり鏡の鏡
誰かつし道の菜や春の山
校門の古きを誇る柳哉

あせる程つくゞ長き燒野哉
散り心ある日を花の盛り哉
落し水瑞穂の浪を潜りけり
樹や草に心は散らす冬籠
暮遅し又あけて見る雨の窓
世は無情計りてはなし放生會
貧に處す壽命長者や干蕪
掛乞に美し女來りけり
郷の名も薫るや花の極樂寺
老木にも素直な梅の標哉
除夜の風呂鷄に呼れて戻り
香は今に高し筑紫に散りし梅
勤の轡に錆なし玉の春
花の香や手向の歌仙巻く座敷
虎杖も折添て來る蕨哉
雨乞の梅は孤ならず隣村
春嬉し笑ふ西山東山
仰き見る恩師の塚や若の花
乗り捨てた声間の舟や冬の月
大空に消き流れや天の川
入道の狸寝入や春の宵
雲退て淋しうしたり峰の花
文月やまた夕榮の辻か花
我庵を叩くや水鶏俳諧師
撞く鐘の音も親しき時雨哉

短夜や舟に殘して上る夢
發展の商戸並ふや歳市の市
武士道すたらす案山子作るにも
虫鳴や斜に張りし貸家札
昇て出る大平鉢や櫻鯛
雲山に志士の碑探る時雨哉
祭らるゝ飼屋の猫や大原志
水に咲く花さへ暑き姿哉
翌日寒く爐になつかしむ夕哉
約束の延て葉なる櫻かな
忠孝の二字輕からず雪の笠
日の丸のかさし草なり櫻花
蚊の聲や未だ夜の淺き枕元
庵結ふには能き梅と流れ哉
存分に咲ても淋し萩の花
花の木も男ふりなり山櫻
春ならぬものなし花の中の町
寒梅や障子を通す日の暖み
露程の芽を花と摘む茶園哉
佛とてもとは凡夫を鉢叩
御園振る響も近し夏木立
陰徳の家茶へる牡丹哉
野は霜の花どかはりて枯芒
穴を出る蛇に小草の戦き哉
車迄出てぬるみけり山の水

新嫁の手なみ譽るや粽結び
掃寄せて梢見上げつ柿の花
白髪にも嘆する日あり尙齒會
不行儀に居ても親まし掃火哉
暮秋や何は無うても積みし米
蓮の香や五山の鐘を如是我聞
稻妻や禁斷の網おろす時
野遊や子に圍まれて行く教師
俗塵の世を隔てゝや萩の垣
一輪て香に不足なし床の梅
施に杖の出てる日永哉
夏瘦や蓮婚の君のヒステライ
葉柳や色に溺るゝ人は誰
欄干の鰻冷かに飛ぶ笠
乳に足て抱れて眠る鹿の子哉
武に強き國の譽れや山櫻
形代や荒瀾の中に見へかくれ
曇る程咲て明るし八重櫻
出るもうし内も淋しや春の雨
朝寒し寛の水の耳に立つ
鴈翼を暫し收めて冬籠
しやふ／＼と波の砂道ふ月夜哉
世に飽ぬ物は日和や稻の花
松風や瓜喰ふて居る五六人
縫れ合ふ衣の袖や秋の風

普請場の目先ちらつく乙鳥哉
新領の塲所も廣き青田哉
鹿なくや家飛々に二三軒
田に入れる大川水や雲の峰
戀風もよせぬ盛りや角力取
雪に文字かくも雪見のすさひ哉
あと逆に結ふ芒や曲り道
朝の月松に涼しふ残りけり
草餅や長者も愛てる野の薫り
朝の間に花も済まして壬生念佛
馬迄も書種に拾ふ花野哉
咲きかはる花に惚ふや十三歳
盃取稻の浪間に沈みけり
静かさの野に凝る玉や草の露
捨た世に又出て菊の主哉
雪踏んて水無月寒き比良の嶺
白菊や五濁の色は知らぬ花
雪にして遠のく松の嵐哉
蓮の香や御法の池の花菫哉
氣にくもりなき親みや月の友
うか／＼と庵を過ぎ行く茂哉
我事に犬は逃げり水祝
三十三歳遊へ琴弾く庵の庭
虫の啼く中に名高し眞如堂
枕から知慧の産るゝ師走哉

龜の鳴く村に歸りし博士哉
夜は秋の虫を鳴せて竹は春
罪造る玉は抱かず露の家
師走氣のはなれて見ゆる藁家哉
春の野や夜さへ明れば鳥か鳴く
底見ゆる細江の水や秋無草
逆縁も國の爲なり玉祭
水仙に寒き忌日の灯哉
西山は晴れ東山時雨けり
足るを知る心富けり梅長者
春早く流れこよかし櫻川
俳聖も佛化す日あり散る櫻
颯や御召列車の笛の韻
餘所の菊只見て菊の節句哉
木の鷹の餌鳥喰さく野分哉
義を見ては暴虎の勇や楯の主
初秋の聲聞く不破の關家哉
梅雨深し鶴も鳴かと思ふ空
忘れたる杖取りに行く霞哉
經塚の一入寂し虫の聲
俄雨跡の花を散らしげり
碓止めは只水音の夜なりけり
敷ふれば延す日もなし煤拂
備忘録紙魚蝕む迄に我老いぬ
沙先の松も聲無き霞哉

旅人に付去ぬらし京の春
涼しきや二人して出す竹床机
緋絨の鏡似たり飾海老
秣刈る女うしなふ夏野哉
芦を出て羽叩く鶯や秋の風
嗚呼夢の浮世なりけり散る櫻
子を叱る親を叱りし紙衣哉
面白う残る角力や土俵きは
菊の香や御前揮毫の女の童
去ぬ雁や假そめならぬ一羽より
一と夜さへ恩に仇なし暖め鳥
萬里舟を泊すべく浦長閑なり
寝て果待待身てもなし冬籠
こふろきや椽の下まで届く秋
瘦て吹く尾花は枯れて冬の月
埋火やつましふ暮らす老夫婦
三鞭に御代書くや菊の宴
見廣げる野山の色や今朝の秋
月涼し揺れ抜けそうな澄酒
白蓮や眞如の月の池に澄む
茶器共に味合ふ古色新茶哉
盛上げた様に小島の茂り哉
野狐の穴どころどころ枯野哉
信心に留守なき神の奇瑞哉
紅葉傘雪の丸山登りけり

曉夜を馬盗人の行術哉
八卦見の行燈暗し枯柳
山吹や家鴨に惜き咲所
茶の羽織着て杖ついて時雨覺
人去て運き日残る野中かな
極樂の名も餘所ならず蓮の寺
蠅二つ晝夜の出臍疵りけり
まん丸ふ手桶の跡の氷かな
春風や京は美人の多い所
また寒き野山の色や百千鳥
夕顔や天下の母の佗住居
散る花の眞や筆に残りけり
雁渡る朝や保養の深呼吸吸
澄む月や影る木もなし三笠山
鶯も水鶏も鳴や龍安寺
雨一過青田を渡る風の音
凍とした色は松なり秋の山
曙や露を其日の日和占
人聲の櫻はなるゝ月夜哉
秋風や日々に寂増す草の庵
花の世を九品淨土の思ひ哉
峰に湧く雲懐しき彌生哉
ゆきの鳥立や行衛も雪の中
肘に張る投網涼しき雫哉
咲曠の家庭に見へて辻か花
百六十七

味はまた色に取られて初茄子
行軍の兵ねきらふや割水
軍艦も増師も易き蠶飼哉
夕顔や白髪は今も浴み好き
聲なくて朝顔人を起しけり
蟠りなき鶯の初音かな
鶯や朝の機嫌を高調子
梅柳よき里ふりに成にけり
明け拾う梅から馴れて梅の窓
花に日のさすまで寒し天龍寺
雪に客ごめて詠の咄し哉
佛まつ庭の清さや盆の月
水不自由した艶てなし今年米
燈火は虫に取られて窓の月
忍ぶ身の忍び歩行や花見時
茶の花や山と山との里續き
霞まねはならぬ姿や春の富士
聞にくき言葉遣ひや餓の友
跡見たき夢に裏着る蒲團哉
冬木立吉野もたの林かな
泣止んで團扇に笑ふ子供哉
戀人を尋ねに來たる日傘かな
煤掃や庭へ持出す長火鉢
華はかり吹かと思ふ嵐哉
時々若世を覗く頭巾哉

事務の暇を窓の麗かに街も見し
屠蘇波や隔てぬ中のさし向ひ
筆津虫墨摺る音に紛れけり
蒸籠の小海老に交る木の葉哉
如何ばかり嬉しかるらん放鳥
六根に染む山風や聖一忌
法話後を踊る善男善女哉
微生むし餅干てある二月哉
初松魚分に過たる者哉
都には見られぬ八瀬の草の餅
蚊帳の月随放樂の眺め哉
踊見に行つて亂るゝ心哉
殘飯に魚太りけり春の水
花に灯を向けて寐惜む泊り哉
幣臺に乗せて返すや和布刈鎌
泰平の御代は豊かや秋の里
京を出て鹿開く人の心哉
虫干や月雪花の旅衣
菜の花の香を思ひ出す寒さ哉
出來稻や村農會の模範田
公然と秘密を契る雜魚寝哉
能因の留守の戸叩く水鶏哉
覗かるゝものにしてあり菊の門
夢の跡訪ふや夏野の鏡塚
鶴の毛を梳りけり春の風

強られた上座の寒し梅の花
新茶汲て昔の戀を語りけり
梅咲て訪ふ人繁き山家哉
嫁した丈け人手の足らぬ田植哉
灯燈して早夜にしたり秋の雨
峰入りや白衣に残る雲の垢
碑に悲しき文字や苦むして
静かさは曙にある櫻かな
手にもとる鷹の濡羽や遠時雨
祭草祝部の軒清めけり
蝶の來て芥子一輪の嵐哉
雛の菓子投扇興て殖ちけり
さはゝと淋し切籠の紙手の風
宵山は屏風祭りか祇園の會
紅梅や藁家なからもか木門
酒となり世に愛てられぬ寒の水
紙衣着て曉傘の嘶哉
佛手柑や施主の名も無き提手桶
灯に障る風とは別よ秋の聲
粹不粹有るや扇の生れ所
傘の上は月夜や春の雪
雪の船雪の港に泊りけり
小金持つ尼の世帯や干蕪
翁てふ草に老けり秋の蝶

嘯や心消わ行く手術臺
娘には見せて置たし鍋祭
灯は嵯峨か梅津あたりか郭公
沙先を千鳥の守る夜明かな
鳴く鳥の口へ日のさす枯野哉
曉の鐘頻りに花雲動きけり
名物を旨う喰ひけり秋の旅
塵焚けは小春の山河曇りけり
背中の子の手も添て引く鴨子哉
道すから摘むや七八つ露の臺
雨晴て一夜に二度の月見哉
句題成らす窓外蛙鳴く夜哉
花曇晴れば浮世の都哉
踊子や箱から出たさいふやうに
力なき枝にはよらす羽抜鳥
天地人和してうるはし稻の花
山吹や遠慮して汲む貫ひ水
茶の花や古きを誇る玉露園
涼しさや流れ見乍ら取る茶杓
初秋や高ふ開ゆる波の音
在天の御靈懐し月今宵
行水の音暮誘ふ寒さ哉
筆嚙めは唇寒し後の月
篠懸の汚れを洗ふ清水哉
入梅晴や土佐繪を山かつら

寒翁か馬よ留守居の花の雨
火は虫に取られしまゝ言
算盤の桁はつしけり花戻り
三曲の合奏に涼し夏の樓
秋寂は此所に見角力なは
栗拾ふ猿に貸したき袂哉
黄に赤に山染て秋行かんとす
見覺への筆なつかしき五明哉
響虫鳴や忠死の軍馬塚
適れな日に折もよし花供養
人聲の夜もしつまたぬ暑さ哉
いたつらに道問はれ鬼春の宵
反古張の行燈暗し鹿の宿
私の明りにはせぬ灯籠哉
情買ふ夜もおり霜の一夜妻
京へ寝に來たはかりさて春の雨
打かけの碁を崩しけり時鳥
言出した人の逃けり雪礫
佛果得し姿や蓮に眠る蝶
いにしへの姿床しき難哉
塀越て二つ舞い來る蝶々哉
雲に枝枝に雲あり山櫻
氏よりも育てと菊を眺めけり
鶴の來て松に霞の動きけり
范蠡の詩情動かす櫻かな

山紫水明麗に消わつ龜の鳴く
鮎下る瀬やちら／＼と昇る月
飛鳥を落す威はなき案山子哉
寒とは人の榮耀そ冬牡丹
初蝶や來たと思へは見失ふ
俗界を放れて清し盆の月
虫をさへ殺さぬ人や唐辛子
寒詣よき子給へと祈りけり
鐘の音も霞んで暮るゝ五山哉
花數のなくて床しや梅の老
秋立や瀬越の鐘の音にまで
留守守も同じ月見の團子哉
輕石の浮いて流るゝ清水哉
年の暮理想の戀も破れけり
咲みちて獅子のかくるゝ牡丹哉
萬世一系國や無窮の紀元節
三日月の下から降るや春の雨
獨かと妻の間ふまで涼みけり
旅なれぬうちは寝られぬ枯哉
雁鳴や勿來關の忍はるゝ
遠富士を背景に見る幟哉
青白き野邊の煙や春寒し
夢の下潜る魚あり浮寝鳥
彌陀刻む鑿を淨むる清水哉
玉章に急ぐ羽振や雨の雁

無事は身の慎みにあり尙齒會
祇園會やわさに來りし旅の客
岷道を身の重た氣や孕み鹿
五月雨や大將を偲ふ琵琶の曲
秋の水里なき方へ流れけり
鶴を見て髭の手入や草
初夜過て机によるや輝男
馬の脊にゆられて眠し春の風
豆洋燈一つに双入夜寒哉
酒の癖泣ながら年忘れけり
餅蒸切火の花をちらしけり
靜なる春此所にあり遅櫻
魚尾燕飛涼しき竹の夜影哉
見直せば空似の人や花の影
菊はかり秋を放れて匂ひけり
八重霞鳴門を鯛の越す日哉
桐一葉二葉と秋を深めけり
初雪や四阿へつく下駄の跡
初東風や淡路産み出す朝朗
女郎花つれなき風に吹かれ覺
我國の飛行機なげく蝶々哉
旅僧鼠封しぬ蠶かな
七夕やまた兒鬚の稽古鞠
鳴聲も秋深草の鶉哉
顔見世や舞臺に並ぶ雪月花

一節載七夕姫に奏しけり
雲雀野や草裾すれば草匂ふ
白雲の上に鳥鳴く彌生哉
海苔の砂大事かる齒に障り覺
搦麩や今日の寒さをすまし汁
花守の身にも苦のある咄し哉
弓矢捨て涼し閑雲野鶴の身
人魂の屋根離れ行く霜夜哉
花筒に切る青竹や今朝の秋
世を遊て菊にたのしむ餘生哉
水に浮く泡より脆し春の雪
親の意に背きてぬるゝ時雨哉
遺言の書を讀む涙土用干
山河搖く挑戦今や初時雨
盗まれた穴數へけり曳大根
火串さし柚の娘も交りけり
日の本の本らし伊勢の初日の出
何時見ても眠り勝なる柳哉
芭蕉植て芭蕉の庵と呼れけり
餅搗の跡のはつみや雪こかし
香も色も形も菊の譽れ哉
治雙酒しや破戒といふ五六盃
帆上げた船行鳩の月夜哉
風にさへ骨のある夜を生海鼠賣
獨采れば杉戸に映る芭蕉哉
百六十九

梅咲や踏の跡の漑み
心のみ春も時雨て墨直し
秋風や調へ亂るゝ琵琶の湖
惜みけり花の命の七日とは
妙曲に清水湧き出る思ひ哉
稻妻や小窓に満みし田の匂ひ
子に知恵を付けて笑ふや春の宵
茶の外に若らぬ僧や花の宿
彼岸會や誠をこめし一つ鐘
若菰にさらゝ鶴の羽風哉
憂さ我れの友となれかし秋の蝶
駒止めて近よる月の籬哉
山高うして水清しはつ嵐
桐の窓菊戴に訪れけり
難波江の時雨や鶯も芦襖
千町田の名も埋もれて雪の原
飛ひゝに茶園の中や桃の花
稻妻の見る影もなく光りけり
菊の戸や奢嫌ひの普請好
椿焚やこん所ても氣の都
奉る和歌のはつかし人丸忌
雨に飲む味一入や花の酒
白梅や消へ行雪のうしろ影
菊の宴金鶏の由緒語りけり
簗笠の音降分る霰哉

半島は雨となり立つ夕雲雀
月の差す木からも來たり火取虫
新米や盡せぬ御代のさゝれ石
ゆつり合ふ内に又出す火鉢哉
春雨や安協も出來て肱枕
藥降る日は芳しゝ草の露
許されぬ飯に重たき蒲團哉
待てと來ぬ人待ち暮す餘寒哉
一時時雨して美しくしき入日哉
落ちて猶人の目を引く椿哉
祖父からの井鉢や水仙花
散らばこそ花の花なる櫻哉
千代萬變らぬ聖代の初御空
雲雀なく煙霞に生る麥笛の子
嗟哉に寝て知るや七野の寂葉
散るような景色は見せぬ櫻哉
夕立や思はぬ人と最合傘
朝起さは眼にも葉や若葉山
旅僧に田植の藥籠かられけり
月皓々萬里の海を照しけり
風や船を氣遣ふ宿の妻
山吹や指先黒き烏帽子折
風呂敷に用の盈るゝ師走哉
阿字欄に影置く月の芭蕉哉
忘れたる如意埋めけり花の雪

景色皆思へどや秋の暮
菊の香や御座所近き庭廻り
法の道踏て昇るや順の峯
笛の音に涼風起る座敷哉
着と先に心の軽き裕かな
百日の筆も納めて朝茶の湯
不自由の里に自由や子規
平生の慈悲も知らるゝ門茶哉
鷓鴣にもうつす訛りや春の人
戀敵き日傘かこふて通りけり
神馬藻も添る忌火の御飯哉
色かへぬ松や皇子の産湯標
身はゆたのたゆたや年の浪枕
居成女やさした柳も根を下す
霜にさへ聲のある夜や鐘氷る
鶯の舌は緑りか紅いか
吹荒るゝ海や千鳥も亂れ鳴
また戀の道にはうとし針供養
雛の宴國母の御歌飾りけり
鶯や翌日から琴は夕稽古
落付いた花の眺めや春の雨
花は根に根は根にありて枯野哉
梶の葉や若き局の歌すさみ
老僧に此勇氣あり寒念佛
さわるやと灯さへともさす虫選

蛤の汐吹く彼岸日和かな
破船繕ふ磯の漁師や秋行日
櫻鯛大膳職へ召されけり
樂さうな社家の朝霞や神の留守
子知らすの浪をなためて月朧
松に鳴く珠敷かけ鳩や花供養
統に似し雪や彼岸の入日空
能く笑ふ女の客や春の宵
雁鳴くや思ひ出多き雨の夕
祭壇に迷ひ込みけり蝶一つ
反古張も届かて寒き障子哉
曰の尻腐るとみみすゝなく
聖壽無窮榮ゆる梅の佳節哉
無爲に生く骨ふらゝや遊園扇
脱すてのちきれて凄し蛇の衣
年明けて智恵増す稚兒や笑初
雨垂の音にもあるや秋の寂
塵ならぬ塵なり雨のこほれ萩
春めいて來たそ神樂の遠囃し
経讀の聲嚴そかや魂祭
大水の迫りて寒き我家かな
蛇の入る穴にさし込む夕日哉
狙てさへ樹から落るに餓と汁
十哲の像に影置く芭蕉かな
松に眠る鶴長閑なる姿かな

稻の穂に治まる御代の重み哉
しめ直す帯も寒さの凌きかな
鮎餅や二階から見る鳩の海
豊なる景氣見わけり年の市
南無阿彌陀得たりと空也踊哉
初秋やひやりと蚊帳の朝嵐
夜は秋にもとる風情や竹の春
羽織より裸時めく角力取
雲の峯崩れて竹の嵐しかな
奏樂の雲から洩れて花供養
過去の非は悔て戻らすゝす
満山花満山酔て山か雲
開澄す琴の音床し嵯峨の秋
降る物の音聞分て冬籠
據なく鯛食ふなり花に雨
叮嚀にたゝむ朝あり秋の蚊帳
未だ風爐の暖みもあるや茶立虫
山冷へに松は育たす閑古鳥
よき種を蒔た人らし尙齒會
月の座へ行迄暗き間敷かな
秋の來し乗りや竹の朝嵐
百迄を雀の御宿尋ねけり
菅蒲太刀負けし魂揃ひけり
海老と髯並へて祝ふ野老かな
吹かすとも限ある日を花に風

忠孝は師の賜を釋奠
夜は竹に戻るや稻の群雀
散る尾花我れも浮世の一分子
菊に寄る賀の句募集や不老園
今日の月心の秋は忘れけり
餘花寒う砲車の柵這へけり
初雷の數程喰はん年の豆
宇治に世を遊て茶を摘む翁哉
咲た木も嬉しがるらん初櫻
問ふ人と道連に成る花見哉
寺一字遙に見ゆる枯野かな
楓あり松あり花の嵐山
粥杖や打甲斐もなき柳腰
獨填の暴風何か山櫻
其日散る花さへあるに百日紅
はりつめて水より高き水かな
御眞影を開く剝那や梅薫る
柿紅葉囚舎の窓を照しけり
御忌の鐘聞くや四條の橋の上
足る事を知れば事足る師走哉
鳴突は鳥原へ行く副業かな
爐塞きて雨暖く聞夜かな
磯涼し怒濤玉兔を弄ふ
棧敷にも欠伸こぼすや壬生踊
魂祭風樹の威の新たなり

松風も法の聲なり懺法會
炬燵から出ても冷たし猫の鼻
灯を一つ里に見出して鹿の聲
菊の苗去年の約束果しけり
賣は罪買ふは情けか放し鳥
新芋や砂糖の利かぬ寺料理
暮の花月と心の残りけり
煤掃や揃ふて下手な頰冠り
白蓮や我も昔は白拍子
紅梅や刀自か書齋の塗机
神棚も持佛も掃のひと間かな
折れる迄堪忍強し雪の竹
留守らしき家からも引鳴子哉
碑の文字の墨も匂ふや初時雨
押詰る年とも見へす雪の不二
月涼し柳潜れば又柳
炭焼の竈に暮の座禪かな
咲かはる花や碑苦むして
舊都も時めく春の往來かな
似た草の無くて摘よし土筆
箒木の伏家を出たか雪女
香盒や夏書の居間に立つ煙
女さへ詞すくなし秋の暮
風のみにあらず秋立つ水の音
誘すも明易き夜を垣見草

氷水酔後の咽喉を迂り鼻
湯上りの女艶なり青簾
稻妻や湖心に浮ぶ船一つ
あきち瓜御大将へ献上かな
客の氣に成て菊見る主哉
川を越す布袋和尚や夏の月
曉や鴉によこす虫の聲
碑の遺句懐しや秋の雨
一あらしこれ則ち初時雨
聲刻む羽遣ひしけし揚雲雀
時雨會や祖翁の像は師の遺墨
酢のものゝ料理好みや更衣
積りても淡々しきや春の雪
鶏ふせた家の門邊や種おろし
無理いふ兒寝かせてからの碁哉
言と行一致し難き炬燵かな
不時の歸郷珍ら田植の傍に立つ
玄寶の果か時雨の弱法師
稻妻に出合頭の戸口かな
譽て行人を見に出る幟哉
煽つ灯は長等風しや千圓子
散る櫻子は笑み親は惜み鳧
鹿の聲止觀の講義更てけり
行年や誰かどめても止らす
桐一葉蜘蛛の巧みを破り落つ
百七十一

芽柳の影未だ寒き月夜かな
 越せば又元の道なり年の坂
 咲ゆとり散ゆとりなき櫻哉
 貫い泣して往しけり蜺賣
 それとなく来て見て嬉し初櫻
 初秋や夜の客へりし避暑宿
 世に盡ぬ月にも名残ある夜哉
 夜毎訪ふ友に更しぬ月の秋
 月涼し橋は十歩に足らずとも
 清風に座して閑あり簾
 花に此静さはなし若楓
 花の宴酒もちなみの櫻哉
 かくされぬ心遣ひや鍋祭
 行違ふ香に見返るや菊かさね
 芭蕉葉の青み戻せば初時雨
 風と風魚と水とに似たりけり
 牛賣て遂に牡丹の長者哉
 二の子此所に歸れて鴛鴦の衾哉
 雪にまでふられて廓戻り覺
 葉櫻は酔のさめたる風情哉
 靈廟の涼しき風や夏木立
 鳥人の燕返しに逝く日かな
 けふはとて回向たのむや寒念佛
 勅題の菓子に添けり結昆布
 着のまゝ寝たる一茶やつれさせ

窓に尻向けて月夜に宵寝哉
 咲けは散る習ひを惜む櫻かな
 散て名を残す氷室の櫻かな
 鎌腹も掻き切りそうを櫛の主
 緋頭巾や元の唇に還る曠
 善根は人の花なり放生會
 夏瘦とはかりは母の油斷哉
 卯の花の雪散る里や子規
 梅よりも輕き櫻の吹雪かな
 手奇麗に五色にかゝる鞠哉
 柴の戸の庭に風情や寒牡丹
 庵の灯や何處へさしても露の中
 新年や古ひし齡か祝ひはれ
 衣を裁つ母の夜業や春近し
 紅梅や窓高からず低からず
 頭巾から響て覗くや子の寝顔
 梅薫る中に國家の響き哉
 泣く子には負て師走の乳首哉
 川上は花の夜明や上り鮎
 鳥の立跡に尾上は霞けり
 數年経て大藏經遂に夏書哉
 叱らるゝ人と成たし年の暮
 風呂吹や庵の障子は禪尼張
 積塔や人の筆かる手向歌
 馬盃に芒さしけり陣の月

解けかねて口舌に酔や玉子酒
 花の跡あつたら日和つゝき鳥
 京女郎のさして似合や濫日傘
 寒梅の梢に添ふや銀の月
 梅共に都へ欲しき葉家哉
 月下弦半過ぎたる芋の味
 春の雪朝顔程の詠めかな
 吹かぬ日は潮音をきさむ柳哉
 樹下石上花に足不足は無り鳥
 羞含む戀の美し花莖
 月と梅吾に酒あり友もかな
 無心する煙草と共に煙管哉
 罪科も消けて跡なし鶴の簪
 寒月や砂に喰入る松の影
 跡たわし河原の院や鳴く千鳥
 夢の世や過ぎにし花の一夜昔
 人は足らぬに馴れて一夜鮮
 天人の顔明易き欄間かな
 鮫汁や親の許さぬ義兄弟
 狙も削り直して盆の月
 一と世界放れて涼し鳥の家
 花に舞ふ胡蝶や院の手向能
 御屏に其飾を散るさくら
 出代らぬ無事國元へ知らせ鳥
 芽や水の誘ふに任す花

奥津城にそゝきて寒し花の雨
 追ふた手に付て放れす冬の蠅
 松からみらかみて高し藤の花
 咲き代り咲き代りして松の花
 身に付た福は放さず札納
 天地へ根を張る雲や五月間
 雪院を見るもおかろ窓の梅
 風曇りして雉子啼く眞晝哉
 抱籠や戀を離るゝ高野
 植添ねる松竹梅や福壽草
 飛々に見ゆる孤村や冬木立
 雪佛子供の業でなかりけり
 節分や笑ひのものゝ局部屋
 山吹や庵閑にして水の音
 水音に心の勇む夏野かな
 草鞋とく妻に霞のはなし哉
 發聲の玉姿麗はし花日和
 香盤の灰は回みて牙返る
 穂芒の長し短し秋の風
 旅ながら施行もして行彼岸哉
 俳諧の變化か月のべた曇り
 狸寝のふとん引はく女哉
 篋に置く露白し九月盡
 音聞て笠の紐とく清水哉
 羹にこりて残暑の胎哉

五形野や借て来た子に氣臥草
 打水の中走りけり男の子
 其人の動も響めて魂祭り
 野に山に日に増す春の光かな
 團參の人さま／＼や御忌詣
 稻妻や草へ逃げ込む鬼の子
 春の月花笑はせて曇りけり
 獨り居のなす所作もなし五月雨
 染殿に藍の匂ふや春の雨
 延元の陵埋む落花かな
 春といふ竹にさへあり秋の聲
 團かなる咄し取巻く火鉢哉
 行水を貰ひに来たり隣の子
 一日も最う隙はなし事始
 碑に残す稚の庵や初時雨
 蝶一つ来て眼に止まる董かな
 草踏んで拜む端午の旭かな
 草の戸や筆の穂先も露の味
 飛や螢茶に適したる水の上
 嫁の名も呼ひよく成りて蠶哉
 五歌仙に梨壺更て春の雨
 香の圖や五十四帖に風薫る
 八兵衛か緋絨着るや時代祭
 うたかたの泡と醒けり新酒醉
 狗脊も綿脱く雨や時鳥

權門の慰みに飼ふ蠶かな
 鶴鳥啼や朝霜煙る軒
 松風の銘打給へ須磨の雪
 傾くや魔風へ一步絹團扇
 勝菊や同じ色にも有響れ
 悟に入りし心は涼し蟬の聲
 牛賣の牛と寝て居る花野哉
 穂に出し早稻の匂ふや初月夜
 牡丹見て心大さうなりに鳥
 花と成て捨てられに鳥路の臺
 召しませと妻か實意や鶏卵酒
 疑ふた時か初音か郭公
 政界に耳を塞きて冬籠
 菩提樹の涼しき庵や靈祭
 昇る旭に露の花散る青田哉
 蒲公英や大演習にふまれても
 凱旋の軍馬嘶く花野哉
 灯に潜む霞もあるか春隣
 藤の花揺られ亂れて雨の來る
 白菊も黃菊も同じ月夜かな
 夜櫻や開ゆる舞は京の四季
 曲りくねり來る風寒し裏長屋
 落かゝる日をさへへ鳥峰紅葉
 思ひきや晝の礎を二尊院
 茶粥炊く瓢の米や桃青忌

凜として賤しみはなし男へし
 春の隙思ふ程にもなかり鳥
 吉兆を師走狐の鳴く夜かな
 藪入に遊び勞れて戻りけり
 掛け忘れしたる瓢や花の醉
 秋の蚊や人の油斷を強う刺す
 鐵鉢に慈悲のこぼるゝ施米哉
 干してある舟の蒲團や散る柳
 空想を繰り返す夜や時鳥
 數書いて只行春を名残りけり
 露しんと夜學の灯据りけり
 時鳥旅に思はず響けり
 端山未だ早し深山は初紅葉
 大年や鶴祝ふ戸の物静
 有明や眠る灯影に露雨時
 花の咲く世を巢籠や郭公
 豊なる世の帰や浮寐鳥
 うら表なく夜の明る櫻かな
 威勢よく仲たつ梅の梢かな
 帷子の紋付目立山家かな
 遠碁思ひ出多き旅寐哉
 罪作る秋とはなりぬ鹿の笛
 猿酒や山に居ながら味しらす
 數島の道に這出る蛙かな
 葉櫻や紀念の句碑を濡す露

探る程思ひ出多し古曆
 爐の中へ踏込む雪の草鞋哉
 寂然としたる禪寺や歸り花
 佐保姫の化粧水なり雪解川
 手を添て春待つ指を折らせ鳥
 往事皆一夢よ花も散り果て
 谷の戸を明けよ巖の握りこぼ
 花待や峰の雲さへ暮はしき
 接兼て又貰呑む木下かな
 噓に面落しけり壬生念佛
 柴の戸の茶煙遅し霜の朝
 風暮れて月にも残る霞かな
 七草の雫氷るや白折敷
 とろ／＼と涼し樹院や岩枕
 夜は月に親しき松を蟬の晝
 來る客は筆に徳あり梅の花
 世に出たる心地と成ぬ五月晴
 大隱は市に潜みて關根分
 船子窓通れぬ虹のいらち哉
 親船を出て涼しかる小舟哉
 一夏して凡夫の垢を削りけり
 同じ流れ汲む里に梅薫り鳥
 遺稿編む一燈暗し遠蛙
 見らるゝも客の曠なり嘉定錢
 晩涼を趁ふ徒に交る微醉哉

35 拾叁

人は皆涙にもろし 涅槃像
掛合に叩く木魚と納豆かな
吾夢の醒めて再び花に蝶
九重の奥にも花の御宴かな
八沙路に舟見ぬ朝や八重霞
夢破れて顔りに塞し冬の宿
改めて今日は時雨よ手向の日
行燈は何處へ置ふそ初蚊帳
坂登る牛遅々として雲の峯
傾城の眼に涙あり 秋の雨
月の雪積や此君十八公
飴なめて雅談に盡きす窓の梅
秋の雨曇さの残り洗ひけり
更てある様には見えず除夜の門
泣く子噛む物にせられぬ鉢叩
秋近し毛瓜のふとる癖の鷹
見乍らに來るやら遅し月の客
順の峯花の瀧にもうたれ 鳧
根なし水鶴に踏れて温みけり
月の戸や叩けは寐ても居ぬ返事
氣に入た難に引けり母の袖
龍天に昇りて風の薫りけり
折て見て花の心を悟りけり
よろこばせ易きは親よ生身魂
納鶏花の曙風ひけり

35 拾四

鷹狩や不二を脇目にかさし笠
盃を辭して廣げる扇かな
朝顔の物と成りけり忘れ杖
歸化人の繪踏舞も踏む心地
物の香の菊にまごまる九月哉
名月や一生徳な家の向
樋大工の晝寐の上や蟬の聲
谷底に冬は残りて初霞
露と水隔て、蓮の葉は浮きぬ
豆腐屋も世話しう成ぬ木の芽時
菓の音讀書の聲や雪の里
落魄の詩人を泊めて月見かな
うら白を敷てかざるや初懐紙
戦國の世は昔なり花の御代
寐姿に知る世の富や稻の出來
年毎に山若ふする櫻かな
雲上の秀峯氣高し初日の出
見學の地圖飛しけり青嵐
書出のあて字を書きし八百屋哉
日和見て蘭の根洗ふ彼岸哉
角ためて居るよ御陵の蝸牛
風の音松より秋を傳へけり
末枯る、疎林に暮鴉の哀鳴す
下加茂や若葉に餘花の哀れ咲
残る香の床し時雨の翁草

35 拾五

山川や紅葉かつ散る夕嵐
松譽めて這入れは奥に牡丹哉
魚釣は黙つて居るよ行々子
金銀の波に浮きけり月見船
見られたり見たり花見の幕の内
風や漁師の夢は海の底
惜まる、夜は更易し今日の月
帷子や加茂の川風肌にすく
蝙蝠や神話の残る磯の洞
蓮の香やむめふのやみの消る時
梅の庵金衣公子に問れけり
春雨や遊ふ積りの人か來る
虫暗や葎に包む無縁塚
寂深し小雨降夜の虫の聲
歩行のも榮耀の内や春の風
小忌衣笹湯の雫氷りけり
夕顔に涼し妻と語りけり
絹をさく如し一聲郭公
驚いた鴨に驚く繩手かな
振り賣の筭長し五月雨
手料理の小鴨に酔はん今朝の雪
葉櫻や夢の跡鳴く明鳥
時鳥草庵に臥龍老てけり
鶯や膝折直す机先
忘れたき事思出て秋の暮

百七十四

35 拾六

ひとつ葉や青くも冬の寂寂り
糸竹の音色にもあり秋の寂
身を寄き樹にも葉はなし寒苦鳥
羽衣の松を根にする霞かな
山里や柴刈るだけか年仕舞
手枕の華骨に入らざる新酒哉
手に受る施薬の上や桐の花
宵闇や庭に白きは雪柳
六日迄難なし花の夕吹雪
日南にも尻のすわらぬ猫の戀
勇ましき學生團や雪合戦
ああれも夢これも夢なり年の暮
女教師や言葉の花の年賀狀
桐咲くや風風の如な根なし雲
繪團扇や月の石山水の瀬田
三大の義務の初日や學校入
稻の香に浮き立つ民の心かな
灌佛の盥や福壽海無量
百舌鳴や朝霧晴る、川向ひ
涼しさや水を捨るも水の上
大岡の出世初めや浮鯨
見返せば曲折多し年の暮
開く蓮散る蓮此の世彼の世哉
薄物や懸香匂ふ摺れ違ひ
老松の雪衰る院の鼎かな

35 拾七

錢までも生た功徳や放し鳥
濡てから高からけする沙干哉
鳴の立つより哀れなり雨の蝶
初戎大黒連れてまいりけり
梶の葉や思ひのたけは盡されす
秋立や露持つ笹の葉先より
魂棚や問ひたき事のある佛
杓井戸の茶の水盡す梅の花
牛阿る聲は婦人や麥の秋
散る花やそゝろに起る菩提心
子心に亭主振あり雛祭
垣越しの咄も長き小春哉
諦めて雨戸しめけり雨の月
薫りなき花の散る夜や玉子酒
梅か香やそよりとゆらく朝灯
伊達矢負ふ上に勇まし掛葵
まほろしの様や若葉に華一つ
葉櫻や人何時までも若からず
霜の聲兵書練る灯に障り鳧
片蔭や扇ならして人の行く
古歌に訪ふ遺跡や花の峯つゝき
温み出る水玉川に流れけり
人妻となりて淋しき踊り哉
穂に重み譲りて軽し落し水
足る事を知てか戻る花の人

35 拾八

罪の無き思案に暮る、翁の日
見せ自慢見功者菊を廻り 鳧
永き日や家庭教師の氣草臥
山菊は百種の中の最高哉
商人と一日呼れて葉竹賣
五月雨や梵字の滲む新卒塔婆
ふいとして晝月見たりねむの花
花の産む月千金や吉野山
日と共に萎み暮たる牡丹哉
婆連か嫁の相場の彼岸かな
勤儉の家には苦なし年の阪
若草や昇る朝日に霜煙る
餅搗や子の朝起もよしあし、
青柳の軒燈淡し時鳥
駒犬の半身白き吹雪かな
國の義務盡す子産て初幟
鶴遊ふ神松に蘭の香り哉
桃折れば牛の面出す垣根かな
藥湯に又入り直す夜寒哉
結立の菱垣匂ふ時雨かな
玄雲も調へて夏經謹寢哉
乞得たる雨千金に優りけり
名月や惜めは秋も明け易き
須磨琴や月の柴戸に夜もすから
幽魂を慰む花下の句會かな

35 九拾

蓮の香や寝て極樂の坊泊り
奢らねは福は内なり鬼は外
顔見世の批評姦まし揚屋町
銀世界眺める粹な世界かな
盤賣月の夜頃をいどひけり
雲去來松明暗や後の月
氣ゆるみのせし藪入の衰顔哉
出代りて花屋の聲や寺男
溪流や曲一曲に水温む
寒月や一錢投す慈善鍋
米藏の並んで眼立つ柳かな
時雨る、や便所をみる瀬戸傳ひ
仇し野の雨になやむや秋の蝶
菊の香や蝶も來そふな朝日和
暮る、日の松に片寄る櫻哉
愁腸の夢や結はん花の雨
雉子啼や村議伐木決す山
春の山越ゆれば古き都かな
翁寂してよき媚茶頭巾哉
刺鯨や里に似合ぬ嫁の辭儀
江の島や花の様なるさゝら波
十字架の身にも散る花論し鳧
墨摺た硯も蝶に乾きけり
曙や花に定まる峰の雲
眼にも露たもつや月に琵琶の曲

35 貳拾

伊達にもつ珠數もまへと御忌詣
蚊柱や貧民窟の夕燈し
貰ふても子は育てたし秋の雨
落付のなくて出いらつ荒鷄哉
思案にも果は有けり大三十日
御身拭春も殊勝な一と日哉
子雀や一と所へ下りて來る
風明りして木の葉散る夕かな
夕立の漏る受る桶洩にけり
花の人酒に呑まれて戻りけり
思ふ事なくてうれしや年忘
咲き満る櫻に狭し渡月橋
繪端書や海邊の松の筆初
靈山や神代からの茂りかも
湯加減に花も香もある新茶哉
莖よく色にとみけり紫野
艶麗の玉座に花の吹雪かな
たぶついた頭巾に寒う戻り鳧
御野立所遙かに晴る、時雨哉
脊中の子に師走教て寢さし鳧
花に嘔吐能き對照と思ひ鳧
三禮を守りて鳩は時雨けり
一汗一椀禪規の外の柚味噌哉
齒固や齒のあるなしに拘らす
花に映す月は真如の光り哉
百七十五

教へよし知れよし柳ありし門
静なる座禪の窓や蓮の雨
鶯や化石の様に立ちし人
葉櫻に奥院暗き佛かな
鷹の功祝ふて鶴の料理かな
遠里や霞を洩れぬ鐘の聲
朝寒や雨に木魚のしめる音
惜まねは雲もかゝらす後の月
養老や清水も酒に變る孝
白酒は辛しと日記假名勝に
代は進み國は榮えて天長節
羅のますもそも輕し夕嵐
鶯やしはし無言の對座客
蚊柱や其日稼きの戻る軒
名城の黄金の絨や風光る
親の功子に及ぼすや縣召
泳くより飛ぶの得手らし水馬
繪日傘や物言はぬ子の笑ふせな
大男のすねあらはなる蒲團哉
敵もたぬ身を安かれ門涼み
納家裏の翻れ日影や赤椿
萬巻の遺書讀誦する夏經哉
鶯を聞く鶯や籠と籠
花の道とはれて鶯の重さかな
春の夜やいつれ親き人はかり

若は樂の種そ日永に眠る鶯
智仁勇備はる振や暖鳥
今朝の雨花の乳房となりて覺
夜は月の秋なり晝は竹の春
尼寺や末摘む花の仇に咲く
しほらしき女名前や門柳
雀子の落して行よ玉椿
うつむくや百合は奢らぬ教へ草
追ひあげて花にうしなふ蝶々哉
鷹それて踏かふりけり溜り水
明兼る戸の罪重し寒念佛
香煙る句碑や雲わく花の山
春風や國より客の來る便り
畑打の鐵にもつる夕日哉
室に籠る墨香しき福壽草
水呑みも酔ひけり箱は十二分
耳に眼をふらん提たる頭巾哉
長者とはこんな心か今朝の春
鶯の去らて暮れけり山の院
啼千鳥月の出汐や浪の隙
したふへき影さへあらて昔清水
碑を浮かす根張りも強し松の花
青き野を踏むや恩賜の松葉杖
花の外塵なし船を汲む流れ
書寫山の麓に并ふ土筆哉

時明りして雨の降る五月哉
利に走る浮世笑ふて畑打
稻光りあはや乾坤眞二つ
山吹や古墓に唯の手向花
取り入れる綿に小春の暖み哉
長閑や蛇籠にたまる水の泡
竹の葉の零散らすや雀の子
魂棚や打れた杖の置所
君に千代ゆつりて鶴は庖丁哉
春雨や歌留多に早き灯の仕度
花に眼の勞れ残りて春の行
和らかな手は摘負る木の芽哉
下車數も日數も欲し春の汽車
下子や月も宿らぬ溜り水
吹き替へて新たに涼し蘆の風
名月や大宮人の歌むしろ
花よりも見心深き紅葉かな
皆田から戻ればたらぬ團扇哉
夜は夜るて氣の落付かぬ彌生哉
覺めし兒の枕と遊ぶ長夜哉
桃咲や日光浴を門むしろ
碑の前や扇に珠數と追悼句
時雨會や空の曇りを袖の露
火の消た煙管くはへて接木哉
虫干や是れも先師の遺し文

芳しき法の落へや御取越し
油斷なき搦や鷹の眼ざし
鶴遊ふ御園に風の温みけり
花の文空見直して封しけり
願き事の利く石探る落葉かな
逸話集など物せんや冬籠
鳥羽玉の夜は猶すこし猫の懸
二の鳥居まては小暗し夏木立
揚る程聲の廣かる雲雀かな
花と碑の景色宮真に残しけり
一疋の蛙の聲にかはつかかな
岩鼻に水折れ曲がる柳かな
降りかゝる雨に音なし今年竹
朝顔や明日咲く花の水加減
水色は浮き心かや春の空
笑はしに來る友もなし秋の暮
水滂を落して落す頭巾かな
常高い敷居跨ける禮者かな
夕東風や汐風呂の顔に出る
世の塵は埋れて清し雪の朝
惜まれて散る日を花の雪解哉
炭ついて都の作法語りけり
人一生名は未代の櫻かな
世の沙汰の盛りを花の盛り哉
勅筆へかゝる吹雪や花の山

南天の花も盛りや五月雨
葉櫻や讀書に耽る茶屋美人
竹馬を乗り捨てあり花野原
佛生の産湯にしめす千早振る
花室の手入に汚す紙衣哉
千丈の瀧五百丈霞みけり
泣て來た子に座を譲る樺火哉
朝顔の色七化やさらは垣
旭さす筆の海より薫る風
春一夜天下の美人集めけり
放された虫はよい音に戻り覺
鈴下駄の音愛らし難の客
銅像の半身濡る夕立かな
清淨に汚す夏書の硯かな
遠蛙軍旅に一詩得たりけり
金柑や乳母も添寝の枕元
世は眞事さゆゆかぬ案山子哉
子の愛に引かれていかむ田植哉
屠蘇の醉妻に小唄をゆるし覺
砂に焦けて女哀れや鯛曳
蜆賣つて自活の道を講しけり
寺の櫻欄蠅叩くなど吳に覺
聖人に夢なし花の浮世にも
梅の主笑ふて茶代戻しけり
蘭の香や窓から洩る茶の匂ひ

結立の髪に春日の光かな
忽然として峰高し秋の空
四方の雪消して笑ふや初櫻
卷惜む庭や花の夕明り
また咲ぬ梅の木の間や星冴る
洛東も春また寒き姿かな
菜の花の果から來たり船上り
蓮咲くや未だ薄暗き塔の影
共に咲く人の心や山さくら
吟情を叩いて行きぬ郭公
寢ぬ我の夢を覺すや除夜の鐘
養殖の眞珠ふとるや春の潮
岩戸出し時もかはらし初日の出
放し鳥助けし杖に追れけり
切れ風の行術果敢なき川向ひ
箱の中行くや神輿の括包み
紙衣着て佛に近き心かな
面白う浮世を暮らせ花の春
海棠や何時寝足らぬ嫁の顔
亡ゆ影を偲ふや虫の聲悲し
けいさよき蓮や肥すは清き池
齒固や壽命に不足なけね共
懸額は恩師の筆や冬籠
筆濡らす程時雨けり翁の日
花の庵留守に行脚の置手紙

雲と見し不二も慥や今朝の秋
善人に語學教へて暮遅し
燈籠に又新らしき涙かな
年毎に榮ゆる菊の根分かな
鷹匠の勇みや殿の添禱
舟の夜は水から明けて遠柳
火によれば後へまはる寒さ哉
飽ぬ夜の更ける葉や月の鐘
おはします雙振や魂祭
鶯や俗耳を洗ふ一閑居
燒き蝶の骨に難客騒き覺
遠乗の馬休めあり若葉影
庵涼し燕も風も通り脱け
氏ならぬ育て位高し鈴の兒
山影や菊の齡を映す水
菩提樹や珠數となる名もなき蓮
蓮の主花より白き心かな
小戻りの用事を問へは扇かな
人妻の口紅にくし手まり唄
人柱長柄の里の桃の花
鳥雲に入りて静けし湖の上
秋淋し飯櫃の底かする音
自然雅を持合ふ梅と菜家哉
灌佛や産れた日からひとりたち
爪に椎の礫や板ひさし

手を突た跡あり雪の瓊曉塚
時鳥雲井に秘曲奏しけり
木の間洩る院の灯しや夏木立
春の旅名所に枕重ねけり
其徳の空にも見ゆれ御講風
夜の内に雨は止み覺雉子の聲
戀やつれするも哀れや船の猫
夕日さす小窓の低し枇杷の花
馬買ひて今日乗初の花見哉
渡る瀬に仇浪もなし天の川
ちり際も崩れを見せぬ牡丹哉
鶯の筆措かせたる詩箋哉
我國の人の心や櫻花
叱られた母の戀しき夜寒哉
老は只日南はつこや春日影
鎌の柄にかけて戻るや蚊遣草
廓の雪玉子に味の有る夜哉
謠初隣の笑ひ静めけり
長江の渡舟閑なり春の水
汗返る夜風や六つの花衣
長者には咲く花もあり富貴草
干てある張子茶碗や竹の秋
下草も潤ふ菊の雫かな
鳥一羽枯木に淋し暮の雨
死んで行く先の苦勞や御取越
百七十七

36 九
世の富を知るや雛の飾り付け
時鳥瞑目沈思する夜かな
熊を得た嘶をかこむ燭火哉
老の我も世に従ひし姑洗かな
天然の園は美し雪の琵琶
階子田の水や日毎に温む色
月の洩る家に戻るや鉢叩き
水遣れは立直りけり角力草
錦てふ名もよし市の櫻鯛
ぬすみ見る妹か日誌や春の宵
産み月の腹を抱へて年木樵
梯子賣女からこう日永哉
昇爵の祝ひを兼て菊の宴
打洩す蠅に塵たつ疊かな
撞き惜しむ鐘や櫻の麓寺
笠とれば雪散りかゝる華頂山
暮て空明て野にあり秋の色
乗り合の皆花に向く渡し哉
引やふる古證文や屠蘇の醉
容つくる日々の瓢や雲の峰
荒庭に一路極まる雪解かな
嶽啼夏の温泉山や捨團扇
鶴の血に汚れて鷹は狂りけり
世を覗く窓はもとめす夏百日
炭手前濟んた刹那や匂ひ鳥

36 拾
白酒や一家和合の高笑ひ
嘆峨へ来て寝ぬも幾夜ぞ時鳥
花に行く衣裳や蝶の飛模様
降り足らぬ雨の咄しや夕涼み
日和山雲雀の下に登へけり
草摘や野を踏たかる都人
色と香に是やまことの東海苔
朝顔やまた戸を開けぬ雨隣
雲に見て過ぐる日多し霞山
木蓮や閑居らしき門構へ
初雪や世にちるもの絶て後
次へ水譲る火繩や雲の峰
常もかな初日に向ふ人心
種蒔てから旅立の支度哉
初夏やはひろの匂ふ宇治の里
草の禮餅にしてから返し鳥
鶯子啼や風は微塵もなき日和
何事も心に足りて宿の春
朝馬場は乗心地よき雲雀哉
虫鳴や未だ紐解かぬ笛袋
短夜の夢や十有三とせけふ
にこゝと恵比須顔して棚下し
古墳一基冬枯の野に荒ひけり
寒菊や霜天凌く花の力
袖を引合も縁なり蓮の露

36 拾壹
花嫁に墓を教へる彼岸かな
筆置て蚯蚓の聲に感しけり
世渡りの綱も濡さす盆三日
年號を香に開分る櫻積
君見ませ通ふ千鳥は夜枯せす
蝶は莊子莊子は蝶か夢の夢
此れたまゝ寝入り鬼炬燵の子
露の戸や宗祇を祭つ夕灯し
秋深し千尋の底も紅葉鮒
最ふ一里最ふ一里とて暮遅し
名言は耳に残りて魂祭
新園に風致を添る櫻かな
草の名は知らず珍し花の咲く
鳥の踏む塵に音あり霜の朝
涼むにも奢りのあるや水の上
御簾巻く清涼や夏の月
露寒し塚を廻りて濡らす袖
炭繼いで置いて手に取る箒哉
芹なつな朱雀は古き名所哉
夏海細き波間や帆立貝
輪の切れし底抜け桶や落椿
夜櫻や花街は戀の伏魔殿
桐一葉膝を叩て悟りけり
一昔し三年世の今日や花供養
思ひ出に遠歩行せん更衣

百七十八
36 拾貳
雨の牡丹貴賈廊下に黙しけり
芝能や思出多き笛の律
白菊も手向て香の煙りかな
須磨の秋月は景色の主かな
閑古鳥一人出家の下向かな
足音に紛れす雉子の芝移り
花も葉もみがいた様な椿哉
伐り惜みして雨に逢ふ牡丹哉
とこやらに鳴いたやう也初蛙
一村を一荷にしたたり初茄子
すへられて尻の落付く瓢哉
頂上に杖奉納す不二詣
竹の子や本の榮へは根の力
陽炎や脚胖に積る土埃
なるといふ日を幸に種下し
朝顔に一つは隠す枕かな
歌味を鳴き深め鳥小夜千鳥
藪入や寝させて置くも馳走振
雀子や分捕砲の中で鳴く
梅か香や門違ひとは知り乍ら
卯の花の雪や久しく消て猶
整列をさして青きを踏せけり
翁忌や念佛に勝る十七字
裸木に鳥淋しく時雨けり
親の名を次て薫れよ手向花

36 拾參
妻も出て拂ふや雪の戻り牛
釣橋に膽冷しけり夏の旅
家柄も譽めて立ちよる門茶哉
奥院の月に氣高し桐の花
二の銚を打れて狂ふ鯨かな
花に美妓鬼に金棒のたぐひ哉
月花の旅につかれて冬籠
雪の日やあり合酒の獨り酌
玉苗や豊葦原の寶草
行宮の古へ語れ山櫻
人の手に觸れたふりなし飛ぶ螢
夏川や砂に底する渡し舟
師走人電車の網に掬ひけり
古池に影新らしき柳かな
松風の後に遠し沙干瀉
訪ふ人に火を打つ庵や初時雨
紅蓮や尼の昔は廊の松
初雪の沙汰も物めく都哉
大盃を座右にすへて試筆哉
訪ふ村のなだれ家並や宵砧
曉の夢破りけり春の鐘
蒸饅や燐火の透る網戸欄
咲満ちて風も通さぬ牡丹哉
太郎冠者御前に候年忘れ
よし切や種蒔かねとも茂る芦

36 拾四
輝や腰に喰入る繩の帯
和田津海の浪静なり歸る雁
鶯や足音低き文使ひ
活る手に薫るや梅の朝雫
際立や小雨をさし未開紅
青麥や品評會の選に入る
にしり出て啼鶯をのそきけり
萩咲いて變るや水の汲み勝手
明日は見る花に心の行夜かな
旬匂て咄しの盡す簾
越方のなつかしき夜や歸る雁
煩悩の盡きた夜明や露の音
太刀魚や海の中にも皇國振
啄木鳥や六波羅堂の古板
種蒔きや最ふ遊はせぬ川の水
淋しきは晝の姿や竹婦人
笛になる麥の葉先や別霜
居らせつ立たせつ嬉し着衣始
茶屋の名の行燈掛けたる柳哉
雁落る湖心や船の返し浪
經を讀む聲にも連れて行々子
花も實も手の内にある接木哉
芦は枯水涸れ廣し江懐
小庭に禰宜も宮居の花見哉
追戻す關もあれかし神の旅

36 拾五
曇りなき薫りや天に滿る梅
走馬燈處世の道を教へけり
橋涼し夜網を投る水の音
孫に手を添へて佛の産湯哉
腹返し春返し狂ふ千鳥哉
地に降らぬ雨や柳の煙る程
月雪の世を去りてこの花の影
虫も機械るや嵯峨野の草錦
庭たゞき語れや神の御大禮
若草や歩行をめたる男の子
一羽つゝ戻る鳥や春の雨
へたてなき寝轉ひ様や床納涼
山吹や文士閑居の亂れ垣
櫻鯛籠も柳と呼はれけり
膝に手を重ねて聞くや霜の鐘
塙取さす供にはくるゝ花見哉
祈る雨祈らぬ所も通りけり
雷晴や百合に明行く春戸の山
衛士の火の消へて静かや朝櫻
清流に泥吐く籠の田螺哉
春雨やお茶を濁して客の去ぬ
妾宅で着替へて輕き袷かな
俳鴈を肥やす風呂吹大根哉
我事に奢らぬ家の施米哉
秋風や物思ひさせ忘れさせ

36 拾六
成らぬ身の成らぬ供養や放鳥
函谷の鶏はものかは時鳥
極樂の夢やお寺の花盛り
ゆれやんで黄昏つくる柳哉
夏木立搗く抹香の濕りかな
芋の露移らう月の都かな
鶯に我琴の音そはつかしき
雨となる風の重たき若葉哉
錦着て一夜の風に散る紅葉
松風の音や干菜の戦く振
紫はゆかりの色か吾妻菊
面白き浮世破るや秋の風
攝待や鐘を叩くは祖母の役
五月雨や土堤に一軒夜宿
登りつめて山の小徑や雉子の聲
梅に明け柳に暮れて旅樂し
學生の棹扱や梅見船
福引や抱いて居る子に米俵
大佛の鼻穴覗く人麗ら
虫一つ露營の間を深めけり
百味てふ供物も露の花香哉
傾きし軒に真直な氷柱哉
夜泣する石さへあるに時鳥
岩を踏む山になつかし花莖
文臺に薫るや春の手向草
百七十九

時ならぬ雪や降り積む花の上
仰き見る瀧千丈や若楓
嫁にさる子程通りけり市の雛
積接や花の香ふせぬかんはしさ
泥君に憎まれて着る紙衣哉
經を讀む聲も霞むや山の寺
風呂吹や法話のあとの夜食膳
佛の座敷の敷を摘れけり
花孕む山や霞の岩田帯
鶯や美しき我歌の國
千竿に縁つなかれて梅柳
組下し紐美しし飾鷹
飛行機の行衛や霞む山の上
鈴虫の聲澄む神の籬かな
花潜る篋や馴れし棹遣ひ
初虹や空も錦のひとなかめ
枕廻草鞋ときく覗きけり
石投けて水底さく紅葉かな
茶煙のはては裾野の霞かな
花もかく咲いて優しき菊哉
曉の雲や櫻の峰つゝき
花篝戀の鬼門に當りけり
水も寝る夜頭を鴛の陸み哉
泣て居る子は罪のなし時鳥
老僧の徐ろに掃く落葉哉

鶯や頼着なしの豆腐賣
窓叩く雨斜なり蜀魂
月はめて居る間や萩に玉の露
出代や都言葉を國土産
新酒に醒めおくれけり駕の醉
青柳やたそや行燈の影ほのか
山畑や雪打て居る小半日
油断して野邊に晝寝の兎哉
迷はねは暗も明るし虫の聲
寒天も乾かぬ冬の土用かな
雲早き風や芒の一穂より
寂聴かぬ聲は樂の落葉哉
攝待や和尙のゆるす寺の椽
遠淺に波の光りや星月夜
難煮食て大望の身を肥し鳥
籠抱いて寝るや本来無一物
蓮池や蝦茶袴の棹扱ひ
師の恩を書いて見せけり筆始
春の日や不二を庭なる一構
月の出て琥珀に似たり蓮の露
其けふを思ひ出して諫鼓鳥
塵塚に咲く仇花や小六月
心にも錦着よかし御忌詣
一聲を湖一文字や時鳥
假理に蘇りける山葵かな

暮て行日は惜しまねど花に風
草深き中に生れて百合の花
陸しき姿や雪の家二軒
下馬札に枝もみたさす糸櫻
笑ふ度入齒の光る頭巾かな
風呂に酔ふ旅の勞れや春の宵
初花やまた仕上らぬ道普請
浦島の傳もあり蜃氣樓
麥の穂も孕みて四手の田長哉
いかめしき中に左近の櫻かな
鶯に茶のよき事も覺わけり
啄木鳥やさもせはし氣に嘴の音
夜や涼し遠音の笛の川向ひ
月待て定めん竹の植所
遠虹に趣き見ゆる柳かな
鞠垣にもつる風の柳かな
放し龜提て來にけり蓮貫ひ
雲遊ふ中に花澄む流れかな
寂なからに草喰ふ牛や揚雲雀
船人に飯の白さや蜃氣樓
庵は古り遺妻は老いて姥櫻
冬の蠅藥鏝の手に眠りけり
負た碁に退て引寄す火鉢哉
雨の牡丹爪折傘をさせ鳥
山吹や鳳凰堂は川向ひ

努力十年表彰されて出代の
庵閑に青葉茂りてほととぎす
座に戻る間もなし又も時鳥
花に笠貸たし我は濡るゝ共
一折の連歌味あふ利茶哉
まどろめば來て居る蝶や窓の先
手にとれば筆のさまある土筆哉
伐り兼て手紙見直す牡丹哉
孝は世に輝く瀧の紅葉かな
石に迄ひく様なり秋の鐘
花守や下地は好のまたら酔ひ
冬籠忙はしかりけり裏日本
儉約は常の事なり初松魚
蛤や港言葉で賣る女
春の風留守の机に埃かな
盧生さへ知らぬ夢あり竹婦人
夕顔や垣根養ふ流し水
藪入や出易き物は里心
初霞磯山遠く松近く
鳥や入る盡さぬ思を雲の上
蓮ならて牡丹の花にまつ佛
百千鳥うつす野守の鏡哉
衣更着や芳野紙程曇る月
苔の色青し幾世に盡さぬ瀧
野馬臺の詩に眼をとしぬ涅槃像

御忌詣古門前を戻りけり
蚊の聲や太刀打習ふ御曹子
須磨明石夜流車は惜し春の海
嬉香や額つく袖に薫る風
芥子の雨軽ふ降れよと思ひ鳥
口紅の干く風吹く紅葉かな
口上は外母の役なり亥子餅
鐘遠く聞夜は近し秋の聲
行く春を花活けかへて惜み鳥
草深ふなる程虫の高音哉
露の目をする傍に晝寝哉
媒人はくゝらぬもつれ柳かな
蛙鳴く宵や上着の袖たゝみ
降らす照さそ寝苦しき暑さ哉
春風や時々蜻蛉の浮上る
御手輕の料理も出來て花見茶屋
梅探り詠諷ふて通りけり
壽も長かれ華に眠る蝶
謎のまはらに白し朧月
穂芒の風に姿を作りけり
風呂の沸く迄の要想や草の餅
禪をしほる夜振の堤哉
冴返る朝や透間の風寒さ
一心の聲は曇す寒念佛
攝待や慈悲と情は人心

梅散りて經讀む鳥の聲淋し
母はまたやつし盛りや初雛
時鳥嬉し世事には掩ふた耳
日盛りや石にしみ込む手向水
水仙や佛御前の佗住居
硯にはまた灯のほしき蓮見哉
水底に月の曇りや初蛙
飛ひかふは梵字の如き燕かな
荒れ果し廢寺の跡や佛甲草
折過ぎて出るに出入れず數の梅
念佛の鐘や餘寒の村はつれ
寂寞と見へけり落葉の嵐山
淨土迄かはれや梅の手向花
陽炎や佛足跡に残る雨
打つ程にひく左近の櫻哉
炬燵から糠に釘打つ異見かな
花の山出抜けて見れば月夜哉
人去て花に静な月夜かな
奥探くる積りか花に草鞋かけ
美しき鳥の來て鳴く新樹哉
河骨や増水知らぬ渦の中
地續きの屋敷も買ふて菊根分
惜まれて散るこそ花の誠なれ
木曾山や一つ巴の初わらひ
帆をかけた船を見ぬ日や雲の峰

雀羅張る古門前や蚊喰鳥
土下座して献上のほたん通し鳥
嫁に遣る子に教訓の柳かな
年波は淀まぬ除夜の流れ哉
京浴衣踊上手と見られけり
秋も此道から來しか草の露
時鳥楠の下風匂ひけり
稻妻や貝殻山の崩る音
拾ふたる錢鳥にして放し鳥
明白に見ぬ笑顔や朧月
嫌ふ程眼につきやすき毛虫哉
炬燵まで調べて出たり蜃賣
水浴びて長閑な顔や籠の鳥
師の句碑を問へは教ゆを櫻哉
郭公山又山へ響きけり
若草や車引く牛鼻動く
寝て聞きし時雨は夢か窓の月
水清き里に美女あり菊の花
逢見ての夜は耳貸さぬ水鶏哉
利根はまた出水の沙汰や花芒
池水につれあふて飛ぶ燕かな
人妻の戀慕ゆゝしや玉子酒
懷舊の嘶しも出てつ納涼臺
積る間か世の傳や春の雪
嬉しさや花に近づく夜の雨

目の罪の咎も重て御忌小袖
貝拾ふ子供ははらりと霞み鳥
散櫻峰の白雲動きけり
里の富目立や稻の出來具合
門跡の手蹟はめ合ふ蓮見哉
雀にはまた罪のなき青田哉
氣短に飛んで見せ鳥雀の子
酒肉五辛散らる庭や花の寺
前途猶望みは遠し今朝の春
憂さも青葉の露よ玉まつり
鯛提けて來るや花見の東山
夕つく日さすや紅葉の高雄山
枯芦の陰や淋しう月の照る
躑躅咲く坊や紫雲に包まれて
艦隊旗日に光り鳥春の海
子に見ゆる育て上手や芋作り
虫籠を釣て秋聞く都かな
接木して我子の年を數へ鳥
道の徳芭蕉の庵に解かれ鳥
芹丈けて河骨一本黄みけり
夏瘦とのみ思ひきや岩田帯
解脱して水に歸るや雪達摩
泣むよりも笑顔身に沁む魂祭
暖くそうに寝て居る鳥や花の山
逢ぬ戀を追ふて戻りけり
百八十一

土橋黄昏て蝙蝠月にとふ
天井の低きをうらむ暑さ哉
亡き人を弔ふ夜半や郭公
散る花や鳥も詭音の亂れ鳴
大聖は大愚に似たり蛙の戸
馬の眼にうつる霜夜の焚火哉
里遠き山懐ろや葛の花
文使ひ糸萩の戸をたつねけり
開く蓮散る蓮彼の世此の世哉
雁近き羽音に夢は醒にけり
見て聞けは淋しふもなき砧哉
眺むれば花近よれば十七字
蝶追ふた果に遠富士見出し鳥
雨空もからりと晴て今日の月
涼しさの見へ鳥山にちらつく灯
徳徳ひ師恩思ふて花供養
暮はしき影や紫雲に入し月
夜櫻や諫言耳に逆ふ友
粹か身を喰た果らしや文紙衣
白菊や獨りなからも茶の手前
一日は世に遠さかる接木哉
頬ににじむ笠の紅緒や春の雨
色即是空とこれ知れ散紅葉
我事に誇らぬ家や粥施行
尼の庵名も墨染の櫻かな

小堤につくく沙千の戻り道
炭竈や花も紅葉もいと煙り
一日は内に居よとや春の雨
雲雪を作る萬葉の櫻かな
湖一つ控へて涼し夏の月
筋塀を見越しに高し桐の花
鶯や鈴振る猫を抱て聞く
牙返る夜や小狐の畏に泣く
閻魔堂に誰か備へしそ鬼薊
日本とはよき國の名や初日の出
雪道や貧乏徳利の行違ふ
瑞雲に靈鳥舞へり花の春
罷り出た様に啼立つ蛙かな
佛を偲ふ法蓮の花見かな
鮎汲や影おく花の下流れ
十徳を得たり深山の運櫻
掛け捨てた小田の車や雲の峰
送火の跡や虫鳴く戸口先
雀蛤となつて踊を忘れけり
比叡風蠟割る指に答へけり
生前の偉徳 偲ふや魂祭
玄關に貴名受けあり福壽草
水飯や榮耀に飽さし望物
馬に打つ鞭のふれけり花の枝
五月雨を忘れ心や風呂の中

鳩の扶持運ふや寺の歸り花
我戀は夢より醒めて不如歸
小人の閑にゆるしむ暑さ哉
打水の餘りやそく塀の腰
着筋るも亡き師の曠や墓參り
移る世に移らぬ花の色香哉
夢誘ふ音となり鳥月の雨
染急く白絹 積て生姜酒
書馬堂の切髪吹くや秋の風
松枯れて影なき清水惜みけり
譽拾にして行秋の流れ哉
献立をかへて出しけり初脛
摘草の子まで上手よ宇治堤
死ぬ事を知つて佛は生れけり
千鳥開く宿や後も前も海
春風や障子明けたり閉したり
京染や洗ふ加茂の潮春の水
月今宵君居ませはと思ひ鳥
親にまて着せる錦や司召
畔道や秋待人の高咄し
松一と木添ふて風情や花の中
ふらこゝやはつみの附きし暮境
歸り花同様に薄き縁しかな
年月の知れぬ古ひや張火桶
雀子を子借に買ふて放しけり

半分は夢も残りてほととぎす
握り飯春の山から轉ひけり
千金の小判散らすや春の廓
御園生に薫るや菊の朝ほらけ
遠蛙鼓膜のかゆき夜なり鳥
風は今水の上行く落葉かな
沖霞流笛鳴らして船の行く
提燈の鱗口もあり花の果て
信用は身の寶なり年男
秋の鐘夜陰に凍んと響けり
輝は金の成る木の二葉かな
參詣の多し十夜の真如堂
彌陀の手に落てかざるや菊の露
師の像に琵琶の秘曲や春の雨
限りなき朝の景色や春の海
輝の手にそなはるや衣食住
旭に向てふくる雪の雀哉
我心おさへて花と別れけり
幾春を花に見飽かぬ吉野哉
堰止めて置はや花の飛鳥川
學ふ友寒椿提けて通り鳥
小修焼く煙纏る夕べ哉
孤待や三代の主慈悲に富む
蓮の葉に輝く月の光りかな
伽羅よりも床し仁孝は世に薫る

辻か花よき友垣を得たり鳥
地酒とは野呆な好やたかむしろ
松の戸や月に見に来つ宿の妻
是非もなき嵐に誘ふ一葉哉
菩提樹の實て數珠繫く日永哉
其奥に匂ふ雲あり八重霞
絹ふとん枕低しと思ひけり
夢寒うさめて時雨を聞夜哉
鳥雲に入るや遠目の利かぬ朝
掛茶屋の入口狭き紅葉かな
縫い上た頭巾我が手に冠せ鳥
居士の碑を引立皮の櫻哉
垂れる枝ありて春高き柳哉
明け白むのもまた早し峯の花
五月雨角力の小屋を流しけり
仇怨の情の溢れけり春の宵
ゆつたりと暮し丸みや春の月
源氏讀む窓の乙女や鹿の聲
無作法な人には見せぬ牡丹哉
池よりも村の小さき枯野かな
山寺の竹伐すかす彌生哉
紅紐の笠冠り來ぬ金魚賣
蝶舞ふや野邊のそよ風眠り吹
禮節は家の美風や生身魂
白露や草葉の上にと世界

凌霄の露もうけたり化粧水
客送る女の聲や春の月
散て尙尊の残る櫻かな
春もまた寒し千鳥の盈れ啼き
靈山の雪とこそ見れ被け綿
如意提て池の蓮切る差圖哉
風流な挨拶振りや梅見客
散花や卒塔婆小町に似たる刀自
詩趣向に慎まる月の一座かな
執念くも我身知らずか火取虫
陣刀の銘探る灯や不如歸
無常とは愛か風の夢見草
瓊曉忌や經讀む鳥も庭に來て
禪話雅談會す書院や竹の秋
區も丸ふなりて賑し春蠶哉
二度來ても飽ぬ須磨也後の月
玉の露碎けて散や蓮の上
一輪の牡丹に狭し大廣間
峯は花籠は酒のはやし哉
祠堂金新茶も添へて納めけり
夏風や池塘に松の聲高し
政海を過て故山に雜奏かな
繪襖を彩る雛の燈しかな
降る雨に濡たも嬉し薬の日
一升は夢の暖くみや計り炭

石塔は寂ひ古ひけり昔の花
天下とる氣も衰へて簾
雪の道近敷へて案しけり
物憊ふ雲なき月や西行忌
不夜城や炬燵は戀の玉手箱
白蓮や浮世の垢にそまぬ艶
頭巾着た儘の會釋や鳩の杖
朝夕に着せ綿も哉返り花
桃咲くや野は滑かな風か吹
暗かりの吐息味しう思けり
腕氣に入か燈籠か梅明り
身を隠す葉も喰盡す毛虫哉
白著は洗はて清し梅に月
花に風居士の遠芳問ふ日哉
月を春や我影踏んで降る坂
青柳や城跡濛の雨に暮る
鳥の聲花に分け入る柔かな
曳や縮潮に映る雲明り
叱られて拜殿下りる鹿の子哉
はてしなき田舎一里や草の花
青柳や空にも空の青み哉
春の衣春の帯して炬燵かな
鶯や忘るゝ頭になれは啼
緋衣の袖や蓮の花吹雪
雉子啼や谷の水汲む一つ家

砂に高く柳は風の柳かな
老いた木も若やく春の姿哉
郭公天下の俳士酔しけり
得も云へぬ風情や庵の梅柳
目に餘る野を一撫や青嵐
裾野から移す緑りや春の不二
白梅に書院明るき野寺哉
碑は寂て寂ひぬ聲聞く雲雀哉
口はかり手傳ふ老や種卸し
時雨るや句碑に泌込む苔の種
心から無垢の白衣や不二詣
橋迄と誘引れて行く納涼哉
ふと夢に先師にあふや花の陰
香に化して匂ふや花の朝雪
春雨や起されて又一と寝入
袖の雪慈悲の焚火へ拂ひけり
管剣て見れば月夜や露時雨
百年の計満山の茂りかな
なく虫に月の破れ垣覗きけり
明日有て翌なき芥子の盛哉
築地堀る鶴聲高し露の臺
福助を又倒しけり嫁か君
晝顔や草にとゝかぬ通り雨
面影は霞に立つや後の朝
若竹や性は善なる物の一
百八十三

37 拾叁

夏机にさすや真如の月明り
森の蟬心すませは静なり
姦しき文字より殖へて雛の數
世を廣ふ思へと詫し霧の雨
須彌仙の峰に渡るか郭公
なつかしき梅の花香や小春空
張交に古き矢文や芭蕉の戸
渡る雁風に力のつく夜かな
帆柱に夜千の網や時鳥
なごなく落付のあり春の雨
濁りなき流れに花の曇り哉
義足とは知らず數蚊のこまり
我儘の枝に雅味あり岨の梅
雪折の枝惜みけり梅の花
蜜蜂の得たりかしこし床の花
武裝する艦の往來や春の海
花ならぬ樹はなし雪の朝朝
笠着たる人に寂持つ時雨哉
相伴の客も美し雛祭り
物足ぬものや角力の立おくれ
文に添ふ伯母の便りや草の餅
粉黛の妻戒めて松納め
花の散る跡は牡丹の盛り哉
鬼百合も姫の手活と成にけり
身を守る角とは見へず蝸牛

37 拾四

口明た蛇籠から出る千鳥かな
長閑さは是にさへあり子守唄
述懐に耽る遊女や戀し鳥
彼岸會や善の種詩く老夫婦
更る程濡れ色帯ひて夏の月
花吹雪見惜む膝に積りけり
戀風も野良吹くものよ春の草
鶴程の白帆も見へて春の海
水鏡も吹伸しけり春の風
春風や二十世紀の人心
春の夜や笛のこぼる舞扇
義仲寺へ濡れつゝ行くや初時雨
寸進に尺退はなし蝸牛
鳥も坊も雲に入りけり紀伊の山
長閑さや繪に書た様な沖の船
鶴は子をいたはる夜半や霜の聲
見送りて居る間に霞む姿哉
去來開かむ寂深川の初時雨
春なに負ふ子は無心なり子規
落花片々鐘聲諸行無情也
取巻いて掌の筋鏡ふ火鉢哉
素裕やほどけかゝりし縵子の帯
なつかしきつぎ目くや文紙衣
猥なれて夢の半はを水鶏哉
移りよし月の鏡に花の顔

37 拾五

静かさや若葉の奥の寺一字
もめ事に日の暮かゝる角力哉
鶯も聞學に就く四月かな
名を殘す俳句の塚や苔の花
温泉も餘花も見晴らす亭や時鳥
別に降る様を蓮に當る雨
道よりも心の細し芒原
慰みの菊に客ある庵かな
如是我聞色即是空散る櫻
たまに吹風もいたはし稻の花
散り交る物さへもなき櫻哉
虫賣の財布へ入れて戻りけり
尋ねよる藁家や梅の折曲り
花の文雨も大事に開夜かな
鳥影も寫るや梅の南窓
當年を偲ふ遺墨や御忌の春
淡雪やさはれば松の一半
松蔭や何を小聲に月の人
水垢にまよふれて轉ふ田螺哉
此の日數何に暮して古曆
追ふ跡へ又來る蠅や兒の寝顔
山を脊に水に活きたる夏座敷
紅葉見や鮫冷たき朝の膳
お多福と思へぬ聲や茶摘唄
梅に月清き流れの小川かな

37 拾六

庵にも陸の曲尺あり菊の寸
大佛の覗いて御座る霞かな
牡丹の戸今日も賓客迎へけり
花の下水も静かに流れけり
露涼し花無き萩に夜の動く
鳥雲に入る日や人も山に入
機止めは鳴き出す小田の蛙哉
華曼草の花にも似たり被布筋
ちらんとす花に悲歎の涙かな
悠々と塵打拂ふ鷹匠哉
政界を離れ座敷の梅見哉
鳴り渡る五山の鐘や秋の暮
花に月裏見た様な景色哉
麗かや松の六里を覗く股
蝶舞ふや我れも浮立つ心持
書紙衣や愛する孫に汚さるゝ
桃咲や隣の鶴の産む玉子
法力に裂けし岩間や湧清水
世の表裏忘るゝ花の日和哉
船に搦む流れ藻屑や秋の汐
枯幹を巡りて馬の芽生哉
短夜のわきには長し妹か文
碑の寂に思ひ出多き時雨哉
富士よりも解ぬ雪あり雲の峯
東風吹て山の裾巻とかせけり

37 拾七

病間に若葉の庭を歩むゆめり
聞けかしに琴ひく月の小家哉
曉や西に消ぬ入る望の月
古池や風交はつきす蛙の子
春寒し議員は國の傀儡師
持直す手に風薫る團扇哉
絹ふとん虎と狸に冠せけり
丹精を幾日重ねて冬牡丹
花の香をたゝみ込みけり暮の蓮
塀越に鉄の音や夏隣
見事さに拜み忘し涅槃像
齒圓めを祝ふや齒なき老乍ら
夜も晝も紛れぬ春や月と梅
月涼し涼し寝をしむ窓の先
燕の勞れ休むや電話線
棕の實の熟し初めたり渡り鳥
行先に青山在て春の旅
逆手鎌遣ふ手や木賊刈
雀子や動きとまりし桔槔
膝抱てさし向ひけり山の月
親貢く孝の光りや蜆賣
山百合や溪の水汲む投げ釣瓶
茶へけり是は接木の三代目
佛燈の春なを寒き光かな
近寄れば川の向ひの野梅哉

37 拾八

合す手に露なこほれて初時雨
鯨鋒に喰ひ切られけり風の糸
去ぬ客に着せる手重し夏羽織
鶴も出て舞ふ吉日や春の旅
律院や夕餉の膳に今年蕎麥
仁と壽を世に薫らせて菊の主
夜狐の尻なし聲や朧月
苗代や蛙も種のおろし所
羽も聲もよふは續く揚雲雀
盗人もはめて通るや垣の萩
禁獵の掲示も古りて木下闇
島原は朧に暮れて啼く蛙
花高朵嗚呼是先師見る心地
香煙に雲夢誘ふや春の雨
風障りさへも嬉しき柳かな
手負猪雪踏みちらし踏みちらし
旅人の足のつかれや藤の花
月にして又よし花の醉心
湯のさくら彌生の隅田に匂ひ鳥
姦ましき猫の戀追ふ命婦哉
秋の夜に女子産れて明けに鳥
我と我身を焦しけり蛾
霞む眼を拭ふて春を惜み鳥
鐘聞た耳へ夜寒の這入りけり
野邊に聞く底雷や雲の峰

37 拾九

乳程に岩根を絞る清水かな
大風に吹き残されて冬の月
巻く唇吉事に使ひ古ひけり
詩に曰く俳句の興や和歌祭り
茶の被布の揃へ曠立つ花見哉
佛の日幸ひ黄菊貫ひけり
碑の裏に一つ巴や蝸牛
勝ちし菊寝もせぬ苦心届き鳥
美しき緑の春を竹の秋
呼りんに手枕捨る晝寝哉
曇る日の柿に赤し鳥羽の里
安樂に聞くや田毎の落し水
頓て引鶴も野に居て春の風
手に受て散る花の香を惜み鳥
未だ蜂の去らぬや庭の水溜り
眼に聞いて心頭に響く秋の聲
雲梯の下行水やむらつゝじ
寒月や隣に老し刀研き
引鶴や曙草も匂ふ空
咲く迄は餘所に見らるゝ野菊哉
田の水も落行果や木曾の川
梅か香や世に詔はぬ致仕の庵
譽られし梅や障子の開放し
義に捨る金は惜まざる遊團扇
梅薫る中に御扉ひらきけり

37 貳拾

早立や暑さは宿の置土産
二日灸笑ふて達者自慢哉
脛傳ふ簀の雫や時鳥
薫るかと思ふ夜もあり春の月
鳥邊野の煙も添はん散る櫻
葉と花に似て穩かな牡丹かな
竹林の聖者梅園の隠者哉
乗せて見る土筆の砂や塗机
汝無見る我も憂し秋の蝶
春の日や船成金の山遊ひ
太箸の其手に握る天下の權
我庵を誰か訪ふらし雪明り
菰に寝て錦に登る蠶かな
遷佛に賑合ふ寺や花吹雪
はんのりと旭に匂ひ鳥梅の花
木も寒うなるかと思ふ落葉哉
花に立つ日も忘れたる主哉
花の蝶花の夢見て眠りけり
強いられて知らぬ歌讀む櫻哉
秋の蝶奉捧の花輪墓ひけり
初冬や杜千軒の煙煙り
福耳の老を正座に年酒哉
杜鵑一聲空を仰けは雲深し
世事聞て鹿も鳴らん奈良の町
野に山に届くや春の影法師
百八十五

善根の種子詩く寺の彼岸哉
菴はよし曙櫻夕さくら
出代や惜しまぬ骨を惜まる
足元に立蚊柱や藪の中
竹に有春の餘情か秋の梅
心得て霞む湊へもとる船
佛日に此咲き榮や白蓮
盤式の笛の遠音や臘の夜
朝霞終には富士も隠れけり
葉櫻や京の西山東山
冬枯も知らず橋立千松島
饒好の子に進めけり二日灸
親思ふしのひ涙たや絹ふとん
露の萩名高き石を隠しけり
葉になれと葉も譽らる櫻哉
手向はや此鉢植の梅一枝
黄泉の客慕ふ夜や蜀魂
静さの限りや露の朝ほらけ
春を葉に隠した山や時鳥
苔撫て讀む塚の句や椎の花
松越に清し殊更梅の月
海苔しはにかゝる風情や春の宵
鐘遠し霞隔て暮る里
卯の花や里の夜明は垣根より
花に寐て香に包まる蝶々哉

濕り持つ花や碑に添ふ朝曇り
三井寺や參る女の京委
月涼し更ても橋の人通り
轉はした炭團の知れぬ日暮哉
鮮客や千葉寺ならぬ笑ひ聲
桃咲や嬌奢の風は吹かぬ村
茸狩や茨にかゝる慾の皮
月もよきなかめや萩に捨床几
惜むへし散れば又咲く花てさへ
日盛りやしはし途切し人通り
飛行機は風の眞上を通りけり
夏瘦の師や閑居して茶三昧
山冷へのして夏寒し籠堂
鶴下りて摘處替る若菜哉
立つ秋を未た夕顔の盛り哉
時雨るゝや山端に日脚有乍ら
朝起の心引立新茶かな
觀念は祖上の鯉か二日灸
文も武も裏表なし梅の窓
夏草や俳士葬る塚一基
草の月草の小風や秋を立つ
初月や今年伸たる竹の影
秋立て寂ぬ覗めの田面かな
見上れば飛花見下ろせば落花哉
閑伽を汲む忌や櫻散る雨模様

野煙のそれかあらぬか夕霞
手にさわる物を枕に晝寝哉
敵入の都嬉しう離れけり
一座皆佳境に入るや花に酒
花摘や塚の前なる乳兄弟
大聲や霞の中の舟と舟
美は人の花なり雪の報謝宿
雉子啼や比叡から吐て消ゆる雲
長閑や田葉粉の長き舟大工
勞れても探る名所や京の春
鶴芝も見へる日和や歸り花
不意と蚊の一聲夏の初めかな
きり／＼と熊谷笠の下に鳴く
淋しさを聞くや砧と風の音
澄にけり秋の誠を月と水
開けゆく世にも静や壬生念佛
巖通す矢の勢ひかも翔る鷹
碑は先師の靈や花供養
手傳ふて寺の戸明る蓮見哉
鐘の音も無常は告けず佛生會
來る人の結ひたかるや京柳
敵入の小袖見合の曠着哉
皆家は法の宿らし盆の月
山の端に白う暮れ行尾花哉
飛鳥の行衛は花の明りかな

一ト色に咲た操や女郎花
薫る蓮誰か遁世の佛間とや
みの虫の聲も手向ん魂祭
荷は春にして嫁貫ふ師走哉
霜牙の孤燈を守る鯛かな
冬枯や花山帳の奥は雪
時雨けり昨日の秋の袂トから
喜壽の人米壽の入や尙齒會
引足を親か教へる田植かな
一日の霜に色なし葉鶏頭
襲爵の披露を兼て梅見客
人はかくありたし風の柳哉
短夜を補ふ朝の小雨かな
汲上る釣瓶に一ツ椿かな
時鳥鳴くや雲つく天狗杉
橋や家に秘藏の御寢筆
椽て突く手鞠叱つて樂寐かな
乳母に行く乳汁經木に流し鼻
別けこたへある貫ひ人や菊の苗
行く春となるや長途の涼車の旅
春風に水鳥ニツ流れけり
白蓮や香の煙のもる窓
塚間へは高き鴨脚を教へけり
しみ／＼と落葉に雨を聞く夜哉
果樹園の接木無数や移植畑

若草や夢より淡き山の色
月清し高樓よりも草の上
切風を見切るや流石男の子
舟寄る眼當矢う霞かな
安らかに露けし豊の寶草
小社もいはれありけな梅の花
窓へ来て經讀む鳥や西行忌
寄合て香酒甘く木の芽漬
涼しさや兩手冠せる煙草盆
暮れて宿取も花見のゆたん哉
間に籠る伽羅の匂ひや絹蒲團
短夜や垣に掛たる濡れ草鞋
施しをする身となりて寒供養
浪音の上行く萩の嵐かな
是れか皆見て居た人か花戻り
野も山も景色の付や花の頃
逃る鶴追ふ鷹卍字巴かな
白菊の薫り洩れけり別座敷
水は世に盡ぬ寶や苗代田
菜の花や野末の寺に大念佛
受流す柳の風や廓の夕
敵入や立居眼の付親心
理木の花見出さる鷹野哉
朝顔や近き隣を廻り道
其の中に風の聲あり花曇り

花の波逆ふ人の出揃かな
梅寒し未た消やらぬ雪佛
白雲に心の移る彌生かな
灯の見ゆる所か渡しか鳴の聲
猿酒や迎も人真似なら味
涼風につひて起るや菩提心
堪忍のつよき男や網代守
色數に海苔も添るや膳の上
遠碇いつしか夢に入りけり
涼しさや玉の影浮く池の月
船鉾や衣裳揃ひの京童子
瘦馬の飾りて重き初荷哉
早咲の蓮もわれかし佛生會
山吹に黄な蝶一ツ紛れけり
散かけて二日三日ある牡丹哉
此上に望む夜はなし花に月
壁もぬる田舎大工や初櫻
月抱く懷優し柳腰
初拾草にも輕味見ゆる風
瀧飛沫八重山吹にかゝりけり
敵原へ茶精捨れば鶯子啼す
二日灸耻かき肌見られけり
夕しはや群る千鳥もひと曇り
齋らせし佗助活けて口切茶
飛梅や神へ捧ぐる詩一篇

馬の子の何に驚く柳かな
雪焼も有るや苦行も積し僧
春の人柱の穴を潜りけり
柳見て醒して居るや二日酔
花も散る廊下や稚兒の練り姿
萬歳や袖の長きは春心
手製には候得とも新茶哉
世を忍ぶ編笠脱けて知た顔
春の野や見せて人呼ぶ拾ひ物
梅咲や雪明り程白むまご
愛の増孫に目の無き頭巾哉
線香を見て子の迷出すや二日灸
夜櫻や篝盛りは人盛り
新綿に輕ふふくる産衣哉
楚歌ならて回向を虫の薨り哉
連も皆海老茶袴の花見哉
羽唸りに鷹と氣の付く廣野哉
起易し寝易し花の咲てより
初鷄や不二の高根の薄明り
色薄き董一輪小春かな
更る夜は灯計りてなし啼蛙
枯木皆梅となかめつ春の雪
苦學する身には關なし雪の窓
落葉して星の林となる木哉
夕鐘引や海邊の萬紅葉

玉川の萩に抱かる瀬音哉
悟らねど其味もなし納豆汁
更科の秋は過ぎけり落し水
人の道風の道ある芒かな
なよ竹の雨涼風を誘ひけり
羽蟻飛ふ和歌山城の夕日かな
寒月の照らして凄し座禪石
鶺鴒の薄き水を走りけり
色々の花有る中のすみれ哉
献立の外に納豆の馳走かな
蠶子はいとも果報や長命縷
仲違ふ風呂外揃ふ浴衣かな
行春のうしろに高し山かつら
呑急きて清水にむせふ女かな
牡丹生けて小さき一間の王者哉
若竹や早月の友風の友
捨て來た處も聞かる毛虫哉
松風も律に渡りて須磨涼し
水立の茶に心ゆく若葉かな
盛會裡にまつ花供養終りけり
門川へ魚放ちやる盆の月
思はしと思ひになやひ夜長哉
日は濡て月に干揚る水かな
若葉香る朱羅子の煙管哉
伯樂の牛の涎や草萌る
百八十七

切り惜む牡丹に歌の浮みけり
勅使門苦も無く燕潜りけり
出代るや壁に開かれし咄より
更る程心冴へ切る月見かな
血祭る日のよそ／＼し顔の顔
敬神は國の基ひや紀元節
御影供や幾代も朽ぬ法の徳
梅か香や茶を煮る慾も出る流れ
火取虫是さへ露の命かな
柳吹く風もをもたし五月雨
百度踏む足にもつる／＼落葉哉
色よ香よ人なら二八の櫻かな
月はまた臙はなれす竹の秋
憂人を思ふて守宮搗夜哉
孟蘭盆や居士の逸話に夜の更る
子も金も儲けて花に遊びけり
拜墳や此身の無事を手向草
佐保姫の姿や清き朝眺め
鹿啼や風に瘦せたる峯の月
温泉の客の逗留長し花楊
障開く日か懐かし初櫻
白魚や孕みすかたも美しくしき
根引した手活の花や玉子酒
紫陽花や雨に寂たる石燈籠
名の高さある庭の牡丹かな

館に似し句てもなし饅頭菊
夢の世は如此しか風の芥子
朝釜の湯も泌らして蓮の花
長ふなる嘶炬燵へ誘ひけり
寒月や破三味線の物貰ひ
菊の香や伯牙か琴のゆるみ哉
撫る手も一ト葉に似たり桐火鉢
鯛よりも座にめでらる／＼初茄子
饅頭の上に涙や二日灸
錦敷く庭の優美や玉のちり
不知火や物理に迷ふ學士連
門柱に噛みつき鳴けり蟬一ツ
展幕歸省に寺訪へは蓮薫也
咲けは雲散りては雪の櫻哉
日を招く力も無くて破れ扇
さぬ／＼の袖絞りけり露時雨
塗り下駄を廻す小椽や杜若
掃煙り盲目暦の煤ひけり
あらさらん命も花に惜みけり
蝶去れば蛇来て花菜日は長し
旅知らぬ我を笑ふ菌時
なき人に御慶申すも初回向
ふくへともならは佛よ鉢叩
妹山は霞み春山は笑ひけり
眞直に月日の立つや今年竹

月に映る丈けは風有る青田哉
秋の蚊を見送る妻の添乳哉
梅咲てから春らしき在所哉
長命を悦ぶ菊の翁かな
摘れなは花も果報や花御堂
遠山に日影は見へて夕立かな
葱の香や粹な暮しを小鍋立
茂りけり真葛原のほと／＼さす
種をろし家督相續濟しけり
句碑埋むはとや忌日の花吹雪
探り得た梅や手向に添ふ手紙
初蝶や重き羽振りも愛らしき
浮く水野山に曇り引日哉
流し着の菖蒲浴衣や美少年
可惜此花に主なき庵り哉
高砂は彌生も松の朝朗
鯨鱈の眠る埠頭や春の月
歌種に拾ふや花のひらく朝
祝ひ事ある様すなり梅貰ひ
蓮の雨舍利も降るかと思ひ覺
腕夜や板新道の下駄の音
花の外この明はのはなかり覺
花の空芳野紙程曇りけり
温泉の醉をさます端居や苔の花
卯の花や暮行く松の根の明り

般若湯とは氣轉なり寺の萩
寝た家のなくて静けし後の月
能き雨にたるみの付て鳴子繩
柴舟も古ひ馴染や網代守
閑處に晝の寂きく水鶏哉
鯉好きの財布にも有り飛鳥川
こほれ止む竹の古葉や初時雨
云あてた寺の馳走や初茄子
麗や休み過ての荷の重み
瑞豊の餘りを盈す落穂哉
冬の寂雪の一夜に隠れけり
柚の木の荆よけ行くや蝸牛
花苔や自然天然寂し庭
行春は又來る春の初めかな
能筆の開らきもありて白扇
蓮清一五濁に染まぬ法の池
病葉は散る丈散て梅紅葉
潜上の祝ひ言葉や内裏難
青春の血汐の燃ゆる楓かな
農閑に青年團や春の旅
湯上りの雑話に吸る麥湯哉
後の世の花を慕ふて夏入哉
室咲の梅も他力や御取越
午を告る音モウ／＼と京の春
過干や立琴に綱觸れて鳴る

花と見る間もなし芥子の散る夕
粥杖や笑われもせぬ置所
馬に乗れ駕に召せ／＼春の風
運ひ込藏賑わし、今年米
あしろ笠掛た柱やきり／＼す
よき歌を捨て居るなり古扇
蓮の花甲干す龜に飄れけり
寝ながらに申す念佛や月の蛭
橋越せは後になりぬ柳哉
初花や居士の忌日のその夕へ
達摩忌や和尚得意の普茶料理
鶯に數忘れけり二日灸
思ふ事皆汗に出て閨暑し
日の駒の歩行も見せず夏木立
蝶舞ふや嬌奢の風は吹かぬ里
奥深き魚盤の音や茂る谷
うたかたの泡と消けり春の雪
鶯の鳴く音入たり蓄音機
雨開て寝たのか夢か今朝の雪
木零の晝も耳立つ夏書哉
間引菜や露の干ぬ間を籠の嵩
薄衣を召した様なり春の月
結ふ實に春惜しみけり櫻の戸
花ゆれに蝶の飛び出す牡丹哉
松も暑そうに見ゆるや雲の峰

吉日を撰む荷前の使かな
頼政の弓に弦なし壬生念佛
此上の咲きよふはなき櫻哉
茶に酔て寝ぬ夜の伽や虫の聲
輝や他人の飯は身の藥
主は今護國の神や土用干
なよ竹のあわれ埋れぬ深雪哉
細經や僧曠着の袈裟衣
青葉越し安居の灯し静なり
娘には能き見せしめや鍋祭り
花守りも花に奢りや鯛一ト日
精進は餘所事にして藥喰
頭陀に置く糺の露や時鳥
十處の花より花の吉野哉
柳はまた焚火のくせや五月雨
腕夜や昔名を言ふ狐塚
桃咲や近道留めし二重繩
塚の靈幾世慰む櫻哉
一蝶か舟を見送る柳かな
鳥打つ農學校の生徒哉
劇果て、一趣高し盆の月
蚊遣り火や風の差圖の置處
御佛事や京の雪見る越の人
さま參る文落しけり臘月
花さき只見る雲と水とかな

石菖や籠越に風のありやなし
晝顔や踏付られし蔓の儘
梅近うさせは底する小舟かな
戎子講家寶のをうこ飾りけり
住み荒れた去來か跡や柿の花
川端の子供あふなし蜻蛉釣り
澄月や十三年の松の影
惚ひけり花の酒戦も夢の跡
陸付の來て賑ふや春の宵
出代りて丸鬚に成るうわさ哉
性根見る獅々は荒けり雪の溪
風鈴も柳もゆれぬ暑さ哉
戀ならぬしのひ詣や薫る梅
乳離の牛に藁足す夜寒哉
次山の詩も世に高し雪の不二
降足らぬ雨に暑さのます夜哉
戀猫や月の有夜も無遠慮
五重の塔見上て凄し冬
珠數の手に櫻提來る彼岸哉
牛も野に寝轉ひ飽し日永哉
如月やそ／＼に寒き松の風
春風やをもし／＼の遠歩行
手安くは伐さぬ花や鐘草
蓮の葉に残りて知るや夜の雨
切風を追ふや海邊の松目あて

財界に名ある牡丹の主かな
鼠啼きしては鬼灯鳴しけり
寝た耳へ鐘の響や寒念佛
孝の徳掛乞の鬼泣しけり
白酒に酔て小さき吐息かな
蒔砂に散り榮へのする牡丹哉
切口や初音とはよき釜の銘
難船の鐘打つ島や夕野分
如是我聞 山寺淋し時鳥
月代や机の上には雁の文
早起の戸口を出たり巢の乙鳥
猿の肝藥に干すや雪の軒
子は子たる道踏分けて墓參り
師の遺墨花の廣間に匂ひけり
風鈴や眞晝は暑き物のかす
霞む日の空は天女の姿かな
耳借の來て邪魔になる頭巾哉
苔咲や回忌營む塚の曠
文殼を流して戀の施餓鬼哉
春の日を三笠の山に遊ひけり
夕立して落伍の兵暮迫る
捨て賣に拾ひ物ある西瓜かな
霜月の影も尊き朝陣かな
陸の兒に道を教へる日永哉
落る日に迷ふ不憫や放鳥
百八十九

若竹の奥に静かな庵かな
櫻より景色は御代の青田かな
海も其色に長閑けし磯の松
菜の花や海も寝乍ら見ゆる家
百僧もあまねく花の供養哉
踏れても又延ひにけり春の草
臘夜や御存しよりの拾ひ文
深呼吸して聲待や時鳥
長閑や草履濡らして子の戻る
行春や花にへらせし下駄の音
緋頭巾や米山峠何のその
朝起の種と朝顔詩にけり
見ぬ須磨も思ひ出されて人九忌
猿酒や木樵も知らぬ醜し處
藥より薬よ青き野を踏む日
定めたる宿は都そ花の旅
注連張た石や河水の湧き處
十返りの松や色増す春の雨
草の葉に埃り巻込む曇さ哉
木魚から蚊一ツ出たり暮の春
松の葉に眼を引星や秋曇し
降りしきる雪を苦にせず眠る鴨
蓮白し真如の月の消る池
牡丹とは思ひ切つたる無心哉
風呂入の歸りは寒し春の風

カト成て九日負ける角力かな
體とまで望みはあらず早松茸
汲み上た去年の水あり片釣瓶
小春迄輪やりたし秋の蝶
松籬に和すや礎の遠響
賑やかにするも名残の月見哉
炭竈や梅も櫻も夕煙り
詩に歌に言の葉繁き櫻哉
桃咲や郡農會の行李飯
神馬薬の匂ふ干潟や青嵐
水遣れは蚊の出る庭の植木哉
貧として語り更しぬ膳の鱈
緋牡丹や獅々吼の香爐煙吐く
道墓ふ雅客に狭し春の寺
風流の筋骨太し謎團扇
虫の音に障らぬ草の戦き哉
風筋を客に譲るや釣しのふ
鬼に打豆腐面に當りけり
爐開や落札の杓霰釜
春雨の艶に濡らすや塗文箱
手のかじけ報謝の米をこぼし鳥
聞となく心に涼し水の音
正法や寒さに氷る關伽の水
日の重み見へて崩るゝ牡丹哉
積善に奢らぬ徳の紙衣かな

竹植て風爐据へ直す茶室哉
夏の虫月のあかさ知らぬかも
風雅にも名を得し梅の主かな
兄弟のよみあふ敷や蚤の跡
萩は最ふ垣に刈られて秋の行
蝸牛や浮世はいそぐ物て無き
鶴に乗る仙術もかな花の雲
雲を吐く山から晴て夏の月
咲順の蕾に見ゆる椿かな
目捨て戻れば虫の庵かな
廊からてもなし雪の朝戻り
出過ぎぬは人も奥ある新茶哉
瀧の裏見の間休める扇かな
伽羅の香も炷き込てあり緋蚊茶
牛の子の乳放れ早し若草野
千代迄も變らぬ難の睦み哉
炳として其名は朽す釋奠
福引に當てた信玄袋かな
初日影松は雄々しき樹なり鳥
鶯に宿置く手元狂ひけり
露の臺提み廻るや南禪寺
雪解に雀の下りる白場かな
咲く花を咲ぬ操や暮參り
神寂し随神門や柿紅葉
花の散るやうにチラ／＼春の雪

迷信を重ねて親の枕かな
澄や空松は桂の月と露
一人起き一人は寝たる月見哉
勝事を負て教へつ關角力
懸香や吉彌結ひの小間使
魚踊る淵へかつ散る紅葉かな
時雨るゝは冬の涙か袖か浦
禮云ふて迎に來たり雛の客
畑打や大演習の噂して
花孕む白玉姫や岩田帯
月の戸や硯も紙も膝廻し
天に沖す阿蘇の煙や大早
句碑一基花の雲間に登へけり
冬の寂一夜を須磨に探りけり
短夜を草に残るや蝶の夢
鐘をつく峯の一寺や冬さるゝ
芽柳や日和あらそふ米仲仕
菊千差香に萬別は無かりけり
羅の透けて耻かし岩田帯
人形の首干す桃の日和かな
其割に遺物なき師走哉
のつと出た儘に置たし梅の月
總揚や花をつかねし東山
日盛や石に隠るゝ蜥蜴の尾
草の戸や午後紙漉ぬ冬日影

野も山も雨は晴れけり揚雲雀
春なれや招く柳に笑ふ梅
朝晴や杖笠輕き春の旅
爐開や茶袋踊るあられ釜
をろす帆に糸のもつるゝ柳哉
寝支度もして出直すや門納涼
をろそかに石も踏れす苔の花
歌讀まぬ我れに所望の扇哉
玉ひまの燃へ廣かりぬ野燒の火
梅の蔭柳の影や春の水
眼の上の病と思ふや月の雲
桶見せて呼ぶや枯野の離れ牛
時雨たる間に日の暮るゝ山家哉
花吹雪鯛の鱗も交りけり
色慾の浮世を捨て鹿の聲
汐先に吹き添ふ風や月涼し
勝馬をつなく譽れの櫻かな
海山も人の目元も霞かな
蝶の舞下や巴に巡る水
見たい氣の出で鶯を逃しけり
九番に結ふて恥かし更衣
清音を弄す禽あり香散見草
折添ふる枝に花な寒椿
蘭の花や露に紛れて黄昏るゝ
陽春の中に寂有り竹の花

鶴下りて冬も長閑な宮居哉
跡の花敷そへて切るや初茄子
さりはなす西瓜に吹や一ト嵐
沼寺の翠を眞似鳴く鴉哉
海苔干や舟の底焼く漬漬き
木枯や聞取りにくき鐘の數
時鳥鳥帽子の紐のゆるみけり
はゝき木は帯と成て秋の風
梅見客淡雪豆腐賞しけり
梅によく添ふたり土橋水車
編笠に長刀疵をかくしけり
獨り茶を煮て聞く竹の時雨哉
なつかしき碑文は寂つ若葉蔭
時鳥孕雲 賑夜也けり
美しき見榮行や門の梅柳
白露や空は翠に澄み渡る
春雨や誰待つとなく釜用意
理屈云ふ人の穢るに牡丹哉
駕衆の息杖長し花の山
風を花と眺める庭の若葉哉
東雲や槍笠連る富士裾野
七草や七野の春を問のあたり
又水鶏戀の弱味を擲りけり
ゆりまけてとろ／＼雪の柳哉
袖乞に慈悲を施す彼岸かな

竹の子ののこ／＼出たり雨二日
梅 鳥人も來たさうな日／＼鳥
留主と云ふ竹貫拔や麥の秋
山鳩の友呼ぶ聲や涅槃の日
浪花津や煙りの中の揚雲雀
あふり海苔器に添はぬ輕み哉
夏瘦や琴の押手も利ぬ指
六月の雲の去來や不二筑波
鬼の無き里羨まし年の暮
碑の前に敷つめた様や散る櫻
月白し霜も名残のさらは垣
手向には伐り惜みせぬ牡丹哉
待つ雨の足りて涼しき月夜哉
葉鶏頭の下た葉や雨の叩き砂
夏菊や針子預る表札
實櫻の景色なつかし夢の跡
供養なら鬼にもならん壬生念佛
梅咲や障子に透る春の色
降ぬ程櫻に曇れ西行忌
始のにかみは露の誠かな
苞の鯉蓮咲く池に放ちけり
遠鹿の聲寂寥を破りけり
柴の戸や朝の落葉を夕煙
水に影映して暮るゝ翡翠哉
白芥子や東雲寒き風に散る

鶯の香浪のきさはし作りけり
夕立や祝ふ在所と待つ在所
鯉汁や十夜の鐘を餘所にして
滾々と湧く井や今朝の年始
下るより登るに早し花の阪
翁忌や松風薫る書院の間
接けるなら一ト木に見たし梅柳
植並を詠めて田から戻りけり
関古鳥尊さき苔の扉かな
絹布とん虚榮の夢を包みけり
片影の出來たと晝寝起しけり
師の遺恨名のある水で洗ひ鳥
菜の花や家とひ／＼の一小村
一重鍋切髪凍々しう見られ鳥
能く手入仕て入る菊の翁かな
よき物は何時も少し夏雨
幸先のよき囀りや朝雲雀
吞まぬ人の足取り輕き花見哉
春の雨物賣も來す静なり
道の記の花散る跡や時鳥
水加減の半搗米や鯉汁
初賣の兄書初め弟かな
炭竈の煙りとなるや散紅葉
彩りの秋を放れて小松原
吊り上げし救命艇や春の海
百九十一

ひさまつく額に風のかほり鳥
行春や丈山眠る詩仙堂
長き夜や語る平家に泣さる
辻か花人は氏より育ちかな
四方の海静に明て初日の出
龍茶屋に暑さ忘れてしまひ鳥
花に風ならめ踊りに俄雨
嘘云ふて通る關所や蟬暑し
夕鴉啼かても淋し門の秋
土筆握つて見れば一にきり
世に薫る花や寸陰惜まる
伸ひ兼て咲くや小春の杜若
唐崎の松は雨より今朝の雪
老僕に鸚鵡任して花見かな
枯尾花昔しの振はなかりけり
馬の脊に人も勞る日利かな
懸に病む思ひや露の女郎花
長閑さや竿一本の鳥めくり
逢坂の關や去ぬ雁來る乙鳥
見做ふて置たき風の柳かな
紫陽花を彩る雨後の夕日哉
松風にゆるし繪廻の緋房哉
面白に際しは開よし厄拂
盆に成る報謝の米や花卯木
明月に水も眠らぬ光りかな

萬倍になる粟飯や雪の宿
接木した手迄譽て柿の味
春風や髯をり立ての男前
曼珠沙華野山に消へて冬近し
飛行機の試乗日和や立つ羽蟻
是程の雪に便利な電話かな
じだらくに寝ぬ夜を夢の別れ哉
夏書にも日数の見へて墨のへり
春も早一ツ小袖や運櫻
やかて世に薫る蕾や辻か花
白の目に残る新茶の薫り哉
蓮帆に風情の多き霞かな
掛箱や流に長き豊の丈
花提て知るや往來に狭き道
待兼た日の立易し花七日
朝顔や茶には百歩の水撰み
水たたく尾先のかるき蜻蛉哉
春風や腹一ツ喰ふ船の飯
涼しさや大海原に月一ツ
うきと云ふ旅にはあらて時鳥
沫雪や小さき全市に一ト平
次の間へ立ては梅か香動き鳥
塚訪へは濡る袂や露時雨
初冬や寂菜りある盈れ雨
這ふ丈の水あれは足る田螺哉

杖の跡しとふて汲むや苦清水
此里へ來よと柳も招きけり
霧晴の跡に残るや水煙り
時鳥主治醫は眉をひそめけり
にこらぬは神の心や御稗川
月朧塔も臆ににしみけり
駈け付た甲斐や汗拭流車の中
假名書の文の長さや灯取虫
はした女の涼風響る乳房哉
鶯にまたさし直す絹の竹
消へた灯の風憎からす夏座敷
冬の日もゆつたりと咲く牡丹哉
柳にも梅にも春の月夜かな
旅へ出て忘るる春の寒さかな
絆さるる仇夢はなし竹婦人
香の残る花になつかし旅衣
戀塚の仰淋し枯芙蓉
鶯に杖取られたる座頭かな
虫開やぬらして戻る歌袋
山も顔隠す涅槃の曇りかな
蛇一ツ仁王の耳に唸りけり
家鴨なく家に人なし五月雨
分別は寝るに極まる寒かな
鷹の眼に遠山松の映りけり
買足して飾る慾なし秋の難

千鳥の戸懸の白浪襲ひけり
花一樹滿都の貴賤集ひけり
傘をたゝめは遠し雁の聲
十五夜の月に打ちけり鮎網
仰き見る宮や千古の杉茂る
鷹狩や拳一ツの放し味
月過ぐる雲に持筆をろし鳥
白蓮は馳走の外や普茶料理
打水のたしにもならず通り雨
鶯に筆置く音を聞かれけり
夫懸一粽結ふにも飭にも
水に影花の曙の重ねけり
友の來て秋の淋しさ忘れけり
蘊善の智に自若たり巴字の宴
稼かねは渡れぬ世なり貝拾ひ
鹿啼や壁に耳なき山の寺
數人や雨の許しを尙一ト日
寺の銀借るや暮參の夫婦連
飯村や日暮を餘所の赤椿
來て呼ぶ戀の相圖や螢と
夕風に吹れて翔る雲雀かな
初鷄や鳥羽四ツ塚は未だ暗し
長生へて尙罪深し網代打
冬枯や入江に餘る不二の影
赤貧に育ちて孝の蜆賣

懷舊をぬらす涙や花吹雪
若竹や貢の駒の育つ原
二三尺間を離れて蓮白し
出代を嫁にはしがる隣かな
山の井や水汲む杓に蝸牛
煙草賣る店や燕と二タ夫婦
東帯のそれも淋しや後の雛
蝶々と何處迄追はん野の緑り
雲行を見る間に晴る時雨哉
香に立や花の主の十三年
夜櫻や親の許しも連次第
玉川の流や萩の雫より
御社に僧のお客や若楓
捨鉢の女夏瘦せさりけり
酢料理の唇寒き小春哉
我よりも先へ慕ふか碑にも蝶
粟飯は奢りてもなし鹿の宿
おしまるる程散り易き櫻かな
思ふ事誰に語らん秋の暮
水の色見せる白魚の雫哉
卯の花に一時晴れの日影哉
南瓜賣呼て井戸端會議哉
蘆の世を理めて清し六の花
樂燒の火加減覗く紙衣かな
春の月山を放れて曇りけり

公達に根引せられて姫小松
全快の赤飯來たり別れ霜
舞扇刀自か火桶に張りにけり
午下三點戀する猫も眠りけり
將軍もたまの賜暇得てねらい狩
年の瀬や世渡る船の浪枕
三室戸の煙とならん散紅葉
呼ひ止めて施米まいらす庵哉
花吹雪ふもとの松に積りけり
虫干や新たに匂ふ居士の筆
水體や伊達に着流す貸浴衣
我物にして鶯を待れけり
花咲けは淋しう思ふ芭蕉哉
罪深し淺し沈む鶉浮べる鶴
天然の美には飽なし若楓
人馴た徳に肥へけり神の鹿
霜の聲月も小さく見へにけり
鳥雲に入るや陽氣の出來小口
陽炎や磯に伏せたる丸木舟
抱籠や石女に風はらませる
筆置て耳搔持ては時鳥
朝々の雀を友よ窓の春
笑ふ子を抱いて出代る涙哉
鉢叩浮世の寂となりけり
蟬鳴くや萎れ戻らぬ草の雨

吹さらす夜や鐘もさへ月も牙
不意と見る鶴の躰や松の花
色深き野山の秋を名殘かな
搖き灯に春の夜風や戀衣
氣ゆるみに又も朝霞や春の雨
父親は物足らぬ氣や辻か花
風の荻物語りめく戦きかな
松風や身に澄渡る朝神樂
花吹雪袖にかゝるや塚の前
撫子の投入床し四帖半
底潜る力は見へす水馬
雨晴の山を見に出る四月哉
神主も僧も合併や花の宿
土に成る焼野の灰や春の雨
尙齒會洋菓洋食嫌ひけり
世は無事の實に廣し露の家
うつつひくや二十日は何のそ
鶯に琴の音はたと止まる哉
紙難や春に淋しき立姿
打解て居れば涼しき圓居哉
陽炎やつや／＼光る撫佛
戀知らぬ子には罪なし星祭
地にしめり移して乾く落葉哉
雲の上の人も踏けり春の草
朝月の光消へ込む蓮田かな

兎も角も奥へ通して年始哉
灰文字も合ふたと撫る火鉢哉
貰うよりやるに嬉しき粽哉
京一目鞍馬の山に春惜しむ
老の杖案山子の弓となり鳥
直切られて髭むしりけり餅筵
時鳥顔見合して黙しけり
法りと聞く松風もあり懺法會
鈴虫の音色冷たし草の月
月よさに放すや買ふた虫乍ら
合客の中や癖好き嬬ざらい
一ト渡し女計りや春の月
笑ひ合ふ聲邪魔ならず壬生念佛
虫啼や五歩の庭にも秋の寂
積善の徳隠れなし魂祭
三折程開けは不二の扇かな
爲す事は皆なし置て春近し
若は樂の種と成りけり田草取
大船の島に隠るる霞かな
四五枚に包む芭蕉の庵かな
一聲を幾歌程や時鳥
初夢のあまりに惜しき寝醒哉
刺炭や同じ僕もなさぬ仲
重き程卯の花白き月夜哉
芥子夢の如く散りけり烟の風
百九十三